
『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～

【Nコード】

N9475G

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

『天人』の台頭と廃刀令によって侍が衰退の一途をたどる時代に、決して曲げぬ侍魂を持つ男が一人。坂田銀時。この物語の主人公である。彼は江戸で万事屋を営み、そこで働く地味なツツコミ眼鏡の志村新八、宇宙最強の戦闘種族『夜兔族』の神楽の三人で賑やかな毎日を送っていた。ある日、ひよんな事から万事屋一行は、アニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界に行ってしまう。そこで出会った魔導師フェイト達と共に銀時達は大暴れ！

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない（前書き）

銀八「ちよこつと！」

生徒全員「銀八先生！」

銀八「え〜この小説は『銀魂』と『魔法少女リリカルなのは』のクロスオーバーです。作者の知識不足によりキャラや内容を忠実に再現できない場合があります。御了承下さい。つーかこの二つの作品のクロスオーバーって無謀じゃね？」

作者「それじゃ『銀魂×魔法少女リリカルなのは』。始まります」

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない

大江戸ドーム。

今ここでは人気絶頂のアイドル寺門通のライブが行われていた。

「みんな〜！今日は私のコンサートに来てくれてありがとうがとうきびウンコオオ！！」

ステージに立つのはアイドルの寺門通。

「とうきびウンコオオ！！」

観客がお通の声に応える。

「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん 人だ？』！！」

最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

*

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。

「いや〜今日も盛り上がったなあ！」

と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。

「そうだなあ。お通ちゃんのリブは最高だよ！」

「なあ軍曹：アレ？軍曹？」

タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。

「軍曹ならそこで携帯いじってますよ」

一人の隊員が指差す。

そこには携帯の画面を見ながらニヤついてる軍曹がいた。

「何やってんだ軍曹のやつ？まさか、また女とメールしてやがんのか！？」

タカチンが額に血管を浮かべる。

「いえ違います。なんか最近、リリなんとかってアニメにハマったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像を見てるんです」

「よ」

「アニメだとオ！？軍曹のくせに何やってんだ！？」

タカチンが軍曹に掴みかかるうとした時。

「ぎゃあああああ！！！」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

「……た……隊長オオオオ！！！！！！」

隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツツコミ眼鏡だが、寺門通の事になるとスウターがぶつ壊れるくらいの戦闘力を発揮する。

「軍曹オオオ！寺門通親衛隊隊規十二条を言ってみろオオ！！！」

新八は鬼の形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いただただっ！！」たっ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ』であります！！」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ！軍曹オ！貴様は幹部でありながらこれを破った！よっつて……」

新八の目がカツと見開かれる。

「鼻フックデストロイヤーファイナルブラスターの刑に処す！！！！」

叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、そのまま一本の太い木に向かつて投げた。

「ぶぎゃー！！！」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹オ！貴様の持つてるそのアニメのDVDやグッズは全て没収だア！全部俺が売ってやる！！！」

*

約一時間後。

軍曹は泣く泣く全てのアニメのDVDとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。

新八はDVDのパッケージを見た。そこには一人の少女が写っていた。

アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのは。

新八はパッケージに写ってる、なのはを見て顔を赤くした。

(あ…アニメなんて…アニメなんて…!!)

DVDを持つ新八の手が震える。

(く…！ありがとございました!!)

新八は頭を下げて心の中で礼を言った。一体誰に言っているのだろう。

それで軍曹から没収した『リリカルなのは』のDVDとグッズを売らずに家に持って帰った。

*

翌日。

ここは江戸の歌舞伎町。この町に『万事屋銀ちゃん』というなんでも屋がある。

「つーかよお。主人公の俺の出番がこんなに遅いつてのは問題じゃねーの?」

ソファアに座って疑問を言うのは坂田銀時。白髪の天然パーマがトレードマークのこの物語の主人公である。

「そうアル。新八なんてダメガネより私達の出番を増やすアル!」

酔昆布を食べながら言ったのは神楽。宇宙最強の戦闘民族『夜兔族』の一人。

「おはようございます」

玄関の扉が開かれて新八が入ってきた。

「新八。なに主人公の俺より先に登場してんだコノヤロー」

「先に登場したって地味キャラはいつまで経っても地味キャラアル
ヨ」

銀時と神楽は新八を睨む。

「いや僕に文句言わないでくださいよ！作者に言ってください！それと地味キャラって言うな！！」

二人にツッコみながら新八はソファ^{ソファー}に座った。

「よーし。新八^{じみ}も来たことだし、仕事に行くか」

「オイ！『新八』と書いて『じみ』って読んだか！？
立ち上がりながら新八はツッコんだ。

*

銀時達は源外の所へ向かっていた。

「源外さんから仕事の依頼？どんな依頼なんですか？」

銀時の横を歩く新八は首を傾げた。

「なんでも新しい発明品を開発したから来てくれってよ
メンドくさそーに銀時は答えた。

「どーせロクな発明品じゃねーよ」

「早く済ませて定春と散歩に行きたいアル」

銀時の隣で神楽は傘をさして酢昆布を食べてる。

そんな会話をしてるうちに万事屋トリオは源外の工場に到着した。

「おーい、じーさん」

銀時が工場の中に声をかけた。

「おー、来たか銀の字」

工場の中から一人の老人が出てきた。

平賀源外。江戸一番のからくり技師である。

「よーし。お前ら中に入れ」

源外に言われて銀時達は工場の中に入った。

「「「おお〜！」「」」

中に入って三人は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん。何だよこいつぁ？」

「コイツはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」

新八は首を傾げた。

「原理はターミナルと同じだが、コイツは生身の人間を移動できるように作ってあるのよ」

「うおおお！スゴイアル！！」

神楽は一人興奮して装置をペタペタ触る。

「神楽ちゃん。何が起こるかわからないから触っちゃダメだよ」

新八が注意する。

「んだよダメガネ」

渋々、神楽は装置から離れる。

「で？俺達にどうしろってんだ？」

銀時が話を戻す。

「お前達に装置の中に入れてもらって瞬間移動してもらおう」

「俺達に実験台になれってか？」

銀時は目を細める。

「他に頼める奴がいねーんだ。金はちゃんと払うから頼むよ銀の字」

「……………しょうがねーな」

頭を掻きながら銀時は承諾した。

「いくぞ新八、神楽」

「はい」

「キャツホオ〜ウ！」

神楽だけテンションは高かった。

ふと、銀時は足を止めて後ろにいる源外に振り返った。

「じーさん。装置の中に変なボタンとかねーだらうな？」

「ねーよ。んなもん。さつさと中に入れ」

「わーっただよ」

銀時達は装置の中に入った。装置の扉が重い音を立てて閉じた。

「それじゃ装置を作動させるぞ」
源外は装置のスイッチを押した。
装置の中が赤くなる。

「おおっ！中が赤くなったアル！」
神楽は一人わくわくしている。

「楽しそうだな。おい」

銀時はため息をつく。

「ちなみに銀の字。どこに移動するかは俺にもわからん。気をつけ
ろ」

「ジジイイイ！！そういうことは先に言えエエエ！！」

銀時が怒鳴った直後。

ビービー

突然、警報が鳴り響いた。

「おい！ジジイ！何だよこれ！？」

銀時は装置の外にいる源外に怒鳴る。

「ん？装置が何かに反応してやがる！」

「ジジイ！また欠陥品作りやがったな！」

装置の中で銀時は怒鳴る。

「銀さん落ち着いてください！」

「これが落ち着いてられるかア！」

「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。

「ヘルプミーだよ神楽ちゃん！」

神楽にツッコむ新八。

「銀の字！お前ら何か変な物持ってないか？」

「何も持ってねーよ！」

源外に怒鳴る。

「銀さん！とりあえず装置の外に出ましよう！」

新八が歩き出した時。

カタン

新八の懐から何かが出て床に落ちた。

「ん？」

銀時と神楽は床に落ちた物を見た。

新八は”しまった”っという顔をして汗を流す。

床に落ちた物は『魔法少女リリカルなのは』のDVDだった。

「新八！」

銀時はジト目で新八を見る。

「お前アニメオタクにもなったアルか？マジキモイアル」

神楽はぺつと唾を吐く。

「何だとオオオオ！！」

新八がキレる。

「銀の字！そのDVDだ！DVDに装置が反応してるんだ！！」

「DVD！？何でDVDに反応してんだよ！？」

騒いでる間にも装置内の赤い光が強くなる。

バチツという音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開ける。中に銀時達の姿はなく、床に落ちてるDVDだけがあった。

「厄介な事にならなきゃいいがな」

誰もいなくなつた工場で源外は一人呟いた。

*

「ん〜」

ゆっくり^{まぶた}瞼を開けて銀時は目を覚ました。

「ん？」

上半身を起こす。周りを見渡した。どこかのビルの屋上らしい。そして空は暗く月が出ていた。

新八と神楽の姿はない。

「どっ、どこ？」

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない（後書き）

作者「いかがでしたか？え？『リリなの』のキャラが出てない？
いません。次の話から出ます！え〜グダグダになりながらも頑張り
ますので、よろしく願います！」

銀時「グダグダにならないように頑張れよ」

第二訓・出会ってやつはいつも突然（前書き）

銀時「『リリカルなのは』のキャラが登場する第二訓！始まるぜ！」

作者「ああ！俺のセリフ〜！」

第二訓：出会ってやつはいつも突然

「アルフ。あの人誰なんだろうね？」

突然、屋上に現れた銀時を空から見下ろしながら金髪の少女が隣にいる。『アルフ』という人物に話し掛ける。

「さあ？管理局の魔導師……なのかな？」

アルフは首を傾げた。

「…何かおかしな恰好してるね。管理局の魔導師には見えない」

二人は銀時の恰好を見た。見た目からして魔導師には見えない。バリアジャケットを着てないし、杖も持ってない。

「どうするフェイト？」

『フェイト』と呼ばれた金髪の少女は手に持つ杖を強く握った。

「捕まえよう。あの人には悪いけど」

「わかった。次元転移による魔力は全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」

「うん。アルフもね」

アルフにそう返して、フェイトは手に持つ杖『バルディッシュ』を起動させる。

「私が初撃で誘導するから、アルフは捕縛用のバインドで捕まえて」「了解！」

*

銀時は屋上の真ん中辺りに座り込んだ。

「たくよお。どこなんだよ、ここはよお？」

銀時は顔を俯かせて呟く。

「ああ、ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラする！あんなに綺麗なのにイー！！」

銀時は顔を上げて怒鳴る。

「ジジイのワケわかんねー機械のせいで知らねー所に飛ばされるしよオ！いつの間にか夜になってるし！帰る方法もわかんねーんだぜ！しかも何故か新八と神楽がいねーしよオ！ツッコミいなきゃギヤグが成立しねーよ！俺がツッコミやれってか！？」

綺麗な星空に向かって銀時は愚痴を叫び続ける。

「ちくしょう！ジジイ！帰ったら絶対ボッコボコにしてやるからな！！」

銀時は怒りで拳を震わせた。

*

フェイトとアルフが上空から銀時に迫る。

(ごめんなさい)

心の中で謝りながらフェイトは銀時に向かって数発の黄色い魔力弾を放った。

「！！」

銀時が魔力弾の光に気付く。そして銀時は腰に差してある木刀『洞爺湖』を抜き、素早く振って自身に迫る魔力弾を全て弾いた。

「えっ！？」

魔力弾を放ったフェイトは驚いた。

「たああああ！！」

銀時の後ろからアルフが殴りかかる。銀時はアルフに気付いて体を捻って拳をかわす。そのまま勢いをつけて銀時は木刀をアルフの顔目掛けて振る。

「アルフ！！」

フェイトが急いでアルフの元へ向かおうとすると、銀時は顔に当たる直前で木刀を止めた。

「！！？」

フェイトとアルフは驚いて動きを止める。

「はあい。終了」

そう言つて銀時は木刀を腰に差した。

目の前のアルフは口を開けてポカンとしてる。

「たくよ〜。いきなり知らん場所に飛ばされて、糖分摂取もしてなくてイライラしてるところにいきなり襲つてきやがって…」

銀時は頭を掻きながら愚痴を零す。

フェイトはアルフの隣に着地する。

「大丈夫アルフ？」

「う…うん。大丈夫だよフェイト」

「貴方は管理局の人間ですか？」

バルディツシユを構えて警戒しながら銀時に問う。

「あ？管理局？何それ？」

「え？」

銀時の返事にフェイトは思わず警戒を緩めた。

「ていうかお前らそんな恰好で恥ずかしくねーの？何のアニメのコスプレだ？」

フェイト達の恰好を見て銀時は言った。フェイトは黒いマントを羽織つて、アルフは獣の耳と尻尾が生えてる。まるでアニメで見るような恰好だ。

「そっちの胸のデケー女は犬のコスプレか？」

「犬じゃない！あたしは狼だ！！」

銀時の言葉にアルフが声を上げた。

「犬も狼も似たようなもんだろ？っーか違いがわかんねーよ。一緒にいいだろ」

「よくない！！」

「アルフ落ち着いて！」

フェイトがアルフを落ち着かせようとする。

「あ…あの」

「ん？」

「本当に管理局の人間じゃないんですか？」

*

「じゃあ貴方は気がついたら此処にいたんですね？」

「ああ」

銀時はフェイトとアルフに事情を説明した。

「フェイト。コイツ『次元漂流者』かもしれないね」

「『次元漂流者』？」

アルフの言葉に銀時は片眉を上げた。

「簡単に言えば迷子です。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人間の事です」

とフェイトが答えた。

「マジでか？」

銀時は屋上の端に行つて街を見渡した。

「そつといえは江戸の街と微妙に違うな…」

建物の形などが江戸の建物と少し違うし、ターミナルもない。それに街を歩いてる人をよく見ると天人が一人もいない。

「なあ地図持つてねーか？」

「地図？」

「ああ」

言われてフェイトは銀時に地図を渡した。銀時は渡された地図を見ると、そこには知らない地名ばかりが書いてあった。

「ははは…やつてくれやがったあのジジイ」

銀時は力無く笑った。

「あの…大丈夫ですか？」

心配になったフェイトが銀時に声をかけた。

「お…おお。大丈夫だ」

銀時は地図をフェイトに返した。

（あのジジイ！帰ったらボコボコにした後、瞬間移動させてやる！）
心の中で銀時は復讐を誓った。

「なんか怒ってないかい？」

「そ…そうだね」

銀時の様子にフェイトとアルフは戸惑った。

「あつ、そうだ。なあお前ら。新八と神楽、知らねーか？」

「新八と神楽…？」

「誰だいそいつら？」

二人は首を傾げた。

「俺の…まあアレだ…家族みてーなもんだ。多分この世界に飛ばされたハズなんだけど知らねーか？」

銀時に言われてフェイトとアルフは考え込んだ。

「……………ごめんなさい。私は知らない」

「…悪いけど、あたしも」

申し訳なさそうに二人は銀時に謝った。

「そうか…まあ気にすんな。あいつらなら心配ないだろ」

「あの…貴方はこれからどうするんですか？」

「あ…そっぴや考えてなかったな」

銀時は腕を組んで考える。

「あの…」

「ん？」

「私達の家でよければ泊まっていけますか？」

と、フェイトが銀時に提案した。

「えっ？いいのか？」

「はい。いいよねアルフ？」

フェイトは隣にいるアルフを見た。

「まあフェイトがいいならいいけどね。それにコイツ悪いやつには見えないし」

アルフもフェイトに同意する。

「いいのか？素性も知らねえ相手をそんな簡単に家に泊めても」

「はい。アルフも言ったけど、貴方は悪い人には見えませんから」

フェイトは完全に警戒を解いてバルディッシュをしまった。

「そうかい。なら少し世話になるうかね。あつ、そっぴやあ自己紹

介がまだだつたな」

銀時はコホンツと咳をした。

「俺は坂田銀時。元の世界じゃなんでもやる万事屋つてのをやってんだ」

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ」

「あたしはアルフ」

フェイト達も自己紹介する。

「まあよろしく頼むわフェイト。アルフ」

銀時は頭を掻きながら二人に言った。

「は…はい」

フェイトは少し顔を赤くして頷いた。

「よろしく」

アルフは笑顔で返事をした。

新八と神楽は何処へ？

第二訓・出会ってやつはいつも突然（後書き）

銀時「感想・評価、待ってるぜ」

作者「お願いします」

第三訓：規則正しい食生活を送れ（前書き）

作者「暑い！まだ五月なのに何でこんなに暑いんだー！」

銀時「はい。うるさい作者は放っておいて『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三訓！始まるぜ！」

第三訓：規則正しい食生活を送れ

「うおおおお！」

銀時はフェイト達が住んでるマンションを見上げて声を上げた。

この辺りで一番高い高級マンションである。

「スゲーなおい。マジでここに住んでんの？高級マンションじゃねーか」

フェイトとアルフが中に入って銀時も後続く。ちなみにアルフの狼の耳と尻尾はなくなってる。

（耳と尻尾は隠せるのか）

アルフを見ながら銀時は思った。エレベーターに乗って上に上がる。エレベーターを出て少し歩いて部屋の前に到着した。鍵を開けて部屋の中に入る。

高級マンションだけあって部屋の中は広い。ガラス張りの壁から綺麗な夜景が見える。

「いい眺めじゃねーか」

夜景を眺めながら銀時が言った。フェイトとアルフはソファアに座る。

「たくつ。子供のくせにこんな高級マンションに住みやがって。羨ましいねえ」

銀時もソファアに座り、部屋を見渡した。

銀時の前に座ってるアルフは銀時の顔をじつと見てる。

「ん？何だアルフ？俺の顔に何か付いてるか？」

「いや、そうじゃないんだけど……」

「何だ？ハッキリ言ってみろ」

「じゃあ言っけど」

アルフは少し身を乗り出す。

「銀時って死んだ魚のような目してるよね」

アルフはハッキリと言った。

「アルフ！そんなこと言っちゃダメだよ！」
慌ててフェイトが注意する。

「ああ。普段はこんな感じだけど、いざという時にはキラめくから」と、銀時は怒る様子もなく普通に答えた。

「え？」

てつきり怒ると思ってたフェイトはポカンとする。

「無駄なエネルギーは消費しないようにしてんだ。省エネだよ省エネ」

「省エネ…？」

フェイトは首を傾げた。

「あはははは！あんた面白いねえ！」

銀時の答えにアルフは腹を抱えて笑った。

「犬の耳と尻尾持つてるお前の方が面白いと思うぞ」

「だからあたしは狼だつてば！」

「わかったわかった」

銀時はメンドくさそーに手を振った。

「ところでフェイトは何者なんだ？光の玉みたいなもの出して凄かったぜ」

と、銀時はフェイトに質問した。

「私は『魔導師』です」

「魔導師？」

聞き慣れない言葉に銀時は首を傾げた。

「魔力を用いて魔法を使う人間のことを魔導師と言います」

「魔法ねえ…マジでファンタジーの世界だな。空も飛んでたし」

銀時は視線をフェイトからアルフに移した。

「アルフも魔導師なのか？」

「違うよ。あたしはフェイトの『使い魔』さ」

胸を張ってアルフが答えた。

「使い魔って何だ？」

「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物さ」

「使い魔ねえ… ってことはフェイトってスゲー魔導師なんだな」
「そ… そんな事ないよ」

銀時の言葉にフェイトは顔を赤くする。

フェイトの隣にいるアルフはニコニコ笑いながら尻尾を振ってる。
フェイトが褒められて嬉しいのだろう。

「あ… あの。今度は私から聞いてもいいですか？」

遠慮がちにフェイトが言う。

「ああ。いいぜ」

「銀時は何者なの？」

「そうそう。フェイトの魔力弾は弾くし、あたしの攻撃もかわして反撃しようとしたし。一体何者だい？」

二人とも魔導師でもないのに自分達の攻撃を防いだ銀時に興味を持ったようだ。

「俺は『侍』だ」

「『侍？』」

フェイトとアルフは首を傾げた。

「自分の武士道ルルを持ってて、そいつを貫くのが侍だ」

「自分のルール…」

フェイトが小さく呟いた。

「ふ〜ん。じゃあその木刀は？フェイトの魔力弾を弾くなんて凄いや
丈夫だよな」

アルフは銀時が腰に差してる木刀を指差した。

「コイツはな、修学旅行に行った時に洞爺湖に住む仙人に貰ったんだよ」

「仙人に貰ったのかい!？」

「す… 凄いよ銀時!」

銀時の話にフェイトとアルフは驚く。

確かに銀時の木刀は辺境の星に生える『金剛樹』と呼ばれる樹霊一万年の木から作られた代物で、そこらの真剣より丈夫で何でも斬れる。

だがこの木刀、なんと通販でお手軽に手に入るのだ。しかも中には
紛い物もあるとかなないとか。

「銀時つて凄いなだね」

フェイトは完全に銀時の嘘を信じている。

「ねえフェイト。そろそろ夕食にしない？」

と、アルフが言った。

「あつ、そうだね」

フェイトが立ち上がる。

*

フェイトとアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ食べよっかフェイト」

「うん。いただきます」

とフェイトが食べようとした時。

「ちよつと待て」

「え？」

銀時がフェイトを止めた。

「フェイト。アルフ。これは何だ？」

銀時はテーブルの上を見た。

「何って夕食だけど…」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだっ
た。

「バツキャロオオオオ!!」

テーブルに置かれた料理を見て銀時はテーブルに足をのっけて二人
に怒鳴った。

「「えっ!?!」」

銀時の勢いに圧されてフェイトとアルフは体を大きく震わせた。

「育ち盛りがこんなモンばっか食って、ちゃんとしたメシ食わねー
とどーなると思ってるんだああ!!」

銀時は怒りの形相で二人に怒鳴った。

「あの…えつと…ごめんなさい…」

銀時の迫力に圧されてフェイトは戸惑いながら謝った。

「それからアルフ!!」

銀時はアルフを指差した。

「お前は何を食おうとしてんだ!？」

「何って…」

アルフは手に持つてる箱を銀時に見せる。

「ドッグフードだけど」

「やっぱ犬じゃねえか!!」

「違う!狼だ!」

アルフが怒鳴り返す。

「ドッグフード片手に持つて言っても説得力ねーんだよ!!っーか

このやり取り何度目!??つかお願いだからドッグフード食べるの

はやめてくれ!何か見てて悲しくなってくるから!!」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

「あゝ銀時…大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

「ちっ。しょうがねえ。俺が作るしかねーか」

そう言つて銀時は台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

「!!!」

冷蔵庫の中を見て銀時は絶句した。

「今度はどうしたんだい銀時？」

アルフが歩いてきた。

「冷蔵庫の中が空じゃねーかああああ!!」

再び銀時が叫んだ。

*

結局、銀時達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

「飯は明日から食材を買って、俺が作るしかねーか」
ソファアに座って銀時はため息を付く。

「なんか悪いねえ銀時」

「俺は部屋に泊めてもらうんだ。そんなぐらいはしねーとな」

「ありがとう銀時」

フェイトが銀時に礼を言う。

「礼なんていらねーよ」

「素直じゃないね」

アルフは銀時を見てニヤニヤ笑う。

「ドツグフード抜きにするぞコラ」

銀時は背伸びをする。

「そういえば銀時。あの…家族は探さなくていいの？」

と、フェイトは銀時に尋ねた。

「ああ…あいつらなら大丈夫だろ」

「でも探すんだろ？」

とアルフが言った。

「……まあ……探すといえば探すけどな……」

と銀時は小さく呟いた。

「ホント素直じゃないな」

銀時の小さな呟きを聞いてアルフは微笑んだ。

アルフの隣で銀時の様子を見ていたフェイトも微笑んでいた。

新八〜！神楽〜！カムバ〜ック！

第三訓：規則正しい食生活を送れ（後書き）

神楽「うおい！私が出てないアル！！」

作者「すいまつせーん！次の話で出します！いや、マジで！！」

新八「僕は？僕も出てないんですけど」

作者「ついでに出すから安心しろ」

新八「ついでかよ！！しかも神楽ちゃんの時と態度違うし！！」

第四訓…全国の娘さん！たまにはお父さんと話をしてあげなさい！！（前書き）

銀時「よし、フェイト。今回はお前が言ってみようか」

フェイト「はい。えっと……『銀魂×魔法少女リリカルなのは』
第四訓。始まります」

第四訓：全国の娘さん！たまにはお父さんと話をしてあげなさい！！

源外が発明した装置で銀時達は別の世界へ瞬間移動してしまった。
そこで銀時は、魔導師のフェイトと使い魔のアルフに出会った。
そして新八と神楽はというと。

時は少し遡り、銀時がフェイト達と出会う前。

海鳴市の住宅街にある高町家。

私、高町なのはは極々平凡な小学三年生のはずだったんだけど、何の因果か運命か、魔法少女なんてやってます。

私は違う世界からやって来たユーノ君のお手伝いで『ジュエルシート』という物を集めてます。

「いただきます」

今は家族のみなんと夕食を食べています。

お父さんの高町士郎、お母さんの高町桃子、お兄ちゃんの高町恭也、お姉ちゃんの高町美由希、そして私、高町なのはの五人家族なのですが。

実は今日、我が家に新しい家族…というか友達…というか居候ができました。

「おかわりヨロシ？」

茶碗を持ちながら桃子に尋ねたのは赤いチャイナ服を着た神楽。

「もうダメだよ神楽ちゃん」

神楽を注意するのは隣に座ってる地味なメガネ男の志村新八。

「もう三杯目じゃないか。僕ら泊めてもらうんだから遠慮しないと」

「私の辞書に遠慮なんて字はないネ」

胸を張って神楽は言った。

「いや、胸を張って言うことじゃないだろ！すみません桃子さん！」
神楽にツッコみながら新八は桃子に謝った。

「うふふ。いいのよ。遠慮しないで、どんどん食べてね」

桃子は優しく微笑んで神楽から茶碗を受け取り、ご飯を盛って神楽に渡した。

「ありがとうアル！」

お礼を言って神楽はご飯を食べる。

「新八君も遠慮しなくていいんだよ」

士郎が新八に言った。

「どうもすいません」

新八は士郎に頭を下げた。

そんなやり取りを見ながら私は楽しく食事を続けました。

どうして新八さんと神楽ちゃんが家にいるのかと言いますと、ジユエルシード集めから家に帰る途中に家の前で倒れてた二人を見つけました。起こして話を聞いてみると二人は別の世界から来た次元漂流者みたいなの。とりあえずお父さんとお母さんに二人の事を話

したらしばらくの間、家に泊めてあげることになったのです。もちろん家族には二人が次元漂流者であることは秘密にしています。そういえば新八さん、私を見た時、教えてもいないのに私の名前を言っただけ、どうしてなんだろう？それに顔を赤くしてなんだか落ち着かない様子だったし。

神楽ちゃんはそんな新八さんを軽蔑のこもった目で見てました。

*

僕と神楽ちゃんは今、高町家の人達にお世話になっている。目を覚まして本当に驚いた。だってあの『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのはちゃんが目の前にいたのだから。最初は夢かと思っただけ、どうやら現実らしい。

つまり僕と神楽ちゃんは『魔法少女リリカルなのは』の世界に来てしまったようだ。たぶん銀さんもこの世界に来てるはずだ。おそらく原因は僕が懐に持ってた『魔法少女リリカルなのは』のDVDだろう。

(それにしても)

僕は隣に座ってる、なのはちゃんを見た。なのはちゃんも僕に気付いて笑ってくれた。

(やっぱり本物のなのはちゃんは可愛いな〜！)
なんて考えていると。

「！！」

僕に向けられた鋭い殺気を感じた。

殺気の出所は父親の高町士郎さんと兄の恭也さんからだ。最初なのはちゃんが僕と神楽ちゃんを紹介した時も士郎さんと恭也さんは「娘(妹)はやらないぞ！！」と怒鳴ってきた。あの時は本当に恐かった。

*

夕食を終えて、私は私の部屋でユーノ君と新八さんと神楽ちゃんとで今後の事について話し合いました。

「新八さんと神楽さんには申し訳ありませんが、僕の力では二人を元の世界へ帰すことはできません」

フレット姿のユーノが申し訳なさそうに新八と神楽に言った。

「そんなユーノ君が気にすることじゃないよ」

新八がユーノを励ます。

「そうアル。元はと言えば新八が悪いアル」

神楽が新八を睨む。

「う……」

新八は神楽から目をそらす。確かに新八がDVDを持っているなければ、このような事にはなっていないかった。

「元気出してください新八さん」

なのはが新八を励ます。

「ありがとう、なのはちゃん」

なのはに礼を言う。

「それにしても銀ちゃん一体、どこにいったアルか？」

神楽は天井を見ながら呟いた。

「銀ちゃんって誰ですか？」

なのはは首を傾げた。

「僕ら元の世界じゃ『万事屋』っていうなんでも屋で働いてるんだ。

銀さんはそのオーナーなんだ」

「へえ〜。私も会ってみたいな」

椅子に座ってる、なのはは足をブラブラさせる。

「とりあえず今後の動きとしては、なのはと僕はジュエルシード集め。新八さんと神楽さんは銀時さん探し。これでいいですか？」

ユーノがみんなに確認する。

「うん。でも僕達もジュエルシード集めには協力するから遠慮なく言うてね」

「私にどーんと任せるアル！」

神楽が胸を張って言う。

「でも…ジュエルシードはとっても危険な物なんですよ？無関係の貴方達を巻き込むわけには…」

「それを言ったら無関係の、なのはちゃんを巻き込んだ時点でダメでしょう」

「う…」

新八に痛い所を突かれてユーノは顔を俯いてしまう。

「あの…本当にいいんですか？」

なのはが二人に聞いた。

「もちろんだよ、なのはちゃん」

「私達となのはは、もう友達ネ。友達助けるのに理由なんていらないアル」

二人は笑顔で力強くなのはに言った。

「ありがとう。新八さん、神楽ちゃん」

なのはも笑顔で二人に礼を言った。

*

話は終わって新八と神楽は、なのはの部屋を出た。

「そついえば新八。お前このアニメのDVD持ってるアルな？」

「え？うん。家にあるよ」

「だったら、十円シールがどこにあるか新八ならすぐわかるアルか？」

ここは『魔法少女リリカルなのは』の世界。なら、そのアニメのDVDを持つてる新八ならジュエルシードのある位置がわかるのではないか、と神楽は思った。

ちなみに、なのは達にはアニメ『魔法少女リリカルなのは』の話はしていない。

「ジュエルシードね。ごめん神楽ちゃん。僕まだDVD観てないん

だ」

「ははは、と頭を掻きながら新八は笑った。

「使えないダメガネアル。そんなんだからお前はダメガネからメガネになれないアルよ」

神楽は目を細めて新八を睨む。

「なんだと!？」

神楽にタイムンを挑もうかと思ったが、振り返ちにあうのは目に見えているので我慢した。

新八と神楽は士郎達が用意してくれた部屋に入った。

新八は窓を開けて星空を見た。

「…銀さん…今頃どうしてるかな？」

夜空に綺麗に輝く星空を眺めながら、新八は小さく呟いた。

第四訓：全国の娘さん！たまにはお父さんと話をしてあげなさい！！（後書き）

銀時「新八〜お前ポリゴンになっちゃったのか？」

作者「違いますよ銀さん。ポリゴンじゃなくてロリコンです」

新八「僕はロリコンじゃありません！」

第五訓：宝探しには危険がつきもの（前書き）

銀時「今回はアルフ。任せたぞ」

アルフ「はいはい 『銀魂×魔法少女リリカルなのは』 第五訓！
始まるよー！」

第五訓：宝探しには危険がつきもの

翌朝。

遠見市にある高級マンション。フェイト達が泊まってるマンションだ。

「フェイト。やっぱり銀時は連れていかないのかい？」

フェイトとアルフは起きて朝食を用意している。食材はまだ買っていないので朝食もインスタント料理だ。

「うん。無関係の銀時を巻き込むわけにはいかないから」

そう言っつてフェイトは視線をソファーに向けた。

ソファーにはイビキをかきながら寝てる銀時の姿があった。

「そうだけど…銀時っつてけっこう強そうだよ？人手は一人でも多い方が……」

「ダメだよアルフ」

「う…」

フェイトに言われてアルフは諦めて席に着いた。

フェイトはソファーで寝てる銀時に近寄る。

「銀時。朝だよ」

フェイトが声をかける。

「ぐお〜がぁ〜」

反応なし。

「銀時」

今度は肩を揺らして起こそうとする。

「ぐお〜がぁ〜」

またも反応なし。

なかなか起きない銀時にフェイトは困った顔をする。

「フェイト。あたしが起こすよ」

そう言っつてアルフは歩いてきて、ソファーの前で立ち止り。

「はあ！」

ソファアを蹴り倒した。

「んがっ!？」

床にぶつかつた衝撃と痛みで、ようやく銀時は目を覚ました。

「銀時！」

慌ててフェイトは銀時に駆け寄る。

「いででで！鼻が痛え！」

銀時は鼻を手で押さえて悶える。

「おはよう銀時」

アルフは笑顔で銀時にあいさつした。

「おはようじゃねーよ！テメー何しやがんだ!？」

「銀時がなかなか起きないのが悪いんだよ」

「俺は朝弱いんだよ！いででで…！」

「ぎ…銀時落ち着いて！」

フェイトは銀時を落ち着かせようとした。

*

「二人で出掛ける？」

朝食を食べてる最中にフェイトが話を切り出した。

「うん」

「何しに行くんだ？」

食べながら銀時はフェイトに尋ねた。

「ちよつと探し物を…」

「探し物ねえ…」

銀時は顎に手を当てて考えた。フェイトとアルフは牛乳を飲んでる。

「もしかして願が叶う玉的な物か？」

「…ブーツ!?!？」

銀時の言葉を聞いたフェイトとアルフは盛大に牛乳を吹いた。

「オイイ！何やってんだオメーら!?!?つかその反応当たり!?!?えっ?俺当たっちゃった!?!？」

驚く銀時。

フェイトとアルフはテーブルを拭きながら落ち着かせる。

「な…なんでわかったんだい!？」

「あつ、やっぱそうなんだ。冗談のつもりで言ったんだけどよ」

「銀時…『ジュエルシード』を知ってるの？」

フェイトが銀時に尋ねた。

「樹液ミート?何それ？」

銀時は首を傾げた。

「あの…ジュエルシードなんですけど…」

「わーったよ。で?ソイツが願を叶える道具みてーなもんなのか？」

銀時がフェイトに聞いた。フェイトは頷いて答えた。

「おいおい。お前ら俺に黙ってそんなスゲー物、探しに行こうとしてたのか？」

「…はい」

「銀時。ジュエルシードは危険な物なんだ!フェイトはあんたを巻き込みたくなかったから…!」

アルフが必死に説明する。危険な物と聞いて銀時はフェイトを見た。

(危険な物ねえ…ジュエルシードってのがどんな物か、よく知らねーが…ガキのくせに危ねー物に手え出そうとしてるな)

銀時はため息を付いた。

「んな危険な物なら探すの、やめたほうがよくな？」

頬杖をつきながら銀時が言う。

「…そうはいかないよ。私の母さんが…ジュエルシードを欲しがってるから…」

フェイトは拳を固く握る。

「母さんのためにも絶対ジュエルシードを集めなくちゃ…」

固い決意の表情を浮かべてフェイトが言う。

銀時はメンドくさそーに頭を掻いた。

(こつという頑固者には何言っても無駄なんだよな)
銀時はため息を付いた。

「しょうがねーな」

「！」

フェイトとアルフは視線を銀時に向けた。

「俺も手伝ってやるよ。ジュエルシード集め」

「えっ!？」

フェイトは驚いて立ち上がった。

「でも銀時!ジュエルシードは……」

「危険な物だつて言うんだろ?だからお前らだけじゃ危なっかしいから俺も手伝ってやるつて言ったんだよ」

そう言つて銀時は耳の穴をほじる。

「だけど……」

「俺の心配ならいらねーよ」

「で……でも……」

なおもフェイトは戸惑う。

「もういいじゃないかいフェイト」

アルフがため息を付いた。

「アルフ」

「本人が手伝うつて言ってるんだから。それに銀時は強いからきつと心強いよ」

「……………」

アルフに言われてフェイトは黙つてしまう。

銀時はフェイトの言葉を静かに待ってる。

「…銀時」

銀時を見つめてフェイトが口を開いた。

「ん?」

銀時もフェイトを見つめる。

「一人で無茶はしないつて約束して」

真剣な顔でフェイトは言った。

フェイトの言葉を聞いて銀時は微笑んだ。

「そりゃ俺のセリフだな」

「え？」

「頑固なお前の方が俺よりよっぽど無茶しそうですね」
意地悪な笑みを浮かべて銀時は言った。

銀時の言葉にフェイトは顔を少し赤くする。

「まっ、約束は護るぜ」

「う…うん。なら、これからよろしく銀時」

「おお」

*

朝食を食べ終え、支度を済ませた銀時達はマンションを出た。

今日はフェイトがジュエルシードの封印、アルフと銀時が他のジュエルシードの探索。と言っても銀時は魔法は使えないから目で見ても探すしかない。それに銀時はご飯の材料も買わなきゃいけないし。

「じゃあ、また後でね銀時」

「じゃあね〜」

「ああ。気をつけるよ」

マンションの前で銀時とフェイト達は別れた。

「あ」

少し歩いて銀時はある事に気がついた。

「この世界に『ジャンプ』ってあるのかな？」

*

海鳴市。

新八達はなのは達と一緒に、なのはの友達の月村すずかの家に遊びに来ていた。

「キヤホオオウ！大きな屋敷アル！」

屋敷を見るなり神楽のテンションは高くなる。

「神楽ちゃんハシヤギ過ぎだよ」

庭でハシヤグ神楽を新八が注意する。

ちなみに新八はいつもの着物ではなく白いワイシャツに黒いズボンを着ている。木刀は袋に入れて手に持っている。

「あの二人がなのはの家に居候してる人達？」

金髪の少女、アリサ・バニングスがなのはに聞いた。

「うん。そうだよアリサちゃん」

「ねえ、なのはちゃん」

紫色の髪の少女、月村すずかが神楽を見つめながら、なのはに言う。

「あの女の子、アリサちゃんに声が似てない？」

「「あつ！」」

すずかの言葉になのはとアリサは同時に声を上げた。

なのはも神楽の声を聞いて誰かに似ているなとは思っていた。

（確かに同じ声だね）

なのはの肩に乗ってるユーノも頷いた。

「新八さーん。神楽ちゃーん」

なのはが二人を呼ぶ。

「ほら、なのはちゃんが呼んでるよ」

「わかったアル」

二人はなのは達の方へ向かった。

「紹介します。私の友達のアリサちゃんと、すずかちゃんです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

新八達に自己紹介した。

「初めまして。志村新八です」

「神楽アル。よろしくネ」

互いに自己紹介を済ませる。そこで新八も『あの事に』気付く。

「あれ？アリサちゃんの声、神楽ちゃんに似てるね」

*

なのは達は庭で紅茶を飲みながら会話をしていた。フェレットのユーノは月村邸の子猫に追い掛けられていた。というより襲われていた。キューキュー鳴きながら子猫から逃げるユーノ。

神楽は笑いながらその様子を見てた。

それにしても、と新八は思うのだった。

(女の子ばかりで落ち着かないなあ)

新八の周りには、神楽、なのは、アリサ、すずか、と女の子ばかりがいる。一応なのはの兄の恭也も来ているが、すずかの姉の月村忍さんの部屋に行ってしまったので、この場にいる男は新八一人だけである。あ、あとユーノ。

(でもユーノ君はフェレットだからなあ…それに今、猫に襲われてるし…)

新八は子猫に襲われてるユーノを見た。全速力で子猫の追跡を振り切り、なのはの肩に避難する。

(フェレットも大変だなあ)

新八はユーノに同情の視線を送った。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

(ユーノ君!)

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

(うん。近くにジュエルシードがあるね)

ユーノは、なのはの肩から降りて森の中に走っていった。アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言っつて、なのは席を立つ。

「ユーノが？私たちも探すわよ？」

「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」

手を振りながらなのはが言う。

なのは達の様子に新八と神楽は気付いた。もしかして二人はジュエルシードの反応を捉らえたのでは？

「じゃあ僕達が一緒に探すよ」

「フェレット狩リアル」

新八と神楽が席を立つ。

「神楽ちゃん！狩っちゃダメだよ！」

初めて、なのはは神楽にツッコんだ。

*

なのは、ユーノ、新八、神楽の三人と一匹は森の中でジユエルシードを探していた。なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持つてる。

「なのはちゃん。ここら辺にあるのかい？」

「そのハズなんだけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

「な……何だこの音!？」

新八達は辺りを見回す。

「アレ！」

神楽が何かを見つけて指差した。

「……!!」「……」

神楽が指差したモノを見て皆驚いた。

「にゃ……」

皆の目の前に大きな大きな猫がいた。

「デカツ!!」

新八はメガネに手をかけた。

「えっと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりた』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

「いやデカ過ぎでしょ!!」どんだけいい加減な願いの叶え方してんですか!？」

大きな猫を見上げながら新八がツッコんだ。

「定春よりも大きいアル〜！」

神楽は大きな猫を見て興奮してる。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユ一ノは『広域結界』という辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ…そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだろうし…」

そう言っただけなのはレイジングハートを構えた。

直後、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃ〜〜！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰!？」

全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女、フェイトが空中にたたずんでいた。

第五訓・宝探しには危険がつきもの（後書き）

次回、ついにバトル開始！

第六訓：一人で勝手に決めるな（前書き）

銀時「俺、主役なのにあんまり活躍してなくね？」

なのは「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第六訓。始まります！」

銀時「お〜い、無視か〜？」

第六訓：一人で勝手に決めるな

(私と同じ魔導師：)

白いバリアジャケツトを着た女の子を見ながらフェイトは思った。

(でも：母さんのためにも：ジュエルシードは譲れない)

フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

「あれは：まさか僕と同じ世界から来た魔導師！？」

フェイトを見てユーノが驚く。

「ってことは狙いはジュエルシード！？」

新八は袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュが鎌のような形になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは！」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

だがバルディッシュの刃が、なのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の傘によって止められた。

「！！！」

攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「神楽ちゃん！」

なのはは自分を助けてくれた少女の名を言った。

「えっ!?!」

なのはの言葉にフェイトは目を見開いた。

(神楽…?今この子、神楽って言った?)

フェイトは動揺しながら自分の攻撃を止めた神楽を見た。

「私の友達に何するアルかアアア!!」

叫びながら神楽はバルディッシュを弾いた。

「く…!」

フェイトは後方へ飛んだ。

「ぬアアア!!」

神楽はフェイトを追って傘を横薙ぎに振る。

フェイトは上に飛んで傘をかわし、神楽の傘は後ろの木に当たった。

木はミシミシと軋み、大きな音を立てて倒れた。

「なっ!?!」

倒れた木を見てフェイトは驚いた。

(魔法も使わずに、傘一本である大木を倒した!?)

神楽の人間離れした怪力にフェイトは冷汗を流した。

「す…: 凄い」

近くで様子を見ているユーノも神楽の力に驚いていた。

「彼女は一体何者なんだ?」

「神楽ちゃんは、宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の一人なんだ」

「宇宙最強!?!」

新八の言葉に、なのはは驚きの声を上げた。

フェイトは空中に浮いたまま神楽達を見下ろす。

(接近戦は厳しい…: 数も向こうの方が有利…)

神楽達を見つめながら状況を分析していると。

「フェイトー!」

他のジュエルシードの探索をしていたアルフがやってきた。

今のアルフは人間の姿ではなく狼の姿になっている。

「アルフ!」

「大丈夫かいフェイト!?!」

「うん」

二人は地上にいる神楽達を見た。

「他の魔導師かい？」

「うん。それに……」

フェイトは少し躊躇ってから言った。

「銀時の家族も一緒にいる」

「銀時の！？本当かい！？」

「うん」

フェイトは頷く。

「よし！あたしが連中の相手をするから、その際にフェイトはジュエルシードを回収して！」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？心配いらぬよ」

アルフはフェイトを安心させるように言った。

「それに銀時の家族は傷つけないように足止めするよ」

「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

「マズイ！ジュエルシードを封印するつもりだ！止めないと……！」

ユーノが叫んだ。

「そうはさせないよ……！」

空からアルフが迫る。

「ユーノ君！」

なのはが走る。

「大丈夫だよ、なのは！」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

「ちっ！」

アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは！ジュエルシードを！」

「う……うん！」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言ったろ！」

アルフは背後から、なのはに襲い掛かる。

「なのは！！！」

ユーノが叫んで、なのは目を閉じる。

その時。

「うおおおお！！！」

新八が叫びながら、なのはとアルフの間に入って木刀で攻撃を防いだ。

「新八さん！！！」

なのはが叫んだ。

「新八！？！」

なのはの言葉にアルフは驚いた。

（このメガネが銀時の家族！？）

アルフがそう考えた時。

「ほあちゃあああ！！！」

神楽が横から傘を振ってきた。

「くっ！！！」

アルフは障壁を作って攻撃を防ぐ。だが神楽の怪力に押されて障壁ごとアルフは吹き飛ばされた。

「うわああ！！！」

木にぶつかってアルフは悲鳴を上げた。

「なのはちゃん！大丈夫！？！」

新八は後ろにいる、なのはに振り返った。

「は…はい！ありがとうございます！！！」

なのはは新八にお礼を言った。

「新八！たまには役に立つアルな！！！」

「たまには、は余計だよ神楽ちゃん！！！」

神楽に文句を言った後、新八はアルフを見た。

立ち上がったアルフは新八達を見つめた。

（あの神楽って子、なんて馬鹿力だい！？これじゃ手加減してたら

こっちがやられちゃうよ！)

神楽の強さにアルフは戸惑う。

(けど銀時の家族を傷つけるわけには……!!)
アルフが迷った時。

「アルフ！」

フェイトが戻ってきた。

「フェイト！」

「ジュエルシードは回収したよ。引き上げよう」

そう言っただけでフェイトはアルフを連れて去って行った。

「しまった！ジュエルシードが……！」

ユーノが慌てて走り出す。

なのは達もユーノの後を追う。

巨大猫がいた場所に着いた。そこには、さっきまで大きかった猫が元のサイズに戻って眠っていた。

「やられた……」

*

ジュエルシードを封印したフェイトとアルフはマンションへ向かっていた。アルフは人間の姿に戻ってる。

(あの神楽と新八って子……やっぱり銀時が探してる家族なのかな……)

フェイトは少し寂しげな表情を浮かべた。

(……やっぱり銀時にはちゃんと教えなきゃ……)

フェイトがそう思った時。

「よオ」

後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

フェイトとアルフは後ろを振り返った。

「どーよ。ジュエルシードは見つかったか？」

両手に材料が入った買物袋を持った銀時が立っていた。

*

マンションの近くの公園。時刻は夕方。遊んでる子供はいない。誰もいない公園のベンチに銀時達は座っていた。

「で？俺に話して何だ？」

横に座ってるフェイトを見た。

「…今日、ジュエルシードを見つけた所で、銀時の家族に会ったんだ」

「えっ!？」

フェイトの言葉に銀時は驚いた。

「赤い服を着た女の子で傘を持っていた。それと木刀を持ったメガネをかけた男の子もいた」

「新八と神楽だ！」

銀時は二人の名前を言った。

「やっぱり銀時の家族なんだ」

「ああ。って、まさか新八と神楽もジュエルシード集めてんのか!？」

「そうみたい。一緒に魔導師もいたから」

「何やってんだあいつら…」

銀時は夕焼けの空を見上げた。

「銀時」

「ん？」

フェイトの方を見る。

「いいんだよ。家族の所に行つて」

「……………」

「ちよつとの間だったけど…銀時といれて楽しかったよ」

「……………」

「ありがとう」

フェイトは笑顔で銀時に礼を言った。

だが銀時にはその笑顔が寂しげに見えた。

「行こうアルフ」

フェイトが席を立つ。

「フェ…フェイト…」

アルフは戸惑いながらフェイトの後を歩く。

「待てよ」

銀時が二人を呼び止めた。

「何、勝手に決めてんだよコノヤロー」

「え？」

フェイトが振り返る。

「途中でやめるくらいなら、最初から手伝いなんかしねーよ」

そう言つて銀時もベンチから立ち上がる。

「銀時…」

「悪いが最後まで付き合わせてもらつぜ。料理作つてやるとも約束したしよ」

銀時は材料の入った袋を持つ。

「でも家族が…」

「いいんだよ。あいつらなら放つておいても、うまくやっていけるさ」

言いながら銀時は歩き出す。

「ほら、家に帰つて飯にするぞ」

そう言つて銀時はフェイトの頭をポンツと叩いた。

フェイトは右手で自分の頭を撫でた。そして前を歩く銀時の後ろ姿を見つめた。

(……ありがとう。銀時)

銀時の背中を見つめながらフェイトは微笑んだ。

おまけ

フェイト達が月村邸で、なのは達と出会った頃。
コンビニ。

「ない」

本屋。

「ない」

デパート。

「ない」

店に入っては出て入っては出てを繰り返す銀時。

「ジャンプがねええええ!!」

雲一つない青空に向かって銀時は叫んだ。

周りの人達は、そんな銀時をジロジロと見ている。

「ママ〜。あの人変わった服着て何か叫んでるよ」

「しっ！見ちゃいけません！」

第六訓：一人で勝手に決めるな（後書き）

銀時「いつになったら俺は活躍するんだ？」

作者「わかりません」

銀時「フェイト」。お前の魔法でこのアホ作者ぶっ飛ばしてくんない？」

第七訓：ベタな展開をバカにはいけない（前書き）

フェイト「銀時の手料理か。楽しみだねアルフ」

アルフ「っていつか銀時って料理できるのかい？」

神楽「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第七訓！始まるアル！」

第七訓：ベタな展開をバカにはいけない

台所に銀時が立つ。

「んじゃ始めるか」

調理を始めようとする銀時。そこへアルフがやってきた。

「ねえ銀時」

「ん？」

「今更なんだけど…銀時って料理できるの？」

アルフは心配そうに銀時に聞いた。

「なめんなよアルフ。こう見えて、銀さん器用だからガンガンできるぞ。もう鉄人並です」

「へえ大した自信だね。じゃあ任せたよ」

アルフは台所を離れた。

そして銀時は調理を始めた。

*

夕食。

フェイトとアルフは銀時の作った料理を食べている。食べた感想。普通においしい。

銀時は自分で料理の腕は鉄人並と言っていたが正直、味は普通だった。普通においしかった。

それでもフェイトは、初めて他人が自分達のために作ってくれた料理に感激していた。

「ごちそうさま。ありがとう銀時。おいしかったよ」

「味は普通だったけどね」

食べ終えてフェイトはお礼を言い、アルフは正直な感想を言った。

「ドッグフードよりはマシだろ？」

「うん」

アルフは腕を組んで悩んだ。

「ドッグフードの方が…」

「お前、明日の朝食抜きな」

「ええ〜!?!」

銀時の言葉にアルフはシヨックを受けた。

「おっと、そうだ。久しぶりにコイツを食うか」

銀時は白いご飯の上にあるモノを乗せた。

「「えっ!?!」」

ソレを見てフェイトとアルフは同時に驚きの声を出した。

「銀時…それは何…?」

フェイトが恐る恐る銀時に聞いた。

「これか?」

銀時は箸でソレを示した。

「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

誇らしげな顔で銀時は答えた。

白いご飯の上に小豆を乗せた料理。それが『宇治銀時丼』。

「っ…」

宇治銀時丼を見たアルフは、顔を歪めて嫌悪感を露にした。

「食うか?」

銀時はフェイトに宇治銀時丼を差し出した。

「……………じゃあ……………一口だけ…」

「フェイト!?!」

フェイトの言葉にアルフは驚いた。

「よしなよフェイト!絶対マズイって!!」

「おい。俺の宇治銀時丼をバカにすんな」

銀時はアルフを睨む。

フェイトはゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し摘んで口の中に入れた。

もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。

「おいしい」

目を見開いてフェイトは感想を言った。

「えっ!？」

フェイトの感想にアルフは顔を引きつらせた。

「おっ。マジで？」

銀時は少し身を乗り出す。

「うん! 凄くおいしいよ銀時！」

フェイトは目を輝かせている。

「おおっ! やつとこの味がわかる奴に出会えたぜ！」

フェイトという同志が見つかって銀時は大喜びした。

「嘘だろ...？」

アルフは一人、頭を抱えた。

*

夕食を食べ終え、食器を片付け、銀時とアルフは席に座っていた。

銀時は前に座ってるアルフをジーツと見つめた。

(同じ獣の耳が付いてる奴でも全然違ーな)

銀時は元の世界で万事屋の下の階に住んでる、全然萌えない猫耳年増女を思い出していた。

「ん? 何だい銀時？」

銀時の視線に気付いてアルフが聞いてきた。

「いや、俺の知り合いにも頭に獣の耳が付いてる奴がいるんだよ。

でもソイツは顔は濃いし、性格は悪くて最悪なんだわ」

「ソイツも使い魔なのかい？」

「いや『天人』だ」

「天人？」

アルフは首を傾げた。

「要は宇宙人だ」

「へえ〜」

「んで、ソイツに比べたらお前の方が可愛いなと思ってな」

「えっ!?!」

銀時の言葉にアルフは顔を赤くする。

「ちよっ…!何言ってるんだい銀時!?!急にそんなこと言われたら恥ずかしいじゃないか!?!」

アルフは両手で頬を押さえながら尻尾を左右に振る。

「ああ。お前は可愛い…!」

銀時は口元を吊り上げた。

「犬だ!」

「狼だ!」

アルフは銀時の言葉を即座に否定した。

「はいはい。わかったよ!」

そう言いながら銀時は席を立った。

「一回でいいから狼って言うてよ!」

アルフはテーブルに突っ伏した。

銀時は風呂場に向かっていた。ぺたぺたと素足で歩いて脱衣所の前
に到着。

ガララと脱衣所の扉を開けた。

中には、これから下着を着ようとしているフェイトがいた。まあ要
するに裸である。

「えっ!?!?!」

フェイトは顔を真っ赤にして目の前にいる銀時を見つめた。

この時、銀時が呟いた言葉は、

「何このベタな展開?
だった。」

顔を真っ赤にしたフェイトは、バルディッシュを取り出した。

「サンダースマッシュャー!」

バルディッシュから金色の光が放たれて、銀時は光に飲み込まれた。
部屋に大きな爆発音が響いた。

「な…何だい今のは!?!」

慌ててアルフは立ち上がり、爆発音がした方へ向かった。脱衣所の

前に到着。

そこにはフェイトの攻撃によって黒焦げになった銀時が倒れていた。

「銀時!!!?」

アルフは銀時に駆け寄った。

「銀時! あんた何があつたんだい!? 銀時!」

アルフが必死に銀時に声をかける。

「…ジエニファア…俺あもう疲れちまつたよ…ゆっくり寝かせてくれ……」

銀時はゆっくりと目を閉じた。

「ジエニファア…って誰さ!? えっ? 銀時!? 銀時! イイイイ!」
部屋にアルフの叫び声が響渡った。

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』完!

ガバツと銀時が起き上がった。

「いや、終わんねーよ! 勝手に俺を殺すなアアア!」

銀時が怒鳴った。

脱衣所の中で、フェイトは顔だけでなく耳まで真っ赤にしてドキドキしていた。

第七訓：ベタな展開をバカにはいけない（後書き）

銀時「次回は銀さん達が温泉に行きまゝす」

新八「次回もお楽しみに！」

第八訓：温泉は心と体を癒すオアシス（前書き）

作者「俺も温泉に行きたいな」

銀時「勝手に行ってこいよ」

新八「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第八訓！始まります！」

第八訓：温泉は心と体を癒すオアシス

フェイト達が一つ目のジュエルシードを回収した翌日。銀時達は次のジュエルシード発見場所に向かった。

「温泉？」

銀時とアルフは『海鳴温泉』と書かれた旅館の前に立っている。ちなみに今の銀時の服装はワイシャツに白衣をだらしなく着た恰好だ。まあ簡単に言えば『銀八先生』の恰好をしているのだ。眼鏡はかけてないが。木刀は袋にしまって持つてる。

「あたしが見つけた場所がこの辺りなのさ」

そう言つてアルフは銀時と腕を組んだ。

「何やってんの？」

「ねえ銀時。こうしてるとあたし達、恋人同士に見えるかな？」

腕を組みながら旅館の中に入った。

銀時は旅館の従業員を見つけ、

「あつ、フロントの人？すみませーん。この犬つまみ出してもらえますか？」

「あゝ！銀時ひどい！！」

銀時の言葉にアルフは頬を膨らませた。

何故、銀時が一緒にいるのかというと。

「私達にご飯を作ってくれたお礼と…その…昨夜のお詫びに温泉でゆっくりしてってね」

と、フェイトに言われたからだ。

ちなみに昨夜のお詫びとは、銀時を魔法で黒焦げにしてみました事である。まあ事故とはいえ、悪いのはフェイトの裸を見た銀時なのだが。

「いやゝあの時はマジで死ぬかと思ったな」

うんうん、と頷きながら銀時はアルフと一緒に部屋に向かった。

*

偶然か必然か、神楽達も高町家と月村家と一緒に海鳴温泉に来ていた。

女湯では、なのは達が温泉に入っていた。

「プーフツ。いい湯アル〜」

温泉に入って神楽はご機嫌である。

「本当〜いい湯だね〜」

神楽の隣で、なのはが気持ちよさそうに一緒に温泉に入ってる。その、なのはの腕の中には、

「キューキュー！」

^{オス}男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔も赤い。

「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって」

「可愛いわね」

一緒に入っているアリサとすずかがユーノに触れる。

（新八さん！助けて〜！！）

ユーノは念話で隣の男湯に入ってる新八に助けを求めた。

だが、魔導師でない新八に念話が届くことはなかった。

*

隣の男湯。

新八と恭也は静かに湯に浸かっていた。

「いい湯ですね〜」

「そうだな〜」

二人とも頭にタオルを乗せて湯に浸かって、温泉を満喫していた。

この間にも隣の女湯にいるユーノは、ずっと新八に向かって届くは

ずのない助けの念話を送っていた。

*

銀時はしばらく部屋でゴロゴロしていた。アルフは先に温泉に入りに行っている。

「俺も入るとするかな…」

銀時は立ち上がって部屋を出た。

温泉を指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、先に温泉から上がった、なのはとアリサ、さすがと絡んでいた。

「ん？何やってんだアイツ？」

銀時は片眉を上げてゆっくり歩き出した。

銀時は、なのはがジュエルシードを集めてる魔導師だということを知らない。だからアルフが念話で、なのはに警告していることにも気付かない。

「おい」

銀時がアルフに声をかけた。

銀時の声を聞いてアルフは慌てて振り返った。

「ぎ、銀時！？」

なのは達の視線が銀時に集まった。

「銀…時…？」

なのははアルフが言った男の名前を聞いて新八達が言った事を思い出した。

（新八さん達が探してる銀さんって…もしかしてこの人？）

なのはは銀時をじっと見つめた。

「何やってんだお前？酔っ払いの絡みですかコノヤロー」

「い…いやだよう銀時！あたし酔っ払ってなんかないよ〜！」

動揺しながらアルフは銀時に答えた。

「たくっ」

銀時は頭を掻きながら、なのは達に視線を向けた。

「悪かったな。コイツは俺の連れなんだ。あとで説教しとくから、許してやってくれ」

「は…はい…」

なのは達は頷いた。

「ほら行くぞ」

「わっ！ちよつと待ってよ銀時！」

銀時はアルフの腕を掴んで歩き出した。

「あ…あの！」

なのはが声を上げた。

「ん？」

なのはの声に銀時は足を止めて振り返った。

「私、高町なのは。なのはって言います！よかったら…その…貴方の名前を教えてください！」

なのはは銀時を真っ直ぐに見つめた。

「…銀時。坂田銀時だ」

そう言っつて銀時はアルフを連れて歩いて行った。

「坂田…銀時」

なのはは銀時の後ろ姿を見つめながら呟いた。

*

「お前は子供をいじめるのが趣味なのか？」

なのは達から離れた離れた銀時はアルフを細目で睨んだ。

「違うよ銀時。実は…」

アルフは銀時に、なのはがジュエルシードを集めてる魔導師である事を話した。

「マジでか？フェイトと同一年くらいじゃねーか」

「うん」

「この世界のガキはどうなってんだ？」

銀時はメンドくさそーに頭を掻いた。

「何で俺に黙ってた？」

「……………」

銀時の質問にアルフは黙ってしまふ。

銀時はため息を付いた。

「同い年の女の子と戦ってる俺が知ったら、お前らから離れると思っただのか？」

「う……………」

アルフは顔を俯かせてしまふ。

「そんなに俺は信用できねーか？」

「そ……………そんなことないよ！」

アルフは声を大きくして否定した。

銀時は短く笑った。

「安心しな。お前らを裏切るような事は絶対にしねーからよ」

銀時にそう言われてアルフは頬を少し赤くした。

「う……………うん！わかったよ銀時！」

「そんじゃ俺は温泉にでも入ろうかねえ」

銀時は男湯に向かおうとした。が、アルフに腕を掴まれて止められた。

「何？」

銀時は振り返ってアルフを見た。

「あ……………あのさあ銀時……………」

アルフは顔を赤くして少し落ち着かない様子をしている。

「一緒に入らないかい……………」

「は……………」

銀時は片眉を上げた。

*

混浴。

銀時とアルフは脱衣所で服を脱いでいた。

「混浴なんて原作にあつたっけ？」

服を脱ぎながら銀時は呟いた。

「ほら、銀時！早く入ろうよ。」

アルフは体にタオルを巻いて既に入浴準備万端である。

「わーっ たよ。」

銀時も腰にタオルを巻いて準備を整えた。

ドアを開けて浴室に入る。人は誰もいなくて貸切り状態である。

「二人つきりだね銀時。」

「おい。あんまりくつつくなよ。」

銀時は体を洗おうとする。

「銀時。背中洗ってあげるよ。」

「そうか？悪いな。」

銀時はアルフにタオルを渡した。

アルフは渡されたタオルで銀時の背中を洗う。

二人とも体を洗い終わって温泉に入った。

「ん、いい湯だね。」

「そうだな。」

二人はゆっくりりと温泉を満喫していた。

その時、ピョコツとアルフの頭から狼の耳が出た。銀時はアルフの

耳に気がついた。

「おい、耳出てるぞ。」

「あっ。」

慌ててアルフは耳を隠した。

*

なのはは銀時に会った事を温泉から上がった新八達に話していた。

「銀さんが！？」

なのはの話の聞いて新八は驚きの声を上げた。

「はい。」

なのは頷いた。

「銀ちゃんと一緒にいた女は、あの金髪の女の仲間アルか？」

「わからない。けど、あの魔導師と関係があるのは間違いない」
神楽の問いにユーノが答えた。

「どうして銀さんはその人達と一緒にいるんだろ？」

新八は腕を組んで考えた。

「本人に聞きに行くアル！」

神楽は立ち上がった。

「ちよっ…神楽ちゃん！」

新八の声も聞かずに神楽は部屋を出た。

でもすぐに戻ってきた。

「銀ちゃんが泊まってる部屋ってどこアルか？」

神楽の言葉に全員がズッコケた。

「わからないで行こうとしたのかよ！」

新八がツッコんだ。

「私は考えるよりも先に体が動くアル」

「ちゃんと確認してから動け！！」

そんなやり取りの後、新八達は部屋を出てフロントに向かった。銀髪は天然パーマで坂田銀時と言ったら部屋はすぐにわかった。

新八達は銀時とアルフが泊まってる部屋に着いた。

「銀ちゃん！いるのはわかってるアル！おとなしく出てくるアル
！！！」

ドアをドンドン叩きながら神楽が大きな声で言う。
すると、

「うるさいねえ。一体何の用だい？」

温泉から上がってきたアルフが、顔をしかめてやってきた。

アルフは目の前にいる訪問者を見た。

「！！！」

アルフは驚いて目を見開いた。

（げっ！銀時の家族の怪力チャイナ娘！！それと地味なメガネ！そ

れに魔導師まで！)

「銀ちゃんはどこアルか!?」

アルフの動揺に気付かないで神楽は問い詰めた。

「銀時? さあ? そんな人、私は知らないねえ」

と知らないふりをするアルフだが。

「銀時? 神楽ちゃんは『銀ちゃん』って言ったんですよ? どうして

『銀時』ってわかったんですか?」

(しまったあ! 動揺してつい...!)

新八に言われてアルフはあたふたする。

「お前、銀ちゃん知ってるアルな!? 一体どこアルかアアア!」

神楽はアルフの胸倉を掴む。

「神楽ちゃん落ち着いて!」

「神楽ちゃん抑えて!!」

新八となのはが止めようとする。

「ぎ... 銀時は部屋にはいないよ!」

「じゃあどこアルかアア!?」

神楽は胸倉を掴む手に更に力を入れた。

「知らないよ! ちよつと... 離し... 助けてええ銀時いい!!」

アルフは叫んで銀時に助けを求めた。

*

アルフと神楽達がドタバタ騒いでいた頃、銀時は旅館の周りを歩いていた。旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。

木の上にフェイトが座っている。

「おーい」

「!」

声に気付いたフェイトは下にいる銀時を見つけた。

「銀時。どうしたの？」

「散歩のついでにお前の様子見に来たんだよ」
「フェイトを見上げながら銀時は言う。」

「そう」

「ジユエルシードは見つかったのか？」

「うん。でも封印の作業は夜にやるから」

「了解」

そう言うって銀時はフェイトに背を向けた。

「なあフェイト」

フェイトに背を向けたまま銀時は話し掛けた。

「何？」

「今度は、お前も一緒に来い。アルフの奴も喜ぶぜ」

「！」

「じゃあな」

手を振りながら銀時は旅館に向かって歩いて行った。

フェイトは頬を少し赤くしながら銀時の後ろ姿を見つめた。

嬉しさでフェイトは、いつの間にか微笑んでいた。

*

「どうしたアルフ？」

部屋に戻った銀時は隅っこでうずくまってるアルフを見つけた。神楽達の姿はなかった。

銀時に気付いてアルフは顔を上げた。

「銀時……」

アルフは立ち上がって銀時に抱き付いた。

「おわっ！ な……おい！ 何だよアルフ！？」

「銀時のバカアアア！！ あんたがいなかった間あたし大変だったんだからああ！！」

アルフはポカポカと銀時を叩いた。

「何？何があったんだよ？」
「わけがわからない、と銀時は首を傾げた。」

第八訓：温泉は心と体を癒すオアシス（後書き）

銀時「アルフのヤツ結構、胸大きかったな」

新八「銀さん。ただのエロオヤジにしか見えませんよ」

銀時「あ…」

第九訓：修学旅行で消灯時間を守る学生はいない（前書き）

銀時「感想・評価を書いてくれた読者には、もれなくジュエルシードをプレゼント……」

新八「いや、プレゼントとかないから！」

フェイト「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第九訓。始まります」

第九訓：修学旅行で消灯時間を守る学生はいない

銀時とアルフは旅館をチエックアウトしてフェイトとの合流地点に向かった。結局、銀時と新八達が旅館内で会うことはなかった。

月が輝く夜の中、二人は森の中へ駆けていった。

「なあアルフ」

銀時が隣にいるアルフに声をかけた。

「何だい銀時？」

「ぶつちやけ、なのはって子は強いのか？」

「ああ、あの子かい？全然大した奴じゃないね。フェイトの敵じゃないよ」

「ふん」

と、銀時は気の抜けた返事をする。

「何だいその返事は？銀時は違うのかい？」

アルフがムツとした顔で言う。

「別に。つーか俺、魔導師の強さとかわかんねーし」

「そういえばそうだったね」

そんな話をしてる内に合流地点に到着した。

「フェイト〜！」

フェイトを見つけてアルフが手を振る。

フェイトも銀時達に気付いて振り返った。

「銀時。少しは楽しめた？」

「ああ。まあな」

「そう。良かった」

「んで？ジュエルシードはどこにあるんだ？」

銀時は周りをキョロキョロ見た。

「あそこだよ」

フェイトは川を指差した。川の中から淡い光りを放っているジュエルシードがあった。

「バルディツシュ、起きて！」

「Yes sir」

フェイトの左手の手袋の甲から黄色い三角形が外れて、一振りの杖へと形を変えた。

「封印するよアルフ。サポートお願い」

「へいへい」

銀時は二人の後ろで封印の作業を静かに見守った。封印作業が問題なく終わった時。

「あ…あれって！」

なのはとユーノがやってきた。

「あ〜らあら。やっぱり来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

「おいおい。消灯時間はとっくに過ぎてんぞ。良い子は寝る時間だぞ」

とダルい声で銀時が言った。

「あっ！銀時さん！」

銀時を見て、なのはは声を上げた。

「銀さんでいいぜ」

と銀時。

「それを…ジュエルシールドをどうする気だ！？それは危険な代物なんだ！」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言っただよね？良い子にしないでないとガブツと行くよって…」

アルフは目をギロリと光らせた。

「あれのどこが親切？ただの酔っ払いの絡み…」

と、銀時は途中で言葉を止めた。

銀時の隣で、アルフは人の姿から狼の姿へと変身したのだ。

「うおおあああ！！！」

銀時は悲鳴を上げながら尻餅をついた。

「おおお…おま、お前い…じゃねーや。狼の姿に変身できたのか！？」

震える手でアルフを指差しながら銀時は言った。

「ああ。そういえば銀時にこの姿を見せるのは初めてだったね。ていうか今、『犬』って言おうとしなかったかい？」

鋭い目でアルフは銀時を睨んだ。

「き…気のせいだよ、気のせい」

銀時はゆっくりと立ち上がった。

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う。

「使い魔？」

なのはは首を傾げた。

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

その時。

「なのはちゃん！」

「なのは！」

新八と神楽がやってきた。

「新八さん！神楽ちゃん！」

なのはは振り返って二人を見た。

銀時も新八達に視線を向けた。

「よオ。新八、神楽。元気だったか？」

手を挙げて二人に声をかけると、

「銀さん!!!」

「銀ちゃん!!!」

銀時に気付いて新八と神楽は声を上げた。

「その様子じゃ元気そうだな」

二人の元気そうな姿を見て銀時は短く笑った。

「銀ちゃん探したアルよ！今までどこに行ってたアルか!？」

「心配したんですよ！」

「あゝまあいろいろあつてな。心配かけて悪かったな」と、頭を掻きながら銀時は答えた。

「ところでお前ら。何でジュエルシード集めてんだ？新八、三十字以内で簡潔に述べろ」

「無理です」

新八は即答した。

「銀さんこそ、どうしてその人達とジュエルシード集めてるんですか？三十字以内で簡潔に述べて下さい」

「無理だ」

銀時は即答した。

「銀ちゃん！その女、私の友達の、なのはを傷つけようとした女アルよ！何でそんな女の味方するアルか！？」

神楽がフェイトを指差しながら叫んだ。

フェイトは表情を暗くする。

「…そうか。まあコイツも本当はそんな事はしたくなかったはずだ。勘弁してやってくんねーか？」

「…なら、なのはに一言謝るアル！」

フェイトに向かって神楽が言った。

フェイトは、なのはに視線を向けた。なのはもフェイトを見つめてる。

そしてフェイトは静かに口を開いた。

「……ごめんね」

「う…うん」

フェイトの謝罪に、なのはは頷いて応えた。

「これで一件落着だな。じゃーな」

銀時がフェイト達を連れて帰ろうとすると、

「いや待ってくださいよ銀さん！」

新八が銀時を呼び止めた。

「何普通に帰ろうとしてるんですか!？」

「あ？まだ何かあんの？」

足を止めて新八に振り返った。

「何かつて、ジュエルシールドですよ！ジュエルシールド！」

新八が額に血管を浮かべながら怒鳴った。

「それは本来、ユーノ君が発掘した物ですよ。現状では所有権は彼にあります。今、銀さん達がやつてる事はネコババと同じですよ」

相手が銀時では説得は難しいが、新八は主張した。

だが銀時は怯まない。

「いいか新八。これはドラゴン ールみたいなもんだよ」

「なんでここでドラゴン ールが出るんですか？」

「よく考えてみる。ドラゴン ールは元々神様が作った物だ。だが地上に散らばったドラゴン ールは先に集めた者が願いを叶えられる。つまり！」

銀時は右手の人差し指を新八に向けた。

「ドラゴン ールもジュエルシールドも集めた者勝ちなんだよ！」

「おいイイイ！何、ドラゴン ールを例えにネコババ正当化させようとしてんだ！！」

銀時の無茶な意見に新八はツツコんだ。

「新八。銀ちゃんを説得するなんて無駄アル」

神楽が一步前に入る。

「神楽ちゃん？」

新八はイヤな予感がした。

「欲しい物は力づくで奪うアルよ」

そう言つて神楽は傘を構える。

「何だ？やる気が神楽？」

銀時も木刀を構える。

うーむ、何だかヤバイ雲行きになってきたぞ、と新八は思い始めた。

「主役の俺に勝てると思つてんのか？」

「天パがいつまでも主役でいられると思つてんじゃないネ」

それぞれ獲物を構えたままジリジリと間合いを詰める。

その緊張感の中でフェイト達は黙って二人の様子を見守ってる。

「主役の座は譲らねエエエエ！」

「これからは私が主役アルウウウウ！」

互いに同時に動き、木刀と傘が火花を散らせてぶつかつた。

「おいいいイイ！戦う理由が変わってるよ！」

新八のツッコミが森の中に響き、銀時と神楽の壮絶な主役の座を争う戦いが始まつた。

「うおおおおお！！！」

「ほあちゃあああ！！！」

フェイト達から離れながら二人は木刀と傘をぶつけ合う。

「ああもう！なのはちゃんユーノ君！僕が二人を止めるからここにいて！」

そう言つて新八は、銀時と神楽の後を追つた。

「し…新八さん！」

なのはが叫ぶが、新八は止まらず走つていった。
残されたフェイト達は、しばし呆然となる。

なのははフェイトと向き合つた。

「あ…あの…」

なのはが口を開いた。

「話し合いで何とかできないかな？」

フェイトも、なのはを真つ直ぐに見つめる。

「…私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になるね」

「だから！そんな勝手に決めない為に話し合いつて必要なだと思
う！！！」

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

フェイトは目を閉じた。

「言葉だけじゃ…何も変わらない…伝わらない！」

そう言つてフェイトは目を開く。バルディッシュを構えてフェイト

は、なのはの背後に回った。

「くっ！」

「Flyer finn」

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

「けど、だからって！」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトも、なのはを追って空を飛ぶ。

「なのは！」

「あんたの相手はあたしだよ！」

なのはを助けようとするユーノにアルフが襲い掛かった。

*

「ふんごおおおー！」

一方、銀時と神楽は壮絶な打ち合いをしていた。木刀と傘がぶつかる音が森の中に響く。

「ぬああああー！」

銀時に向かって神楽は傘を横薙ぎに振るう。体を沈めて銀時は傘をかわし、神楽の傘は後ろの木を倒した。

「ちよつと銀さん！神楽ちゃん！ストップストップ！！」

新八は二人を止めようとして叫んだ。

「何だ新八！？」

「真剣勝負の邪魔すんじゃねーヨ！」

二人は止めに入った新八を睨む。

「いや二人とも冷静になろうよ！僕らが戦うなんておかしいですよ！！」

「うるせーよダメガネ！そのメガネ割ってただのダメにしてやるのか？」

「地味男はそこで地味に指くわえてガタガタ震えてるヨ」

「んだとコラアアア!!」

二人の言葉に新八の堪忍袋の緒が切れた。しまっていた木刀を取り出す。

「銀さんこそ主役の座から降ろして脇役にしてやるよオ!! 神楽ちゃんも語尾の『アル』なくして、ただの小娘にしてやるよオ!!」

「上等だコラアアア!!」

「かかってくるヨロシ!!」

はい、この時点で新八君もバトル参加決定! 新八も加わってバトルはヒートアップする。

「うおおお!!」

新八は怒りに任せて、銀時に向かって木刀を振るった。銀時は新八の攻撃を防御し、木刀を弾いて新八の顔面に木刀を叩き込んだ。

「ぐばあ!!」

銀時の攻撃を食らった新八は吹き飛ばされて木にぶつかつた。

「ブハハハハ! 新八イ! お前が俺に勝とうなんざ百年早えんだよ!!」

銀時が笑っていると、

「ほあちゃあああ!!」

背後から神楽が銀時の頭に傘を叩きつけた。

「こはっ!!」

頭を打たれた銀時はその場に倒れた。頭を押さえて悶える銀時。

「ブハハハハ! 私がいる事を忘れたアルかアアア!!」

神楽が笑っていると、

「うおおお!!」

横から新八が木刀を振ってきた。木刀は神楽の左脇腹に当たった。

「ぐ...! 新八いつの間に!？」

横にいる新八を睨む。

「地味をバカにするな! こうやって気配を絶って相手に近づく事もできるんだアアア!!」

木刀を神楽に突き付けて新八は叫んだ。

その直後。

「お前それ存在感が薄いだけだろーがアアアア!!」
銀時が起き上がりながら木刀で新八の顎を、拳で神楽の顎を攻撃した。

「やったアルな銀ちゃん!」

「お前が先に仕掛けたんだろーが!」

「か…体が持たない…」

万事屋バトルロワイヤルは続く。

うーん。新八、死ななきやいいけど。

*

フェイトと、なのはの空中戦。

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

「レイジングハート!お願い!!」

「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく。

「!」

金色の閃光は桜色の閃光に掻き消された。フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

「なのは…強い!」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

「なのは!!」

ユーノが叫ぶ。

「あっ!?!」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

「!!」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。勝負は決した。

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシードが一つ出てきた。

「レイジングハート:何を!?!」

「きつと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシードを受け取ると、地上に着地した。

「銀時を連れて帰るよ。アルフ」

「さっすが、あたしのご主人様」

アルフはフェイトの下へ戻る。

「待って!」

なのはも地上に降りる。なのはの声にフェイトは足を止めた。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きつと加減なんて出来ない」

振り向かず、なのはにそう言った。

「名前:あなたの名前は!?!」

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「わ:私は」

なのはが名前を言おうとして、フェイトは銀時達の方へ向かった。「ばいばい」

アルフもフェイトに続いた。

*

「銀時…大丈夫かな？」

フェイトは少し不安な顔をする。

「だ…大丈夫だよフェイト！銀時なら心配ないさ！」

フェイトを元気づけようとするが、アルフも内心少し不安だった。

あの怪力チャイナ娘が相手では、いくら銀時でもキツいかもしい。何より家族と戦うのは辛いだろう。

しばらく走っていると銀時達の姿を捉らえた。

「銀時！」

フェイトとアルフは走ってた足を止めた。

銀時と神楽は服もボロボロで肩で息をしていた。

新八？新八は力尽きて地面に倒れてます。早々に万事屋バトルロワイヤルをリタイアしました。

「ぎ…銀時？」

フェイトが声をかけた。

「あ？おお…フェイトと…アルフか…もうちつと待ってる…すぐ終わるからよ…」

「あの…ジュエルシールドはもう回収したから…無理しなくていいんだよ？」

目的の物を手に入れたのだから、もうここには用はない。

「銀ちゃん…帰ってもいいアルよ？その代わり勝負は私の勝ちネ…」

…」

神楽はニヤリと笑みを浮かべる。

「バカヤロー…俺アまだまだ余裕だよ」

木刀を構える。

「俺アまだ…半分の力しか使ってねーぜ…」

「ププー…銀ちゃん…もうそんなに使ったアルか…？私なんかまだ40%しか使っていないネ…」

「…いや…実は俺も…まだ30%しか使ってねーんだよ……」

「わ…私も本当は20%しか使ってないアル……」

「…俺は10%だコノヤロー……」

二人がそんなやり取りをしていると、

「…いや……キリないから……」

最後の力を振り絞って、新八がツッコんだ。

流石、『銀魂』の貴重なツッコミ役。こんなボロボロの状態でもツッコむなんて、ツッコミの鑑かがみだね。

一方、フェイトとアルフは銀時と神楽のやり取りを呆れた顔で見ている。

「アルフ」

「はいよ」

フェイトに言われてアルフは銀時の背後に近づいた。そして大きく口を開いてガブツ、と頭に噛み付いた。

「おわっ！何だ！？急に真っ暗になったぞ!？」

突然、視界が遮られて銀時は混乱する。

「ほら。帰るよ銀時」

アルフの声が銀時の頭に響いた。

「アルフ!? テメー、定春みたいに頭に噛み付くんじゃねエエエ!」

そのまま銀時はアルフに頭を噛み付かれたまま連れてかれた。なんともシュールな絵である。

神楽と新八は呆然となってアルフの後ろ姿を見つめた。

フェイトも新八達に背を向けた。

「…ごめんなさい」

二人に小さく謝ってフェイトも去っていった。

残された新八と神楽はフェイト達が去った方を静かに見つめた。

第九訓：修学旅行で消灯時間を守る学生はいない（後書き）

銀時「はい。今回の話で新八は何回ツッコんだでしょうか？答は俺も作者もわかりません」

新八「誰もわかんないのかよ!？」

作者「だって数えるの面倒じゃん」

第十訓：綺麗な物にはトゲがある（前書き）

作者「いよっしゃああああ！ついに第十訓まできたぜ！！」

新八「いやテンション高すぎませんか？第一章が終わってそのテンションならわかりますけど」

作者「いいじゃないか新八君！俺がどんなテンションをしようとするの自由なんだから！」

新八「まあそうですけど」

銀時「おい、お前ら。さっさと本編始めるぞ」

作者「それじゃあ銀さん！皆さん！頑張ってください！」

全員「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十訓！始まるぜ！！」

第十訓：綺麗な物にはトゲがある

夕方。

アルフは尻尾を揺らしながら、おいしそうにドッグフードを食べている。

「ん〜こっちの世界の食事もなかなか悪くないよね〜」

満足したアルフは席を立つ。

「さて、ウチの姫様はっ」と

ドッグフードを一箱持つてフェイトの部屋に向かう。

部屋に入ると、バリアジャケットを着たフェイトがベッドで横になっ
てる。

「ああ。また食べてない」

台の上には、あまり手を出していない食事が置かれてあった。

「ダメだよ食べなきゃ。銀時に怒られるよ？」俺の作った飯が食べ
ないのかコノヤロー”って”

アルフは銀時の口調を真似て言った。

「銀時なら言いそうだね。大丈夫だよ。少しだけ食べたから」

「まあそうみたいだけど…」

フェイトはゆっくりと体を起こした。

その時に見えたフェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフは
顔を悲痛に歪ませた。

「フェイト…銀時には言わないのかい？」

「……うん。銀時には余計な心配は掛けたくないから…」

「でも…でもさフェイト。銀時なら、あの人からフェイトを護って
くれるかもしれないよ」

「大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だっと言ってたし」

そう言っつてフェイトは立ち上がった。

「ジュエルシードの位置特定は出来てるから銀時が帰ってきたら出
発しよう。確か散歩だっけ？」

「う…うん…けどフェイト…あんまり無理しないでね」
「大丈夫だよ。私、強いから」
フェイトは微笑みながらアルフに言った。

*

マンションの近くの公園。
そこに銀時がいた。頭には包帯が巻かれている。アルフに噛まれた傷だ。

誰もいない公園で、銀時は一人ベンチに座って考え込んでいた。

ジュエルシードは危険な物なんだ！

アルフやユーノが言ってた言葉を思い出す。

「危険な物ねえ…」

そう呟いて夕焼けの空を見上げた。

*

銀時が帰ってきた後、三人は再び海鳴市へやってきた。ちなみに銀時はいつもの着物を着て、アルフは狼の姿になつてる。ビルの屋上に立って下を見渡す。

「おいおい。こんなゴミゴミした街中から探すのか？」

メンドくさそーに銀時は頭を掻いた。

「ちょっと乱暴だけど、辺りに魔力流を打ち込んで強制的に発動させるよ」

フェイトが始めようとするよ、

「ああ、ちょっと待った。それあたしがやる」

自分がやると言ってアルフが前が出る。

「大丈夫？結構疲れるよ」

「あたしを一体誰の使い魔だと思いで？任せてよ」

「うん。それじゃあお願いね」

フェイトはアルフに任せた。

「ちよつと待った」

銀時が待ったをかけた。

「え？」

「フェイト。悪いんだけど、ジュエルシード一個見せてくんねーか？」

「ジュエルシードを？」

「ああ」

銀時の目は、いつの間にか死んだ魚のような目から鋭い目が変わっていた。

「は…はい」

言われてフェイトはバルディッシュからジュエルシードを一つ取り出した。

銀時はジュエルシードを受け取った。

「銀時？」

「……………」

フェイトの声に応えず、銀時は険しい顔で、ジッとジュエルシードを睨むように見つめた。

フェイトとアルフは黙ってその様子を見てる。

「……………ありがとな。返すぜ」

そう言つて銀時はジュエルシードをフェイトに返した。

「どうしたの銀時？」

ジュエルシードを受け取ったフェイトは首を傾げた。

「いや…なんでもねえ」

それつきり銀時は黙ってしまった。表情は険しいままだ。

「…それじゃあいくよー！」

アルフが構える。

「はああああー！」

アルフの足下にオレンジ色の魔法陣が展開される。それにジュエルシールドが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

*

なのは達も同じく街でジュエルシールドを探していた。

「こ…これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く…!広域結界!間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

*

空は暗くなり、ゴロゴロと雷が鳴る。

「あれ…?これももしかして…俺止めた方が良かった?何かヤバイ事になってない?」

銀時は汗を流しながら、少し顔を引きつらせた。

その時、街中に一本の青い光が立った。

「見つけた!」

「けど、あっちも近くにいたみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

「早く片付けよ。バルディッシュ」

「Sealing form setup」

フェイトがバルディッシュを構える。

*

なのは達も別の場所でジュエルシールドの光を確認した。

「あれはジュエルシードの光!?」

光を見ながら新八が声を上げた。

なのはレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル!」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

「ジュエルシード、シリアル19!」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

「封!」

「印!」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのは達は急いでジュエルシードのある場所に向かった。ユーノも走る。

「やつぱ新八と神楽もいるか」

銀時は二人の姿を確認する。

「銀時。無理に戦わなくていいんだよ」

「大丈夫だよ。心配すんな」

銀時は腰に差してある木刀を抜いた。

「…ごめんなさい。私達のせいで家族と戦うことになって…」

表情を暗くしながらフェイトは銀時に謝った。

「だから気にすんなって。あいつらとの喧嘩なんていつもの事だ」

そう言つて銀時はフェイトの頭を軽く叩いた。

「さつさと終わらせるぜ」

「…うん。アルフはフェレットの方をお願いね」

「はいよ!」

と、フェイトに答えた直後、銀時がアルフの背中に乗った。

「ちよつと銀時!何勝手にあたしの背中に乗ってるんだい!?!」

「しょうがねーだろ?俺は空飛べねーんだからよ。頼むよアルフ!ポンポンッと軽く背中を叩きながらアルフに言った。

「しょうがないねえ。じゃあしつかりつかまつてるんだよ!」

銀時を背中に乗せてアルフはフェイトと一緒にジュエルシールドへ向かう。

なのは達はジュエルシールドの前に着く。そこへユーノもやってきた。「やった！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが障壁を張って防御する。

銀時はアルフの背中から飛び降りた。

ユーノはアルフを引き付けて、なのは達から離れる。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

新八と神楽は銀時と対峙する。

「この間の続きといくか」

そう言っつて銀時は木刀を構える。

なのははフェイトと対峙する。

（目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない……）

なのはは真っ直ぐにフェイトを見つめる。

（だけど知りたいんだ！）

なのはは一步前が出る。

「この間は自己紹介できなかつたけど……私、なのは！高町なのは！

私立聖祥大付属小学校三年生！」

なのははフェイトに自己紹介した。

だが、

「Scythe form」

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた。

「……！」

なのはもレイジングハートを構える。

（どうしてそんなに寂しい眼をしているのか……）

フェイトがバルディッシュを振り上げて襲い掛かる。

「Filler fin」

なのはは足に翼を展開させて空を飛んだ。

*

地上では、銀時と新八と神楽が木刀と傘で打ち合っていた。

「銀さん！僕達で争ってる場合じゃないでしょ！？」

木刀を交えながら新八が目の前の銀時に言う。

「銀ちゃん、そんなにジュエルシードが欲しいアルか！？」

新八の隣にいる神楽も銀時に叫んだ。

銀時は表情を険しくしている。

(…何だ？いつもの銀さんと様子が違う…)

銀時の様子に新八は違和感を感じた。

銀時が口を開いた。

「新八、神楽。このまま俺の話を受け」

「え？」

「銀ちゃん？」

最初は戸惑ったが、二人は銀時の言う通りにした。

「お前らすぐにジュエルシード集めをやめろ」

「え？」

「もちろん、なのはとフェレットにもやめさせる。こっちも何とかフェイト達を説得してやめさせる」

真剣な顔で銀時は二人に言う。

突然、ジュエルシード集めをやめろと言われて新八は戸惑った。

「…急にどうしたんですか銀さん？」

「さっきフェイトに頼んでジュエルシードを一つ見せてもらった
そう言っただけで銀時は宙に浮いているジュエルシードを見た。

「手に取って見てわかった。ありゃお願いを変な風に叶える迷惑な
道具なんかじゃねえ。もつと、とんでもなく危ねえもんだ」

「どつという事アルか？」

神楽は首を傾げる。

「見た目は綺麗な宝石みたいだがよ…中身はとんでもなく危険な感じがするんだ…俺達が想像してる以上にな…」

銀時は静かに二人に話した。

話を聞いている新八と神楽は、いつの間にか冷汗を流していた。

「でも…仮に僕らがジュエルシード集めをやめたとして…他のジュエルシードはどうするんですか？」

街にはまだジュエルシードが散らばってる。銀時の予想が本当なら、このまま放っておくわけにはいかない。

「フェイトから聞いたが、『時空管理局』ってのがあらしい。そいつらに他のジュエルシードを任せればいいんだよ」

『時空管理局』。

数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関。新八と神楽もある程度の事はユーノから聞いていた。

「大体こういうメンドーな事は、そういう組織に任せりゃいいんだよ」

「でも…なのはちゃん…やめるかなあ…？」

「難しいアル」

新八と神楽は悩んだ。

「こつちもフェイトを説得できるか微妙だな…」

銀時は険しい表情で考える。

（俺が言っても聞かないだろうしな…もしフェイトを止められるとしたら、フェイトの母親か…）

そんな事を考えながら木刀を振ったら、新八の顔に当たった。

*

フェイトは、なのはの後ろに回る。

「Flash move」

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「……！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

「話し合いだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……話さないと、言葉にしないと伝わらない事だっけとあるよ……！」

「……！」

「…………！」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声を出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

「…………！」

フェイトは黙って、なのはの話聞く。

「これが……私の理由！」

「……私は……」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！ 答えなくていい……！」

アルフがそれを止めた。

「……！」

「優しくしてくれる人達の所で、又ク又クと甘ったれて過ごしてきたガキンちよに何も教えなくていい……！」

アルフの言葉に銀時は更に顔を険しくした。

（おいおい。まさかフェイトの母親と何か関係があるのか？ もしそらうだったら、母親に頼んでフェイトを説得させるって、俺の作戦が

グダグダじゃねーか)

表情を険しくしたまま銀時は考え込む。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト!」

「なのは!」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

「大丈夫? 戻ってバルディッシュ」

「Yes, sir」

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前に佇んでるジュエルシード目掛けて走った。

「フェイト! ダメだ危ない!」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。するとジュエルシードから強い光が放たれる。

「く…!」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ… 止まれ!」

手袋が破れて血が吹き出る。

「あのバカガキ!!!」

木刀を手放して銀時はフェイトに駆け寄った。

「こないで銀時！」

「うつせえ！お前の意見は却下だ！！」

ジュエルシードを握るフェイトの手を握った。

直後、銀時の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

「ぐあああああ！！」

銀時は悲鳴を上げた。

「銀時！」

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

フェイト、新八、神楽が銀時の名を叫んだ。

「がああああ！！」

体に激痛を受けても銀時はフェイトの手を離そうとはしなかった。

「銀時！魔導師でもないのに、なんて無茶するんだい！！」

アルフが悲鳴に近い声を上げる。

「銀時！」

フェイトが銀時の名を呼ぶ。

「バ…バカヤロー…：…さつさと…：…封印しやがれ…！」

「銀時…！くっ！生まれ、生まれ、生まれ、生まれ！」

懇願するようにフェイトはジュエルシードを握り締める。

やがてジュエルシードの光が収まり、魔法陣も消える。

銀時は地面に膝をついた。

「銀時…！！」

フェイトは銀時の体を抱え、アルフは銀時の木刀を拾い、人型に戻って駆け寄る。

「銀時！しっかりして！」

銀時の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

「…へへ…フェイト…：…オメーはやればできる子だと信じてた…：ぜ

…！！」

そう言つて銀時は、ゆっくりと目を閉じて気を失った。

「銀時！」

フェイトは銀時を抱く腕に力を入れた。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

「銀さん！」

新八、神楽、なのはが駆け寄ろうとした。

その時、アルフは振り返って射抜くような鋭い眼で新八達を睨みつけた。

「な……！」

アルフの眼に新八達は動きを止めた。

そしてアルフは新八達から視線を外した。

「あたしが運ぶよ、フェイト」

「……うん。お願いアルフ」

アルフは銀時を抱きかかえて、フェイトと共にビルを渡りながら去っていった。

新八達は、ただ黙ってその姿を見つめることしかできなかった。

第十訓：綺麗な物にはトゲがある（後書き）

作者「感想・評価、お待ちしてます」

銀時「待ってるぜ」

第十一訓：物を隠す時は隠し場所を慎重に選べ（前書き）

銀時「シリアスになってきた『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第
十一訓！始まるぜ！」

第十一訓：物を隠す時は隠し場所を慎重に選ぶ

フェイト達はマンションの部屋に戻った。気絶してる銀時を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当てをしている。

フェイトの方の傷は銀時が庇ったおかげで軽いもので済んだ。

「これでよし」と

アルフが傷の手当てを終える。

「銀時……」

フェイトはそつと銀時の手に触れた。

「ごめんなさい……私のせいで……」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

「フェイト……」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

「ごめんね銀時……本当にごめんなさい……」

俯きながらフェイトは謝った。

その時。

「何勝手に自分のせいにしてんだコノヤロー」

声がした。

フェイトは顔を上げて銀時を見た。銀時はいつの間にか目を開けて

いてフェイト達を見ていた。

「銀時！」

「気がついたのかい!？」

「ああ」

ゆっくりと銀時は上半身を起こした。

「銀時……本当にごめんね。私のせいで……銀時を危ない目にあわせて

……」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

銀時がため息をついた。

「顔上げる、フェイト」

銀時の優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

「銀時……」

「コイツは俺の意志で動いて、できた傷だ。だからそうやって自分を責めるんじゃないよ」

「銀時……」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

「けどな、フェイト」

銀時は微笑んで、しばし間をとった。

「やっぱりお前のせいだろうがアアアアア！」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になつた銀時は、フェイトの頭に拳骨を食らわせた。

「っ……!!」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みを悶えた。

「銀時！あんた何やってんだい!？」

アルフが銀時に飛び掛かるうとして、

「おすわり！」

「わんっ！……ハッ！」

銀時の言葉でアルフは思わず、おすわりをしてしまった。

「フェイト。前にお前が、俺に何て言つたか覚えてるか？」

「……………」

フェイトは銀時に何と言つたか記憶を辿る。

「お前は俺に”一人で無茶はするな”って言つたんだ」

「……………」

フェイトは顔を俯かせたまま黙つて聞いている。

「ところが、一人で無茶をしたのはフェイト。お前の方だ」

「……………」

「ガキのくせに、何でも一人で背負おうとしやがって……お前は俺が信用できないか？」

「そ……そんな事は……」

銀時の言葉にフェイトは目を泳がせてしまう。

フエイトの様子に銀時は二度目のため息をついた。そしてゆっくりと片手をフエイトに伸ばした。

「！」
また殴られると思ったフエイトは、ビクツと体を震わせて目を閉じた。

だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。ゆっくりと目を開けると、銀時はフエイトの頭に手を乗せていた。

「お前は、まだガキなんだからよ。もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ？」

微笑みながら銀時はフエイトに言った。

言われてフエイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフエイトを見つめてる。

「ついでに俺もな」

そう言つて銀時はフエイトの頭から手を離れた。

「銀時……」

フエイトは銀時に顔を向けた。

「もう一人で無茶するんじゃないぞ。いいな？」

フエイトを真っ直ぐに見ながら銀時が言う。

「……うん」

フエイトは首を縦に動かして答えた。

フエイトの答に銀時は満足そうに笑った。二人の様子を見守ってたアルフも嬉しそうに笑つて尻尾を振つてる。

「んじゃ、飯にするか」

「あつ、銀時。その手で料理作れるのかい？」

「あ」

アルフに言われて銀時は自分の手を見た。

明日には治るだろうが、包帯でグルグル巻きになってる今の手では調理はできない。

どうしたものか、と銀時が悩んでいると、

「わ……私が作るよー！」

フエイトが手を挙げて言った。

「え？」

銀時は目を細めた。

*

夕食。

テーブルの上には黒焦げになってる料理が並べられていた。

全てフエイトが作った料理だ。銀時は目を細めてジッと黒い料理を見つめた。さすがのアルフもちよっと引いている。

最初に口を開いたのは銀時だ。

「えーっと…これは何？アート？」

「…料理です」

フエイトは少しムツとした顔で言った。

「いや、お前これは料理じゃないよ。これを料理と言ったら、料理に対する冒涇だよ？」

銀時がそう言うと、フエイトはバルディッシュを取り出した。

いつの間に直ったんだ？

「食べるよね？銀時？」

フエイトはニッコリ笑ってバルディッシュを構えた。

「ハイ、食べマス」

銀時はとても良い笑顔で答えた。

*

銀時は寝巻に着替えて寝る準備をしている。

フエイトの料理？食べたよ全部。味は思ったとおりマズかったけどな。だが俺の世界にいる殺人料理人の作った料理に比べたら全然マシだったけどな。

そんなこんなで銀時の大変な一日は終わろうとしていた。

(明日はフェイトの母親の…ラフレシアだっけ?とにかく母親に報告しに行くから、そんな時に母親を説得してフェイトのジュエルシード探しをやめさせるか……)

そんな事を考えながら銀時がソファで寝ようとした時、フェイトがやってきた。

「…銀時」

「ん?何だフェイト?眠れねーのか?」

「あの……その……」

フェイトは顔を赤くしながら、胸の前で手をモジモジさせてる。

銀時は首を傾げた。

「えっと……一緒に…寝てくれる?」

「は?」

銀時は片眉を上げた。

「何言ってるんのお前?」

「あ…あの…銀時…一人で寝るのは…寂しいかなって思って…ええっと……」

フェイトは顔をキョロキョロさせながら言う。その顔はどんどん赤くなっていく。

(顔スゲー赤いな。このままいくと何か爆発するんじゃない?)

顔を赤くしてるフェイトを見ながら銀時は思った。

「…えっと…ダメかな…?」

上目遣いでフェイトが聞いてくる。

銀時は本日三度目のため息をついた。

「わかったよ。一緒に寝てやるよ」

銀時がそう言った瞬間、フェイトは笑顔になった。

「うん。待ってるね」

フェイトは嬉しそうに自分の部屋に向かう。

「フェイト」

「何?」

フェイトは足を止めて銀時に振り返った。

「銀さんはロリコンじゃねーから安心しろ」
「？」

ロリコンという言葉を知らないフェイトは首を傾げた。
この夜、三人は一緒の部屋で寝ることになった。
ちなみに銀時は狼姿のアルフと一緒に床で寝た。

*

翌日。

銀時達はマンションの屋上にいる。

「銀時。準備はいい？」

「ああ」

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しに行く。
フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親へ
のお土産だろう。

「じゃあ行くよ」

「おお」

「次元転移。次元座標。 876C 4419……………」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。

「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロッサの主の所へ！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

*

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。

その直後、銀時は顔を青くして、

「おぼろろろろろろろろろろ！！！」

盛大なゲロを吐いた。

「銀時！？」

「ちょっと！どうしたんだい銀時！？」

二人が心配そうに聞いてくる。

「な…何か気持ちわ…オボロロロロ…！」

「まだ吐くんかい！！」

アルフがツツコんだ。

銀時が気分を悪くしてゲロを吐いた理由。

それは『高次空間内』という空間が、今までいた所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れていない銀時は気分を悪くし、ゲロを吐いたのだ。

「わ…悪い……先行つててくんねーか？…後から行くからよ…」

「う…うん。わかった。無理しないでね銀時」

「ゆっくり休んでな」

そう言つて二人は母親の所に向かった。

一人残つた銀時は、座り込んで気分を落ち着かせた。

*

しばらくして銀時の気分は落ち着いてきた。

「ふー。やっと落ち着いたらぜ」

ゆっくりと立ち上がった。

「あ…フェイトに部屋の場合聞くの忘れてた…」

銀時は軽く舌打ちをした。仕方なく適当に中を歩くことにした。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。銀時は歩きながらどうやってフェイトの母親を説得させるか考えた。

(ジュエルシードを欲しがってるのは母親の方だからな…こっちの説得も難しそうだな…ヤベツ、どうやって説得させるかわかんなくなつてきた…)

頭を掻きながら銀時は悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

「何やってんだアイツ？」

銀時は首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトがいない。

(一人で母親に報告してんのか?)

そう思いながら銀時はアルフに近寄った。

「おい。こんなトコで何やってんだ？」

アルフに声をかけた。

銀時の声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げて銀時を見た。

「銀時……」

アルフは立ち上がり、涙目になって銀時に抱き付いた。

「銀時っ!!」

「おわっ!? おいアルフ! 何だよ急に!？」

銀時は慌てながらアルフに尋ねた。

「銀時……お願いだよ……フェイトを……フェイトを……助けて……」

泣きながら懇願するアルフに銀時は目を細めた。

その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

「……こいつぁ何の音だ？」

銀時は扉を覗んだ。

「フェイトが……フェイトが……」

「此処にいる」

銀時はアルフに残るように言って、扉の前に立った。大きく息を吸い、

「うるぁぁぁぁ!!」

叫びながら扉を蹴った。扉は開き、銀時は部屋の中に入った。

「!!!!」

部屋に入って銀時は目を見開いた。

バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れていた。

「フェイト!!」

銀時は駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

「フェイト! おい! しっかりしろ!」

「…あ…銀時…?」

フェイトはうつすらと目を開けて銀時を見た。

「いきなり扉を開けて入ってきて…貴方、一体何者?」

前から声が聞こえた。

銀時は顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見えてくる黒髪の女が立っていた。

この時が、坂田銀時と大魔導師プレシア・テストロッサが初めて対峙した瞬間だった。

「…人に名を名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だって母ちゃんに習わなかったか?」

銀時の言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

「…私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサよ」

「俺は銀時…坂田銀時だ」

銀時はフェイトを抱いたまま立ち上がった。

「アルフ!」

銀時は大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄ってきた。

「フェイト!!」

「フェイトを連れて傷の手当てをしろ」

そう言って銀時はアルフにフェイトを預けた。

「う…うん。銀時は?」

「俺はあの女と話がある」

「…銀時…気をつけなよ…」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋には銀時とプレシアの二人つきりになった。

「テメー、フェイトの母親だろ？何であんな仕打ちをした？」

「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから躡しつをしただけよ」

プレシアの言葉に銀時は怒りを燃やした。

「…フェイトがどんだけ頑張ったか…どんだけ辛い思いをしたか、わかってんのか？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

「さあ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

「テメエ！！」

「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が銀時に向かって放たれた。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで雷をかわした。

（速い！）

銀時の素早さにプレシアは少し驚いた。

（魔力による肉体強化？違うわ。あの男からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖を銀時に向けて再び雷を放つ。

魔法が使えない銀時は避けることしかできない。

「いつまで逃げ切れるかしら！？」

プレシアの容赦のない雷が銀時に迫る。

「くっ！」

銀時は後ろに跳び、雷は銀時の前に落ちた。

後ろを向くと壁があった。

（ヤベツ！このままじゃ壁にぶつかる！）

だが銀時は、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ。

「！！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

「おわっ！」

銀時は床に倒れた。

「何だここ？隠し通路か？」

立ち上がりながら銀時は隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

「なっ！？」

ソレを見て銀時は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

「…フェイト…！？」

第十二訓：他人の為と言ってやってる事は結局は自分の為（前書き）

銀時「いや〜きちちゃったな」

新八「きちやいましたね」

神楽「『作者とキャラの会話がイタい』って感想がついに来たアル」

銀時「まあいつか来るとは思ってたけどな。というわけで作者。もう前書き、後書きに出るなよ〜。出るなら一人で出るよ〜」

神楽「それじゃあ、とつとと本編にいくアル！」

銀時「うーし。『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十二訓！始まるぜー！」

第十二訓：他人の為と言ってやってる事は結局は自分の為

銀時の前に、ガラス張りの大きなケースがあった。

その中には、緑色の液体の中を漂う金髪の少女がいた。

「もう一人の…フェイト？」

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。

銀時がケースに近づこうとした時、

「アリシアに近寄らないで！！」

「！」

プレシアの怒声と共に雷が銀時を襲った。

「うおっ！！！」

銀時はなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

「おい…こいつぁどういう事だ？」

銀時は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

「何でフェイトがもう一人いるんだ？」

「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

銀時の言葉にプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「人形だと…？」

プレシアの言葉に、銀時は目を細めた。

「フェイト・テストロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。」フェイト”の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

「な…！？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

銀時は黙って聞いている。

「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった。いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた。

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ!!！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

銀時はジッとプレシアを見つめた。プレシアの姿を見て銀時の脳裏に一人の男が浮かんだ。

林流山。

銀時のいた世界の有名な機械技師だ。

自らの実験中に娘を死なせてしまい、死んだ娘を蘇らせようと『芙蓉プロジェクト』を計画した。

娘・芙蓉の人格データを機械人形からくりじんぎょうに引き継がせ、娘が死んでしまった苦しみや悲しみから逃れるために流山自身も実験体に使い、自分の人格データを機械人形に組み込んだ。

全ては死んだ娘のためではなく、自分のためにしたこと。

銀時は口を開いた。

「…プレシア」

プレシアは、上げていた視線を銀時に戻した。

「テメーは娘のために、娘を生き返らせようとしてんじゃねえ」

「……何ですって？」

銀時の言葉にプレシアは目を鋭くする。

「フェイトを造ったのも、アルハザードに行つて娘生き返らせようとしてんのも全部、自分のためだ」

「!?!」

プレシアの目が見開かれる。

「テメーは自分の寂しさを埋めるために、フェイトとアリシアの魂を弄んでんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

「……黙りなさい」

「テメーは、娘が死んだ事実から逃げてるだけだ」

「……黙れ」

銀時の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

「今のテメーが、胸張ってアリシアに”母親”だと言えんのか!?!」

「黙りなさいって言ってるのよ!?!」

プレシアから、巨大な雷が銀時に向かって放たれた。

「ぐああああああ!?!」

雷は銀時に直撃した。

(避けなかった!?!)

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる。

銀時は火傷を負い、着物は所々焦げて煙が出てる。

肩で息をしながら銀時はプレシアを見る。

「……気が済んだかよ?」

「く……!うるさい!その減らず口を黙らせ……」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。

「う……ごほつ!」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

「おいっ!どうした!?!」

プレシアの異変に銀時が駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

「あんた……まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

「……ふふ。大魔導師でも……不治の病は治せないのよ……」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の銀時を睨みつける。

「…んな事するかよ。あんたを殺すのが目的じゃねえ。それに…」

銀時は一旦、言葉を切った。

「フェイトのヤツが悲しむ」

「……………」

プレシアは顔を俯かせた。

「銀時…」

「ん？」

プレシアはゆつくりと顔を上げた。

「貴方なら…雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その木刀で叩けたはずよ……何故そうしなかったの…？」

「だから、俺ああんたを叩くのが目的じゃねーんだよ」

メンドくさそうに頭を掻きながら銀時は答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

「…銀時…」

「今度は何だ？」

「…私は……間違っていたの…？」

俯いたままプレシアは銀時に聞いた。

だが銀時はその問いには答えない。

「もし…間違っているなら……私は…私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

「…さあな」

銀時は歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前で銀時は足を止めた。

「ただよお」

「！」

プレシアは振り返って銀時の後ろ姿を見た。

「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけなんだよ」

「……！」

銀時の言葉にプレシアは目を見開いた。

「じゃあな」

銀時は通路から出ていった。

一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

「アリシア……私は自分のために……貴女を弄んでいたの……？」
近寄ってケースに触れる。

「私は……どうすれば……」

プレシアは力無く床に座った。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

「フェイト……」

*

廊下を歩いて、フェイト達がいる部屋を目指す銀時。

「……こいつぁプレシアを説得するのは無理かもしれないな」

銀時は頭を掻きながら悩んだ。

「たくつ。とんでもねー頑固親子だぜ」

銀時はフェイト達がいる部屋に入った。

「銀時！」

銀時に気付いたアルフが駆け寄った。

「あんた……！どうしたんだい、その体は！？」

プレシアの雷を受けてボロボロになった銀時の姿を見てアルフが叫んだ。

「あ？お前これはアレだよ？ドーナツ作りに失敗したんだよ」

「何言ってるんだい！？あの女にやられたんだろ！？」

「大丈夫だよ。それよりフェイトはどうだ？」

銀時は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

「…今は落ち着いて眠ってるよ」

銀時は椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

「ん…」

フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

アルフが目には涙を浮かべる。

「…アルフ……銀時……」

フェイトは二人を見て小さく呟いた。

「よお」

銀時が声をかけた。

フェイトはボロボロになってる銀時の姿を見て驚いた。

「銀時…！その傷…どうしたの？」

「これか？」

銀時は、指で耳の穴をほじる。そして、アルフにも言った言葉を口にした。

「ドーナツ作りに失敗した」

*

翌日。

銀時はフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシールド集めを続けることになった。

屋上に銀時達が立ってる。

「もうすぐ発動するジュエルシールドが近くにある」

夕焼けの空を見上げながらフェイトが言う。

後ろには銀時と狼形態のアルフがいる。

（マズいな…今はまだフェイトにアリスアの事はバレないが、ジュエルシールドを集めれば、いずれはバレる）

銀時は表情を陰しくして考える。

（何か…何か方法は……ないか!?!）

*

夕方。

学校からの帰り道。

なのはは新八達と出会った。

ユーノが赤く丸い石をなのははに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

「レイジングハート。直ったんだね？よかった」

「Condition green」

レイジングハートは、なのははに答えた。

「また、一緒に頑張ってくれる？」

「All right, my master」

なのははレイジングハートを握った。

「ありがとう」

なのははの様子を見て、新八と神楽は安心したように微笑んだ。

*

銀時達はジュエルシードがある場所にやってきた。海が見える公園。

公園内には銀時達以外、誰もいない。

公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。

一本の木の中に、ジュエルシードが入っていた。木に変化が起る。

「ゴオオオオオ!!」

二本の腕が生えた巨大な木の化物になった。

「元気いいなオイ。その元気を少し分けてほしいぜ」

木の化物を見ながら銀時が呟いた。

「フェイト」

アルフがフェイトに声をかけた。

「うん。あの子達もいる」

フェイトは、なのは達の姿を捉らえた。

「フェイト」

今度は銀時がフェイトを呼んだ。

「何？」

「あの化物の相手は俺がしてやつから、お前は封印だけやれ」

「え？」

銀時の提案にフェイトは戸惑った。

「でも…」

「言っただろ？」

銀時はフェイトの頭に手を乗せた。

「お前はガキなんだから、もっと周りを頼れ」

「！」

銀時は前に出る。

木の化物と対峙する銀時。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

銀時の姿を見つけた新八と神楽は声を上げた。

「まさか…彼は一人でアレに立ち向かうつもりなのか!? 無茶だ！」

ユ一ノは、銀時の行動を無謀だと思った。

新八と神楽は銀時の姿を見て、目付きを変えた。

「行こう神楽ちゃん！」

「うん！」

二人は銀時に向かって走り出した。

「新八さん! 神楽ちゃん！」

なのはが叫んだ。

「なのはちゃんは、そこにいて！」

「封印は任せたアル！」

木の化物は、目の前にいる銀時を睨みつけている。

「ゴオオオオオ!!」

銀時を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。

「ギャーギャーギャーギャーやかましいんだよ。発情期ですかコノヤロー」

そう言つて銀時は、腰に差してある木刀を抜いた。

その時。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

新八と神楽がやってきた。

「新八、神楽」

銀時は振り返つて二人を見た。新八と神楽は銀時の後ろで足を止めた。

「銀さん。あの時の傷は大丈夫なんですか？」

「ああ」

銀時は後ろにいる、なのはを見つけた。

「つーかお前ら、ジュエルシード集めやめろつて言つたら？」

「すいません。なのはちゃんを説得する事ができませんでした」

新八は謝りながら銀時に言った。

「そういう銀ちゃんこそ、ジュエルシード集めやめてないアル。あの二人の説得はどうしたアルか？」

神楽は目を細めて銀時を睨む。

「うるせーな。こつちだつていろいろあんだよ」

三人がそんな会話をしていると、

「ゴオオオオオオ！」

木の化物が雄叫びを上げた。

「何だ？無視されて怒ったか？寂しがり屋ですかコノヤロー」

銀時は再び木の化物を睨みつける。

「とりあえず今は」

新八は木刀を構えた。

「あの化物を倒すアル！」

神楽も傘を構える。ふと隣にいる新八を見た。木の化物を前にして

体が少し震えてる。

「新八」

神楽は新八に声をかけた。

「な…何、神楽ちゃん？」

新八は、少し汗を流した顔を神楽に向ける。

神楽は新八に耳打ちをした。

「新八。もし新八がカツコよくあの化物を倒したら、新八の好きなのはが新八の事を好きになる可能性が出てくるかもしれないアルよ？」

神楽の言葉で、新八の魂に火がついた。

「オルア！てめーら！とつとと、あのザコモンスターぶつ潰すぞオオオオ！！」

と、新八の気迫が上がった。

「え？どしたの新八君？親衛隊長の時並のテンションなんだけど？」
新八のテンションに銀時は若干引いている。

「魔法の呪文を言ったアル」

銀時はため息をついた。

だが、同時に心地いい感じがした。

（たくつ…こいつらがいると騒がしくてしょうがねーぜ）

銀時は一人笑みを浮かべた。

「よーし。万事屋が三人揃ったところで、久しぶりにいくぜ！新八！神楽！」

「おおっ！！」

銀時の声に新八と神楽は力強い声で応える。

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして銀時達目掛けて木の根を振り下ろす。

「うおおおお！！」

三人は叫びながら木の化物目掛けて走り出した。

「だらあああ！！」

銀時は、木刀を振るって自身に迫る巨大な木の根を切り裂いた。

「ほあちゃああー!!」

神楽も傘を振り回して木の根を切り裂く。

「うおおおおー!!」

新八も、切り裂く事は出来ぬが木刀で木の根を防ぎ、攻撃をかわしながら前に進んでいく。

次々と襲い掛かる木の根をもとせす、万事屋トリオは木の化物に迫る。

*

「っ…強い!!」

戦いの様子を見るアルフが驚きの声を上げた。

「銀時…こんなに強かったんだ…」

隣に立つてるフェイトも驚いてる。銀時が強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

「神楽さん…強い!!」

「新八さんも凄い!!」

ユーノとなのはも神楽達の實力に驚いていた。

特にユーノは魔法も使わずに、あの木の化物と戦ってる銀時達の力に驚愕を隠せなかった。

「一体…彼等は何者なんだ?」

*

「ジュエルシード斬りじゃあああー!!」

銀時は叫びながら、木刀を振り下ろして木の根を斬った。

「ジュエルシード蹴りじゃあああー!!」

神楽は強烈な蹴りで木の根を粉碎する。

「ジュエルシード防ぎじゃあああー!!」

新八は木刀で木の根の攻撃を防ぐ。

三人は木の化物の目の前まで迫った。

「ジュエルシード……」

三人は木の化物に攻撃するが、

「ガアアアアア！！」

木の化物は、障壁を展開して防いだ。

「ちっ！！」

銀時達は一旦、木の化物から離れた。

「あいつ、生意気にバリアなんか張ったよ！」

「今までのより強いね」

フェイトはバルディツシュを持つ手に力を入れる。銀時を助けない

気持ち在必死に抑える。

（大丈夫…銀時ならきつと……）

フェイトは銀時を信じて待った。

「ゴオオオオオ！！」

木の化物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

「近所迷惑だコノヤロー」

銀時は目を鋭くした。

「ジュー」

「エー」

「ルー」

銀時達はそれぞれ武器を構えた。

「……シード……」

三人は凄まじい気迫を放つ。

「ゴオオオ！？」

銀時達の気迫に、初めて木の化物は動揺した。

銀時達は地を蹴って、木の化物の顔の前まで跳んだ。

「……割りじゃああああ！！……」

それぞれの武器を振り下ろす。

木の化物は障壁を展開した。銀時達の攻撃は障壁に当たり、ガラス

が碎けるような音を立てながら障壁は割れた。

「うおおおおお!!」

銀時は一人木の化物の眼前にまで迫った。

「ジュエルシールド狩りじゃああああ!!」

上段から木刀を振り下ろし、木の化物を縦に斬った。

銀時は地面に着地した。銀時が斬った木からジュエルシールドが出てきた。

「やった!やったよフェイト!」

「うん!」

銀時の勝利にアルフとフェイトは喜んだ。

「何やってんだフェイト!さっさと封印しろ!」

「あつ!は…はい!」

銀時に言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。

なのはもレイジングハートを構える。

「ジュエルシールド、シリアル7!」

「封印!」

ジュエルシールドに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシールドが佇む。フェイトとなのははジュエルシールド挟むように対峙する。

「…ジュエルシールドには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイト

ちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

「…だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構える。

銀時達は地上で二人の様子を見る。

「アレ?何やってんの?何やるうとしてんの?嫌な予感がするんですけど」

二人を見上げて銀時は言う。

「ちよっ…あの二人戦う気ですよ！しかもジュエルシードの近くで！」

新八は叫んだ。ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

「おいイイイ！！フェイト待てエエエ！！お前そんなトコでやり合ったら、またジュエルシード暴走するぞ！！」

「なのはちゃん！一旦降りよう！いい子だから一旦地上に降りよう！！！」

「なのはアアア！早まるなアアア！！」

銀時達在必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

「あああああ！！！！」

銀時達は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ！」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

「！！！！？」

突然の乱入者に二人は驚いた。

「ここでの戦闘は危険すぎる！！」

地上にいる銀時達も呆然と見上げている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

第十二訓：他人の為と言ってやってる事は結局は自分の為（後書き）

ついに時空管理局登場。

そして次回は万事屋以外の銀魂キャラが！？

第十三訓：集まりし侍達（前書き）

新八「読者の皆さん。沢山の感想・評価・ご意見ありがとうございます！」

神楽「私達も嬉しいアル！」

銀時「それじゃあいくぜ！『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十
三訓！始まるぜ！」

第十三訓：集まりし侍達

「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。ジュエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

（おいおい。ここで管理局のお出ましかよ…）

銀時は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を険しくした。

「どうするんですか銀さん？」

新八が小声で銀時に話し掛ける。

「どうするって言われてもな…」

銀時は険しい表情のまま悩んだ。

フェイトと、なのはの間立つてるクロノは交互に二人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら…」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「はっ！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。

全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！銀時！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシード目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。銀時達も離れる。魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシードに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

「ちっ！」

銀時は、素早く木刀を魔力弾に向かって投げた。投げたと同時に銀時は走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾は銀時の投げた木刀によって弾かれた。

「ああっ！」

フェイトは、魔力弾と木刀がぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。

クロノは意識をフェイト達から銀時に向けた。

「何の真似だ！？」

銀時に向かって叫びながら黒いデバイスを構える。

だが銀時はクロノには何も答えない。

「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を銀時に向かって放つ。

銀時は魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

「銀時！」

アルフが叫んだ。

銀時とクロノの距離はどんどん縮まる。

（こいつ！魔法を使ってないのに、なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノは銀時の身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃った。銀時は上に跳んで魔力弾をかわした。

（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ銀時の姿を見た。

銀時の右手には、先ほど投げたはずの木刀が握られていた。

「なっ！？」

「ふっ！」

銀時は、上段から木刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、木刀をクロノの顔に向けた。

「チェックメイトだ。管理局さんよ」

言って、銀時はニヤリと笑った。

銀時が上に跳んだのは、落ちてくる木刀を掴むため。その場にいる全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユーノは驚愕を隠せなかった。

「か…勝っちゃった…」

銀時の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に銀時は勝った!? しかもアツサリと!?!）

木の化物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

「凄い…」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

木刀を突き付けられてるクロノは動けなかった。

「き…君達はどれだけ危険な事をしているのか分かっているのか!？」

「さあな。どんだけ危険か教えてくれませんか? 黒井教務官さん」

「僕はクロノだ! それに教務官じゃなくて執務官だ!」

銀時に向かってクロノが怒鳴る。

「そう怒るなよ。短気は損気だぜ? カルシウム摂れ。カルシウム摂れば全てうまくいく」

「いや。あんたうまくいってないでしょ」

と、新八のツッコミ。

「話を逸らすな!」

クロノが怒鳴った時だ。

「下がってるクロノ」

男の声がした。

「テメーじゃソイツの相手は荷が重すぎる」

クロノの後ろの林の中から三人の男が現れた。

「なっ!?!」

男達を見て銀時は驚愕した。

いや、銀時だけでなく新八と神楽も驚いていた。

男達は黒い制服を着て、腰には刀があった。

「こ…」

新八が口を開く。

「近藤さん！土方さん！沖田さん！」

新八は男達の名前を叫んだ。

「モニターの映像を見てまさかとは思ったが…本当にテメーらだったとはな」

煙草タバコをくわえた男が言った。

土方十四郎。幕府の武装警察『真選組』の副長。鬼の副長と恐れられている。常に瞳孔開き気味。

「いや〜奇遇ですねエ旦那方ア」

栗色のサラサラヘアの男が言う。

沖田総悟。真選組の一番隊隊長。組随一の剣の使い手で腹黒いドS。

「おおっ！本当に新八君だ！元気だったか？」

ゴリラ顔の男が大声で言った。

近藤勲。真選組の局長。新八の姉・お妙に付き纏うストーカーでもある。

「どうして皆さんがこんな所に!？」

新八は三人に聞いた。

すると土方は表情を曇らせた。

「…いろいろあったんだよ。それよりテメーらこそ何でこんな所にいる？」

「おいおい。まずは新八の質問に答えてもらおうじゃねーか」

木刀を下ろして、銀時は土方を見つめた。

「ま…まさか…!？」

突然、近藤が声を上げた。

「まさかお前らも俺達と同じように、『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っている事に気付かないで瞬間移動装置を使ってこの世界に来たのか!？」

「お前らもかいイイイイ!!」

近藤の言葉に、新八は目を剥いて叫んだ。

周りにいるフェイト達は、銀時達の話の内容がわからず首を傾げている。

でも、待てよ。あの真選組の中に『魔法少女リリカルなのは』を観る者がいるのだろうか。新八は疑問に思ったが、すぐに”ある可能性”が思い浮かんだ。

「あの…もしかしてDVDを持つてたのは……」

言いながら、新八は視線をある人物に向けた。

視線を向けられたのは土方。

土方は、顔を曇らせて舌打ちした。

「…俺だよ」

煙草の煙を吐きながら土方が言った。

「えっ!？」

土方の言葉に銀時は驚いた。

だが新八は驚かなかった。真選組のメンバーで、アニメのDVDを持つてる可能性があるのは土方だけだと考えていたからだ。いや…正確に言えばDVDを持つていたのは『土方』ではない。

『トツシー』。土方が妖刀『村麻紗』を手にした事によって生まれ、もう一人の土方十四郎。主にアニメ等の二次元の作品が好きなヘタレたオタク。別人格ではなく、れっきとした土方十四郎の人格の一部なのだ。

「あの野郎…いつの間にかアニメのDVDなんざ懐にしまいやがって…!」

土方は拳を握って怒りを燃やした。

「ブハハハハ!何?お前またトツシーに体乗つとられたの?」

土方を見ながら銀時は笑った。

「テーマ何笑ってやがんだ!斬るぞコラ!!」

土方が銀時に掴みかかる。

「やれるもんならやってみやがれ!マヨラー侍さんよオ!」

「上等だコラ！」

いつもの銀時と土方の争いが始まる。

「君達！少しは落ち着いて…」

クロノが二人を止めようとするが、

「うるせー！ガキはすっこんでろ！！」「」

二人に怒鳴られてしまう。

銀時の後ろで様子を見るアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、銀時はチラッとアルフに目配せした。

「！」

アルフは銀時の意図に気付いた。銀時は”逃げる”とアルフに目配せしたのだ。

(銀時……ありがとう……ごめんよ……)

アルフは心の中で銀時にお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、気付かれないうちに静かに動いて、アルフは去っていった。銀時と土方はまだ言い争ってた。

「テメーには、いろいろと借りがあるからな。延滞料金も含めてキツチり返してやるぜ！」

「土方さん」

沖田が声をかけた。

「何だ？」

「金髪の魔導師、いなくなっちゃいました」

沖田の言葉で、全員の視線が銀時の後ろに集まった。フェイトとアルフの姿はなかった。

「しまった！」

クロノは顔を険しくした。

「…万事屋。テメーわざと俺と口喧嘩して…」

土方は、目の前にいる銀時を鋭い目で見つめた。

「あ？何の事かわかんねーな」

「ちっ」

土方は舌打ちした。

*

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

*

公園。

銀時達の前にリンディの映像が現れた。

「クロノ。お疲れ様」

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線を銀時達に向けた。

「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら？」

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をする映像は消えた。

第十四訓：お茶に砂糖を入れてはいけません（前書き）

新八「いや、真選組も登場して、銀魂キャラが増えましたね」

銀時「たくつ。メンドクせー連中が来やがったぜ」

土方「何だとコラ」

近藤「トシ、よせ」

沖田「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十四訓。始まりますぜ
イ」

第十四訓：お茶に砂糖を入れてはいけません

銀時達はアースラにやってきた。

「フアンタジーの次はSFか…何でもありだな」

銀時が呟いた。

魔法やら使い魔やらジュエルシードなど、いろんなモノを見てきた銀時達は、もう驚きはしなかった。

先頭に立つてるクロノが、なのは達に振り返った。

「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

「ああ、そういうええそうですね。すっかり忘れてました」

「えっ？」

なのはは首を傾げた。隣にいる新八と神楽も同じく首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

「えっ!？」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。隣にいる新八と神楽もだ。

銀時は、

「おお」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

「ふええええ!!??」

アースラに、なのはの声が響いた。

「な…なのは？」

ユーノは首を傾げた。

「ユーノ君って…ユーノ君って…！」

「えっ！？ちよっ…ええっ！？」

「ユーノ、人間だったアルか！？」

なのは、新八、神楽はユーノの正体に動揺を隠せなかった。

「そんなに驚く事か？ウチのい…狼も人の姿に変身してたじゃねーか」

銀時は冷静に言う。

「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙ってた土方が言った。

「えっと…なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「ち…違う違う！最初からフェレットだったよ〜！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

「ああっ！」

そして思い出した。

「そ…そういえば、この姿まだ見せてなかった」

「だ…だよな？ビックリした〜！」

なのはは大きく息を吐いた。

「あれ？そういえば…」

新八も何か思い出した。

「ユーノ君。海鳴温泉に行った時、フェレット姿で、なのはちゃん達と一緒に温泉に入ったよね？」

「あっ！」

新八に言われてユーノは声を上げた。

「……………！！！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

「いや…違うんだ、なのは！あれは……」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

「おい」

銀時が声をかけた。

「じゃあお前何？フェレット姿なのをいい事に、お前女湯に入ったの？」

銀時は、軽蔑の眼差しでユーノを見つめた。

「いえ…その……」

ユーノは、新八と神楽に視線を向けた。

二人とも、目を細めて銀時と同じく軽蔑の眼差しで見つめてる。

今度は真選組の三人を見た。みんな冷たい視線をユーノに向けている。いや、沖田だけはイジメ甲斐のありそうな獲物を見つけて、ドSな笑みを浮かべていた。

「ユーノ君がそんな人だとは思いませんでした」

新八は、ジト目でユーノを見つめた。

「最低アル！女の敵ネ！しばらく私となのはに話し掛けないで！」

神楽は、なのはをユーノから引き離れた。

「いや違うんです！僕はそんなつもりじゃ……！」

もはや、この場にユーノの味方はいなかった。

ユーノが絶望した時。

「ユーノ」

「銀時さん！」

銀時がユーノの前に立った。

「誰にでも間違いや失敗はあるさ。次はこうならないように気をつけな」

優しく銀時が言った。

「銀時さん……！」

ああ、僕にも味方がいた。ユーノがそう思った時。

「でもな、ユーノ」

銀時は微笑んだ。

「やっばお前最低だろうがアアアア!!」

突然、銀時が怒声を上げた。

「ええっ!!!?」

ユーノは銀時の豹変ぶりに、驚いた。

「やったらんかいイイイ!という銀時の声を合図に、新八、神楽、土方、沖田、近藤がユーノに襲い掛かった。

このスケベフェレット!くたばれ淫獣!ガキだからって優しく許されると思うなよ!銀魂は甘くねーんだよ!SMショーの始まりでイ!と、鉄拳、蹴り、木刀、傘がユーノに降り注いだ。

「ぎゃああああ!!」

ユーノの悲鳴が、アースラの中に響き渡った。

なのはとクロノは、静かにその光景を見守る事しかできなかった。

*

「艦長。来てもらいました」

銀時達は艦長がいる部屋に到着した。

中に入って、銀時達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

「何この妙な和風空間?と銀時達は思った。

畳の上には、艦長のリンデイが正座していた。

「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽しんでくださいね」

笑顔でリンデイが言った。ふとリンデイはユーノの姿を見た。

「ユーノは服はボロボロで、顔や腕、足には青アザが出来ていた。

「えっと…君は何かあったのかな…?」

戸惑いながらリンデイは尋ねた。

「……いえ……何もありません……」

力無くユーノは答えた。

ユーノの答にリンデイは苦笑いをした。とりあえず銀時達は畳の上に座った。

「どうぞ」

銀時達の前に、お茶と羊羹ようかんが差し出された。

「ありがとうございます」

新八や、なのはが礼を言った。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

「…それで僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある！」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

「あの、『ロストロギア』って何なんですか？」

なのはがリンディ達に尋ねた。

*

銀時達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どこるか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

「あっ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリンディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

(うわぁ。銀さんみたいだな)

新八は、そう思いながら銀時を見た。

銀時は、リンディの行為を見ながら不敵な笑みを浮かべていた。

(おもしろえ)

対抗心を燃やした銀時は、角砂糖が入ってる器に手を伸ばした。なのは達とリンディ達が、銀時の動きに気がついた。銀時はみんなの視線を浴びながら、リンディが入れた倍くらいの数の角砂糖をお茶に入れた。

「なっ!?!」

銀時の行為にリンディは驚いた。リンディだけでなく、なのは達も驚いている。

銀時は、リンディの前で沢山の角砂糖の入ったお茶を飲んだ。

(まさか、この男も私と同じ!?!しかも私よりも多く角砂糖を入れた!?!)

リンディは目を見開いて驚いた。隣に座ってるクロノも目を丸くしている。

銀時はリンディに不敵な笑みを見せた。

「!?!」

銀時の笑みを見たリンディは、更に角砂糖をお茶の中に入れた。

「か…艦長!?!」

クロノが驚きの声を上げた。

(さぁ、これで私の勝ちよ!)

そう思っ、リンディは銀時を見た。

「!?!?!」

そして驚愕した。

銀時のお茶の中には、更に足した角砂糖と、お茶と一緒に出された『羊羹』が入っていた。

(よ…羊羹をお茶の中に!?!?!わ…私でもそんな発想はできなかつ

たわー！)

動揺しながら、リンディは銀時の顔を見た。

銀時は、またも不敵な笑みを浮かべてリンディを見ていた。

(ふん！糖尿病寸前まで糖分摂取をしてきた俺に敵うと思ったのか？)

銀時は邪悪な笑みを浮かべた。

「俺とあんたとじゃ、糖の器が違う」

「！！！」

銀時の言葉を聞いて、リンディは畳に両手をついた。

「わ…私の負けだわ」

悔しそうにリンディは顔を俯いた。

「いや、あんたら馬鹿だろ！！！」

新八が怒鳴った。

「何くだらない争いしてんだよ！」

「バカヤロー新八。ここで引いたら、糖分王の名折れだろうが」

言って銀時は、角砂糖と羊羹が入ったお茶を飲んだ。

「そんな称号捨ててしまえ！」

と、新八が怒鳴った時、

「メガネの言う通りだ」

土方が口を開いた。

「お茶に角砂糖を入れるなんざ、テメーらの味覚はどうかしてるぜ」

そう言う土方は、お茶の中にマヨネーズを入れていた。

「いや、あんたもおかしいから！」

即座に新八がツッコんだ。

「何お茶にマヨネーズ入れてんですか！？」

「食い物だけでなく飲物にもマヨネーズを混ぜるのが、一流のマヨラーってもんよ」

土方はフツと短く笑った。

「いやカツコよく言ってるけど、やってる事は間違ってるから！最悪だから！」

三人の味覚馬鹿のせいで、場の緊張感は完全に消えていた。

なのは達は、銀時達の並外れた味覚に、ただただ目を丸くして驚くしかなかった。

リンデイが敗北から立ち直って顔を上げた。コホン、と小さく咳をする。

「これよりロストログリア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ!?!」

リンデイの言葉に、なのはとユーノは戸惑った。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。新八達も、うんうんと頷く。

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンデイが、なのは達に言った。

土方は、リンデイの言葉に目を細めた。

「ちよつと待て」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、土方が口を開いた。

「何かしら?」

リンデイが土方に顔を向けた。

「何で考える時間なんて与える?民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなもんは必要無いだろ」

煙草に火をつけながら土方が言う。

土方の言葉で、新八もハツとなった。確かにそうだ。本当に事件から手を引かせようと考えているなら、話し合う時間など必要無い。

なのに何でリンディさんはあんな事を言ったのか。

「まっ、あなたの考えてる事は大体読めてるがな」

フーッと、土方は煙草の煙を吐いた。

「大方、コイツらの方から協力を申し出るように誘導して、足りない人員を補強しようって魂胆だろ？」

土方の鋭い眼がリンディを射抜く。

いや、土方だけではなく近藤、沖田、銀時も眼を鋭くしている。三人もリンディの考えに気付いていたようだ。

「……………」

リンディは無言で表情を険しくした。

「本当ですか艦長！？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

「そんな姑息なマネしねーで、堂々とソイツらに頼んだらどうだ？ そしたら俺も余計な口は挟まねえ。決めるのはソイツらだからな」
そう言っつて、土方は腕を組んで目を閉じた。

「リンディ艦長。立場上、あなたの方から民間人に協力を頼めないのでわかる。だが、だからと言ってこのような手段で彼女達を巻き込む事を、俺達は認めることはできません！」

近藤がリンディに言った。

しばらく場が沈黙に包まれた。

「あ…あの…！」

なのはが沈黙を破った。

「私にお手伝いさせてください！」

全員が、なのはへ振り向いた。

「その…リンディさんに言われなくても…きっと私、自分から頼んでいたと思います」

「し…しかし……………」

なのはの言葉にクロノが戸惑う。

「お願いしますー！」

立ち上がった、なのはは頭を下げた。

「ぼ、僕もお願いします!」

ユーノも立ち上がった頭を下げた。

「だどよ艦長殿」

銀時が笑みを浮かべて言った。

「俺もあんたのやり方は気に入らねえ。だがコイツらは、あんたに言われたからじゃなく、本当に自分の意志で手伝うと言ってる」

銀時は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも銀時の視線を受け止めてる。

「……わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長!? 本気ですか!？」

「二人の善意を利用しようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語った。

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

「い……いえ……そんな……」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしくお願いします」

「は……はい! よろしくお願いします!」

「お願いします!」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい!」

「クロノ。二人を元の世界へお送りして」

「……はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。

なのはとユーノ、クロノが部屋から出ていった。

リンディは銀時達に顔を向けた。

「あなた達はどうしますか？」

「あ？俺達か？」

銀時はお茶を飲み干した。

「俺達も協力させてもらうぜ。あいつらだけじゃ心配だからな」

「はい。乗り掛かった船ですし」

「友達を置いて帰らないアル！」

三人はそれぞれリンディに答えた。

「わかりました。あなた方もこれからよろしくお願いします。それと…先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を銀時達にも謝った。

「まあ…アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもな」

銀時が言った後、沖田が立ち上がった。

「あゝ俺、腹減っちゃいましたよ。そろそろ飯にしませんかい？」

「そつだな」

沖田の言葉で、全員が立ち上がった。

「それじゃあ食堂へ案内します」

リンディが先頭に立って銀時達を案内した。

(…フェイトとアルフのやつ…大丈夫だろうな?)

二人の事を思いながら、銀時はリンディの後を歩いた。

*

遠見市のマンション。

フェイトはソファアに座って、アルフはフェイトの前に座ってる。

「ごめんよフェイト…あたし…銀時を置いてきちゃったよ……」

アルフは今にも泣きそうな顔をしていた。

銀時に目で逃げる、と言われたとはいえ、銀時を置いてきた事は辛かったようだ。

「大丈夫だよアルフ。銀時は次元漂流者だから、管理局は保護してくれるよ」

安心させるようにフェイトが言う。

「…ねえフェイト…もう止めようよ…」

アルフはフェイトに詰め寄った。

「本気で捜査されたら…此処だつていずればバレちゃうよ」

「…でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは…！」

アルフが声を荒げる。

「フェイトには幸せになつてほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃって
いるんだね…ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなかった。

「なら…約束して…あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に
頑張るつて！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ…」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

(銀時…)

フェイトの表情が少し暗くなった。

(ごめんね銀時…無理しないって約束…破るかもしれない)

もう、銀時とアルフの騒がしい会話も聞けない。銀時の手料理も食べれない。銀時と一緒に寝れない。

無愛想だけど、いつも私達を心配してくれた銀時。

フェイトの目から一筋の涙が流れた。

(あれ…？もう泣かないって…決めたばかりなのに…)

アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていない。

(銀時…)

銀時の事を考えると、胸が苦しくなる。

(…会いたいよ……銀時……)

フェイトは、アルフに気付かれないように、そっと涙を拭いた。

第十五訓：鎖で遊んじゃいけません（前書き）

生徒全員「3年Z組！銀八先生！」

近藤「起立！礼！着席！」

銀八「はい。ホームルームをやる前に、転校生を紹介する」

フェイト「ど…どうも。フェイト・テストロッサです」

なのは「高町なのはです！よろしくお願いします！」

銀八「それじゃあ二人は適当に席に着け。今回は紹介だけで、特に何も無いから、これで終了。はい以上」

新八「…『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十五訓。始まります」

第十五訓：鎖で遊んじゃいけません

「え？ここアニメの世界なの？」

アースラの食堂。

ここで銀時は食事をしながら、新八にこの世界がアニメの世界である事を知らされた。

「はい。『魔法少女リリカルなのは』っていうアニメです。多分、瞬間移動装置の中に持ち込んだ、そのアニメのDVDが原因で僕らはこの世界に飛ばされたんだと思います」

「いやいやいやいや。新八君。いくら何でもありの銀魂でもそれはないわ」

と銀時は手を横に振りながら、新八の言葉を否定した。

「コイツを見る」

土方は銀時に、ある物を渡した。

銀時はソレを受け取った。渡された物は『魔法少女リリカルなのは』のDVDだった。

真選組がこの世界に来た原因となったDVDだ。そのDVDのパッケージには、フェイトとなのはが写っていた。

「マジでか？」

「俺達も最初は信じられなかったが、魔法やら時空管理局やらジュエルシードやらと、そのアニメの内容と全て一致する。信じるしかねえだろ」

ため息をつきながら土方が言う。

「まったく、土方さんのせいで、侵入者に間違われたり大変でしたぜい」

「俺のせいじゃねーよ。トツシーのせいだ！」

隣に座って、オレンジジュースを飲んでる沖田を睨む。

真選組の三人は、気がついたらアースラの中にいた。最初は侵入者と間違われたが、事情を話すと次元漂流者という事で保護されたの

だ。

「この連中は、ここがアニメの世界だって知ってんのか？」

銀時が土方に尋ねた。

「リンディ艦長とクロノには、この世界がアニメの世界である事を教えてある」

「まあ最初はリンディ艦長達も、自分達がアニメのキャラクターである事には信じられなかったみたいだがな」

近藤が腕を組んで言う。

「そりゃあそうだ。自分達がアニメのキャラクターで、住んでいる世界が架空の世界だなんて、すぐに信じられるわけがない。」

「ちよつといいかな？」

なのは達を送りに行ったクロノが、戻ってきた。

「銀時。貴方に聞きたい事があります」

「あ？何だ？失望官さん」

「失望官じゃない！執務官だ！！いい加減覚えろ！」

「わーっ たよ」

銀時は、手をヒラヒラ動かしながら答えた。

クロノが、コホンと咳をする。

「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で銀時に尋ねるクロノ。

だが、銀時は。

「あつ、すんませーん。チョコレートパフェお願いしまーす。え？

話何だっけ？」

「人の話を聞けエエエエ！！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

「あくはいはい。アイツの目的ね」

「ちゃんと聞いてたのか！？」

クロノは肩で息をしている。

「おいおい、もう疲れたのか？新八だったらもっといけるぜ？」

「聞かれた質問にだけ答えろ!!」

「クロノ君！落ち着いて！完全に銀さんのペースだよ！」
新八がクロノを落ち着かせる。

「質問の答ね。目的はわかんねーよ。ちなみにアイツは、ある人物に言われてジュエルシード集めしてるだけだ」

「それは一体誰なんだ？」

「……さあな。俺もそこまではわからねえ」

「本当か？」

クロノは疑いの目を銀時に向ける。

「信じる信じねえは、お前の自由だ」

互いに睨み合う。

先に視線を外したのはクロノだった。

「…これ以上聞いても、何も言わないようだな」

クロノはため息をついた。

「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

「へいへい」

銀時は軽く返事をし、クロノは食堂を去っていった。

*

翌日。

アースラの会議室。

局員達が椅子に座ってる。

その中には万事屋、真選組、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これからの事について説明している。

「……というわけで本日もって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

「また、今回は特例として問題のロストロギアの発見者であり、結

界魔導師でもあるこちら」

リンデイがユーノを見る。

「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た…高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

「最後に真選組以外の一般の協力者です」

「銀さん」

新八が小声で自己紹介をするように促した。

「あ？たくつ。しょうがねーな」

メンドくさそーに銀時は立ち上がった。

「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまゝす」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。

次に神楽が立ち上がった。

「私の夢は！酔昆布一年分を手に入れる事です！でも夢は叶うと寂しいから、胸の奥にしまっておこうと思います！」

「お前らマジメに自己紹介しろ！すいません皆さん！！」

二人にツツコんだ後、新八は頭を下げ謝った。銀時と神楽に反省の色はない。

周りの局員達は、呆れた顔で銀時達を見ていた。

「え…えつと…彼らが臨時局員となつて事態にあたつてくれます」

「よろしく願います！」

なのは、ユーノ、新八が頭を下げてあいさつする。

銀時と神楽は椅子に座つて欠伸あくびをかいている。

「お前らも頭下げるポケ共があああ！！」

新八が無理矢理、二人の頭を下げさせた。

真選組の三人は頭を抱えた。

*

森の中。

なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所にいた。

そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥がいた。怪鳥は、ユーノの緑色の鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

「あゝあゝダメでさア、ユーノ」

そう言いながらユーノに近づいたのは沖田だった。

「沖田さん？」

「鎖の締め具合が甘えぜ。もっとキツく締めな」

そう言つて沖田は、一本の鎖を思いつきり引つ張つた。

「グアアアアア!!」

怪鳥は先ほどよりも大きな悲鳴を上げながら暴れた。

「おつ、なかなかいい悲鳴上げるじゃねえか。道具持ってきてくりゃあよかつたな」

沖田は、道具を持ってこなかった事を心底後悔した。

「あの…この鎖は相手を痛ぶるための物じゃないんですけど…」

ユーノは、やんわりと沖田に言つた。

「他に道具はねえのかイ？」

「いや…それは……」

沖田の質問に、ユーノは困つた顔をする。

「じゃあ鎖の数もつと増やしな」

「いや貴方、鬼？」

二人がそんなやり取りをしてる間に、なのははジュエルシードを封印した。

「あゝ全然イジメ足りなかつたけど、仕方ねえや」

沖田は少し残念そうな顔をした。

そんな沖田を見て、なのはとユーノは顔を引きつらせた。

*

遺跡。

フェイトとアルフがいた。

「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」

「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」

「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

（銀時…今頃どうしてるかな？）

*

時の庭園。

プレシアは一人王座に座っていた。

（フェイト……今頃、私のためにジュエルシードを集めてるのかしら……）

プレシアは考えた。

（坂田銀時…あの男の言葉を聞いてから…何故かフェイトの事を考えるようになったわ……）

銀時に言われた言葉を思い出す。

「ああ…そうか……」

プレシアは気付いた。

「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない……こんな事に今まで気付かなかったなんて……」

プレシアはため息をついた。

「アリシアもフェイトも私の娘。私は二人の母親」

ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

「銀時…魔法も使えないただの人間が、この大魔導師に向かってあ

んな事を言うなんて……いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑った。

「…自分の大切なものを…自分で傷つけていたなんて……」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しずつ暗くなっていた。

「何故……」

手が震える。

「何故……やっと大切なものに気付いたのに……」

目には涙が浮かぶ。

「私は死に近づいていくの？」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。フェイトが大事だって気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆った。

「…フェイト……」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

*

クロノとオペレーターのエイミィ・リミエツタがフェイトについて調べていた。

「フェイト・テストロツサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

「じゃあ、その関係者かな？」

「わからない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしれない」

*

銀時達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエル

シードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

銀時達は食堂にいた。

それぞれ料理を持って、席に着いたのだが。

「……………」

なのはとユーノは、苦い顔をしていた。原因は銀時と土方にあった。銀時は白いご飯の上に大量の『小豆』をかけた。

土方はカツ丼の上に大量の『マヨネーズ』をかけていた。

小豆テンコ盛りの『宇治銀時丼』と、マヨネーズたっぷりの『カツ丼土方スペシャル』。

二人はこの光景を何度も見たが、やはり慣れることはできなかった。

「おい。お前の犬のエサのせいで、なのは達が気分悪くしてるぞ。

席移れ」

「何言つてやがる。お前のイカれた食い物を見て気分悪くしてんだよ。お前が席を移れ」

睨み合う両者。

「あの…銀さん…」

新八が声をかけた。

「何だ？」

土方から視線を外して、新八を見た。

「フェイトちゃんの事なんですけど…本当に管理局に保護を頼まなくていいんですか？」

新八は、前から思ってた事を口にした。

公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護つたのだ。銀時なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

「今、アイツらを管理局に保護してもらっても、何の解決にもならねえんだよ」

宇治銀時丼を食べながら銀時は答えた。その顔は険しかった。

「何かワケありか？万事屋」

近藤が銀時に尋ねた。

「ああ。まあな」

銀時は、井と箸をテーブルに置いた。

「アイツはよお。ガキのくせに一人で何でも背負おうとして、無茶ばっかする厄介なヤツなんだよ」

そう言っつて銀時は頬杖をついた。

「…銀さん」

「ん？」

唐突に、なのはが銀時に話し掛けた。

「私もね。小さい頃はよく一人だったんだ」

「…そうなんだ」

銀時は頬杖を解いて話を聞く。周りの皆も黙って話を聞いている。

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのはは話を続ける。

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「……………」

なのはの話を、銀時は黙って聞いている。

話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で……だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言っつて、なのはは笑顔を作った。

「銀さん」

「ん？」

「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

「……………」

銀時は黙って、なのはの答を待つ。

「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分
ここにできる事だと思っんです」
なのはが答を言う。

答を聞いた銀時は、静かに目を閉じた。

銀時も最初は一人だった。家族もいない。一人で生きてきた。そんな銀時を一人の人物が拾った。

それから銀時には仲間ができた。気持ちを分け合い、解り合える大切な仲間。

だが、その仲間の多くを天人との譲夷戦争で失ってしまった。

そして時を経て、銀時に新しい仲間。いや、家族と呼べる者達_ができた。

銀時は目を開けた。

「…そうだな」

そう言って銀時は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

第十五訓：鎖で遊んじゃいけません（後書き）

次回は竜巻と対決します。

第十六訓：事件はブリッジで起きてるんじゃない海で起きてるんだ（前書き）

銀八「3年Z組ー！」

生徒全員「銀八先生ー！」

銀八「はい。それじゃあお前ら、フェイト達と仲良くするように。はい以上」

フェイト「先生。私となのはの年齢はいくつですか？」

銀八「年齢は第一期、つまり無印の時の年齢だ。はい以上」

なのは「先生。それじゃあ私とフェイトちゃんが高校生という設定は無理があるんじゃない？」

銀八「近藤や長谷川などのオッサンもいるから年齢に問題はない。はい以上」

新八「…『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十六訓。始まります」

第十六訓：事件はブリッジで起きてるんじゃない海で起きてるんだ

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

「アルタス、クルタス、エイギアス…」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違ってるけど…）
アルフの表情が険しくなる。

「はああああ！！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

「見つけた…残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて…いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、銀髪の男を思い浮かべた。

（銀時…… あんたなら… フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

「空間結界とサポートお願い！」

「あ…ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！銀時は体を張

ってフェイトを護ったじゃないか！だったら！）
アルフは決意を固めた眼をする。
（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）
フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。
「いくよバルディッシュ。頑張ろう」
バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

*

緊急事態のアラームを聞いた銀時達は、ブリッジに入った。
銀時達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

銀時となのはが、フェイトの名を叫んだ。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に行った。

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、銀時は眉をひそめた。

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

「!？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。
周りにいる新八や神楽も驚いている。銀時と真選組の三人は、表情を険しくした。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けば

いい。」

「でも…」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンデイが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。画面を見上げていた銀時が口を開いた。

「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」

「何だと!？」

クロノは、振り返って銀時を睨んだ。

「俺達のいた世界にも、幕府って組織があるが…どうやらテメーらも、幕府と同じくらい腐ってるみてえだな」

「貴様：！口を慎め!!」

クロノが銀時に向かって叫んだ。

直後、銀時の眼がカツと見開かれた。

「目の前で苦しんでるヤツらを救おうともしねーで、世界を管理するなんて大層な事吐かしてんじゃねエエエ!!」

銀時の怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンデイだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

「銀さんの言う通りです」

新八が銀時の横に立つ。

「世界を救う前に、目の前で必死に戦ってる少女を救ったらどうなんでしょうか？」

新八が言い終わった後、神楽も銀時の横に立った。

「苦しんでる女の子を見捨てるなんて、お前ら薄情者アル!!」

神樂がリンディ達に向かって怒鳴った。

「き…君達は……！」

銀時達の言葉に、クロノは歯を食いしばる。

「土方さん！」

クロノは、真選組の方に顔を向けた。

「貴方達も、組織の人間ならわかるはずだ！」

真選組の三人に向かって叫んだ。

土方は、静かに煙草とライターを取り出した。

「確かに何を優先させるべきかは、俺にもわかる」

そう言つて土方は煙草に火をつけた。土方の言葉に、クロノは笑みを浮かべた。

しかし、続けて土方が言った言葉は、クロノにとって意外なものだった。

「だがな。目の前で弱つてるガキを見捨てるテーマらと一緒にされるのは虫唾が走るぜ」

「な…！？」

土方の言葉に、クロノは大きく目を見開いた。続いて沖田が言った。

「目の前で苦しんでる奴がいたら、いい奴だろーが悪い奴だろーが手え差し伸べる。でしたよね？近藤さん」

「その通りだ」

沖田の言葉に、近藤は大きく頷いた。

それから近藤はリンディを見つめた。

「リンディ艦長。俺達はあんたの部下でも管理局の者でもない」

隣にいる土方と沖田も、目を鋭くしてリンディを見つめた。

「俺達は真選組だ！」

毅然とした態度で近藤が言い放った。

銀時達や真選組の言葉に、クロノは表情をどんどん険しくした。

「貴方達は、事の重大さがわかって……！！！」

「クロノ！」

リンディがクロノを制した。

「か…艦長!？」

クロノは戸惑いながら、リンディに顔を向けた。

「リンディさん!」

なのはの声がブリッジに響いた。

「私…フェイトちゃんを助けたいです!」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはが言った。その瞳には、強い決意が宿っていた。

「……………わかりました。行動を許可します」

「艦長!？」

リンディの言葉に、クロノは驚いた。

「ありがとうございます!」

「急ごう、なのは!」

リンディにお礼を言っ、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

その時、

「なのは」

銀時が、なのはを呼び止めた。

「は、はい」

なのはは、足を止めて銀時を見た。

「悪いが今回、俺は力になれねえ。空飛べねーからな」

そう言っ、銀時は、なのはに顔を向けた。

「フェイトを頼んだぞ」

「はい!」

銀時の言葉に、なのはは力強い声で返事をした。

「なのは!早く!」

「うん!」

なのはが、走り出した時、

「それから、なのは」

再び銀時が、なのはを呼び止めた。

「一つ、アイツらに伝えてほしい事がある」
「え？」
なのはは、首を傾げた。

*

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。

それでもジュエルシードを封印しようとした時。

「!!!」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

「フェイトの邪魔するなアアア!!!」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。

間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

「えっ!?!」

アルフが驚きの声を上げる。

「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていた。

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

「デイベインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

「せーの！」

なのはが合図する。

「サンダー……」

「デイベイン……」

二人ともデバイスを構える。

「レイジー……！」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

「バスター……！」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

*

アースラのブリッジ。

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」
オペレーターのエイミーが報告する。

「な……なんてデタラメな……！」

クロノが驚く。
クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。
「こいつぁスゲーや」
画面を見て、沖田が呟いた。
「やったあ！なのはやったアル！」
神楽は嬉しさで飛び跳ねてる。
隣にいる銀時は、小さく微笑んだ。

*

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。
嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

「えっと…半分こ…で良いよね？」

「……………」

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろうとした。

「待ってフェイトちゃん！」

なのはは、フェイトを呼び止めた。

フェイトは振り返らずに止まった。

「銀さんが、フェイトちゃんとアルフさんに伝えてほしいって」

「えっ!?!」

思わずフェイトは振り返った。隣にいるアルフも少し驚いた顔をした。

「…また無茶したら、二人とも拳骨だ」って

「……………!!」

フェイトは、目を見開いて一瞬肩を震わせた。

アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。
「フェイトちゃん……」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

*

マンションに向かうフェイトとアルフ。

（銀時…… 私達の事…… 心配してくれてたんだ……）

フェイトは、胸に手を当てた。

（ありがとう銀時……）

心の中でお礼を言いながら、フェイトはアルフと共にマンションに戻った。

第十七訓：決闘は他人に迷惑がからない所でやれ（前書き）

銀八「3年Z組ー！」

生徒全員「銀八先生ー！」

銀八「突然だが、席替えをする。何かいい案ないか？」

近藤「はい！」あみだくじ”はどうすか？」

沖田「ダーツで」

神楽「腕相撲大会！」

フェイト「え？え？」

桂「どの案にするかジャンケンで決めてはどうか？」

なのは「いつまで経っても終わらないよー！」

銀八「そんじゃあ案がまとまらないから、席替えはナシ！以上」

新八「…『銀魂×魔法少女リリカルなのは』始まります」

第十七訓：決闘は他人に迷惑がかからない所でやれ

会議室。

万事屋、真選組、なのは、ユーノ、クロノとリンディが集まっていた。

「まったく。勝手にジュエルシードを半分ずつ分けて…」
壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

「す…すみません」

なのはが謝る。

「何もしようとしなかった奴が、文句言う資格があんのか？」

「何!？」

銀時の言葉に、クロノは食ってかかる。

「やめなさいクロノ」

「…はい」

リンディに言われて、クロノは渋々下がった。

「で？今回の事件について、何かわかったのか？」

煙草をくわえながら土方が尋ねた。

「ああ。エイミイ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

「はいはい」

スピーカーからエイミイの声が聞こえた。

エイミイの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

「あら」

「!」

映像を見て、リンディは少し驚き、銀時は表情を険しくした。

「一体誰ですかイ？」

沖田がクロノに尋ねた。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサ

だ」

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「テスタロツサって…」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

「あのフェイトという少女はおそらく」

「プレシアの娘…ね」

リンデイが険しい表情で呟いた。

なのはは、プレシアの映像を見つめる。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

「つまり、この女が今回の黒幕ってことか…」

土方が腕を組んで言う。

「プレシア・テスタロツサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかってる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

「ご苦勞様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンデイが言った。

「あ…でも…」

「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」

優しく微笑みながらリンデイが言う。

「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう」

そう言ってリンデイは席を立った。

「万事屋と真選組の皆さんも、その間は自由に休んでください」

「やったアル！久々になのはの家に行けるアル！」

休みと聞いて神樂がはしゃぐ。

銀時は険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

(プレシア……)

*

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しにきた。

プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立つてる。

「…ジュエルシードを、全ては回収できませんでした…」

怯えながらフェイトが報告する。

「…回収したジュエルシードの数は…全部で九つ……」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

「ご…ごめんなさい、母さん……」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

「………残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

「え……？あ…はい……」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。

いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

「何をボーツとしているの？早く行きなさい」

「…はい……」

言われてフェイトは部屋を出た。

扉の前で待つてたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。

二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

「ゴホッ…！ゴホッ…！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができています。

「……私には…もう時間がないわ……」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。

「こんな私といっても…フェイトは幸せにはなれない……」

自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

*

高町家。

「……とまあ、そんな感じの十日間でしたのよ」

「まあ、そんなんですか」

リンディと、なのはの母親の高町桃子は、意気投合して楽しく談笑している。

「ははは……」

二人の様子を見て、新八は苦笑いをした。新八だけでなく、なのはとユーノも内心苦笑いを浮かべていた。

神楽は、用意されたお菓子などをバクバク食べている。

（リンディさんの話：内容が全て虚構で固められたフィクションだなあ……）

そんな事を思いながら、新八はお茶を飲んだ。

一方、真選組は特に用事も予定もないので、海鳴市の街を見て回った。

*

銀時はフェイト達が使ってるマンションの部屋にいた。部屋の中に、フェイト達の姿はなかった。

「やっぱいねーか」

頭を掻きながら部屋を見渡した。

「まあ向こうは、管理局と一緒にいる俺とは会いたくねーと思ってるだろうな」

言いながら銀時は、部屋を出ようとした。扉を開けて、一度振り返って誰もいない部屋を見た。

「……またな」

小さく呟いて、銀時は部屋を出て扉を閉めた。

*

時刻は夕方。

銀時は、高町家を目指して歩いていた。

「あつ、銀さん！」

歩いていると、なのはと出会った。

「なのは。どうした？」

「心配になつたから、迎えにきました」

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

「そうか。わざわざ悪いな」

「いいえ」

二人は並んで歩いた。

なのはは、隣を歩く銀時を見上げた。

「あの…銀さん」

「何だ？」

「銀さんは…フェイトちゃんとは、どんな関係なんですか？」

銀時を見上げながら、なのはが尋ねた。

銀時は顎に手を当てて、うんと少し考えた。

「保護者代理的な感じ？」

「保護者代理…ですか？」

「ああ。つーか何でそんな事聞くの？」

今度は銀時が尋ねた。

「えっと…フェイトちゃんの事を心配してる時の銀さんが…フェイトちゃんのお父さんみたいに見えまして…」

少し恥ずかしそうに、なのはが答える。

「おいおい。俺が親父になったら、フェイトの奴ロクな大人にならねーぞ」

「ははは」

銀時の言葉に、なのはは笑った。銀時も軽く微笑む。それから二人は、なんてことない話をしながら家に向かって歩いた。

「なのは」

「何ですか？」

呼ばれて、なのはは銀時を見上げた。

「たぶん近い内に、フェイトの奴はジュエルシードを手に入れるために、なのはの前に現れる」

さっきまでと違って、銀時は真剣な表情で話す。

「はい」

なのはも真剣な表情で、銀時の話を聞く。

「わかつてると思うが、フェイトは強えぞ」

「はい」

なのはは、頷いて答える。

「フェイトちゃんと戦うのは辛いけど……でも私、どうしてもフェイトちゃんを助けたいんです！」

強い決意を表すように、力強くなのはが言った。

なのはの、決意の顔を見て銀時は微笑んだ。

「どうやら、次も俺の出番はねえみてーだな」

「銀さん……」

「なのは」

銀時は、なのはを見た。

「思いつきりぶつかっていけ！」

「はい！」

銀時の言葉に、なのはは笑顔で力強く答えた。

*

二日後の早朝。

時間はAM5:27。

なのは達は家の門の前に立ってる。

「ふあゝ。何もこんな朝早くに出なくてもよくな？」

欠伸をかきながら、銀時は背伸びをする。

「俺、朝弱いんだよ」

「ごめんなさい銀さん」

なのはは謝った。

「いや、なのはちゃんが謝る事じゃないよ」と新八。

「気にする事ないネ、なのは」

神楽も、なのはを励ました。

「お前ら。喋ってねーで、さっさと行くぞ」

そう言っただけで土方が歩き出した。

*

海鳴臨海公園。

時間はAM5:55。

なのは、銀時、ユーノの三人がいた。新八と神楽、真選組の三人は公園の入口で待機してる。

なのはは小さく深呼吸をする。

「ここなら…いいよ」

なのはが口を開いた。

「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の見えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。

朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。

なのはと銀時は、後ろを振り返った。

バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

「銀時…」

銀時を見つめながら、フェイトが呟いた。

「安心しろ。こいつはお前と、なのはの戦いだ。俺とユーノは余計

な手は出さねえ」

そう言つて銀時は腕を組んだ。

なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

「ただ捨てればいいつてわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

「逃げればいいつてわけでもない」

真つ直ぐにフェイトを見つめる。

「きっかけはジュエルシード…だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

「Put out」

なのはの周囲にジュエルシードが現れる。

「Put out」

フェイトの周囲にも九つのジュエルシードが出る。

「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトも下段にバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まつてすらいない…」

銀時とユーノ、アルフが黙つて見守る。

「だから、本当の自分を始めるために…」

対峙する二人の魔導師。

「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

第十八訓：決闘に横槍を入れるな（前書き）

銀時「いよいよ第一章も終盤に近づいてきたぜ！ 『銀魂×魔法少女
リリカルなのは』第十八訓！ 始まるぜ！」

第十八訓：決闘に横槍を入れるな

アースラ。

「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミーが言った。隣にはクロノが立っている。

「ああ」

クロノとエイミーは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

「頼りにしてるんだから、逃がさないですよ」

「おう！任せとけ！」

エイミーが親指を立てて返事をした。

*

公園の上空で、激しくぶつかり合う二人の魔導師。

「Photon Lancer」

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

「Divine Shooter」

なのはも、複数の桜色の魔力弾を出す。

「ファイア！！」

「シユート！！」

金色の魔力弾と桜色の魔力弾が、同時に発射される。

なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾を避ける。

フェイトは、追跡してくる桜色の魔力弾を障壁で防ぐ。

「！！」

フェイトが気付いた時には、なのははもう次の攻撃体勢に入っていた。

「シュート!!」

再び桜色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

「Scythe Form」

バルディツシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桜色の魔力弾を切り裂く。

(フェイトちゃん…やっぱり強い!)

振り下ろされるバルディツシュを避けながら、なのはは思った。

(でも…負けられない!)

距離を取って、再び桜色の魔力弾を放つ。

(フェイトちゃんの為にも…私を信じてくれてる銀さんの想いに応える為にも…)

揺るがない決意を胸に、なのははレイジングハートを強く握り締めた。

(絶対に負けられない!)

*

(最初は、ただ魔力が強いだけの素人だったのに…)

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディツシュで切り裂く。

(…強い!)

フェイトもバルディツシュを強く握り締める。

(でも…負けられない!)

フェイトは空中で静止した。

(母さんの為にも…絶対に負けられない!)

両手でバルディツシュを掴んで、前に構える。フェイトの足下に、巨大な金色の魔法陣が展開された。

*

「ん?フェイトのヤツ、何か大技でも出すのか?」

ユーノ達と、地上で観戦していた銀時が目を細めた。

「マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

「っーことは…アレがフェイトの切り札ってヤツか…」

焦るアルフの隣で、銀時が冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の…いや、無数の魔力弾が佇む。

なのはがレイジングハートを構えようとした時、

「あっ！！！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

「なのは！今サポートを！」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

「やめる、ユーノ」

銀時がそれを制した。

「余計な事はすんな」

「余計な事！？」

「でも銀時…フェイトのアレは本当にマズイんだよ！」

アルフが戸惑いながら言う。

「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねえ」

今の銀時の言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アルフと

ユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

(銀さん…ありがとう)

三人の様子を見ていたなのはは、心の中で銀時に礼を言った。

「アルカス、クルタス、エイギアス…」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかかれ。バリエル・ザリエ

ル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

「フォトンランサー・ファランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

「打ち砕け！ファイア！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。銀時は黙って見つめてる。

やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。

フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。

やがて煙が晴れてくる。

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。

障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだ。

「…マジでか？」

流星の銀時も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

「今度は…こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

「受けてみて…！ディバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

「Starlight Breaker」

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

「スターライト・ブレイカー！！！」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

「はぁ！！！」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放った。フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消された。

「!!!」
驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。

フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

*

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

「なのは!」

「フェイト!!!」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

「フェイトちゃん!」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのはは銀時達の元へ飛んでいった。

「ん…」

銀時達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

「フェイト!」

「あつ、フェイトちゃん気がついた?」

アルフとなのはが声をかけた。

「……………私…負けたんだね…」

フェイトの表情が暗くなった。

「フェイト」

銀時が声をかけた。フェイトは、銀時に顔を向けた。

「よくやったよお前は。最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんて何もねーぜ」

そう言っつて銀時は微笑んだ。

「銀時……」

銀時の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

「あんた……本当にいい奴だねえ銀時……」

銀時の隣にいるアルフは泣いていた。

「何でお前が泣いてんだよ」

と銀時。

「Put out」

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

「アアアアアア……」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

「フェイト……」

「フェイトちゃん……」

銀時となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えていった。

よるけるフェイトを銀時が抱き抱える。

「プレシアアアアア……」

雲の歪みに向かって、銀時は怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。

エイミイが座標を割り出した。

リンディイが立ち上がる。

「武装局員、転送ポードから出動！任務は、プレシア・テストロッ

サの身柄確保！」

*

時の庭園。プレシア・テストロッサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳込んでいた。

「ハア……ハア……次元魔法は……もう体が耐えられないわね……」

顔を苦痛で歪ませる。

「それに…今のでこの場所も掴まれた……」
プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。
「フェイト…よくここまで戦ったわね……」
フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。
「こんな母さんの為に……今まで、よく頑張ったわね……」
愛おしそうにフェイトを見つめる。
「銀時…アルフ……フェイトをお願い……」
プレシアは、二人にフェイトの事を託した。
「さあ…全てを終わらせましょう」

*

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。
アースラのブリッジに万事屋、真選組、なのはとユーノ、それにフェイトと人間形態のアルフが入室してきた。
フェイトは銀時となのはの間に立っている。局員がフェイトに拘束具を付けようとしたが、
「んだコラ！お呼びじゃねーんだよ！殺すぞ！」
「ケツの穴にホース突っ込んで、水流して奥歯ガタガタ震わせてやりましょうかい？」
と、銀時と沖田の脅しで拘束具は付けられなかった。
ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた。
「お疲れ様」
リンデイが銀時達に近寄ってきた。それから、フェイトに顔を向けた。
「フェイトさん？初めまして」
フェイトは、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。
「総員、玉座の間に進入。目標発見」
時の庭園では、武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた。
「プレシア・テストロツサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します」

「速やかに武装を解除してください」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。

局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。

プレシアは後ろに回った局員を睨みつけた。

(あれ？ちよつと待て……このまま映像が映し出されると……)

銀時の顔に焦りの色が浮かんだ。

局員が隠し通路を見つけてしまう。

そして、アレを見つけてしまう。

「しまった！映すんじゃねエエ！！」

銀時が慌てて叫んだ。

だが、もう遅かった。

「……！！？」

映し出された映像に、銀時以外の全員が絶句した。

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

「……………」

「……………」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

「おい、万事屋……こいつぁどういう事だ？」

動揺しながら土方は、銀時に尋ねた。

だが銀時は、土方には答えず顔を険しくして歯を食いしばった。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

「ぐわあああ！！」

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

「私のアリシアに近づかないで！！」

局員を睨みながら叫んだ。

「う……撃てう！」

局員は武器を構えて、閃光を放った。

だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

「うるさいわ……」

プレシアは、手を前に突き出した。

「危ない、防いで！」

リンデイが叫ぶが、

「ぐわあああー！」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

「いけない！局員達を送還して！」

リンデイの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいなかった。

その事に、銀時は疑問に思った。

「おかしいぜ」

「え？」

銀時の呟きに、新八が反応した。

「俺が受けたアイツの雷の威力は、あんなもんじゃなかった…」

「どういことですか？」

新八が尋ねるが、銀時は答えなかった。

(手加減してるのか？……それとも予想以上に病が進行してるのか？)

プレシアを見つめながら銀時は考えた。

「アリ…シア？」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめた。

プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

「もうダメね…時間がないわ…たった九つのジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど………」

プレシアは後ろを振り返った。

「…フェイト。そこにいるんでしょ？」

「！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

「貴女はね…アリシアの代わりにしようと…私が造ったアリシアの

クローンなのよ……」

「!?!」

驚愕の事実にも、フェイトは信じられないと言った表情をする。

「…プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テストロツサを亡くしているの。」フェイト”と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミーが険しい表情でみんなに話した。

「よく調べたわね……」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

「フェイト。正直に言うわ……私ね…貴女を造りだした時から、貴女を好きになれなかったの……」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクツと震わせた。

「何故、貴女を嫌っていたのか……ある人のお陰でようやくわかったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった

……」

フェイトも銀時も周りにいる全員が、黙ってプレシアの話を聞く。

「…でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない…貴女は『フェイト』だもの……」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

「フェイト…貴女を『フェイト』という、私の娘として見た時に…私の気持ちは大きく変わったわ……」

フェイトはジツとプレシアを見つめる。

「ごめんなさいフェイト…今更謝っても許されないのは、わかっているわ……でも…これだけは貴女に伝えておきたいの……」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

「フェイト…貴女の事が大好きよ」

第十九訓：笑顔にもいろんな種類がある（前書き）

銀八「ちょこつと！」

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「は〜い。読者から『銀八先生が読者の質問に答えるコーナーを作ってください』という、ご意見がありましたので、何か質問があったら評価・感想に書いてください。前書きか本編のおまけか後書きで、銀八先生がズバツとお答えするかもしれない。というわけ、質問コーナーを作ってくださいと意見した、ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん、廊下に立ってなさい」

近藤「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第十九訓！この後すぐ！」

第十九訓：笑顔にもいろんな種類がある

「フェイト…貴女の事が大好きよ」

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

「……………!!」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

「アルフ。貴女もいるんでしょ？」

プレシアは、今度はアルフに声をかけた。

「こんな私が頼めた義理じゃないけど……………これからもフェイトをお願い……………」

「プレシア……………」

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

「大変！屋敷内に魔力反応多数！」

「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。

屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵が現れる。

「庭園敷地内に魔力反応！しかも50、80と数を増やしていきま
す……………」

「プレシア・テストロツサ！一体何をするつもり！？」

プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。

「それから銀時」

「……………」

銀時は画面のプレシアを見上げた。

「最後に貴方に礼を言っわ……………」

笑みを浮かべるプレシア。

「ありがとう」

次の瞬間、九つのジュエルシードが強い光を発した。

「次元震です！中規模以上……………」

「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンデイが局員に指示を出す。

「ジュエルシード九個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！」

「了解！」

指示を受けた局員が動く。

「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。

局員達が慌ただしく騒ぐ中、銀時は画面のプレシアを見つめていた。

（バカヤロー…）

爪が食い込む程に、拳を強く握る。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと三十分足らずです！」

局員が焦った声で、報告する。

「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです

！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」

エイミイが説明した。

リンデイは、顔を険しくした。

*

「……………銀時」

銀時の後ろに立っているアルフが呼んだ。

銀時は静かに振り返った。

「あなた……………全部知ってたのかい…？」

怒り、悲しみ、様々な感情が混ざった視線を銀時に向ける。

「……………」

銀時は黙ってる。

新八達、周りの視線も銀時に集まる。

「答えてよ！」

アルフが声を荒げる。

「……すまねえ」

「謝って済む問題か！！」

感情に任せて、アルフは右拳を銀時の顔に振るった。

殴った後、アルフはハツとなる。

「あ……ご……ごめん、銀時……あたし……」

アルフは、震える右手を引っ込める。

「……オメーが謝る事はねーよ」

場が重い沈黙に支配される。銀時は、隣で泣き崩れてるフェイトを見た。

「フェイト」

銀時が声をかけた。

「すまねえ」

フェイトにも謝った。

「……銀時は……悪くないよ……」

小さな声で、フェイトは答えた。

フェイトを見つめながら、銀時は口を開いた。

「……フェイト。プレシアはアルハザードに行こうとしてる。アルハ

ザードに辿り着けるかどうか、本当にアルハザードがあるかどうか

……それは俺にもわからねえ」

フェイトは俯いたまま、銀時の話を聞いている。

銀時は、話を続ける。

「ただ、このままプレシアを放っておけば……アイツが、お前の手

の届かない所に行っちまうって事だけは確かだ」

銀時の言葉に、フェイトはかすかに、本当にかすかに肩を震わせた。

「このままここで泣き崩れてるか、今の自分の殻を破って前に進む

か……今ここで決める」

その言葉を最後に、銀時は黙った。

再び、場が沈黙になる。フェイトは考える。これからどうすべきか。

隣にいる銀時は、静かにフェイトの答を待つ。

「……私は……今まで母さんの為に頑張ってきた……母さんに笑ってほしくて……」

顔を俯いたまま、フェイトが沈黙を破った。

「……さつき母さんは……私に笑ってくれた……でも……！」

フェイトは、ギョツと両手を強く握った。

「あの時の母さんの笑顔は……すごく寂しい……悲しい笑顔だった……！」

涙を流しながら、フェイトは言う。

「私は……もう母さんに、あんな笑顔をさせたくない！」

フェイトの声が、ブリッジに響いた。

やがてフェイトは、ゆっくりと顔を上げた。涙は止まっていた。

「銀時」

フェイトは、銀時を見上げながら言葉を繋げた。

「私、母さんを助けたい！」

迷いのない、固い決意の宿った瞳で銀時を見つめながら、フェイトは答を出した。

その答を聞いて、銀時は微笑んだ。いや、銀時だけではない。新八も神楽も、真選組の三人も微笑んでいた。

「フェイト」

アルフが声をかけた。

「アルフ……また、私に力を貸してくれる？」

立ち上がりながら、フェイトはアルフに尋ねた。

「もちろんだよ！フェイト……！」

フェイトに抱き付きながら、アルフは答えた。

「ありがとう。アルフ」

フェイトは微笑みながら、アルフに礼を言った。

「フェイトちゃん！」

呼ばれてフェイトは、振り返った。

なのはとユーノが立っていた。

「私も一緒に行くよ!!」

「僕も!」

二人が力強く、フェイトに言った。

「……!!」

なのは達の言葉に、フェイトは目を見開いた。

「僕も行く!このまま放つてはおけない!」

クロノが言った。

「みんな…」

フェイトは、なのは達を見渡した。

「お前は一人じゃねえって事さ」

横から銀時の声が聞こえた。

フェイトは、銀時に顔を向けた。

「あの…銀時…」

「ん?」

銀時は片眉を上げた。

フェイトは、頬を少し赤くしながら、何か言おうとして戸惑ってる。

「その…一緒に来てくれる?」

上目遣いに、おずおずとフェイトが尋ねた。

銀時は微笑みながら、ため息をついた。

「ああ。いいぜ」

「!!」

銀時の答えを聞いて、フェイトは笑顔になる。

「俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ!」

銀時は、力強くフェイトに言った。

「準備はいいか?新八!神楽!」

振返りながら、銀時は二人に言った。

「はい!」

「いつでも準備オーケーアル!」

それぞれ木刀と傘を持って、新八と神楽は力強く答えた。

「トシ!総悟!俺達、真選組も行くぞ!」

近藤が、右手で拳を握りながら叫んだ。

「ああ、久しぶりの喧嘩だ。思いつきり暴れるぜ」

「そろそろ体動かさねーと、鈍うちまいまさア」

土方と沖田もやる気満々である。

「よーし。行くぜお前ら！」

銀時が大声で叫んだ。

「待ってください、銀さん」

新八が、銀時を呼び止めた。

「何だ新八？」

銀時が振り返った直後、

「うおりやああああ！！」

新八、神楽、真選組の三人が銀時に襲い掛かった。

「ごばあ！な…何しやがんだテメーら…！？」

わけがわからないと、銀時は新八達に向かって叫んだ。

「アリシアちゃんの事を黙ってた罰です！」

と新八。

「四分の三殺しで許してやるアル！」

と神楽。

「テメーも、一人で背負ってんじゃねエエ！」

と土方。

「万事屋！一言、俺達にも言え！」

と近藤。

「すまねえ旦那。流れるに俺も殴りまさア」

と沖田。

それぞれ言いたい事を言い終わると、再び銀時に鉄拳制裁を加えた。

「ぐわああああ！！」

暴力の爆心地から、銀時の断末魔のような悲鳴が聞こえた。

フェイトは、オロオロしながらその様子を眺めてる。

やがて、鉄拳制裁が終わり、銀時が床を這いずりながらフェイトの

方へ向かった。

「ぎ…銀時…大丈夫…？」

心配そうにフェイトが尋ねた。

「お…おお…大丈夫だ…」

言いながら銀時は、顔を上げた。

「それじゃあ行くか。お前の母ちゃんの、本当の笑顔を取り戻しに」

「うん！」

銀時の言葉に、フェイトは力強く頷いた。

第二十訓：酔いやすい人は必ずエチケット袋を持参せよ（前書き）

銀時「最終決戦開始の『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第二十訓
！刮目せよ！」

新八「後書きには、銀八先生もあります」

第二十訓：酔いやすい人は必ずエチケット袋を持参せよ

銀時達は、時の庭園に転送された。
直後、

「おぼろろろろ！！！」

新八、神楽、真選組は盛大なゲロを吐いた。

「きゃあ！？だ：大丈夫ですか！？」

「ど：どうしたんですか！？」

なのはとユーノが驚く。

「おいおい。今からそんなんじゃ、先が思いやられるねえ」

銀時は、憎たらしい笑みを浮かべて新八達を見下ろす。

「いや、あんたも最初に来た時、ゲロ吐いたじゃないか」

アルフが目を細めて言った。

「あんたも吐いてたんかい！！」

アルフの言葉を聞いて、新八は銀時に怒鳴った。

「バツカ、アルフ！お前それ言うなや」

と銀時。

「…気持ち悪……」

口を押さえながら、土方達が立ち上がる。顔色はまだ少し青い。

「銀時もそうだったけど。ここはさっきまでとは別空間で環境も違うから、魔導師でない貴方達は慣れないと体調が悪くなるみたいなの」

フェイトが土方達に説明した。

「なるほど：つかテメー知ってたんなら教えろや！」

土方は、銀時に向かって怒鳴った。

「いやゝ悪いな。すっかり忘れてたぜ」

悪意に満ちた笑みを浮かべながら、銀時が答えた。

「ふざけんなよ、コノヤロー！！」

銀時に掴みかかる。

「ちよっ…止せ、トシ！」

「土方さん、落ち着いてください！」

近藤と新八が、二人を止めようとする。フェイトやなのは達は、困りながら様子を見ている。

「旦那ア、土方さん」

沖田がいつものもの、のんびりとした声で二人を呼んだ。

「何だ！？」

二人は沖田に顔を向けた。

「お二人が騒いでる間に…」

言いながら沖田は、前方を指差した。

沖田が指差した先には、様々な鎧の形をした、沢山の傀儡兵が剣や槍などを持って構えていた。

「おいでなすったぜイ」

ニヤリと沖田は、笑みを浮かべた。

フェイト達もデバイスを構える。

「い…いっぱいいるね」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

「まだ入口だ。中にはもつといる」

クロノは、前方の敵を見据える。

銀時がゆっくりとフェイト達の前に出た。

「フェイト。俺達がいっつらを片付けるから、お前達は俺達の後に続け」

「え？」

フェイトは、銀時を見上げた。銀時の横には、いつの間にか新八と神楽、それに真選組の三人がいた。

「でも銀時…」

心配になって、フェイトが声をかける。いくらなんでも敵の数が多すぎる。

「オメーは母ちゃんを助ける事だけ考えろや」

銀時は腰の木刀『洞爺湖』に手をかける。新八達もそれぞれの武器

を構える。

「俺達は俺達の護りてえもん護る」

鋭い目で、眼前の敵を見据える。

沢山の傀儡兵が一斉に銀時達に襲い掛かる。

銀時は木刀を抜いて、横薙ぎに振るった。

次の瞬間、複数の傀儡兵は、胴が粉々になって吹き飛んだ。

フェイトやなのは達は、目を丸くした。

「はいイイイ！次イイイ！！」

銀時は傀儡兵の軍の中に飛び込みながら、さらに木刀を振るった。

傀儡兵の頭は砕き、武器を破壊して倒していく。

「うらアアア！！」

土方の刀が、傀儡兵を真つ二つに両断した。休まず刀を横薙ぎに振るって傀儡兵の首と胴体を切り離す。

「ほあちゃああああ！！」

神楽は、傘を振り回して傀儡兵を吹き飛ばす。時には、拳で殴って傀儡兵を粉碎する。

「チャイナには負けねえぜイ！！」

神楽に対抗心を燃やす沖田も動く。目にも止まらぬ素早い剣技で、傀儡兵達を次々と切り裂いていく。

「ぬうおりゃあああ！！」

近藤が叫びながら、豪快に刀を振り下ろす。近藤の刀は、他より少しサイズが大きい傀儡兵を両断した。

「す…すごい…！！」

なのは達は、デバイスを持ったまま身動きができなかった。

ハッキリ言って、なのは達が出る幕は、これっぽっちもなかった。

まさに鬼神の如き強さで暴れ回る万事屋と真選組。

「な…なんてデタラメな連中なんだ…」

クロノは、驚きを通り越して半分呆れていた。

もう誰にも止められない。銀時達が傀儡兵を次々倒していく中、

「うおおおおお！！」

新八が上段から木刀を振り下ろす。

だが木刀は簡単に剣で受け止められてしまい、もう片方の手に持った盾で殴られてしまった。

「何で僕だけエエエ!!!？」

吹き飛ばされながら、新八は叫んだ。その時、新八のメガネが外れた。

「新八イイイ!!!大丈夫か!？」

傀儡兵を倒しながら、銀時は新八に駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

フェイト達も、新八に駆け寄った。

「うん。大丈夫だよ」

安心させるように、笑って答えながら新八は立ち上がった。

「どうやら無事みてーだな」

屈んで銀時が声をかけた相手は、地面に落ちた新八のメガネだった。

「新八こっちイイイイ!!!」

額に血管を浮かべながら、新八が怒鳴った。

「銀時。ソレはこの人のメガネなんじゃ!!!」

フェイトがそう言つと、

「いやいや、違つぞフェイト」

銀時は首を横に振りながら言った。落ちてる新八のメガネを拾う。

「よく覚えとけフェイト。新八の成分の95%はメガネだ。つまり

こっちが新八だ」

メガネを持ちながら銀時が説明した。

「違つ違つ!違つからねフェイトちゃん!普通に僕が志村新八だから!僕が本体だから!!!」

新八は全力で、銀時の言葉を否定した。

フェイトは、少し困ったような笑みを浮かべながら、二人の様子を見ていた。

「おい、テメーら」

土方が声をかけた。

「いつまでふざけてんだ。さつさと先に行くぞ」

見ると既に、入口前にいた大量の傀儡兵は全滅していた。

「よし！行くぜフェイト！」

「うん！」

銀時の声に答えながら、フェイトは走り出した。

*

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

「その穴『虚数空間』だから気をつけて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

「虚数空間？」

沖田は首を傾げた。

「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、新八となのはは冷汗を流した。

「まっ、要は落ちなきゃいいんだろ」

言いながら銀時は、走り続ける。

前にある扉を蹴破って中に入る。部屋には、更に沢山の傀儡兵がいた。

クロノが上に続く階段を見つけた。

「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案した。

「よし。そんじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとすっか」

「え？」

銀時の案にクロノは顔をしかめた。

「銀時！こんな時にジャンケンなんて……」

「ジャンケンケーン！」

クロノの異議をスルーして、ジャンケンを始める銀時。他のみんな

も、戸惑いながらも手を構える。
「ポン！」

*

「ひくじかゝた君。何で君は、いつつ俺と一緒にいるんだ？友達になりたいのか？友達になりたいのか？」

不機嫌な顔で銀時は、隣を走る土方を睨んだ。

「そりゃこつちのセリフだ。何で俺がテメーなんかと…！」

土方も銀時を睨みながら、眉を顰めた。

二人の後ろをフェイトとアルフ、クロノが走ってる。フェイトは苦笑いしながら、アルフとクロノは呆れながら二人の様子を眺めた。

ジャンケンの結果、なのは、ユーノ、新八、神楽、近藤、沖田が最上階の駆動炉のロストロギア封印。銀時、土方、フェイト、アルフ、クロノが最下層にいるプレシアの元へ向かう事に決まった。

ちなみにさっきの部屋にいた傀儡兵軍は、またも万事屋と真選組によつて全滅した。

「足引つ張んなよ、大串君」

「誰が大串君だ！」

さつきからずくと、口喧嘩をしながら走る二人。

「あ…あの…」

フェイトが二人に声をかけた。

「何だ！？」

銀時と土方は振り返ってフェイトを見た。

「二人とも、仲良くやろう？」

微笑みながらフェイトは言った。

言われて銀時と土方は、互いに顔を見合わせた。

「…フェイトに言われちゃしょうがねエ」

「…まつ、今は俺達で喧嘩してる場合じゃねーしな」

二人の喧嘩は収まった。

フェイトは嬉しそうに笑った。

「やれやれ。フェイトの方が大人だな」

「そうだねえ」

クロノとアルフが、ため息をつきながら言った。

*

最上階。

なのは達はエレベーターを使って最上階にやってきた。

エレベーターから出ると、駆動炉を守る大量の傀儡兵がいた。

「やっぱり素直に通してくれないか」

新八達が武器を構える。

ユーノが前に出る。

「防御は僕がやる！なのはは封印に集中して！」

「うん！いつも通りだよね！」

「え？」

なのはの言葉に、ユーノは振り返った。

「ユーノ君、いつも私と一緒にいてくれて、守ってくれたよね？」

ユーノに笑顔を向けながら、なのはが言う。

「だから戦えるんだよ。背中がいつも暖かいから！」

そう言っただけなのはは、レイジングハートを構えた。

「みんなまとめてぶっ飛ばすアル！行けばつっあんど……ん？」

神楽が後ろを振り返ると、新八はうずくまっていた。

「新八？」

神楽が近寄る。

「……やっぱりなのはちゃんは、ユーノ君が好きなのかなあ……」

先ほどのなのはがユーノに言った言葉で、新八は落ち込んでいた。

「……そうだよ……僕みたいなダメガネの事を……なのはちゃんが好きになるわけがない……」

新八は更に落ち込む。

やれやれ、と神楽は首を横に振った。そして、また新八に魔法の呪文を囁いた。

「ぱつつあん、ピンチはチャンスアルよ。ここで、ぱつつあんがカツコよく敵を倒せば、なのはがぱつつあんを好きになる可能性が出てくるんじゃないね？」

「オルア！覚悟しろよテメーらア！！志村新八が成敗してくれるわアアア！！」

神楽の囁きで、新八の魂に火がついた。

「シユート！！」

なのはは、桜色の魔力弾を複数放った。傀儡兵に当たり爆発する。

*

アースラ。

リンデイが席を立った。

「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

*

「うおらアアア！！！！」

銀時達は、迫り来る傀儡兵達を倒しながら前に進む。飛行型の傀儡兵は、フェイト達が相手をする。

「サンダー・レイジー！！」

フェイトから金色の雷が放たれた。雷を受けた傀儡兵達は爆発した。「スナイプ・シヨット！！」

クロノの黒いデバイスから、青い閃光が放たれた。閃光は傀儡兵達を貫いて、傀儡兵達は爆発した。

「はぁぁぁ！！」

アルフも鋭い爪で、傀儡兵を切り裂いていく。

「どけ、ガラクタ共オオオオ！てめーらに構ってる暇はねーんだ
アアアア！！！」

叫びながら銀時は、木刀で傀儡兵を斬り伏せながら先に進む。

広い部屋に着いた瞬間、大きな音を立てて壁が崩れた。崩れて出来た穴から、両肩に砲身を付けた大型の傀儡兵が姿を現した。

「へっ。デケーのが現れやがったな」

「上等だコラ」

大型傀儡兵を睨みながら、二人は剣を構えた。

「銀時！いくら銀時でも……」

「お前達はそこにいろ！」

フェイトの言葉を最後まで聞かず、銀時と土方は大型傀儡兵に向かって走り出した。

「銀時！」

「土方さん！」

アルフとクロノが叫んだ。

大型傀儡兵は、銀時と土方に狙いを定めて砲身に魔力を集束する。

魔力の光が強くなり、砲身から魔力砲が発射された。大爆発を起こして、部屋に轟音が響いた。

「銀時！！！」

煙が立ち込める中、フェイトが叫んだ。

大型傀儡兵がフェイト達に狙いを定めた時、

「どこ見てやがるウウ！！！」

煙の中から、頭から血を流した土方が飛び出して、大型傀儡兵の前に現れた。

「土方さん！」

クロノが叫んだ。

「うりゃああああ！！！」

上段に構えた刀を振り下ろす。大型傀儡兵はバリアを張る。土方が振り下ろした刀は、バリアに亀裂を作った。

「ダメか！？！」

クロノが叫んだ直後、

「うおおおおお！！！」

木刀を構えた銀時が、煙の中から跳んで姿を現した。

「銀時！！！」

フェイトは弾んだ声を出した。

「食らいやがれエエエ！！！」

土方が作った亀裂に、銀時は木刀を突き刺した。

亀裂は広がり、バリアはガラスのように粉々に砕け散った。

銀時は着地した。

「俺達の……」

脚に力を入れる。

「勝ちだアアア！！！！」

叫びながら銀時は、地を蹴って大型傀儡兵の顔の前まで跳んだ。

木刀を上段に構える。

「てえあああああ！！！！」

木刀を振り下ろし、落下しながら大型傀儡兵を頭から一刀両断した。

銀時と土方が離れた後、大型傀儡兵は爆発した。

「銀時！！！」

フェイト達が銀時と土方に駆け寄る。

「よお。怪我ねーか？」

そう言う銀時は、土方と同じく頭から血を流していた。

「いや、あんたが怪我してるじゃないか！」

アルフが声を上げた。

「こんなん、かすり傷だよ」

「……まったく、貴方達のデタラメさには本当に呆れる」

クロノは、ため息をついた。

「ふん」

土方は鼻を鳴らしながら、目を閉じた。

「そんじゃ、先に進むか」

銀時達は再び走り出した。

*

時の庭園、最下層。

プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。

「誰か乗り込んできたみたいね……」

上を見ながら、プレシアは呟いた。

（恐らく管理局の執務官……）

プレシアは短く笑った。

「でも無駄よ。私を捕まえても……私はもう長くはない……」

悲しい表情を浮かべながら、プレシアはアリシアを見つめた。

「アリシア……ごめんなさい。こんな事になってしまって……」

庭園が激しく揺れる。

「フェイト……貴女だけでも幸せになって……」

プレシアがそう言った直後、背後から爆音が聞こえた。

「！」

慌ててプレシアは、振り返った。

「きたわね」

執務官が来たと思い、プレシアは杖を構えた。

だが、

「おう。最下層はここかい？」

聞こえてきた声にプレシアは驚いた。

聞き覚えのある声。

いえ、まさか……あの男がここに来るなんて……。

そして、壁に空いた穴から人影が姿を現した。

「どーも。万事屋です」

銀髪の侍。

そして、

「母さん！」

自分の愛する娘。

「銀時…フェイト……」
プレシアは、信じられないと言った顔をする。
フェイトは、固い決意の宿った眼でプレシアを見つめた。

くおまけく

生徒全員
「教えて、銀八先生！」

フェイト
「こんにちは。読者からの質問に答えるコーナー『教えて、銀八先生』です。私はアシスタントのフェイトです」

銀八

「はい。それじゃあ最初の質問。ペンネーム『ゲロロ軍曹』さん。『なのはがフェイトに自身の必殺魔法であるスターライトブレイカーをぶっ放したじゃないですか。ぶっちゃけアレを見た銀さんや新ぱっつあんたちの心中って、どんな感じだったのでしょうか?』というものです。はい、ズバリお答えしましょう。アレを見た時、銀さんは普通にフェイトの心配をしました。果たしてあんなデケー閃光にフェイトが耐えられるのかどうか。本当に心配しました」

フェイト

「銀時…そんなに心配してくれたんだ」

銀八

「ちなみに新八達は、戦いの様子はよく見えてなかったんで、閃光を見てビックリしただけです」

フェイト

「それでは、もう一つの質問。『ゲロロ軍曹』さん。あっ、さっきと同じ人だね。『バルディッシュ』とレイハさんことレイジングハーットって、銀さんの事をどう思ってたりにしてるのでしょうか?』」

銀八

「俺が答えるより、本人達が答えた方がよくな?」

フェイト

「どうなのかな、バルディッシュ?レイジングハーット?」

バルディッシュ
「甘党」

レイジングハート
「天然パーマ」

銀八
「…はい。二つも質問を書いてくれた『ゲロ口軍曹』さん。廊下に立ってなさい」

第二十訓：酔いやすい人は必ずエチケット袋を持参せよ（後書き）

生徒全員「3年Z組、銀八先生!!」

銀八「はい。今日は副担任を紹介する」

リンディ「副担任のリンディ・ハラオウンです。今日からよろしく
お願いします」

山崎「質問です！リンディ先生の好物は何ですか？」

リンディ「お砂糖たっぷり緑茶が好物です」

山崎「え…?」

銀八「うまそーだな。今度飲ませてくれ」

リンディ「はい、是非」

銀八「先生。余所でやってください」

第二十一訓：人の腕は大切なモノを抱きしめるためにある

「ふあちよおおお!!」

神楽は、傀儡兵の頭部を蹴りで破壊する。

「チャイナ！俺より目立つなア!!」

沖田も刀を振るって傀儡兵を斬り倒す。

「頑張れ新八君！我が義弟よオ!!」

「いや、あなたの義弟になる予定はないからアアア!!」

近藤と新八が同時に剣を振り下ろし、最後の一体を倒した。

周りには、傀儡兵の無残な残骸が散らばっている。

新八達の背後で、赤い光が輝いた。振り返って見ると、なのはが駆動炉のロストロギアの封印に成功した。

「やった!!」

ユーノが声を上げた。

その時、

(皆さん、よく頑張りました)

なのはとユーノに、リンディからの念話が聞こえた。

(私も現地で次元震を抑えています。おそらく、これで次元断層は起こらないでしょう)

「よかった!!」

リンディの言葉に、なのはは安堵のため息をついた。

これで最悪の事態は防げた。

残すは……………。

*

最下層。

フェイトは銀時達と共に、プレシアの前に降り立った。

「フェイト……………どうして来たの…?」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

「母さん……」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

「貴女…何しにきたの…?」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまう。

「私は……」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

「母さんを助けにきました」

「……!」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった……」

自分の想いをプレシアに伝える。

「母さんは…さっき私に笑ってくれた…けど、私が見たかった母さんの笑顔は…あんな悲しそうな笑顔じゃない!」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。

プレシアと銀時達は、黙ってフェイトの話聞く。

「母さんには…楽しそうに…嬉しそうに笑ってほしいの…心からの、本当の笑顔になってほしいの!」

母に伝える娘の想い。

フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまでできた。

杖を握るプレシアの手が震える。

「だから、母さん……」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。

フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。

フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

「……………」
プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

「フェイト…」

顔を上げてフェイトを見る。

「ごめんなさい」

「！」

プレシアは杖を掲げる。

「トシ！」

プレシアの動きに気付いた銀時は、土方を呼びながら走り出す。

「お前が”トシ”って呼ぶんじゃないよー！！」

銀時の意図に気付いた土方も走り出した。

プレシアは掲げた杖を地面に叩いて、魔法陣を展開した。プレシアの足場が崩れていく。

「母さん！」

フェイトが叫んで走り出す。フェイトの横を銀時と土方が通り過ぎた。

崩れた足場が、プレシアとアリシアを飲み込もうとした時、

「おおおおお！！」

銀時が叫びながら、アリシアの入ってるケースを後ろに押しつけ、崩れた足場に落ちていくプレシアの手を掴んだ。

後ろにいた土方が、ケースを受け止める。

「銀時！！」

プレシアとフェイトの声が重なった。

「く……！！」

銀時は両膝を地面に着き、右手でプレシアの手を掴んでる。

「は…離しなさい銀時！このままだと貴方まで…！！」

プレシアは、銀時の手を離そうとする。

「プレシア…アンタ、まだフェイトから逃げてる事に気付かないのか？」

「え…？」

プレシアの手の動きが止まる。

「フェイトが、本当はまだ自分を恐れているんじゃないかと…自分が一緒にいたら、フェイトは幸せになれないと恐れて…アンタはフェイトから逃げてるんだ」

歯を食いしばりながら、銀時が言う。

銀時の後ろに立ってるフェイトとアルフ、アリシアの入ってるケースを後ろに運んでる土方、様子を見守ってるクロノも銀時の言葉を聞いている。

「プレシア…アンタを助けるために、危険を覚悟でここまで来たフェイトがアンタを恐れていると思うか？自分を想ってくれる親がいて、他に何がいるんだよ」

プレシアを真っ直ぐに見つめながら、銀時が言う。

「もう逃げるんじゃないやねエ！！」

プレシアに向かって怒鳴る。

銀時の声に、プレシアは目を見開く。

「本当にフェイトの事を想っているなら、アイツの傍にいやがれ！」
銀時の言葉がプレシアの心に響く。

「その手で、その腕で、思いつきり抱きしめる！涙が出るくらいに強く抱きしめやがれ！！」

銀時の叫び声が、最下層に響いた。

「この手は離さねえ」

プレシアの手を、更に強く握る。

「もう目の前で、大切なモノは取り零さねエ！！」

「銀時…」

必死に自分を助けようとする銀時を見つめる。

その時プレシアは、銀時の瞳に一瞬、悲しみの色が見えた気がした。銀時がプレシアを引き上げようとした瞬間、地面に亀裂が入った。

ガラガラと音を立てて、銀時の足下が崩れる。

「え？」

後ろで見ていたフェイトが小さな声を出した。

目の前の光景が信じられなかった。フェイトの目の前で、銀時とプレシアが崩れていく足場に飲み込まれていく。

「銀時！！母さん！！」

「銀時！！」

フェイトとアルフが同時に走り出した。

「万事屋アア！！」

「銀時！！」

土方はアリシアの入ってるケースを置き、クロノと一緒に駆け出した。

フェイトが落ちていく銀時に手を伸ばす。

だが、フェイトの手は虚しく空を掴み、銀時とプレシアは虚数空間に落ちていく。

フェイト達は、ただその光景を見ている事しかできなかった。銀時とプレシアは穴の中に消えていった。

「…嘘だろ…？」

アルフが震える声で小さく呟いた。

「…母…さん……銀時…」

穴を見つめながら、フェイトは呟いた。

やっと、母さんと解り合えたかもしれないのに。銀時が必死に母さんを助けようとしたのに。

フェイトは、悲痛な顔で穴を見つめた。

その時、アースラにいるエイミーから連絡が入る。

「みんな！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！！」

焦った声で脱出を求めた。

「フェイト・テストロツサ！アルフ！土方さん！脱出するぞ！！」

クロノが三人に向かって叫んだ。

「…行くぞ。フェイト、アルフ」

重い声で土方が二人に言った。

「…でも…銀時が…」

アルフは、今にも泣きそうな顔をしていた。

「…野郎は、こんな事でくたばる奴じゃねえ」
そう言つて土方は、フェイトの方を向いた。
「アイツを信じる。信じて待つてろ」
それだけ言つて、土方は振り返つて歩き出した。
「フェイト…」
アルフが心配そうにフェイトを呼んだ。
フェイトは、拳を強く握つた。
「……行こう、アルフ」
穴に背を向けて、アルフを連れて走り出す。
崩壊する庭園の中、転移魔法を使い、アースラに帰還した。

*

アースラ。
「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」
「次元震停止します」
「断層発生ありません」
「了解」
局員の報告を聞いて、リンディは頷いた。
そして、土方が持ってきたアリシアの亡骸が入ったケースは、別室
に保管された。

*

医務室。

「ぎ…銀さんが!？」
クロノから、銀時とプレシアが虚数空間に落ちた事を知らされた。
新八と神楽、なのはとユーノは愕然とする。
「…すまない」
クロノは頭を下げ、心からの謝罪をした。

「あの…何か助ける方法はないんですか？」

僅かな可能性を求めて、なのはが尋ねた。

「……方法は…ない」

目を固く閉じ、拳を震わせながら、クロノは悔しそうに答えた。

「そんな…」

なのはは、表情を暗くした。

その時、神楽が立ち上がった。

「銀ちゃんは絶対帰ってくるアル！」

「神楽ちゃん」

全員の視線が、神楽に集まった。

「どんな事があっても、銀ちゃん最後は必ず私達の所に帰ってきた

アル！」

力強く言った後、神楽は新八を見た。

「新八！私達が信じないで、誰が銀ちゃんを信じるアルか！？」

神楽の言葉を聞いて、新八の表情が変わる。

「…そうだよ。記憶を失った時も、どんなピンチだって切り抜け

て、銀さんは僕達の所に帰ってきた！」

「私達は信じて銀ちゃんを待つネ！」

銀時を信じてる神楽と新八は、決して諦めなかった。

「私も銀さんを信じます！」

「僕も！」

なのはとユーノも声を上げた。

そんな新八達の様子を見て、クロノはため息をついた。

（まったく…こんなに皆に信頼されて…あの男は幸せ者だな…）

場の雰囲気少し明るくなり、クロノも僅かだが希望を持つ。

（言いたい事は山ほどあるんだ。戻ってこなかったら承知しないぞ

！）

*

独房。

フェイトとアルフ、真選組が入っている。

真選組も同室する事で、フェイトへの拘束具の取り付けはなくなつた。

やはり銀時とプレシアの事がショックなのか、フェイトは顔を俯いたまま黙っている。隣にいるアルフは、心配そうにフェイトを見つめてる。

「元気出せ！お嬢ちゃん！」

近藤が沈黙を破った。

「万事屋の野郎は、そんな事でくたばるような男じゃない！きつとプレシアさんを連れて帰ってくるさ！！俺達が保証する！」

「旦那のしぶとさは、ゴキブリ並ですからねエ」

沖田も、いつもの軽い口調で言った。

「…うん」

フェイトは小さく頷いた。

(銀時…母さん…私、信じて待ってるから)

両手を胸に当てながら、フェイトは二人の無事を願い、信じて待つのだった。

第二十一訓：人の腕は大切なモノを抱きしめるためにある（後書き）

銀八「はい。『ガンダム』さんから二つ目の質問。『銀さんが新八のメガネを新八とよんでフェイトに新八の95%はメガネだといいましたが新八が否定してフェイトは苦笑いしたけど、ぶつちやけフェイトは新八の本体ってなんだと思いますか？』どうなんだフェイト？」

フェイト「もちろん、新八さん自身を本体だと思ったよ！」

銀八「本当に？」

フェイト「ほ…本当だよ」

銀八「本当に？」

フェイト「……………一瞬、メガネが本体なんだ……………なんて思っっちゃいました…」

銀八「はい。二つも質問してきた『ガンダム』さん。ビーサーベルとシールドを持って廊下に立ってなさい」

第二十二訓：失ったモノを取り戻そうとするより今ある大事なモノを大切にしろ

作者です。

メッセージで『銀魂リリカルなのは終わったら続きは書くんですか？』という質問をいただきました。

続きはわかりません。とりあえず、この小説を完結できるように頑張ります。

では、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第二十二訓！始まります！

第二十二訓：失ったモノを取り戻そうとするより今ある大事なモノを大切にしろ

真っ黒い空。

（アレ？なんだコレ？空が真っ黒だ…）

銀髪の男と長い黒髪の女が倒れてる。

（アレ？真っ黒なのは俺じゃねーか）

銀髪の男がうつすらと片目を開けてる。

（アレ？なんで俺、こんな所にいるんだ？アレ？こんな前にもなかったっけ？原作でやったよね？アレ…？）

*

「ん…」

プレシア・テスタロッサは意識を取り戻した。

ゆっくりと目を開けると、顔に何か当たってる感触がした。プレシアは顔を上げて見ると、銀時の顔があった。

「きゃああ！？ぎぎ…銀時っ！？」

慌ててプレシアは起き上がって、銀時から離れた。

どうやら自分は、銀時の上に倒れていたようだ。深呼吸して気分を落ち着かせる。落ち着いて銀時の脈を確認したり、息をしているか確認する。脈はあるし、息もしている。銀時はただ眠っているだけだった。

「よかった…」

銀時が無事な事に、プレシアはひとまず安心した。

銀時の無事を確認した後、周囲を見渡した。何もない真っ暗闇。だが明かりもないのに、自分の体と銀時の姿だけ妙にハッキリと見える。

「ここは一体…？」

プレシアは考えた。

自分達は確か、虚数空間に落ちたはず。という事はここは死後の世界？天国？地獄？少なくとも天国という感じではない。顎に手を当てて考えていると、

「ふあゝ」

銀時が欠伸をかきながら、上半身を起こした。

「銀時！気がついたのね」

「あ…？プレシア…？」

寝ぼけながらプレシアを見た後、銀時は周りを見渡した。

「何この真っ黒い空間？」

銀時は目を細めた。

「私にも解らないわ」

プレシアは床に落ちてる、自分の杖を拾った。

銀時は立ち上がった。

「まさか仙人が出てくるとかないよな…？」

銀時がそんな不安を抱いた時、

「おお。これは驚きました。自力でこの空間に来るとは」

どこからか、男の声が聞こえてきた。

「…！」

すぐに銀時とプレシアは、周囲を警戒した。

周りには誰もいない。

「まあ待って下さい。私は敵ではありません」

また男の声が聞こえる。

「おい。コソコソ隠れてねーで、出て来たらどうだ？」

銀時は、腰に差してある木刀を掴む。

プレシアも、杖を構えながら警戒を続ける。

「私なら、ここにいますよ」

「どこだよ？」

銀時はキョロキョロと周りを見る。やはり誰もいない。

「今、貴方達がいるこの空間ですよ」

「え？」

銀時とプレシアはポカンとなる。

互いに顔を見合わせる。それから顔を前に向ける。

「この空間が…貴方？」

プレシアが戸惑いながら尋ねた。

「はい。申し遅れました。私『アルハザード』と言います」

空間が自己紹介した。

「は？」

銀時とプレシアは間抜けな声を出した。

しばし呆然となって、場が沈黙する。

「あの〜」

沈黙に耐えられず、『アルハザード』を名乗る空間が二人に声をかける。

銀時の目が、カツと見開かれる。

「アルハザードオオオオ！？」

ありったけの声で、銀時は叫んだ。銀時の声が空間に響いた。

「まさか…ここが…アルハザード…？」

プレシアも驚きながら、再び周囲を見渡した。

自分達以外、誰もいない。何も無い。ほとんど『無』に等しき空間。

ここが、自分が探し求めてた場所『アルハザード』。

「嘘つくんじゃないエエ！こんな何も無い真っ黒い空間がアルハザードだったらなあ、俺の家の押し入れもアルハザードだろうがアアア

！！！」

「ちよつとオ！押し入れと一緒にしないでくださいよオ！」

銀時の言葉にアルハザードは怒る。

その時、

「ゲホツ…！ゲホツ…！ゴホツ…！」

銀時の隣にいるプレシアが、急に咳込んだ。

「プレシア…！」

銀時が駆け寄る。

「大丈夫か！？おい！しっかりしろ…！」

銀時は、プレシアの肩を抱きながら声をかけた。咳は激しくなり、最後には吐血をした。

「ハア…ハア…どうやら…もう限界みたいね…」

手に付着してる、自分の血を見ながらプレシアは呟いた。

「バカヤロー！諦めんな！何か方法があるはずだ！！」

必死にプレシアを助ける方法を考える。

その時、

「あゝ」

アルハザードの声がした。

「そちらの男ばかりに、気を取られて気付かなかったんですが…、

貴女は病気なんですか？」

「ええ…不治の病よ……」

顔を上げながらプレシアは答えた。

プレシアの答を聞くと、アルハザードはしばし黙り込んだ。時折、

うぐんと何か考え込んでいる声が聞こえた。

「…わかりました。貴方達がここに来たのも何かの縁。すみません。

そちらの男の人の名前は？」

「銀時。坂田銀時だ」

アルハザードに聞かれて、銀時は名乗った。

「女性の方は？」

「プレシア。プレシア・テストロッサよ」

プレシアも自己紹介をした。

「では、坂田さん。テストロッサさんから少し離れてください」

「何するんだ？」

銀時は目を細めて空間を睨んだ。

「テストロッサさんの体を調べます。大丈夫です。絶対に危害は加

えないと約束します」

ハッキリとアルハザードが言った。

銀時はしばし考えた後、プレシアに顔を向けた。咳は収まったが、

プレシアは苦しそうな顔をしている。

まだアルハザードの事を、完全に信用したわけではない。だが、他に方法はない。

「…わかった。頼んだぜ」

「はい」

銀時の言葉に、アルハザードは力強く答えた。

銀時はプレシアから離れて様子を見る。

「では、テストロッサさん。そのまま動かないでください」

「え…ええ…」

戸惑いながらも、プレシアはアルハザードの声に従った。

プレシアの足下に巨大な魔法陣が展開された。

「ふむふむ…なるほど」

魔法陣を展開してから、アルハザードはブツブツ呟く。プレシアの体を調べているのだろう。

銀時は静かに様子を見守り、プレシアも黙って座っている。しばらくして、

「あゝはいはい。わかりました」

アルハザードの軽い声が響いた。

「じゃあ今から治しますんで、そのままじっとしてて下さい」

「え？」

アルハザードの言葉に、プレシアはポカンとなる。

足下の魔法陣が少し強い輝きを放った。時間にして二、三秒くらいか。輝きはおさまり、足下の魔法陣も消えた。

「オッケーです」

アルハザードがそう言った直後、

「…!!!」

プレシアは、自分の体の異変に気付いた。

「体が……軽いわ！痛みも苦しみも全くない！！」

「えっ！？」

様子を見守ってた銀時も、驚きの声を上げた。

慌ててプレシアに駆け寄る。

「信じられないわ…不治の病が治るなんて…！」

「そちらの世界では、不治の病かもしれないませんが、私にとってはそうではありません。あっ、ついでに病気で弱った体を回復させて、健康状態も良好にしました。それなら別の病気にかかる心配はないでしょう」

と、軽い口調でアルハザードが説明した。

プレシアは、まだ信じられないと言った顔をして、自分の体を眺めている。

「やるじゃねーかアルハザード！」

「いや〜それほどでも」

銀時の言葉にアルハザードは照れた。

その時、プレシアはある事をアルハザードに聞くことにした。

「あの…アルハザードさん」

「あっ、呼び捨てで結構ですよ」

「じゃあ…アルハザード…貴方に聞きたい事があるの」

「何ですか？」

そこでプレシアは一旦、言葉を止めて目を閉じた。深呼吸をして、ゆっくりと目を開ける。

「貴方…死者の蘇生は可能かしら？」

険しい表情でプレシアは尋ねた。

隣にいる銀時は少し驚いたが、口は挟まなかった。

「死者の蘇生…ですか」

ポツリとアルハザードが呟いた。

プレシアは、手に汗を握りながら答えを待った。

そして、アルハザードはプレシアの問いに答える。

「申し訳ありませんが、いくら私の力でも死者の蘇生はできません」

プレシアは、アルハザードの答えを聞いて目を閉じた。

「そうよね…無理よね…そんな方法があるはず無いわね……」

顔を俯いて呟いた。

「…すみません」

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。

プレシアは顔を上げた。

「いいえ。感謝しているわ。アルハザード」

「え？」

プレシアの言葉に、アルハザードはポカンとする。

「失ったモノは取り戻せない……そんな事はわかっていた事……なのに……私はそれを認めようとせず……逃げて……あの子を苦しめてしまった……」

プレシアは悲しい表情を浮かべた。

アルハザードと隣にいる銀時も、黙ってプレシアの話を聞いている。

「でも……ようやく私は、今までの自分の殻を破って、新しい自分になる決意が出来たわ」

例え、アルハザードが死者の蘇生が可能だと答えたとしても、プレシアはソレを拒絶し、新しい自分になるうと考えていた。

そしてプレシアは、新しい自分になる決意をした。
隣にいる銀時は微笑んだ。

「なんか……よくわかりませんが。とりあえず、よかったですでしょうか？」

アルハザードは、いまいち話の内容がわからいでいた。

「ええ。それと、病気を治してくれてありがとう」

微笑みながらプレシアは礼を言った。

「いえいえ」

プレシアは銀時に振り返った。

「銀時。私はもう逃げないわ。ちゃんとフェイトと向き合って、二人で生きていくわ。アリシアの分まで」

銀時を真っ直ぐに見つめながら、プレシアが言った。その瞳には、今までのプレシアにはなかった、力強い意志が宿っていた。

「ああ」

銀時は満足そうに微笑んだ。

「それじゃあ元の世界へ戻りましょう」

「プレシア」

「何かしら？」

プレシアは首を傾げた。

「どうやって戻るんだ？」

「あ……」

そうだ。自分達は虚数空間に落ちてここに来たのだ。一体どうやって戻る？また虚数空間に落ちるか？いや、そんな事したら今度こそ命はない。

「ご心配なく。私が二人を元の世界へお送りします」

二人の足下に魔法陣が展開された。

「悪いな。いろいろ世話になったぜ」

「いえいえ。あつ、ただし一つお願いがあります」

「お願い？」

二人は首を傾げた。

「私の存在を外の世界に教えないでください。私の力を悪用しようとする者が、出てくるかもしれないので」

「ええ。わかったわ」

プレシアは頷いて答えた。

「貴方達だったら、いつでも歓迎しますけどね。まあ何もない所です」

「今度からキレイな姉ちゃん用意しときな」

笑みを浮かべながら銀時が言った。

「それは無理です」

「即答かよ」

そんな話をしてる内に魔法陣の光が強くなる。そろそろお別れだ。

「それじゃあお二人さん、お幸せに〜」

「えっ！！？」

アルハザードの言葉に、プレシアは頬を赤くした。

「ちよっ…ちよっ…と待ちなさい！私と銀時はそんなんじゃない……！」

プレシアが言い終わらない内に、二人の姿はアルハザードから消えた。
「あの様子だと、テストロツサさんの方はまんざらでもない感じだな」
アルハザードは一人、楽しそうに呟いた。

*

アースラ。

フェイト達が入ってる独房。

現在夜中の二時。

フェイトは眠れずにいた。真選組の三人とアルフは眠っている。

(母さん…銀時……)

両手を握って二人が帰ってくる事を祈る。

その時、フェイトの前で突然強い光が発せられた。

「!!!」

あまりの眩しさに、フェイトは手で目を隠した。

やがて光がおさまり、フェイトは手をどけて前を見た。

ソレを見て、フェイトは目を大きく見開いた。

「どこだ、どこ?」

「どこかの部屋みたいだわ」

坂田銀時とプレシア・テストロツサが、フェイトの目の前にいた。

「母…さん…?」

「え?」

声に気付いて、プレシアは振り返った。

そこには、自分の愛する娘がいた。

「フェイト…」

プレシアは体が震えた。目から涙が零れる。

「母さん…」

フェイトがゆっくりと近づいてくる。

「フェイト!!」

プレシアは泣きながら、フェイトに抱き付いた。

「母さん!!」

フェイトも涙を流しながらプレシアを抱いた。

「フェイト……ごめんなさい……ごめんなさいフェイト!」

「ううん!母さん……母さんが生きててよかった!無事でよかった!」

プレシアとフェイトは涙を流しながら、離さないように互いの体を強く抱きしめた。

二人の様子を見つめながら、銀時は微笑んだ。

「よかったな……プレシア、フェイト」

すると、近藤が目を覚ました。

「何だか騒がしいな……」

目を擦りながら体を起こす。

そして目の前の光景に驚く。

「えっ!?万事屋!!?プレシアさん!!?」

近藤のデカい声が、独房に響いた。

「よオ。いい夢見たかいゴリラ?」

*

銀時とプレシアが虚数空間から生還した事実、アースラ内の人達は全員度肝を抜いた。最初は幽霊だと騒いだ者もいたが、すぐに生きている生身の人間だとわかった。

銀時は新八や神楽達に顔を見せた。その時、涙を流して叫びながら新八達は、銀時に殴りかかった。

当然、クロノとかに問い詰められたり。

「一体どうやって虚数空間から戻ってきたんだ!？」

「海を漂ってたら、いつの間にか砂浜に着いてた感じ?」

「マジメに答えろ!!」

約束通り、銀時とプレシアはアルハザードの存在を誰にも話さなか

った。

銀時は、また騒がしい日常に戻った。

*

翌日。

プレシアとフェイトはリンディに呼ばれてた。部屋に入ると、リンディとクロノが待っていた。

「おはようございます。とりあえずお座り下さい」

リンディが椅子に座るように促した。

プレシアとフェイトは椅子に座った。

「それでは早速本題に入ります」

リンディは報告書を取り出た。

「フェイトさんは、本局の保護施設に移送する事になります。ただ、今回の事件の重要参考人なので暫くは事情聴取を受ける事になります」

時折、紙に目を通してフェイトに説明した。

「あの…母さんは…？」

プレシアを心配そうに見ながらフェイトが尋ねた。

「…残念だけど、プレシアさんは管理法違反、しかも次元断層を引き起こそうとした張本人。私達も目をつむるわけにはいかないの」
険しい表情でリンディが語った。

「そんな…」

フェイトは表情を暗くする。

「大丈夫よフェイト。母さんは大丈夫だから」

プレシアは微笑みながら、優しくフェイトの頭を撫でた。

「じゃあクロノ。この報告書を提出して…」

リンディがクロノに報告書を渡そうとした時、

「異議あり！」

扉の向こうから、男の声が聞こえた。

全員が扉へ振り返った。直後、扉は勢いよく開かれ、スーツ姿の二人の男が中に入ってきた。

「いや、突然すいません」

男は、くいつと眼鏡を上げた。プレシアの横を通り過ぎて足を止める。

「私、急遽プレシア・テストロッサの弁護をさせていただきます……」

そこで男はプレシアとフェイトに振り返った。

「弁護士の坂田です。よろしくお願ひします」

ニヤリと笑みを浮かべるのは坂田銀時。

「銀時！！？」

プレシアとフェイトの声が重なった。

「こちらは、助手の沖田君だ」

銀時は、隣にいる栗色の髪の男を紹介した。

「沖田です」

沖田は、間延びした声で名乗った。

「な……何のつもりだ！？」

クロノが二人に向かって叫んだ。

「先ほどのプレシア・テストロッサの措置について異議がありません
てねエ」

銀時は、不敵な笑みを浮かべる。

「私は、プレシア・テストロッサの無罪を主張します！！！」

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『GIPPO』さんからの質問。『新八の普段の戦闘能力は362Kですが(竜宮編より)魔法の呪文を使ったらどのくらい戦闘能力が上がるんですか?』。では銀八先生、答をどうぞ」

銀八

「はい、ズバリお答えしましょう。戦闘能力は370Kです」

フェイト

「たったの8Kしか上がってない!?!」

銀八

「まあ新八だからな。でも気迫は凄く上がってるから。というわけで、ペンネーム『GIPPO』さん。両手に昆布の入ったバケツを持って、廊下に立ってなさい」

フェイト

「では二つ目の質問。ペンネーム『ガンダム』さんから。『新八はメガネをとつたら何Kですか？自分の予想では1Kじゃないですか』」

銀八

「また新八に対する質問かよ。新八人気なの？」

フェイト

「そういえば『K』って何？」

銀八

「昆布の事だ」

フェイト

「昆布!？」

銀八

「では質問に答えます。メガネを取つたら新八は5Kです」

フェイト

「1Kとあまり変わらない……」

銀八

「新八は長谷川さんと違ってマダオじゃないんで。でもメガネ（グラサン）が本体という共通点でこうなります。それじゃあ『ガンダム』さん。グラサンかけて廊下に立ってなさい」

第二十三訓：異議がある時は手を挙げる（前書き）

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第二十三訓！始まります！

第二十三訓：異議がある時は手を挙げる

プレシア・テストロッサの無罪を主張。

リンデイとクロノの前で銀時はそう言い放った。

「ま…また貴方は無茶な事を…！」

クロノが銀時を睨みつけた。

「銀さん。いくら何でも今回ばかりは…」

「報告書よこしなア」

リンデイが話してる途中で、沖田は報告書を取った。

「おい！勝手な事は許さんぞ！」

クロノが声を上げる。

だが、銀時と沖田は、クロノの声を可憐にスルーして報告書を見る。

プレシアとフェイトは、もう黙って成り行きを見守る事にした。こ

っちが何を言っても、おそらく銀時は止まらない。今までの銀時の

行動でよくわかった。

「なるほどねえ…」

報告書を読み終わった銀時は、ため息をついた。

「思ったとおりでしたねエ」

隣にいる沖田もため息をついてる。

「い…一体何なんだ？」

クロノが尋ねた。

銀時は目を細めて、クロノ達を見た。

「この報告書…」

スツと報告書を前に突き出した。

「間違いだらけじゃねえかアアアア！！」

怒鳴りながら、報告書をデスクに叩きつけた。

リンデイとクロノ、プレシアとフェイトは体をビクリと震わせた。

「全部書き直した」

「ちよっ…ちよっと待て！書き直してどついう事だ！？」

クロノが叫んだ。

「だーかーらー、間違いだらけの報告書を書き直せって言ってんだよ」

銀時は、眼鏡をクイツと上げながら言った。

「どこも間違えてないぞ！」

クロノが反論する。

「じゃあ俺が間違いを指摘してやる」

そう言っただけで銀時は、報告書を開いた。

手には赤ペンを持つてる。

「『プレシア・テストロツサはジュエルシードを使用して次元断層を引き起こそうとした』。はい、ココ間違ってますね」

赤ペンで『x』を書きながら、銀時が言った。

「いや、間違っただけでいいぞ！本人も認めてるんだ！」

クロノがデスクを叩きながら言った。

ここで沖田が手を挙げた。

「異議あり！どうせ不眠不休で相手を弱らせて、無理矢理、自供させたんだろ？そんな自供に証拠能力はありませんぜ」

「いや、昨日一回話を聞いただけなんだが……」

クロノは顔をしかめた。

ここで銀時も口を開いた。

「次元断層が起きそうになったのは事実でしょう。しかし、これが故意に起きたのか偶発的に起きたのか甚だ疑問であります」

報告書を片手に銀時は言った。

「疑問って……プレシアが九つのジュエルシードを発動させて、次元断層が起ころうになったんだぞ。貴方も一緒に映像を見ただろ」

クロノが負けじと反論した。

また銀時が手を挙げる。

「異議あり！そもそもプレシアがジュエルシードを集めてた目的は、危険なロストロギアを海鳴市から回収するため。つまり善意でジュエルシードを集めていたのです」

「ぎ…銀時？」

プレシアが声をかける。

「つまりトロくて薄情でいい加減な組織、時空管理局の代わりに、テスタロツサ親子は必死になってジュエルシード集めをしてたんでさア」

沖田が銀時の後に続いて説明した。

再び銀時が口を開く。

「むしろ…これは対応の遅れた、おたくら時空管理局に問題があるわけであり、プレシアとフェイトには何の罪もない」

ニヤリと憎たらしい笑みを浮かべる。

クロノはグツと歯を食いしばり、リンディも険しい表情をする。銀時の言う通り管理局の対応が遅れたのは事実。

「だが…次元断層が…！」

クロノが反撃しようとするが、

「異議あり！あれは回収したジュエルシードが暴走した結果であり、プレシアに罪はない！」

「そもそもジュエルシードを早く管理局が預かっていれば、あんな事にはならなかったとうワケでさア」

銀時と沖田は怯む事なくクロノに言った。

管理局の対応の遅かった点を攻める二人に、クロノはなかなか反論できない。

「では銀さん」

ここで、今まで黙ってたリンディが口を開いた。

「プレシア女史が局員を攻撃した事については、どう説明するつもりですか？」

リンディが反撃に転じた。

だが、銀時は怯まない。

「異議あり！！あれはプレシアが娘のアリシアを護るために行った行為！母が娘を護る行為を責める事は、誰にも出来ない！！」

「銀時…」

銀時の発言に、プレシアは思わず涙目になる。

沖田も銀時に続く。

「更に言えば、善意でジュエルシードを集めてたプレシアの城に、勝手に侵入した时空管理局の方が住居不法侵入罪で犯罪者でさア」
ニヤリと腹黒い笑みを浮かべる沖田。

「う……」

銀時と沖田の主張に、リンディの顔は険しくなる。

リンディの隣に立ってるクロノは苦い顔をしている。ダメだ。僕らじゃこの二人は止められない。この二人に勝てない。

「おや？どしたのかなクロノ君？リンディさん？」

「まさか証拠もなく、プレシアを犯罪者にしのかイ？こいつア冤罪事件だねエ」

銀時と沖田が口元を歪める。

リンディとクロノは、返せる言葉がなかった。

時の庭園は崩壊して、証拠と呼べる証拠はない。

リンディは眉間にシワを作って考えた。部屋が静寂に包まれる。

しばらくして、リンディはため息をついた。

「……わかりました。報告書を書き直し、プレシア女史をフェイトさんと同じく、管理局で保護します」

ついにリンディが折れて、プレシアもフェイトと一緒に管理局に保護される事になった。

いつもなら、ここでクロノがリンディに叫ぶのだが、今回はなかった。クロノは疲れ切った顔をしている。

（きつと向こうで裁判をしても…この二人に勝てる検事はいないだろうな……）

なんて事を考えながら、クロノはため息をついた。

「それじゃあ…私と母さんは……」

フェイトは身を乗り出す。

「これから二人は一緒に暮らす事になります」

リンディはフェイトに言った。

「母さん！」

すぐにフェイトは、プレシアに顔を向ける。

「フェイト！」

プレシアも笑顔でフェイトを見る。

そんな二人の様子を見て、リンディはため息をつきながら微笑んだ。

「ま…これはこれで、よかったのかもしれないわね」

リンディは席を立った。

「まったく…貴方は本当に……」

クロノは頭を抱えた。

「まあまあ。あんまり真面目すぎると、背が伸びねーぞ」

「背は関係ない!!」

今ままで一番大きな声で、クロノが叫んだ。

「銀時！」

フェイトが銀時を呼んだ。

「ん？」

振り返ってフェイトを見る。

「ありがとう」

笑顔でフェイトは、銀時に礼を言った。

「母ちゃん大事にしるよ」

そう言っつて銀時は部屋を出た。

「いや〜いい事した後は気分がいいですね」

沖田も部屋を出た。

「じゃあクロノ。悪いけど報告書の書き直し、お願いね」

「はい」

クロノは仕方なく報告書を受け取った。

*

プレシアとフェイトは、アリシアの亡骸が保管されてる部屋に入った。

静かな部屋にコツコツと足音が響き、二人はアリシアに近寄った。

「アリシア」

プレシアはアリシアの顔に手を伸ばした。

「この子がフェイトよ。貴女の妹になるわね」

眠ってるアリシアにフェイトを紹介する。

「アリシア。私はこれからフェイトと一緒に生きていくわ」
アリシアの頬を撫でる。

隣でフェイトはアリシアを見つめてる。

「フェイトと二人で、貴女の方まで生きるわ。それが貴女に出来る私の償い」

プレシアの目に涙が浮かぶ。

「アリシア、フェイト。愛してるわ」

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さんからの質問です。『銀さん達とフェイト達で強いランキングをしたらどうゆう順位になりますかおしえてください』」

銀八

「なかなか困る質問だな。フェイト達だつてこれから強くなるんだし、精神状態とか相性とか戦いの状況とかで勝敗とかも決まるし……」

フェイト

「銀八先生？」

銀八

「ランキングなんかには踊らされるなアアア！！はい次の質問！」

フェイト

「酷っ！ちゃんと答えてあげようよ！」

銀八

「人生なんでもかんでも答があると思つたら大間違いなんだよ！！」

フェイト

「それはそうだけど……」

銀八

「じゃあ二つ目の質問。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さんから。『銀さんの宇治銀時井って、フェイトはともかくとして、なのはとかユーノとかアルフ的には』うわぁ……”な感じのようですけど、でしたら同じく甘党であるリンデイさんでしたら、宇治銀時井にはどんなコメントをされるでしょうか」はい、お答えします。第二十四訓でリンデイは宇治銀時井と出会います。ですから第二十四訓が載るのを待ってください」

フェイト

「第一章も、もうすぐ終わりだね」

銀八

「そうだな。それじゃあ『ダークキバ』さんと『ゲロ口軍曹』さん。廊下に立ってなさい」

第二十四訓：宴会もマナーを守って楽しめよう（前書き）

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「メッセージに質問があったのでお読みします。『銀さんや神楽さんは魔導師や騎士のランクにするとどれくらいになりますか？新撰組の人達もできれば教えてください』はい、質問に答える前に間違いを指摘します。『新撰組』ではなく『真選組』です。ここテストに出るぞ。質問の答ですが、ランクはあくまで魔導師の強さを表すものです。まあでも、銀さんや真選組の人達はクロノよりは強いです。あと、一応小説はAS編、Strikers編も書くつもりです。じゃあ『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第二十四訓。始まります」

第二十四訓：宴会もマナーを守って楽しみましょう

ここは海鳴温泉。

旅館の宴会場に銀時達はいた。

プレシアも無罪となり、事件が無事解決した事を祝つたために海鳴温泉で宴会を開く事になったのだ。

宴会場には、銀時、新八、神楽の万事屋トリオと、近藤、土方、沖田の真選組の三人もいた。

もちろん、フェイト、プレシア、アルフもいる。

なのはとユーノも。

リンディも、クロノとエイミィも、アースラに乗ってた局員達もいる。

とにかくみんな、いた。

近藤がビールの入ったコップを片手に立ち上がり、宴会場を見渡した。

「えー、皆さんの協力のおかげで無事、事件を解決する事ができました。今日は思う存分飲んで騒いで、疲れを癒してくれ」

そう言つて近藤は、コップを上に掲げた。

「みんな、今までおつかれやしたー！！」

「おつかれやしたー！！」

近藤の声の後、みんなが乾杯した。

「何でお前が仕切つてんだよ？」

酒を一口飲みながら銀時は呟いた。

「うおおお！ご馳走食べ放題アル！」

神楽はテーブルの上に並べられてる料理を片っ端から食べ始めた。

他のみんなもワイワイ騒ぎながら酒を飲んだり、料理を食べたりしてる。

沖田は、ユーノに絡んでいた。

「よオ、むつつりスケベ。今日はフェレット姿で女湯に入らねえの

「かイ？」

酒を飲んで酔っているのか、沖田の顔は少し赤かった。

「だからアレは誤解ですってば！」

コーノは必死で沖田に訴えた。

土方はクロノの隣で酒を飲んでいた。

「土方さん。お疲れ様です」

「オメーもな。野郎に振り回されて大変だったろ」

「ええ…まあ」

クロノは苦笑いをした。

「まあ今日は飲もうや。愚痴を肴にしてな」

そう言つて土方はクロノのコップにコーラを注いだ。その後、自分のコップにも酒を注いだ。

フェイトは、銀時とプレシア、アルフと一緒に料理を食べていた。

「フェイトちゃん」

そこへ、なのはがやってきた。

「あ…」

呼ばれてフェイトは、なのはへ顔を向けた。

「一緒にいいかな？」

「う…うん」

フェイトは少し戸惑った顔をする。なのははフェイトの隣に座った。

「私ね、フェイトちゃんに伝えたい事があるんだ」

「え？」

フェイトが少し驚いた顔をする。

「私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

優しく微笑みながら、なのはは想いを伝えた。

「…あ…あのね…私…アルフ以外に友達とか出来た事ないから…
…どうすればいいのか分からなくて…」

胸に手を当てて、フェイトは戸惑う。

「簡単だよ。友達になる方法…すっごく簡単」

なのはの言葉にフェイトは首を傾げる。

「名前を呼んで」

「名前？」

「うん。君とか貴女とかじゃなくて、その人の名前を呼んであげて全部そこから始まっていくから」

優しく微笑んでるなのはを、フェイトは見つめる。

「……なのは」

目の前にいる少女の名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「なのは……」

もう一度名前を呼ぶ。

「うん」

なのはは頷く。

「もう私とフェイトちゃんは友達だよ」

笑顔でなのはが言う。

フェイトは少し照れた顔をする。それからフェイトは優しく微笑んだ。

「ありがとう、なのは」

ハッキリと、なのはの名前を呼んだ。

それを聞いたなのはは、嬉しそうな笑顔で頷いた。

「うん！」

それから二人は笑顔で互いの手を握った。

互いが離れないように強く。

二人の様子を銀時は微笑みながら、プレシアは涙目で微笑みながら見つめた。

すると、

「ひつぐ……えぐ……」

プレシアの隣でアルフが泣いていた。

「何泣いてんのお前？」

「だってさ……なのはってばスゴく優しい子だし……フェイトも嬉し

そうに笑ってるし……」

涙を流しながらアルフが言う。プレシアが涙を拭いてあげた。

「まあ…そうだな」

微笑みながら銀時は、酒を一口飲んだ。

いい感じになってるフェイト達だったが、この雰囲気をつち壊す人物が現れた。

「よーし！次はカラオケいつてみようかアー！！」

叫びながら近藤はカラオケセットを用意した。

「じゃあまずは新八君から！」

「ええっ！？ぼ、僕ですか！？」

いきなり近藤に指名されて、新八は戸惑った。

「さあ早く早く！」

近藤はマイクを新八に持たせた。

「わ…わかりました」

マイクを片手に新八は立ち上がった。

銀時は危険を察知した。

「フェイト、なのは、プレシア、アルフ。お前ら耳を塞げ」

「え？」

銀時の言葉にみんな戸惑った。

「いいから早く耳を塞げ」

言いながら銀時は、自分の耳を手で塞いだ。

「なのは、母さん、アルフ。銀時の言う通りにしよう」

フェイトは耳を塞いだ。

「し…仕方ないわね」

プレシアも耳を塞いだ。

なのはとアルフも耳を塞いだ。

「一番。志村新八。よろしくお願いします」

マイクを構える。

曲が流れ始めた。曲は寺門通の『お前の母ちゃん 人だ？』。

何でこの曲が『リリカルなのは』の世界にあるの？というシツコミ

はナシでお願いします。

新八は大きく息を吸い込み、

「お前エそれでも人間かア!!お前の母ちゃん 人だアア!!」

新八の音痴が宴会場に響いた。

新八以外の全員が耳を塞ぐ。

「いい加減にしねえと!」

新八は一人歌い続ける。

「ちょ…ちよつと!何なのよコレ!?!」

耳を塞いだままプレシアが叫んだ。

「新八は音痴なんだよ」

短く銀時は答えた。

「音痴つて…!こんな酷い歌聞いた事ないわよ!!ほとんど騒音じゃない!!」

「それよりも厄介なのはなア、新八本人が音痴であることを自覚してない事だ」

「えっ!!?!」

プレシアは驚愕の表情を浮かべた。

「こんなに酷い歌で自覚なし!?!どうなってんだいあの子は!?!」

苦痛の表情でアルフが叫んだ。

新八は気持ちよさそうに歌ってる。

その時、銀時達は、ブチツと何か切れる音が聞こえた気がした。

一人の少女がゆっくりと立ち上がった。顔を俯いたまま新八に向かって歩いていく。

「な…なのは?」

フェイトは少女の名を呼んだ。だが、なのははフェイトには反応せず新八に近寄った。

新八はまだ熱唱している。

なのははバシツとマイクを叩き落とした。

「な…なのはちゃん!?!」

なのはに気付いた新八が叫んだ。

「新八さん……」

なのは手にレイジングハートを構えた。

「少し……頭冷やそうか……」

冷たい目で新八を見つめる。

「え？」

新八は冷汗を流した。

「スターライト・ブレイカー……!!」

「ぎゃああああ!!!!」

新八は桜色の閃光に飲み込まれた。

宴会場がシーンと静かになった。黒焦げになった新八は、バタリと倒れた。

この事件が『白い悪魔』誕生のキッカケになったとかそうじゃないとか。

この後にもいろいろ騒ぎが起こるのであった。

*

「もう我慢できないでござる!!」

急に誰かが立ち上がった。

その人物とは。

「ひ……土方さん!?!」

隣に座ってるクロノはビククリした。

銀時は片眉を上げた。

「ござる?まさか……」。

銀時はイヤな予感がした。

「フェイトちゃあああん!!」

土方はフェイトに向かって走り出した。

「えっ!?!」

フェイトは怯えて体を震わせた。

「ぼぼ、僕と握手して下さい!それとサインをおおお!!」

興奮しながらフェイトに迫る土方。

「フェイト!!」

プレシアとアルフがフェイトを護ろうとした時、

「トツシーイイイ!!」

叫びながら銀時は、土方：いや、トツシーにドロップキックを食らわせた。

へたれたオタク、トツシー出現。

「ぶはぁあ!!」

トツシーは床に倒れた。

「な…何をするんだ坂田氏!?!」

「汚え手でフェイトに触ろうとすんじゃねエエ!!」

銀時はトツシーに鉄拳制裁を加えた。

しばらくして『トツシー』から『土方』に戻り、銀時と喧嘩になった。

フェイトはニコニコ笑いながら、白いご飯に小豆を乗せている。

「フェ…フェイトちゃん!?!何してるのオ!!?!」

「フェイトオ!?!」

なのはとプレシアは、顔を引きつらせながら叫んだ。

「宇治銀時井って言って、凄く美味しいんだよ」

そう言ってフェイトは、美味しそうに宇治銀時井を食べ始めた。

「宇治銀時井って…まさか!」

プレシアは銀時の方を向いた。銀時も白いご飯に小豆を乗せていた。

「銀時!貴方、フェイトに何てモノ教えてるのよ!!?!」

「あ?何って宇治銀時井だけど?」

銀時は首を傾げた。

プレシアはアルフの胸倉を掴んだ。

「アルフ!貴女がついていながら!!」

「あたしも、まさかフェイトがアレを気に入るとは思わなかったんだよ〜!!」

顔を横に振りながら、アルフが言った。

銀時の前に、リンデイがやってきた。

「あら、銀さん。何を食べてるんですか？」

「宇治銀時丼だ。食うか？」

銀時は宇治銀時丼を差し出した。

「いただくわ」

リンデイは箸で宇治銀時丼を摘み、口の中に運んだ。

「う〜ん。なかなか美味しいわね。ご飯に小豆を乗せるなんて、さすが銀さん！発想が違うわ！」

リンデイは宇治銀時丼を気に入った。

プレシアとアルフは呆然となって、その様子を見た。

一方、フェイトとなのはは。

「なのはも食べる？」

フェイトは、なのはに宇治銀時丼を差し出した。

「NO!!」

なのはは全力で断った。

*

まあそんな騒がしい宴会にも終わりはやってくる。みんな酒を飲んで騒いで疲れ切って眠っている。起きている者もいた。

銀時は宴会場の入口に一人座ってる。

するとフェイトがやってきた。

「どした？」

「ちよつと、お手洗いに行ってくるね」

そう言ってフェイトは宴会場を出た。

銀時は、フェイトの背中に声をかけた。

「フェイト」

「何？」

フェイトは足を止めて、振り返った。

「楽しかったか？」

「うん！」

フェイトは笑顔で頷いた。また歩き出して角を曲がって銀時の視界から消えた。

銀時はため息をつきながら考えた。

プレシアも無事で、事件が解決したのはよかった。だが、肝心の元の世界に帰る方法はまだ見つかってない。

どうしたものかと銀時が思った時、目の前に小さな光が現れた。

「ん？」

目を細めて光を見る。

やがて光が消えてある物が床にあった。黒くて長方形の形をした物。

「こいつア…無線機か？」

銀時がそう呟いた直後、

「銀の字！銀の字！応答願います！」

無線機から声が発せられた。しかも聞き覚えのある声。

「こちら源外だ！応答願います！」

銀時はすぐに無線機を拾った。

「じーさん！」

「おお、銀の字無事か！？」

「無事か？じゃねーよ！テメーのせいで俺達は大変な目にあっただぞ！」

無線機に向かって銀時は怒鳴った。

「すまなかつたな銀の字。後でちゃんと謝るから勘弁してくれ。ところで新八と神楽はどうした？」

「すぐそばにいる」

眠ってる新八達を見ながら答えた。

「よし。今すぐ起こして三人一カ所に集まれ。すぐにこっちに戻す！」

「え？」

『すぐに』、という言葉に銀時は眉を寄せた。

「お前らを送った事で装置が故障してな。さつき、やっと装置の修理を終えたばかりなんだ。だが急いで直したもんだから、また何時故障するかわからん。だから急いで二人を呼んでこい」

少し焦った感じで源外が説明した。

元の世界へ帰れるのは嬉しいが、まさかこんな急に帰る事になるとは。

「…わかった。あと真選組の三人もいるから」

「真選組！？なんで真選組がいるんだ！？」

無線機から源外の驚いた声が聞こえた。

「理由は後で話す。とにかく連中も一緒に連れていくから、じーさんは装置を動かしたらどっかに隠れてろ」

銀時が言った。

源外は前に、カラクリ軍団を使って將軍の首を狙った事で指名手配されているのだ。

「しょうがねーなあ。わかった。そいつらも起こして連れてこい」

「悪いな」

無線機を片手に銀時は立ち上がった。

新八達を起こそうと振り返った時、

「帰っちゃうの？」

後ろから声が聞こえた。

銀時は声がした方を向いた。

そこには、表情を暗くしたフェイトが立っていた。

「銀時…」

「フェイト…」

本来、出逢うはずの無かった二人。その二人に別れの時がきた。

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀さん達のなべ対決は最終回の番外編としてやってみてください』」

銀八

「これ、質問じゃなくてリクエストじゃね?」

フェイト

「そっだね」

銀八

「えー、『ダークキバ』さん。なべ対決をやるかどうかは、作者の気分という事で。ていうか…心理戦とか高度な戦いは無理かもな。書けないかも」

フェイト

「銀八先生？何か段々元気がなくなってるような…」

銀八

「次行こ、次。ペンネーム『ダークキバ』さん。ってまたあんたか！質問好きだねえこの人。『AS編では新八と神楽のほかになだれといるんですか』。はい。お答えします。第二章が始まってからの楽しみです。誰が出るのかな〜と楽しみにしながら第二章を待つてなさい。では、二つも質問、しかも片方はリクエストを書いた『ダークキバ』さん。一時間くらい廊下に立つてなさい」

フェイト

「三つ目の質問。ペンネーム『名隊長OOGAMI』さん。『STRIKERSまで話を進めるのですか？またはA・Sで話を終わらせるんですか？気になって夜も眠れません、答えてください』」

銀八

「この質問はよく聞かれるのですが、一応STRIKERSまで書

くつもりです。作者には頑張ってもらいたいですね。ではペンネーム『各隊長OOGAMI』さん。廊下に立ってなさい」

第二十四訓：宴会もマナーを守って楽しみましょう（後書き）

第一章！

ついに次回、最終回！？

第二十五訓：離れ離れになっても絆は切れない（前書き）

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「ペンネーム『スーパーフライ』さんからの質問。『なのはやフェイト達の戦闘能力をKやOで表すとどの位ですか？自分的には、なのは：12500。フェイト：13000。淫獣：メガネとあまり変わらず、位かと』。はい、お答えしましょう。だいたいそんな感じで合ってます。ただし、二人はまだまだ成長しますから戦闘能力も上がります。将来が楽しみです。ちなみにユーノは………まあ400Kくらいじゃないですかね。じゃあ『スーパーフライ』さん。とりあえず廊下に立ってなさい」

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第一章、最終回。始まります。

第二十五訓：離れ離れになっても絆は切れない

旅館の廊下で互いを見合う銀時とフェイト。窓から差し込んでくる月明りが、二人の姿を照らす。

「…帰っちゃうんだね。銀時」

フェイトは、寂しい表情を浮かべる。

「ああ、悪いな。急に帰る事になっちまった」
頭を掻きながら銀時が謝る。

フェイトは首を横に振る。

「謝らないで。よかつたね銀時」

悲しい気持ちを無理矢理抑えて、フェイトは笑顔を作った。

それを見た銀時はため息をついた。

「そんな顔するな。これが今生の別れになるわけじゃねーんだからよ」

銀時はフェイトに無線機を渡した。

「銀時？」

「やるよ。コレで源外ってじーさんに連絡すれば、俺達の世界に来れる」

そう言つて銀時は新八達を起こしにいった。

フェイトは銀時から渡された無線機を、ギュツと握り締めた。

*

みんなを起こさないように、銀時は新八達を起こして事情を説明した。

「本当に元の世界に帰れるのか？」

目を鋭くしながら土方が尋ねた。

「ああ」

銀時は頷く。

「まあ他に方法はないんだ。信じてみよう」
近藤が言った。

隣で沖田は眠そうに欠伸をかいてる。
フェイトが銀時に歩み寄った。

「銀時。みんなは起こさなくていいの？」

「ああ。大勢で見送りとかさねちまうと、コイツらが泣いちゃうかもしれないから」

そう言っただけで銀時は新八と神楽を見た。

二人は寂しそうな表情を浮かべていた。だが、銀時の言葉を聞いて二人ともムツとした顔になる。

「僕ら子供じゃないんですから、泣きませんよ！」

「馬鹿にするなヨ！」

銀時に向かって叫んだ。

銀時は、はいはいと軽く手を振って答えた。それからまたフェイトに向き直った。

「オメーから皆に、世話になったなって伝えてくんねーか？」

「うん」

フェイトは頷いて答えた。

その時、

「銀時？」

フェイトの後ろから声が聞こえた。

見ると、さっきまで眠っていたはずのアルフが立っていた。

「アルフ」

「起きちゃったのか」

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「フェイト。銀時達……どうしたんだい？」

不安がこもった声でアルフは尋ねた。

「…帰るんだって…元の世界へ」

「えっ!？」

アルフは驚いて目を見開いた。

「そんな……！何で急に……もう少しいてもいいじゃないか！」
銀時の肩を掴んでアルフが叫んだ。

「悪いな。今帰らねーと、次はいつ帰れるかわかんねーんだ」
アルフは我慢できずに、涙を流して泣き出した。

「寂しいじゃないかあ……銀時……！」

泣きながら銀時に抱き付く。肩を震わせながら涙を流す。狼の耳も元氣なく、ペタンと倒れている。

そんなアルフの姿を見て、銀時はため息をついた。

「フェイトにも言ったがよ。別にこれで二度と会えなくなるワケじゃねーんだよ」

アルフの肩に手を置きながら銀時が言った。

アルフは嗚咽をもらしながら顔を上げた。

「ほ……本当かい……？」

「ああ」

銀時は優しくアルフの頭を撫でた。

アルフは腕で涙を拭いた。

「……わかった。絶対にまた会おうね、銀時」

「ああ」

微笑みながらアルフに答えた。銀時は窓の外を眺めた。

「そついや、お前らと初めて会った夜も、こんな感じだったな」

夜空に輝く月を眺めながら銀時は呟いた。

フェイトとアルフも月を眺めた。いろんな事があつた。最初は敵と勘違いして戦つて、誤解が解けて一緒に暮らす事になった。ご飯の事で怒られたり、ジュエルシード集めを手伝ってくれたり、銀時が料理を作ってくれたり、一緒に寝たりした。

今までの出来事が、頭に思い浮かぶ。苦しい事もあつたけど、銀時がいて本当に楽しかった。

「おお、そつだ！」

突然、近藤が声を上げた。

「せつかくだから、ちゃんと俺達の自己紹介をしないか？」

「そういえば：僕らフェイトちゃん達にちゃんとした自己紹介して
ませんでしたね」

近藤の言葉に新八は頷いた。

「そうだろ？じゃあまずは俺達、真選組からだ！」

近藤がコホンと咳をする。

「真選組局長、近藤勲だ！」

力強い声で近藤が名乗った。

「：真選組副長、土方十四郎だ」

煙草をくわえながら土方は、クールに名乗った。

「真選組一番隊隊長、沖田総悟。でも明日には副長になってまさら」

「テーマはホント、いい加減にしろよ総悟」

副長の座を狙う沖田を、土方は睨みつける。

「万事屋で働いてる、志村新八です」

新八が自己紹介した。

「万事屋の神楽アル！」

神楽は元気よく自己紹介した。

「そして俺はご存知。万事屋、坂田銀時だ」

最後に銀時も自己紹介した。

「私はフェイト。フェイト・テストロツサ」

笑顔でフェイトは自己紹介した。

「あたしはフェイトの使い魔のアルフ！」

神楽に負けじと、アルフも元気に自己紹介した。

互いに自己紹介が終わり、別れの挨拶に移る。

まずは真選組の三人から。

「元気だな！フェイトちゃん！アルフ！」

「：じゃあな。フェイト。アルフ」

「フェイトとアルフも、一緒に土方さんを殺りませんかイ？」

「斬るぞ teme ee ee!!」

土方と沖田の喧嘩が始まった。近藤は必死に二人を止めようとする。
次は万事屋。

「元気でね。何かあったらいつでも万事屋に来てね。フェイトちゃん、アルフさん」

「フェイト、アルフ。コレお近づきの印にあげるアル」
そう言つて神楽は、フェイトとアルフに酢昆布を渡した。

「ありがとう」

受け取りながら、フェイトとアルフは礼を言った。

それからフェイトは真選組の三人を見回した。

「近藤：土方：沖田：」

フェイトの目に涙が浮かんでくる。

次に万事屋の三人を見回した。

「新八……か……神楽……」

泣きながら新八達の名前を呼び、最後に銀時を見た。

……銀時……」

銀時の名前を呼んで、フェイトは顔を俯いた。

涙がポロポロと床に落ちていく。

「元気でな。フェイト」

銀時は優しく微笑んで、フェイトの頭を撫でた。

「アルフもな」

「うん！」

アルフは涙目で頷いた。

「銀の字！そろそろいいか？」

フェイトの手にある無線機から、源外の声が聞こえた。

「ああ」

銀時はフェイト達から離れて、新八達の所に立った。

「待って銀時！」

フェイトが、バツと勢いよく顔を上げた。

無線機をアルフに渡すと、銀時に向かって走り出した。

「ん？」

銀時はフェイトに振り返った。

フェイトは思いつきりジャンプして、銀時の胸の中に飛び込んだ。

銀時は思わずフェイトを抱いた。

「お…おい、フェイト…」

フェイトの行動に銀時が戸惑っていると、フェイトは顔を銀時に近づけた。

次の瞬間、フェイトは自分の唇を銀時の唇に重ねた。

「!!!？」

銀時は目を見開いて驚いた。

銀時だけでなく、新八や神楽、真選組の三人も啞然としている。

フェイトをよく知るアルフも、口を大きく開けて驚いている。この場にプレシアもいたら、一体どんな反応をしただろう？

キスをした後、フェイトは下りて銀時から離れた。顔を真っ赤に染めながらも、真っ直ぐに銀時を見つめた。

「銀時。貴方が好きです」

微笑みながらフェイトは、みんなの前で銀時に告白した。

「…え……ちよっ……」

何とか我に帰った銀時が何か言おうとしたが、光が銀時達を包み、次の瞬間にはフェイト達の前から消えてしまった。

フェイトの後ろに立ってるアルフがようやく我に帰った。

「フェ…フェイト……あんだ……！」

アルフは動揺を抑えられないでいた。

フェイトは、窓の外の月を見上げながら小さく呟いた。

「また会おうね。銀時」

*

江戸のかぶき町。

かぶき町にある、源外の工場内から強い光が発せられた。光は収まり、工場内にある装置の扉が開かれた。中から万事屋と真選組が出てきた。

「…本当に戻ってきたのか？」

真選組の三人は工場の外を見た。

居酒屋やスナックなどの店があり、街には着物を着た人達が行き交い、天人達も歩いてる。

忘れるはずのない自分達の町。江戸のかぶき町である。

「…帰ってきたな」

土方が小さく呟いた。

ふと、三人は後ろを振り返った。

そこには、フェイトにいきなりキスと告白の両方をされて、どうしたらいいかわからないで呆然と立ち尽くす銀時の姿があった。隣にいる新八と神楽もどうしたらいいか困っている。

「じ…じゃあ俺ら屯所に帰るわ」

「じゃあな万事屋！」

「旦那ア、これから頑張ってください」

真選組の三人は逃げるように去っていった。

真選組がいなくなったのを確認して、隠れてた源外が出てきた。

「いや〜悪かったな銀の字。まあ金はちゃんと払うから勘弁してくれ」

源外が頭を掻きながら謝った。

だが、銀時は源外の言葉に反応しなかった。

「どうした銀の字？」

源外が尋ねた。

銀時は口を開いた。

「……じーさん」

「ん？」

「俺はどうすればいいんだ？」

「は？」

源外は首を傾げた。

銀時は外に向かつて、ゆっくり歩きながら呟く。

「どうすればいいの？フェイトにキスされた俺はどうすればいいの？フェイトに告白された俺はどうすればいいの？俺の心はどうすれ

「ばいいの？」

外に出て銀時は足を止めた。そして大きく息を吸い込み、

「教えてくれエエエ！バルディツシュウウウ！！！」

青空に向かって叫んだ。

新八達は力無く笑いながら、銀時の背中を見つめた。

雲一つない青空の下、銀時達はかぶき町に帰ってきた。

第一章 完

第二十五訓：離れ離れになっても絆は切れない（後書き）

ふう〜。やっと第一章が終わりました。いや〜長かったです。

次は第二章、A・S編となりますが、正直に言います。実はA・Sの内容をまだ知りません。無印しか観てないんです（汗）

なので更新が遅れると思います。すみません！幕間的な話も書くかもしれませんが。

それとこんな質問がありました。『次のA・S編で銀さんがメインメンバーから外されるなんてないですよね！？』。大丈夫です。銀さんがレギュラーから外される事は、絶対にありません。

第一章を読んでくれてありがとうございます！第二章も頑張りますので、これからもよろしくお願いします！

ありがとうございました！

第二十六訓：オマケがメインの時がある（前書き）

幕間的な『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第二十六訓。始まります。

第二十六訓：オマケがメインの時がある

ジュエルシードの事件から数日。銀時達は元の世界で平和な毎日を送っていた。平和というか、依頼が来なくてグータラな毎日に戻っていた。

瞬間移動装置は、まだ調整が完全でないのでフェイト達の世界には行けない。その代わり源外が送った無線機をフェイトが持っているので、それを使って連絡をとる事ができる。

そのフェイトは、銀時と沖田の無茶苦茶な弁護のお陰で無罪となったプレシアやアルフ達と一緒に楽しく暮らしている。

ちなみに銀時達みんなに黙って帰った後、眠りから起きたリンデイ達がフェイトとアルフから銀時達が帰った事を聞いた時は、黙って帰った事に激怒したとか。

*

万事屋。

「もしもし。銀時？」

テーブルの上に置いてある無線機から、フェイトの声が発せられた。銀時が無線機を取る。

「はい。こちら万事屋。どうぞ」

「あつ、銀時。今日も依頼はないの？」

フェイトは少し意地悪な事を言った。

「お前は俺をイジメて楽しいか？」

「あはは。ごめんね銀時。新八と神楽は？」

「神楽は定春と散歩で、新八は休みだ」

ソファアに座りながら銀時は答えた。

「この前、送ったビデオメール観た？」

「ああ、観た観た」

先ほども述べた通り、瞬間移動装置はまだ完全ではない。が、源外が調整して、軽い物資を送れるくらいはできるようになったのだ。フェイト達の方から連絡がきて、源外が装置を起動させてビデオメールをこっちに送らせた。

「元気でやってるみたいだな」

「うん。母さんやアルフ、クロノやリンディ提督と楽しくやってるよ」

無線機からフェイトの明るい声が聞こえてくる。

声を聞いて銀時は微笑んだ。

「あつ、銀時、アルフに代わるね」

そう言つてフェイトはアルフに無線機を渡した。

「銀時い！あんた何時になったらこっちに来るんだい！？」

アルフの大声が無線機から発せられた。

銀時は無線機を遠ざけて耳を塞いでる。

「だからア！まだ装置が完全じゃねえって何度言えばわかんんだ、犬っころ！」

「犬じゃない！いい加減『狼』って言つてよ！」

こんなやり取りもいつもの事。無線機で話す度に二人は、こんな感じなのだ。

「つーかお前！ビデオメールに映ってる時、肉ばっか食ってんじゃねーよ！」

「いいじゃないか！」

「よくねーよ！」

ギャーギャー騒ぎながら会話は続いた。

*

アルフとの賑やかで騒がしい会話を終えた銀時は、再びフェイトと話を始めた。

「囑託魔導師？」

銀時は片眉を上げた。

「うん。それになって管理局に協力しようと思ってるんだ」

「ふ〜ん」

「まあ、囑託魔導師になるには試験に合格しなくちゃいけないんだけどね」

笑いながらフェイトが言った。

「大丈夫なのか？」

「うん。筆記の方は母さんが教えてくれるし、実施はアルフと組手をやってるから」

「そうか。まあ頑張れよ」

「うん」

そこで会話が途切れる。

銀時は少し考えて、フェイトに”あの事”を聞く事にした。

「なあフェイト」

「何、銀時？」

「……お前…本気で俺の事、好きなの？」

こちらの世界に帰る直前に受けたフェイトの告白。

フェイトが、あんな冗談を言うとは思えないが一応聞いてみた。

「…うん。本気だよ」

フェイトは真剣に答えた。

マジでか？と銀時は心の中で呟いた。

「今はまだ子供だけど…いつか絶対、銀時を振り向かせてみせるから」

無線機での会話なので、フェイトの顔は見れないが、多分フェイトは笑顔で答えている。

「お前が本気だって事がよくわかったよ」

銀時はため息をついた。

「あつ、そろそろ試験の勉強の時間だから。またね銀時」

「ああ」

銀時が答えた後、無線機は切れた。

無線機をテーブルの上に置く。

「やれやれ」

銀時は天井を仰ぎながらため息をついた。

生徒全員

「教えて、銀八先生！」

フェイト

「ペンネーム『藍莉』さんからの質問です。『銀八先生に質問です！この中で一番人気あるのは誰だと思いますか？』」

銀八

「そうだなあ。やっぱり銀さんかな。フェイトはどうだ？」

フェイト

「わ…私も…銀時…かな」

銀八

「はい、それじゃあ『藍莉』さん。特に理由はないけど、廊下に立ってなさい」

フェイト

「じゃあ次の質問にいくね。ペンネーム『GI P P O』さん。『新八はなのはの事が好きみたいですが、なのはの方は新八の事をどう思っているんですか？新八には内緒の方向でぶっちゃけて下さい』」

銀八

「はい、新八には内緒でぶっちゃけます。ちょっと頼りになるお兄さん、という風に思ってます。恋愛対象としては全く見てません」

フェイト

「宴会でも新八に、スターライト・ブレイカー撃つたしね」

銀八

「最悪、新八はなのはに嫌われたかもな。はい、というわけで『GI P P O』さん。30分くらい廊下に立ってなさい」

フェイト

「続いている質問。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『S t S 編の敵メンバーであるナンバーズってチンクという子がいるんですが…ぶっちゃけ銀さんたちって名前聞いたら

「…おいおい、なんつー卑猥な名前してんだお前。チ コだなんて

よお。名付け親の顔が見てみたいぜ」…的なコメントを言いそうな予感がするんですけど、実際どうでしょうか？（汗）『……………チン……………！』」

銀八

「質問長っ！ああ、間違いなく言いますね。そんなコメントを言わない銀さんなんか銀さんじゃないですから。ってかフェイト。お前、大丈夫？顔真っ赤よ？」

フェイト

「う……………うん……………大丈夫……………」

銀八

「はい。フェイトの顔を真っ赤にさせた『ゲロ口軍曹』さん。ペンキで顔を赤くして、廊下に立ってなさい」

フェイト

「つ……………次の質問です。ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀さんはAS編ではどうやってなのは達の世界にくるのですか』」

銀八

「隠すほどの事でもないの、お答えしましょう。AS編でも源外の瞬間移動装置を使って、なのは達の世界に行きます。それじゃあ『ダークキバ』さん。みんなと仲良く廊下に立ってなさい」

フェイト

「続いては『ゲロ口軍曹』さん。あつ二回目ですね。『リリカルなのは系のSSって、たまにある意味リリカルの原作である』とら八こと』とらいあんぐるハート3』の設定を用いて、すずかちゃんや忍さんが

「夜の一族」という、ちょっと変わった(?)吸血鬼だったりする設定があつたりするんですけど、こちらのSSではどうでしょうか?あと、私すずかちゃんのファンなので、できれば彼女が活躍するお話が見てみたいんですけど…、その辺いかがでしょうか?(苦笑)さすがに『魔法使いになつてほしい』とまではいいませんので…(汗)』」

銀八

「長いー!!質問は短く要点をまとめてから送りなさい!!」

フェイト

「ぎ…銀八先生!せっかく質問を書いてくれたのに失礼だよ!」

銀八

「とういか『ゲロ口軍曹』さん。『リリカルなのは』の事もロクに知らなかったこの作者が『とら八』を知っていると違いますか?吸血鬼なんて、先生も作者も初耳だよコノヤロー。すずかちゃんの活躍ねえ…難しい所だなあ……。多分無理だな。ホント申し訳ありません」

フェイト

「最後の方、急に態度が低くなっちゃった」

銀八

「というワケで『ゲロ口軍曹』さん。すずかちゃんを大事に想いながら廊下に立ってなさい」

フェイト

「それでは本日最後の質問です」

銀八

「まだあるのか!？」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。この人も二回目だね。ありがとう。『銀さんがフェイトにキスされちゃったけどあれ実際フェイトはキスしてどんな感じでしたか』って……え?えええ!?!?!……これって……私への質問にもなってるない?」

銀八

「どうなんだフェイト?」

フェイト

「え……えっと……初めての感触で……その…………うまく答えられ

「ません！」

銀八

「じゃあ代わりにこの人の意見でも聞くか。特別ゲストどうぞ！」

銀時

「どうも。坂田銀時です」

フェイト

「ぎ…銀時!？」

銀八

「フェイトとのキスはどんな感じでしたか？」

銀時

「どんな感じって言われてもな。まあ悪くはなかったよ」

銀八

「ほう、まんざらでもねーみてえだな」

銀時

「おい。何ニヤけてんだコラ。俺はロリコンじゃねーぞ。いやマジで。読者が誤解したらどうすんだ」

銀八

「必死に否定する所が怪しいなあ」

銀時

「テメー。上は同じ『銀』だけど下は新八と同じ『八』じゃねーか
コラ」

銀八

「何だところの天然パーマ！」

銀時

「テメーも天然パーマだろーが！」

銀八

「お前ちよつと体育館裏こい」

銀時

「上等だ」

フェイト

「え…えっと…沢山の質問ありがとうございました！」

第二十七訓：人は答を求めて生きている

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さんからの質問です。『なのはってぶつちやけ銀さんのことどうおもっているんですか』」

銀八

「そつだなあ。まあ凄く頼りになるお兄さん、ぐらいだと思います。多分」

フェイト

「ハッキリしない答えですみません」

銀八

「いいんだよ。答えは答えなんだから。はい、『ダークキバ』さん。廊下に立ってなさい」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『ジョンスミス』さん。『質問なんですけど、ぶっちゃけ銀さんは、いつしょにお風呂入ったアルフと全裸をみてキスをした、フェイトどっちのほうがよかったですか』って…え？」

銀八

「そうだなあ。銀さんも大人ですからねえ。やっぱり裸ならアルフの方がいいでしょう。でも自分に好意を抱いてキスしてくれたフェイトもいいかなあ、なんて思ってると思います」

フェイト

「こんな質問を書いた『ジョンスミス』さん。廊下に立ってくださいー！」

銀八

「おっ？珍しくフェイトが、廊下に立ってなさいって言ったな。まっついいやな」

フェイト

「では次の質問です。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『もし定春がなのはやフェイトたちと初会合した場合、誰の頭を丸かじりしてそうでしょうか？少々気になります…』。頭を丸かじり!？」

銀八

「誰のっていうか、両方の頭を丸かじりすると思っぞ」

フェイト

「さ…定春ってそんなに怖いのか？」

銀八

「少々はしゃぎ過ぎるデカイ犬だ。というワケで、フェイトを怖がらせた『ゲロロ軍曹』さん。廊下に立ってなさい」

フェイト

「続いての質問。ペンネーム『ミュラ』さん。『質問です。銀さんのリリカルキャラへの好感度ランキングを教えてください』」

銀八

「まあダントツ一位はフェイトだろうな。宇治銀時丼を食した同志だし。二位は…アルフか？なんやかんやで仲良いからな。なのはの事は嫌いじゃないし、リンディも甘党だからな。クロノは微妙だな」

フェイト

「私、一位なんだ。やった！」

銀八

「まあこんな感じかな。それじゃあ『ミュラ』さん。自分でもランキングを想像しながら、廊下に立ってなさい」

フェイト

「最後の質問、『スーパーフライ』さん。『A・S』では、さっちゃんや九兵衛など、銀さん以外の『江戸』の住人が『海鳴』にきたりするんですか？ちなみに自分は九ちゃんの来訪を熱望します！」

銀八

「はい、お答えしましょう。まだ全然決まっています。ホント、ダラダラしてる作者で申し訳ありません」

フェイト

「ごめんね、『スーパーフライ』さん」

銀八

「後ついでにペンネーム『ユウスケ』さん。原作ではフェイトは料理がある程度できるみたいですが、この小説のフェイトも料理できると思ったら大間違いです。というわけで『ユウスケ』さん。『スーパーフライ』さんの代わりに廊下に立ってなさい」

フェイト

「予想以上に質問が多かったので、今回はここで一気に答えしました」

銀八

「沢山の質問ありがとう。でもあんまり多過ぎると、答えるの大変だから、まあちょこっとずつ質問してくれ。後、作者は今、A・Sを観てるので、第二章はもう少し待ってください」

フェイト

「では、今回はこの辺で」

銀八

「はいはい」

〈第二章〉第二十八訓：闇の書って名前からして物騒な感じがするよね

なのは達の世界。

6月4日。AM0:00。

海鳴市の中丘町。八神家で、ある魔導書が起動した。一人の少女の前で本は輝きを放ち、少女の中から小さな光の玉が出て、本に触れて強い光を放った。

光が収まると、少女の前に、見知らぬ四人の男女がいた。女性三人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

「『闇の書』の起動。確認しました」

ピンク色の髪でポニテールの女性が言った。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます」
次に金髪の女性が言う。

「夜天の主の下に集いし雲」

白い髪で獣の耳と尻尾を付けた逞しい肉体の男性が言う。

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みにした女の子が言った。

四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。

しかし、いつまで経っても命令が来ない。焦れた赤い三つ編みの女の子が、少女に近寄ってみた。

（ねえ。ちよつとちよつと）

女の子は念話で仲間と話し掛けた。

（ヴィータちゃん、静かに）

金髪の女性が、赤い三つ編みの女の子『ヴィータ』に注意する。

（でもさあ）

（黙っている。主の前で無礼は許されん）

ポニテールの女性もヴィータを注意する。

（無礼ってかさあコイツ…）

ヴィータは倒れてる少女の顔を覗き込んだ。

(気絶してるように見えただけど)

「ええっ!？」

気絶した少女の名は、八神はやて。

両親を早くに亡くして、一人暮らしをしている足が不自由な少女だ。

突然、目の前に得体の知れない人達が現れて、ビックリして気絶してしまったのである。

守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

*

江戸のかぶき町。

そこに何でもやる万事屋があった。部屋の中で三人の人物がテレビを見ている。

死んだ魚のような目をした銀髪の天然パーマの男、坂田銀時。

地味な眼鏡男、志村新八。

宇宙最強の戦闘種族『夜兎族』の一人、神楽。

三人が見ているのは『魔法少女リリカルなのは無印』のDVDである。見終わって、新八はDVDをデッキから取り出した。

「本当ならプレシアさんとフェイトちゃんは、解り合えないまま別れちゃったんですね」

新八が言った。

「俺達が介入した事で、向こうの世界の未来が変わったんだな」

指で耳の穴をほじりながら、銀時が言った。

「でもやっぱり、フェイトとプレシアは一緒にいる方がいいアル」

フェイトから送られた写真を見ながら、神楽が言った。

そこには、笑顔のフェイトとプレシアとアルフの姿が写っていた。

「そっだな」

銀時は小さく頷いた。

*

八神家。

「そっか。この子が闇の書つてもんなんやね」

車椅子に座り、手に闇の書を持ちながらはやてが言った。

「はい」

ポニテールの女性が答える。

「物心つく頃には柵にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど……」

言いながら車椅子を動かして、柵の前に移動する。

「覚醒の時と眠ってる間に、闇の書の声を聞きましたか？」

金髪の女性が尋ねた。

「ん〜私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……あ、あった」

答えながら、はやては探し物を見つけた。

「わかった事が一つある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、キッチリ面倒見なアカンゆうことや」

「え？」

はやての言葉に、ポニテールの女性がポカンとなる。

「幸い住むトコはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服、買ってくるからサイズ測らせてな」

そう言っではやては、手に持つてるメジャーを伸ばした。

はやての少しズレた考えに、守護騎士達は呆然とする。

「ほんならまず……えっと……」

ポニテールの女性を見つめながら、はやてが悩む。

「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナムと申します」

ポニテールの女性、シグナムが自己紹介した。

「私は『鉄槌の騎士』ヴィータ」

赤い三つ編みの女の子、ヴィータも自己紹介した。

「私は『湖の騎士』シャマルです」

金髪の女性、シャマルがヴィータに続いて自己紹介した。

「『盾の守護獣』ザフィーラ」

最後に獣の耳と尻尾がある男性、ザフィーラが名乗った。

「ほんなら、シグナムからサイズ測ろうか」

笑顔ではやてが言う。

はやての、これまでの主とずいぶん違った接し方にシグナム達は戸惑ったが、悪い気はしなかった。

この時、守護騎士も、はやても、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る強大な『悪』の存在を。

その『悪』の鼓動に、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る『悪』は、静かに時を待った。自分が復活する時を。

*

時は流れ。12月1日。

時空管理局艦船アースラ内。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

「ん〜予定は順調ね」

砂糖とミルクの入ったお茶を飲みながら、リンディ・ハラオウンは頷いた。

「やっと私達も一休みできますね」

エイミイ・リミエツタがやってきた。

「そうねえ」

「レテイ提督の方は大変みたいですけど…」

「一級搜索指定のロストロギアで、搜索担当班は大変みたいね」
リンディはため息をついた。

*

アースラの戦闘訓練室。

フェイト・テスタロッサとアルフ、クロノ・ハラオウンの三人が戦闘訓練を終えた。

「はあく疲れたあく」

背伸びをしながらアルフが訓練室を出た。その後ろをフェイトとクロノが歩く。

「アルフ、クロノ。お疲れ様」

「フェイトもお疲れ」

「ああ、お疲れ」

三人は汗をタオルで拭きながら廊下を歩いた。

「じゃあ僕はシャワーを浴びてくるよ」

「うん」

フェイト達と分かれて、クロノはシャワー室へ向かった。

「フェイト、アルフ」

廊下の向こうから、プレシア・テスタロッサが二人に声をかけた。

「母さん」

二人はプレシアに駆け寄った。

「二人ともお疲れ様。おやつ作ったんだけど、食べる？」

「うん！」

「わくわく！」

二人は喜びながら、プレシアと一緒に部屋に向かった。

部屋に入った三人は、おやつを食べながら話をしていた。

「そういえば、もう少しで銀時がこっちの世界に来れるのよね？」

お茶を飲みながらプレシアが言った。

「本当かい!？」

アルフが嬉しさのあまり席を立つ。

「うん。装置の調整がもう少しで完成するって、源外さんが言ったよ」

フェイトも嬉しそうな表情をしている。

「あく！早く銀時に会いたいなあ！」

アルフは、銀時との再会を楽しみにしながら、バクバクおやつを食

べる。

「アルフ、一人で食べ過ぎよ」

「は〜い」

プレシアに注意されて、アルフは少しへこんだ。

そんな様子を見ながら、フェイトは微笑んだ。

（私も…早く会いたいな）

一枚の写真を手に取って見る。

銀時達から送られた写真。写っているのは万事屋の三人。

*

12月2日。

海鳴市の市街地。

闇の書を巡る戦いが始まる。

〈第二章〉第二十八訓：闇の書って名前からして物騒な感じがするよね（後書き

こんにちは、こんばんは。

始まつちやいました、第二章。多分、第一章の時よりグダグダになると思います（汗）

こんなグダグダな作品ですが、温かい目で見守ってください。では、これからもよろしくお願い致します！

第二十九訓：ピンチの時にカツコよく駆け付けるのが主人公（前書き）

銀時「銀魂」

フェイト「魔法少女リリカルなのは」

銀時&フェイト「魔法少女と銀髪の侍！第二章もよろしくお願い致します！」

第二十九訓：ピンチの時にカツコよく駆け付けるのが主人公

12月2日。

海鳴市の市街地。

高町なのはは、謎の襲撃者に襲われていた。

襲撃者はヴィータ。赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている。

なのはもバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。

ヴィータは鉄球を上に向けて、なのはに向かった鉄球をハンマーで打った。

障壁を張ってなのはは、鉄球を防いだ。同時に二つの桜色の魔力弾を出した。

「どらああああー!!」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。

なのはは横に飛んで、ハンマーをかわした。

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど…!!」

空中で止まって、ヴィータに向き直る。

「どこの子!? 一体なんでこんな事するの!?!」

大きな声でヴィータに理由を尋ねる。

ヴィータは黙って指の間に、新たな鉄球を出す。

「教えてくれなきゃ、わからないってばア!!」

そう言っただけなのはは、先ほど出した二つの魔力弾『ディバインシューター』を操作して、ヴィータの背中目掛けて放った。

ヴィータは一発目を避けて、二発目を障壁で防いだ。

「このやるおおお!!」

ヴィータは怒りながらハンマーを振り上げて、なのはに襲い掛かる。振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわした。レイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

「話を!」

レイジングハートを構える。

「聞いてつてばアー!!」

ヴィータに向かってディバインバスターを放つ。ディバインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。

落ちていく帽子を見ながらヴィータは怒り、なのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろいだ。

ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

「グラーファイゼン！カートリッジロード!!」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立てて、ハンマーの形が変わった。

「え…え〜!?!」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。

ハンマーは片方の先の部分が尖って、もう片方の面は噴射口みみたいだった。

「ラケーテン!」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する。

回転の勢いを使って、なのはに襲い掛かる。なのははすぐに障壁を展開するが、簡単に破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

「ハンマー!!!」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ばされる。

「ああああ!!」

窓ガラスを破って、ビルの中に入った。

埃や煙が立ち込める中、なのはは咳をしながら立ち上がった。

「でええええい!!」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。再び障壁を張って防ぐ。

「ぶち抜けエエエ!!」

「了解」

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えると、障壁は破られた。バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に叩きつけられる。

ヴィータがなのはに近づく。

なのはは、なんとか傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。なのはの前でヴィータはハンマーを振り上げる。

（こんなので…終わり？嫌だ……ユーノ君…クロノ君…銀さん…フェイトちゃん…！）

なのはは固く目を閉じた。

直後、金属同士がぶつかる音が前で響いた。

なのはは、ゆっくりと目を開けて恐る恐る前を見た。

そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

「ごめんなのは、遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

「ユーノ、君…」

隣にいたのは、ユーノ・スクライアだった。

「く…！仲間か!？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

「友達だ」

バルディッシュを鎌に変形させ、構えながらフェイトが答えた。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだデメエ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

一歩前に踏み出す。

「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

「誰がするかよ！」
ヴィータはビルの外へ出た。
「ユーノ、なのはをお願い！」
「うん！」
すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。
残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。

*

空中でヴィータとフェイトが対峙する。
「バルディッシュ」
フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。
ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。
フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。その時、アルフがヴィータに拳を放った。ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。
フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。十数回打ち合って、フェイトが一旦離れる。
その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。
「く…！」
ヴィータが歯を食いしばる。
「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」
ヴィータにバルディッシュを向けながら言った。
その時、突如フェイトの前に剣を持ったシグナムが現れた。剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。
「シグナム」
ヴィータが呟いた。
「おおおおお！！！」

別方向からザフィーラがやってきて、アルフに蹴りを放った。

「ああっ！」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

「レヴァンティン。カートリッジモード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こす。

直後、剣が炎に包まれた。

「紫電一閃！！！」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。

バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真つ二つに斬れてしまった。

シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。フェイトはビルの屋上に叩きつけられた。

「フェイト！！！」

アルフがフェイトの元へ行こうとする。

が、ザフィーラが行く手を阻む。

*

アースラ内。

結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

「術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない」

「そうなんだよ」

砂嵐の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミーは焦りの表情を浮かべる。

二人の後ろで、プレシアが心配そうに画面を見つめてる。現地の様子がわからなくて、プレシアの不安は大きくなる一方だった。

「フェイト…アルフ…」

プレシアは意を決して、黒い無線機を取り出した。

（まだ無理かもしれないけど……あの子達を助けて！）

無線機のスイッチを入れた。

*

シグナムはヴィータの前に浮かんだ。

「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

「うっせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか。それは邪魔したな」

そう言っただけでシグナムは、ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わーってるよー！」

ヴィータはそっぽを向いてしまう。

「ほら。落とし物だ」

シグナムはヴィータの頭に、先ほど落ちた帽子をかぶせた。ちなみに破損はシグナムが直してある。

「…ありがとう。シグナム」

ヴィータは俯きながら礼を言った。

ユーノも加わって、状況は三対三になった。

シグナムは、フェイトが落ちた屋上に降り立つ。倒れてるフェイトに近づいた。

「く…！」

フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。

「じっとしている。抵抗しなければ、命までは取らない」
そう言っただけで剣を上に掲げる。

「だ…誰が…！」

足に力を入れて立ち上がろうとする。

「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

シグナムは剣を振り下ろす。

フェイトは目を閉じた。頭に浮かんだのは一人の男。

(銀時！)

とても強く、自分が好きになった男の名を心の中で叫んだ。
直後、フェイトとシグナムの間に光が出現した。

「何っ!?!」

「えっ!?!」

驚いたシグナムは剣を止め、フェイトは目を開いて光を見た。

そして光の中から、一本の木刀が現れ、シグナムに向かって突きを放った。

「くっ!」

シグナムは剣で木刀の突きを防ぎ、光から離れた。

やがて光が収まり、一人の男が姿を現した。

フェイトは目を見開いて驚いた。フェイトはこの男を知っている。

銀髪の天然パーマ、白い着物、『洞爺湖』の文字が入ってる木刀。

「よオ」

男はフェイトに振り返った。

「久しぶりだな」

笑みを浮かべながら、フェイトを見た。

「ぎ…」

フェイトの顔が自然と笑顔になった。

「銀時っ!?!」

大きな声で銀時の名を呼んだ。

「まっ、再会を喜ぶのは後にしよーや」

銀時はシグナムに向き直った。

「貴様…何者だ?」

銀時に剣を向けながら、シグナムは鋭い眼で尋ねた。

「なアに」

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「ただの通りすがりの侍よ」

第三十訓：戦いの場では常に緊張感を持って（前書き）

銀時「ついに銀魂キャラが闇の書を巡る戦いに参戦！」

フェイト「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十訓。始まります」

第三十訓：戦いの場では常に緊張感を持って

空中ではザフィーラとアルフが戦っていた。

「ちっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。

その時、

「わんっ!!！」

上空から犬の鳴き声のようなものが聞こえた。

「えっ!?!」

二人は思わず上を見た。

巨大な白い犬のような生き物が、ザフィーラに向かって上空から突進…というか落ちてきた。

「なっ!?!」

最初は驚いたが、すぐにザフィーラは障壁を張って防御した。白い犬はザフィーラの障壁にぶつかり、ザフィーラと白い犬はそのまま真下にあるビルの上に着地した。

「な…何だいあの犬!?!」

アルフが驚いていると、

「定春ウウウ!!！」

また上空から声が聞こえた。

しかし、今度のは聞き覚えのある声。

アルフはまた上を見た。そこにいたのは、傘を持った赤いチャイナ服を着た少女だった。

「神楽!?!」

アルフは少女の名を叫んだ。

「アルフ…!久しぶりアル…!!！」

そのまま神楽は、定春とザフィーラが落ちた屋上に着地した。

「定春…!!」

「わんっ!!」

神楽の声を聞いて、巨大な白い犬『定春』が駆け寄ってきた。

「定春！無事でよかったアル！」

神楽は定春を抱きしめた。

アルフも屋上に降り立った。

「定春つて……変わった名前だねえ……つてか神楽のペットかい？」

「可愛いでしょ？」

神楽は定春の頭を撫でる。

その時、ザフィーラが起き上がった。

「定春、アルフ、下がってるアル」

ザフィーラを見て、神楽の目つきが変わった。

「ぬっ」

ザフィーラも神楽を睨みつける。

「カモ〜ン。ガキだと思ってナメてたら痛い目に遭うアルヨ」

*

ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

「ぶっ潰せエエエ！！」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

「そこまでだ」

上空から声が聞こえた。

「えっ！？」

ヴィータは上を見た。

上空から、刀を持った人物がヴィータに迫っていた。

「くっ！」

ヴィータはハンマーで、振り下ろされる刀を防いだ。

そのまま二人は屋上に着地した。刀を持った人物は一旦ヴィータから離れた。

「誰だデメエ！？」

突然の乱入者にヴィータは怒鳴った。

乱入者は手に刀を持ち、黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。

「柳生九兵衛だ」
やぎゅうきむつへえ

隻眼でヴィータを見据えながら九兵衛が名乗った。

「柳生：九兵衛？」

屋上の真上にいるユーノは、首を傾げた。

「若アアア！！」

すると一人の男が九兵衛と同じように、突然屋上の真上に現れ、屋上に着地した。

「大丈夫ですか、若！？お怪我はありませんか！？」

長髪で目が細めで物腰柔らかそうな男、東城歩が九兵衛に駆け寄った。

「心配するな。怪我はない」

「そうですか。では……」

九兵衛の返事に安心した東城は、どこからともなく鎧を取り出した。「コレを着てください。雨が降りそうな天気なので」

と、東城が九兵衛に鎧を着させようとした瞬間、九兵衛は東城の頭に手刀を叩き込んだ。

*

なのはは、屋上でみんなの様子を見ていた。

「銀さん！神楽ちゃん！」

銀時達の姿を確認して、なのはも明るい表情になった。

他にも巨大な白い犬や、見たことがない二人組がいる。

犬の方は神楽ちゃんになついているから、神楽ちゃんのペットかな？あの二人組は服装が銀さん達に似てるから、やっぱり銀さん達の知り合いなのかな？

と、なのはが考えていると、

「なのはちゃん」

後ろから名前を呼ばれた。

なのは振り返って後ろを見た。そこには志村新八がいた。

「新八さん！」

「久しぶり、なのはちゃん」

なのはは笑顔で新八の名を呼び、新八も笑顔で応える。

ふと、なのはは新八の隣にいる女性に気付いた。

「紹介するね。僕の姉上の志村妙」

妙の方を見ながら、新八はなのはに紹介した。

「初めまして。志村妙です」

ニツコリ笑いながら、妙が自己紹介した。

「は…初めまして。高町なのはです」

ペコリと頭を下げながら、なのはも自己紹介した。

「なんだか大変な事になってるみたいだね」

状況を見ながら新八が呟いた。

「でも僕達が来たからには、もう大丈夫だよ！」

なのはを安心させるために、新八が力強く言った。

「はい！」

新八の言葉に、なのはは笑顔で頷いた。

*

神楽VSザフィーラ。

「ふんぬお おおお！！」

「うおおお おおお！！」

雄叫びを上げながら、互いに拳を放つ。

二人の拳は激突し、腕に衝撃が走る。すかさず神楽は蹴りを放つ。

ザフィーラは障壁を張って防御する。

「ぬあああああ！！」

神楽は障壁に拳の連打を浴びせる。

激しい音を立てながら、障壁に拳を叩き込む。やがてビシッビシッ

と障壁にヒビが入る。

「何っ!？」

ザフィーラは動揺した。

「ぬおおおお!!」

神楽は、更に力を込めた右拳を放った。

拳は障壁を粉々に砕き、ザフィーラに届いた。

「ぐっ!!」

なんとか両腕で神楽の拳を防御した。

(何だこの少女の力は!？明らかに人間の力を超えている!)

ザフィーラがそんな事を考えている間にも、神楽はザフィーラに迫る。

拳と蹴りの打ち合いになった。

(もはや人とは思わん!!)

ザフィーラは目を鋭くして神楽を見た。

神楽の腹に蹴りを叩き込む。腹を蹴られた神楽は口から涎を吐くが、すぐに左手でザフィーラの足を掴み、右の肘を足に叩き込んだ。

「ぐああああ!!」

肘で足をやられたザフィーラは悲鳴を上げた。

だがいつまでも痛んでる場合ではない。ザフィーラは神楽の顔に拳を振るった。直後、ザフィーラの顎を衝撃が襲った。殴られると同時に、神楽がザフィーラの顎に蹴りを入れたのだ。

「ぐあっ!!」

ザフィーラは後方に吹き飛んだ。

神楽はペツと血を吐き捨てた。

「ガキは家でプロレスごっこでもやってな」

倒れたザフィーラを見つめながら、神楽が言った。

「ぐ…!!」

口から流れた血を拭きながら、ザフィーラが立ち上がった。

「か…神楽…やっぱり強い!」

後ろで戦いを見ているアルフは、改めて神楽の実力に驚いた。

「わんっ！」

アルフの隣で定春は、神楽にエールを送っていた。

*

「うおおおおおー!!」

ヴィータが叫びながら、グラーフアイゼンを振り下ろす。

それを九兵衛は刀で『受ける』のではなく『受け流して』グラーフアイゼンを捌き、ヴィータに向かって剣撃を放つ。

「くっっ！」

ヴィータは紙一重で剣撃をかわす。

(まただ!)

一旦、九兵衛から離れる。

(コイツ…力を力で受けるんじゃないで、私の力を受け流して攻撃してきやがる!)

九兵衛を睨みながら、グラーフアイゼンを構える。

「なら、これでどうだ！」

鉄球を四つだして、九兵衛に向かって打ち放った。

それを九兵衛は、無駄のない小さな動作で素早く鉄球をかわす。だが追尾型の鉄球は、また九兵衛に迫る。避けても無駄だと判断した九兵衛は動きを止めた。

(諦めたか?)

ヴィータがそう思い、鉄球が九兵衛に当たる直前、

「はあっ!!」

九兵衛は神速の速さで刀を振るった。

四つの鉄球は、それぞれ真っ二つに斬れた。

「う…嘘だろ!？」

ヴィータは驚愕の表情を浮かべた。

「おおっ!さすがは若！」

九兵衛の戦いを見守っている東城が声を上げた。

九兵衛はヴィータに向き直った。
「まだ続けるか？」

*

シグナムは、屋上で銀時と対峙していた。

（一体何者だ、この男は？）

剣を構えながら、シグナムは銀時を見つめた。

（魔力は全く感じない…魔導師ではない……だが…）

剣を握る手に力を入れる。

（この男…強い！）

鋭い眼光を銀時にぶつける。

対する銀時は、緊張した様子もなくシグナムを見ていた。

「おいおい。んな怖い顔してつと、せつかくの綺麗な顔が台無しだぜ？」

「なっ!？」

銀時の言葉に、シグナムは少し動揺する。

銀時の後ろにいるフェイトは、少しムツとした顔になる。

「どうだいネーちゃん。んな物騒な剣振り回さねーで、俺の股間のけ…!」

と、銀時が言いかけた所で、フェイトが無表情で銀時の後頭部に、バルディッシュの魔力の刃を刺した。

「ぎゃあああああ!」

後頭部を押さえながら、銀時が悲鳴を上げた。

「お…お前!何すんだコノヤロー!」
涙を流しながらフェイトに怒鳴った。

ブイツとフェイトは無言でそっぽを向いた。

「おいコラ。助けてやったのに、そりゃないんじゃないの?銀さん泣くぞ?」

銀時が、そっぽを向いてるフェイトに話し掛ける。

が、フェイトはそれを無視。

「ん…コホンツ！」

二人の様子を見ていたシグナムが、わざとらしく大きな咳をした。そこで二人はようやくシグナムに向き直った。

「あ…悪い」

と、銀時が謝った。

気を取り直して、シグナムが剣を構える。

「貴様が何者か知らんが、邪魔をするなら容赦はしない」
殺気をぶつけながらシグナムが言った。

「下がってる、フェイト」

「うん。銀時…気をつけて」

「後でチヨコレートパフェ奢ってもらうからな」
フェイトは後ろに下がり、銀時は木刀を構えた。

銀時VSシグナム。

侍と騎士の対決が始まる。

生徒全員

「教えて、銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『FOTUTE』さんからの質問です。『1この小説では銀魂の中でなのは世界はアニメということになっておりますが銀さんたちが活躍したことによって新八とトツシーが持ってたD VDのパッケージが変わったりしないのですか？2第二期から3期にかけてなのは世界では数年たっておりますが銀さんたちはどうなるのでしょうか？3第一部では銀さんがフェイト側についてたことによってパワーバランスが拮抗しましたがA'sではよろずやメンバーが全員なのは側に立つためヴォルケンリッター大ピンチですねできれば桂あたり（ある程度強くてギャグの塊のような人）をヴォルケンリッター側にお願ひします』」

銀八

「質問多いな…まあお答えしましょう。質問1の答。パッケージが変わったりはしません。質問2の答。先の事は教えられません。質問3の答。これ質問じゃなくてリクエストだよ？ここリクエスト受け付ける所じゃないから。その辺勘違いしないように。桂？さあねえ。まあ誰かしら出るかもしれませぬ。それじゃあ『FOTUTE』さん。廊下に立ってなさい」

フェイト

「次の質問。『ダークキバ』さん。『銀さんが白夜叉ってフェイトたちにしられてなかったけどA・S編でしることになるのですか』」

銀八

「はい、お答えしましょう。フェイト達が白夜叉の事を知るかどうかは、わかりません。読んでからの楽しみです」

フェイト

「『ダークキバ』さんから二つ目の質問。『銀さんって竜宮編ではおじいちゃんになってて実際は・30000Kでしたけど実際は何Kですか自分的には2500Kだとおものですが』」

銀八

「そうだな。何Kだろうな。先生にもわからねーな。まあ多分、老人で・30000Kだから…その逆で30000Kとか？いやもう先生にもわかりません！後、・30000Kって銀さんと桂を合わせた数字だから！というわけで先生を困らせた『ダークキバ』さん！廊下に立ってなさい！」

フェイト

「次はペンネーム『ゲロ口軍曹』さんからの質問。『今回のお話にて、銀さんたちが本来の無印編のなのを見た描写がありましたね。前から思ってたのですけど、銀さんたちの世界でのリリカルなのはって、もうStS編とかまで出ているのでしょうか？それとも、まだ無印かA・S編の辺りでしょうか…？』。『ゲロ口軍曹』さん、

いつも質問ありがとう」

銀八

「質問の答ですが、銀さんの世界でもDVDはS t S編まで出ています。ですが、銀さん達はまだ無印しか観ていません。それじゃあ『ゲロ口軍曹』さん、廊下に立ってなさい」

フェイト

「本日最後の質問。ペンネーム『烈火竜』さんから。『近藤さんは第二章ではなのは達やヴォルケンリッターの女性達の前で素っ裸になっ
てしまっ予定はあるのでしょうか？』えっ？近藤さんって裸になるの！？」

銀八

「はい、お答えしましょう。ぶっちゃけますが、第二章に真選組の三人が登場する予定は今のところありません。なのでゴリラの素っ裸はありません」

フェイト

「よかった…」

銀八

「と、油断していたら出てくるかもしれない」

フェイト

「ええっ!!?」

銀八

「まあ結局わからないという事で。はい、『烈火竜』さん。廊下に立ってなさい」

第三十一訓：最近の漫画やアニメは剣にいろんな機能を付けすぎ（前書き）

銀時「俺も木刀型のデバイスとか持とうかなあ……」

フェイト「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十一訓。始まり
ます」

第三十一訓・最近の漫画やアニメは剣にいろんな機能を付けすぎ

ビルの屋上で、剣がぶつかり合う音が響く。

木刀『洞爺湖』とアームドデバイス『レヴァンティン』が火花を散らせてぶつかる。

「く……！」

シグナムは苦戦していた。

（何だ？この男の剣は！？）

銀時と剣を交えて思った。

この男の剣には、決まった『型』がない。まるで雲の如く変化する剣。

（正規の剣術ではない！我流か！？）

今まで出会った事がない剣筋に、シグナムは苦戦していた。

剣筋が読み難いだけでなく、この男自身の身体能力も高い。力と速さ、反応速度が並の人間を大きく超えている。魔法を使わず、純粋な剣の腕のみでベルカの騎士の私と剣を交えている。

（こんな人間は初めてだ！）

剣の打ち合いは激しさを増していく。

「うおおおお！！！」

銀時が両手で持ちながら、木刀を上段から振り下ろした。

「くっ！」

シグナムは剣を頭上に構えて、木刀を防いだ。

銀時は、素早く木刀を引いて今度は右手に持ち替えて、横薙ぎの一撃を放った。シグナムも反応して剣で木刀を防ぐ。

戦況はシグナムが押され始めていた。

（くっ！やむを得ん！）

シグナムは一旦、銀時から離れて距離をとった。

「レヴァンティン！カートリッジロード……！」

レヴァンティンが撃鉄を起こした。

直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

「な……!?」

それを見た銀時は、驚いた顔をする。

「紫電一閃!!!」

高速で銀時に接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。

振り下ろされたレヴァンティンによって床が砕け、辺りに煙が立ち込めた。

「銀時!!!」

下がって戦いを見守っていたフェイトが叫んだ。

レヴァンティンの炎が消えた。シグナムは悲痛な顔で煙を見つめた。

(…殺すつもりはなかったが…コレを使わなければ、私がやられていたかもしれん)

シグナムがそう思った直後、

「おい」

煙の中から声が聞こえた。

「!!!」

シグナムは目を見開いて煙を見た。

煙は晴れていき、中から服を埃だらけにし、頭から少し血を流した銀時の姿が現れた。

「危ねーな。当たったらどうすんだコノヤロー」

いつもと変わらぬ口調で銀時が言った。

シグナムとフェイトは驚愕した。いや、一番驚いているのは、やはり技を放ったシグナムだった。

(ば…馬鹿な!!!紫電一閃を初見でかわした!!!?)

シグナムは驚愕を隠せなかった。

今までこの『紫電一閃』を初見でかわされた事は一度もない。

(この男の実力…甘く見ていたワケではないが……!)

再び銀時から距離とって、シグナムは剣を構え直した。

だが、さすがに今度は銀時もシグナムを追って距離を縮めた。

銀時が横薙ぎに木刀を振るうと、シグナムは上に飛んで避けた。

「！」

銀時は、空に飛んだシグナムを見上げた。

「我らは負けるワケにはいかないのだ！レヴァンティン！！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シユランゲフォルム』となった。

「おいイイイ！ちょっと待てお前！ソレもう『剣』じゃねーだろ！別の武器だろ！！」

シユランゲフォルムを見て銀時が叫んだ。

シグナムは構わず連結刃で銀時を攻撃した。

「ちっ！」

銀時は横に跳んで刃をかわした。

連結刃は蛇のように動き、銀時を翻弄する。

シグナムは連結刃の刃に紫色の炎を纏わせた。

「…すまない」

シグナムは小さな声で、銀時に謝罪をした。

そして炎を纏った連結刃を操る。

「飛竜一閃！！！！」

炎を纏った連結刃を銀時に放った。

屋上は大爆発を起こした。

「シグナム！？」

周りで戦ってる人達の意識が、シグナム達が戦ってるビルに向いた。ビルの屋上には大きな穴が空き、中から煙が立ち上る。

「ぎ…銀時…？」

フェイトはゆっくりと穴に近づいた。

銀時が負けた？死んだ？

フェイトの目に涙が浮かんだ。

「銀時イイイ！！」

フェイトの叫び声が響いた。

空中に浮いてるシグナムは、肩で息をしていた。

（銀髪の男…せめて倒す前に、お前の名を知りたかった……）

シグナムは静かに目を閉じた。

そしてシユランゲフォルムを解除しようとするが、

「えっ？」

何かに引っ掛かっているのか、連結刃がピンツと真っ直ぐに張って
いて戻らない。

(引っ掛かる？一体何に……)

シグナムがそう考えた時、

「オイ…姉ちゃん」

下から声が聞こえた。

シグナムは額から汗を流した。ゆっくりと声がした方……屋上に出
来た穴を見た。

声を聞いたフェイトも穴を見た。

煙が晴れて、屋上の下の階にいる一人の男が姿を現した。

「刃物遊びは終わりだコノヤロー」

連結刃を木刀に絡め、両手で木刀を上段に構えている銀時が立っ
ていた。

右肩には連結刃でやられた傷があった。

「銀時！！」

「な…！？」

フェイトは嬉しさを銀時の名を呼び、シグナムは目を見開いて驚愕
した。

「悪いな。テメーらにも譲れねーモンがあるみてえだが…」

木刀を持つ両腕に力を入れる。

「俺にも譲れねーモンがあるんだアアア！！」

叫びながら銀時は、思いつき木刀を振り下ろした。

「うわあっ！！」

レヴァンティンを持つてるシグナムは、引っ張られて屋上に叩きつ
けられた。

床は砕け、シグナムも銀時がいる階に落ちた。銀時は絡めた連結刃
を解いた。

「くっ！」

シグナムは立ち上がって、シュランゲフォームを解除し、元の長剣に戻した。

「いいか…テメーらがこの世界で何しようが、どうでもいいし俺の知った事じゃねエ」

木刀を突きつけながら、シグナムに言った。

「だが俺のこの剣。コイツが届く範囲は、俺の国だ」
鋭い眼光をシグナムにぶつける。

「無粋に入ってきて、俺の大事なモンを傷つける奴ア」
両手で木刀を握って構える。

シグナムも刀身を炎で包んで構える。

フェイトは屋上から戦いを見守る。

「魔導師だろうが、騎士だろうが…ロストロギアだろうが！」

二人は同時に地を蹴って動いた。

「ブツた斬る！！！」

すれ違い様に二本の刃が振り下るされた。

二人の動きがピタリと止まった。

わずか二、三秒の沈黙の後、

「…無念」

シグナムが床に倒れた。

銀時は木刀を腰に差した。

「銀時！！！」

フェイトが銀時に駆け寄った。

「銀時！大丈夫！？」

「ああ。心配いらねーよ」

そう言っつて銀時は、フェイトの頭に手を乗せた。

*

「ん…」

シグナムは意識を取り戻した。うつすらと目を開ける。

「あ…私は……」

ゆっくりと体を起こした。

「よオ」

声をかけられて見ると、銀時とフェイトがすぐ側に座っていた。

「き…貴様ら…!？」

シグナムはすぐに立ち上がるつもりだったが、

「ぐっ…!」

銀時にやられた傷が痛んで、立てなかった。

「おいおい。急に立ち上がるうとすんじゃねーよ」

そう言つて銀時は、シグナムに手を差し出した。

「え…?」

シグナムは呆然となつて、差し出された手を見た。

「ほら。さつさと掴みな」

「あ…ああ」

戸惑いながらも、シグナムは銀時の手を掴んで立ち上がった。

「やれやれ。お前のせいで服がボロボロだぜ」

服を叩きながら銀時が呟いた。

「…魔法を使わず、剣の腕だけで私を倒すとは…強いな」

「なアに。アンタも強かつたぜ」

シグナムと銀時は、互いに笑みを浮かべた。

「ベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナム。

貴公の名は？」

「俺は銀時。坂田銀時だ」

「銀時か…魔導師の方の名は？」

シグナムはフェイトに顔を向けた。

「時空管理局囑託魔導師。フェイト・テストロッサ」

「テストロッサ…二人の名前、しかと覚えた」

互いに自己紹介をした。

先ほどまでの緊張感はなくなっていた。

「シグナム。貴女達の目的を教えてくださいませんか？」
フェイトが真剣な表情で尋ねた。

「…すまないが、それは言えない」
シグナムも表情を険しくして答えた。

「おいおい。いきなり襲ってきて、そりゃないんじゃないの？」
と、銀時がシグナムに近づこうと歩き出した時、

「あ」
瓦礫につまづいてしまう。

グラついた銀時は、そのまま顔をシグナムの胸の谷間に埋めた。ちなみにシグナムの胸は結構デカイ。

「なっ！！？」
シグナムと銀時の後ろにいるフェイトは、顔を赤くした。

「お…おおっ！！？」
銀時も冷静さを失い、思わずシグナムの豊満な胸を掴んでしまう。

（け…結構デケーな…それに柔らかけ……ってか何この O L O V
E 的展開？）

胸を揉みながら銀時は思った。
その時、凄まじい殺気を感じた。銀時は恐る恐る、もう冷汗をダラ

ダラ流しながら顔を上げた。
顔を真っ赤にしたシグナムが、殺気を放ちながら銀時を睨んでいた。

「いや…ちょ待てよ……まずは話し合おう…」
後退りながら銀時が言う。

すると今度は背後から殺気を感じた。誰の殺気かはすぐにわかった。
一応、銀時は後ろを振り返った。

そこには、シグナムと同じく顔を真っ赤にして、殺気を放ちながら
両手でバルディッシュを構えるフェイトがいた。

「いや…お前これアレだよ？わざとじゃないから…事故だから…」
二人の鬼に挟まれて、銀時は生きた心地がしなかった。

「…テストロツサ。準備はいいか？」
「…はい、シグナム」

二人とも攻撃態勢に入る。

「おい…何する気？ちよタイム…」

左右に首を動かしながら、銀時は必死に助かる方法を考える。だが、時すでに遅し。

「紫電一閃！！」

「サンダースマッシュャー！！」

二人の魔法攻撃が銀時に襲い掛かった。

「あああああ！！」

銀時は悲鳴を上げながら、攻撃を受けた。

*

二人の攻撃を受けた銀時は、黒焦げになった。

ちなみにシグナムとフェイトは、まだご機嫌ななめである。

「そりゃ確かに俺が悪かったよ……でもコレやり過ぎじゃね？ペナルティーデカすぎじゃね？」

黒焦げの銀時が言うが、二人は口をきいてくれない。

「…何で俺ばつかこんな目に……」

落ち込んだ銀時は、その場に座り込んだ。

その時、

「なのはちゃん！！」

新八の叫び声が聞こえた。

銀時は立ち上がり、フェイトも新八の声がした方を見た。

なのはの体から、何者かの腕が出ていた。

なのはの体から出てる手の中に、光の玉があった。

「なのはアアア！！」

すぐにフェイトは飛んで、なのはの元へ向かった。

銀時はシグナムを睨みつけ、胸倉を掴んだ。

「シグナム！なのはに何しやがった！？」

怒りの形相でシグナムに怒鳴る。

「落ち着け銀時！あれは『リンカーコア』を蒐集しているんだ！」

「リンカーコア？」

銀時は片眉を上げた。

「リンカーコアとは魔導師が持つ魔力の源だ。それを奪われたら、しばらく魔法は使えなくなるが、命に別状はない」

銀時を落ち着かせるように、シグナムが説明した。

「…本当か？」

「嘘は言わん」

銀時は鋭い眼でシグナムを見つめ、シグナムも顔をそらす事なく銀時を見つめる。

銀時は胸倉を掴む手を離れた。

「…すまない。だが我らには、こうする以外方法がないのだ」

シグナムが苦悶の表情で銀時に謝罪した。

「…目的は何だ？」

銀時が尋ねた。

シグナムは意を決して目的を言った。

「…闇の書の完成です」

「闇の書？」

聞き慣れない言葉に、銀時は目を細めた。

その時、仲間のシャマルからシグナム達に連絡が入った。

（蒐集は完了したわ。みんな各自離脱して）

（了解）

シャマルに答えてからヴィータ達は離脱し始めた。

シグナムも銀時から離れる。

「おい、シグナム！」

「すまない銀時！我らは捕まるワケにはいかないのだ！」

そう言っつてシグナムも離脱した。

「……………」

銀時は静かにシグナムが去っていった方を見つめた。

くおまけ

生徒全員

「教えて、銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』からの質問です。『3部のstriker
s編でヴィヴィオちゃんがフェイトさんやなのはさんをママって呼
んでいましたけど、銀さんは何て呼ばれるんですか?』」

銀八

「はい、お答えしましょう。『おじちゃん』とか『パパ』と呼ばれ
る可能性が高いです。おじちゃんと呼ばれたら、銀さんはショック
を受けるでしょうね。では『Mさん』。廊下に立ってなさい」

フエイト

「続いての質問。ペンネーム『鶴』さん。『銀さん達は新八が持っていた』魔法少女リリカルなのは』のDVDに反応して無印の世界にとんだから、第二章もA'sのDVDを持っていたと考えていいんですか？それと、第三十訓で銀さん達がピンポイントで各キャラの前に現れたのは装置の性能が上がったからですか？」

銀八

「はい、ズバリお答えしましょう。瞬間移動装置に、『リリカルなのは』の世界の座標のようなものがインプットされているので、DVDがなくても『リリカルなのは』の世界に行けます。ピンポイントで現れたのは、源外が装置を調整させて、より正確な場所に移動する事ができるようになったからです。それじゃあ『鶴』さん。廊下に立ってなさい」

フエイト

「ペンネーム『藍莉』さんからの質問です。『しつもん！定春が出てきたんですが、擬人化にならないのでしょうか？アルフと戦わせて欲しいです』」

銀八

「いや、なんないから。人の姿にはならないが、真の姿になったら誰も手がつけられねーけどな。質問の答。定春は擬人化しません。『藍莉』さん。廊下に立ってなさい」

フェイト

「ペンネーム『GIPPO』さんからの質問。『銀魂の面々は空が飛べませんが、海上とかではどうするんですか？たしかA・S編の最終決戦は海上だった気が…なのはやフェイトにおぶってもらったかですかね？』」

銀八

「はい、お答えしましょう。最終決戦の海上での戦いは考えてあったりなかったり…。まあなんとかかなると思います。では『GIPPO』さん。廊下に立ってなさい」

フェイト

「答えになってなくて、すみません」

第三十二訓：友達を見捨てちゃダメ（前書き）

生徒全員「3年Z組！銀八先生！」

銀八「はーい。久々の銀八先生。今日は転校生を紹介する」

シグナム「シグナムです。よろしく」

銀八「胸大きいな、シグナム。ちょっと触らせ……」

ブスッ

桂「大変だ！先生の額に黄色い魔力刃が！！」

フェイト「……『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十二訓。始
まります」

第三十二訓：友達を見捨てちゃダメ

リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていった。

「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャマルが三人に聞いた。

「ああ、大丈夫だ」

「全然平気だよ！」

「我も問題ない」

三人はシャマルに答えた。

「シャマルこそ大丈夫かよ？その腕」

シャマルの左腕を見ながらヴィータが言った。

シャマルの左腕には大きなアザがあった。

実は左腕のアザは、お妙にやられたのだ。なのはリンカーコアの蒐集を終え、腕を引っ込めようとした時、

「ぎゃああああ！！お化けエエエ！！」

悲鳴を上げながら、お妙が腕に蹴りを決めたのだ。

「だ…大丈夫よ。これくらいすぐに治るから」

安心させるように、シャマルは笑顔で答えた。

「…それにしても、途中から現れた彼らは何者かしら？」

シャマルは先ほどの戦いに現れた、銀時達の事について考えた。

「魔力を感じなかったところを考えると…少なくとも魔導師ではないだろう」

狼形態になったザフィーラが言った。

「魔法も使ってねーのに結構強かったし…」

口を尖らせながらヴィータが言った。

「それに一番無茶苦茶なのは、あの天然パーマの奴だ！一対一の勝負でシグナムに勝ちやがった…！」

ヴィータが納得いかないと言った顔する。

シャマルもザフィーラも、シグナムが一对一で負けるとは想像もしていなかった。

そのシグナムは、銀時の事を考えていた。魔導師でもない、魔法を使わず剣の腕前だけで自分を倒した男。銀時の姿が頭から離れない。いつの間にか、シグナムの頬は少し赤くなっていた。

「シグナム？」

「えっ？あ…ああ、どうした？」

隣にいるシャマルに声をかけられ、シグナムは慌てて答えた。

「大丈夫？顔が少し赤いけど」

「だ…大丈夫だ。心配いらない」

平静を装ってシグナムが答えた。

一行は八神家に到着した。ドアを開けて中に入る。

「主、只今戻りました」

「ただいま」

中に入って挨拶をする。

「みんなお帰り」

車椅子に乗ったはやてが玄関に来た。

その時、シグナム達は目を細めた。はやてに変わった所はない。シグナム達は、はやての後ろに立っている男を見て目を細めたのだ。

「…誰だよお前？」

ヴィータが、はやての後ろに立っている男に尋ねた。

男は長い黒髪に着物を着ていた。ヴィータに聞かれ、男は自己紹介をする。

「初めまして、桂小太郎です。好物はそばだ」

「…何故、好物を言った？」

「そば出せってか？そば出せってか？」

シグナムが眉を寄せ、ヴィータは桂を睨みつける。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

はやてがシグナムとヴィータをなだめる。

「桂さん、私の家の前に倒れててな。泊まる所もない言うから、家

に泊めてあげる事にしたんや」

はやてがみんなに説明した。

「みんな仲良くしてな」

「よろしく頼む」

桂がシグナム達に頭を下げた。

まあ悪い人ではないようだから、シグナム達も警戒を解いた。

ふと、シグナムは思った。

(この男の服装：銀時達に似ている?)

そんな事を思いながら、シグナムは中に上がった。

一行は、はやてと桂の後に続いて部屋に入った。

「うわああ!!?」

部屋に入って、ヴィータが驚きの声を上げた。

シグナム達も目を見開いて驚いている。

部屋の中に、白い体に黄色いくちくち嘴が付いた、ペンギンお化けのような奴がいたからだ。

「な…何だこの化物!?!」

「化物じゃないエリザベスだ」

ペンギンお化けみたいなきき物『エリザベス』を指差しながら叫んだヴィータに、桂が名前を教えた。

エリザベスは、

『おかえりなさい』

と書かれたボードを掲げた。

「た…ただいま」

とりあえずシグナム達は挨拶した。

「ほんなら皆揃った事やし、夕飯にしよか」

はやてが台所に向かう。

「私も運ぶの手伝います」

シヤマルも台所に向かった。

「ところで八神殿、そばはないか?」

と桂が言った直後、ヴィータがハンマーで桂の頭を叩いた。

八神家に騒がしい居候が増えた。

*

シグナム達との戦いを終えた銀時達は、なのはを保護して、時空管理局本局にいた。

なのはは、魔力の源であるリンカーコアが縮小している以外に、特に外傷はないのですぐに良くなるそうだ。

フェイトは銀時と通路を歩いている。

「それにしても本当に驚いちやった。どうして銀時達が？」

「お前の母ちゃんに呼ばれたんだよ」

「え？」

フェイトは少し驚いた顔をした。

「急に無線機に連絡があつてな。『フェイトを助けて』って頼まれたんだよ。装置の調整は大体完成してて、いけねー事はなかったからな。じーさんに無理言つてこつちに来た」

「そっか…ごめんね銀時。迷惑かけちゃって…」

顔を俯きながらフェイトが謝った。

「なアに。再会が少し早くなっただけだ」

笑つて銀時が言った。

銀時の顔を見て、フェイトも微笑んだ。

「そういえば、今回は何人か知らない人達がいたけど」

「心配すんな。俺の知り合いだ」

そう言つて銀時とフェイトは、フェイトとなのはのデバイスの修復作業が行われてる部屋に入った。

部屋の中にはクロノやアルフ、ユーノ。万事屋とお妙、九兵衛と東城がいた。

「紹介するぜ。コイツは柳生九兵衛だ。神速の剣の使い手だ」

「柳生九兵衛だ。よろしく」

銀時に紹介された後、九兵衛はフェイトに挨拶した。

「フェイト・テストロツサです。よろしくお願いします」
フェイトも頭を下げて挨拶した。

「んで隣にいるコイツは東城歩。頭はアホだが、剣の腕は柳生四天王最強だ」

「誰の頭がアホですか？私はただ、カーテンのシャワーってなるやつが気になっただけです」

「お前はロフトに行つて、二度と戻ってくるな」

そう言つて銀時は、東城の紹介を終えた。そして今度はお妙の方を向いた。

「コイツは志村妙。苗字からわかる通り、新八の姉だ」

「志村妙です。よろしくフェイトちゃん」

「こちらこそ、よろしく願ひします」

お妙とフェイトは、互いに頭を下げて挨拶した。

「んで最後に、こつちのデケーのが…」

銀時は視線を定春に向けた。

「定春アル！」

神楽が定春の名前を言った。

「定…春？」

定春を見つめながら、フェイトが呟いた。

「わんっ！」

定春が元気よく吠えた。

えー、ちなみに何故、九兵衛と東城、お妙や定春がいるのかと云つと。

プレシアから連絡があつた時、新八の家に九兵衛と東城がいたのだ。電話で銀時から連絡を受けた新八が行こうとしたら、お妙も行くと言ひ出したのだ。理由は新八の話で聞いてた、なのはやフェイト達に一目会いたからというものだった。すると九兵衛が、お妙の事が心配だからとついてきたのだ。東城も九兵衛を一人で行かせるワケにはいかなないとついてきたのだ。定春は神楽が連れていきたいと言つて、連れてきたのである。

「そういえばさあ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」
頭に包帯を巻いたアルフが尋ねた。

「あれは『ベルカ式』だ」

アルフと同じく、頭に包帯を巻いているクロノが答えた。

「ベルカ式？何ですかそれ？」

今度は新八が尋ねた。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

新八の問いに、頭に包帯を巻いてるユーノが答えた。

え？何で三人とも頭に包帯巻いてるかって？そりゃあ定春に頭を噛まれたからですよ。

「遠距離や広範囲攻撃がある程度、度外視して対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は『騎士』と呼ばれる」

クロノがユーノに続いて説明した。

「そっぴやシグナムの奴、騎士って言ってたな」

思い出したように銀時が言った。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る」

最後にユーノが説明をした。

「あれはマジで反則だろ。剣が炎に包まれるしよオ。一瞬、え？焔

？火 霊神か？お前は志々 真実か？って思ったからな」

「ちよっ…銀さん！あんまりそういう事は言わないでください！」

銀時の言葉を聞いて、新八が注意した。

「銀時」

「ん？」

クロノが銀時を呼んだ。

「貴方に会わせたい人がいます」

*

銀時はクロノの後ろ歩いてる。銀時の隣にはフェイトもいる。フェイトが、

「私も一緒に行っていていいかな？」
と言ってきたのだ。

特に断る理由もなかったもので、同行する事になった。

クロノの案内で、銀時とフェイトは部屋に入った。中には一人の老人が座っていた。

「グレアム提督。彼を連れてきました」

「やあクロノ。ご苦労だったね」

老人の名は、ギル・グレアム。時空管理局顧問官だ。

ふと、フェイトは銀時の顔を見た。何故か銀時は表情を険しくしていた。フェイトは、何故銀時がそんな顔をしているのかわからなかった。

グレアムに促された銀時とフェイトは、椅子に座った。

「私はギル・グレアム。君が坂田銀時さんか」

「…ああ」

銀時は素っ気ない返事をした。

「銀時！」

銀時の態度に、クロノが怒鳴る。

「いいんだクロノ」

「グレアム提督…」

グレアムに言われて、クロノは大人しくした。

銀時の隣に座ってるフェイトは、銀時の態度に違和感を感じた。

「で？俺に何の用ですか提督さん？」

「用という程の事ではない。ジュエルシード事件で魔法を使わずに活躍した、君の姿を一度見てみたくてね」

穏やかな口調でグレアムが言った。

「そうですね。じゃあ俺も出ているのですか？糖分摂取してなくてイライラしてるんですよ」

言いながら銀時は立ち上がった。

「ぎ…銀時!？」

部屋を出ようとする銀時に、クロノが叫ぶ。

「ま…待って銀時!」

慌ててフェイトが後を追う。

二人はそのまま部屋を出てしまった。

「アイツ…!提督に対して…!!」

「いいんだクロノ。私なら気にしていない」

そう言いながら、グレアムは珈琲を一口飲んだ。

*

銀時とフェイトは通路を歩いていた。

「ねえ銀時」

「ん？」

「銀時は…グレアム提督が嫌いなの？」

フェイトは、さっきから気になっていた事を聞いた。

グレアム提督を見てから、銀時の態度は少しおかしかった。

「別に。嫌いとかそういうんじゃないよ」

「え？」

嫌いとかじゃない?じゃあどうして。

フェイトが考え込んでると、銀時が言った。

「なんつーか…胡散臭い感じがしたんだよなア、あのオッサン」

「胡散臭い？」

フェイトは首を傾げた。

「まあ俺の勘違いかもしれねーから、気にすんな」

そう言っつて銀時は頭を掻いた。

じはらく歩くと、前からプレシアがやってきた。

「母さん」

「フェイト!」

プレシアは駆け寄って、フェイトに抱き付いた。

「フェイト！無事でよかったわ！」

「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」
安心させるように、フェイトが言う。

プレシアは顔を上げて銀時を見た。

「ありがとう、銀時」

「なアに、俺は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ」

プレシアのお礼に、銀時は笑って応えた。
すると、

「銀さん！」

今度は新八が走ってきた。

「どうした新八？」

新八は銀時の前で止まって、呼吸を整えた。

「桂さんとエリザベスがいません！！」

新八が大きな声で言った。

言われた銀時は数秒、呆然としてたが、やがて目と口を大きく開いた。

「ああああっ！！」

思い出したように、銀時は大声を上げた。

「しまったアア！！あのバカの事すっかり忘れてたアアア！！」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

フェイトとプレシアは、ワケがわからず首を傾げていた。

「どこを探しても二人がいないんです！無理矢理、装置に入ってきたから別の場所に移動しちゃったのかも！」

焦りながら新八が言う。

実は桂小太郎とエリザベスも、瞬間移動装置でなのは達の世界に来ただのだ。

銀時達が装置の中に入った後、桂がやってきて『銀時！俺と共にこの国を変えよう！』としつこく譲夷志士の勧誘にきたのだ。そして無理矢理、装置の中に入って銀時達とは、はぐれたが結果的に『リカルなのは』の世界にきたのである。

「もう知らねーよあんなバカなんて！エリザベスも一緒にいんだから大丈夫だろ！」

「いや、探してもあげましようよ！」

銀時と新八は、ギヤーギヤー騒ぎながら話し合った。

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生！！！」

フェイト

「ペンネーム『ジェット』さんからの質問です。『銀さんがシグナムをナンパしているシーンがありましたがあぶっちゃけ銀さん的にはシグナムは好みでしょうか？それともただの軽口なんでしょうか？そこらへん聞いておいて下さい』」

銀八

「はい。ズバリお答えしましょう。そりゃあ好みだと思えますよ？
顔は綺麗だし、性格はいいし、ボンツキュッポーンな体してますし。
ちなみに作者もシグナムは大好きです。ってどうでもいい情報だな」

フェイト

「…銀時はシグナムみたいなのが好きなんだ……」

銀八

「どしたのフェイト？」

フェイト

「な…何でもないよ！つ…続いてペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。
『今回銀魂サイドからの助っ人の一人として柳生家の九ちゃんが登
場してくれましたが、なのはたちは九ちゃんが『女性』である事を
知ったら、やっぱり相当驚いちゃうでしょうか？』えっ！？九兵衛っ
て女性なの…!?」

銀八

「そつだよ。お答えしまよう。そりゃあ驚くでしょう。なんせ新八
ですら後から九兵衛が女性だって気付いたんですから」

フェイト

「ペンネーム『アスカ』さんからの質問。『Strikres』
編で高杉が出てきそうな気がするのは気の性でしょうか？教えてく
ださい」

銀八

「気のせいじゃないと思います。第三章で高杉が出る予定です」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『巨乳のシグナムを見て、貧乳の神楽、志村妙、九ちゃんはどう思うでしょう？あと、銀さんは巨乳派ですか？、貧乳派ですか？』」

銀八

「はい。お答えしまよう。九兵衛はそれほど気にしないと思います。が、神楽とお妙はシグナムに嫉妬しそうですね。巨乳派か貧乳派？そりゃあ巨乳派でしょう。出るところは出て締まる所は締まるエロいボディが銀さんは好きだと思いますよ」

フェイト

「ペンネーム『FORTE』さん。『銀さんはレヴァンティンの連結刃をみてBLEACHの蛇尾丸と勘違いしなかったのですか？』」

銀八

「はい、お答えしまよう。まず作者がソレに気付きませんでした。という訳で、銀さんも気付かなかったという事で」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』からの質問。『例えば銀さんとフェイトが結婚したらどう言う役割になるんですか？やっぱり銀さんが家の家事全般を任される感じになるんですか？フェイトが外で仕事をすると思うんですけど？どうなんですか？』わ…！私と銀時が…け、結婚！！？」

銀

「うん。まず銀さんが結婚する姿が思い浮かばないなあ。ダメだ先生にもわからん。ただフェイトにはかり仕事をさせるとは思えません。多分」

フェイト

「『Mさん』から二つ目の質問。『またまた質問です。strickers編で屁怒紹さんが出て来たら新人フォワードのティアナが模擬でなのは怒りを買います。』少し頭冷やそか…』って言って攻撃を放った瞬間屁怒紹さんが出て来て『殺生はいけない』なんて感じになつたらなのは、どう言う反応するんですか？』」

銀八

「無茶な止め方しそつだなあ屁怒紹さん。屁怒紹さんの前では、白い悪魔もタジタジじゃないですか？」

フェイト

「ペンネーム『MN』さん。『この作品には高杉率いる鬼兵隊は登場するのでしょうか？回答よろしくお願いします』」

銀八

「第三章で出る予定です。やっぱり皆、高杉に出てほしいのかなあ？
高杉人気あるからなあ」

フエイト

「『烈火竜』さんから二つ目の質問。『魔法少女と銀髪の侍はアニメ化無理があるかもしれませんが、ドラマCDならできるでしょうか？。声だけの出演なので』」

銀八

「いや無理じゃね？できたらスゲーけど無理じゃね？まあ出来たら出来たで面白いかもしれないけど」

フエイト

「皆さん沢山の質問ありがとうございました！」

銀八

「みんな容赦なく質問し過ぎ！先生も疲れちゃったよ…みんなこれからは質問お手柔らかに頼むぜ！それじゃあ質問してくれた皆、廊下に立ってなさい！」

第三十三訓：夜更かしは美容の敵（前書き）

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十三訓。 始まります。

第三十三訓：夜更かしは美容の敵

八神家。

夜中に桂は目が覚めた。

リビングに明かりがついているので、物音を立てないように静かに近づいた。

リビングにはシグナム達が集まって、何やら話合いをしている。

「こんな時間に何をしている？」

桂が声をかけた。

「えっ!？」

驚いたシグナム達は、桂へ顔を向けた。

「な：何もしてねーよ!」

言いながらヴィータは、持っている闇の書を背中後ろに隠した。

「ふむ。ヴィータ殿。今後ろに何を隠した？」

「何も隠してねーよ!」

桂に向かってヴィータは叫んだ。

「まあ落ち着け。別にソレをどうこうしようと言っワケじゃない。

ただ、みんな深刻な表情をしていたので気になっただけだ」

真剣な顔になって桂が言った。

桂の真剣な顔を見て、シグナム達は顔を見合わせた。

やがてシグナムが口を開いた。

「：話を聞いてくれるか？」

「うむ」

桂は頷いた。

*

桂はシグナム達から闇の書についての説明を聞き終えた。説明を聞いた桂は驚いた。

「なんと…！では闇の書を使えば、天竺への道が開かれるのか！？」
闇の書を手にとって桂は興奮する。

「そうじゃねーよ！お前の頭力チ割ってやる…！」

「ヴィータ！落ち着け！」

「ヴィータちゃん！」

グラーファイゼンを構えるヴィータ。必死にヴィータを止めようとするシグナムとシヤマル。

「まあ落ち着け。つまりこの闇の書。空白の666ページ全てを埋めれば、所有者は大いなる力を得る。そういう事だな？」

「そうだ」

桂の言葉にザフィーラが頷いた。

「しかし八神殿は力を欲している様子はないが…何故お前達は闇の書在完成させようとしているんだ？」

「…闇の書在完成させなければ、主はやてが死ぬからです」

険しい表情でシグナムが答えた。

「何？」

「主はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いなのです。それは徐々に上の方に進行している。それを止めるために、私達は蒐集を行っているのです」

シグナムが説明を終える。

桂も表情を険しくした。

「自らの主を呪うとは…皮肉な話だな…：ちなみに他の方法はないのか？」

「ありません」

シグナムは苦悶の表情で答えた。

答えを聞いた桂は目を閉じて、腕を組んで考えた。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

「わかった。俺も闇の書の蒐集に協力しよう」

「えっ…!?!？」

桂の言葉にシグナム達は驚いた。

「魔法とやらは使えないが、剣の腕には自信があるつもりだ。足手まといにはならん」

「あの…本当にいいんですか？」

シヤマルが桂に尋ねた。

「正直、やり方には反対だが…八神殿を助ける手段がそれしかないのなら仕方なかるう」

と桂が言った。

「貴方の協力は嬉しいが…何故そこまで？主はやてとは今日会ったばかりでは？」

シグナムが理由を尋ねた。

「八神殿は素性も知れぬ俺を家に泊め、飯まで世話をしてくれた。俺は侍だ。侍は受けた恩は返す」

桂はハツキリとそう言った。

「…わかりました。では、これからよろしく頼む」

シグナムが頭を下げた。

「それじゃあ問題は…あの銀髪の男ね」

「銀髪の男？」

シヤマルの言葉に桂は目を細めた。

「シグナムを一对一の勝負で倒した化物だよ」

ウィータが桂に教えた。

「ちょっと待て。シグナム殿。その男の名は坂田銀時ではないか？」

「な…！？何故貴方が銀時の名を！？」

シグナムが驚いた顔で聞いた。

「やはり銀時か…」

桂はため息をついた。

「アイツの事知ってるのか？だったら教えてくれよ！」

ウィータが袖を掴んで聞いてくる。

桂は少し迷ったが、シグナム達に話すことにした。

「…昔、俺達の世界で、宇宙から来た異人、天人あまんととの戦「讓夷戦争」が起こった。その戦の中で銀時は、その鬼神の如き強さで数多の天

人を倒し、敵はおるか味方からも恐れられ『白夜叉』と呼ばれたのだ」

桂は自分達の過去と、銀時について話した。

「白夜叉…」

話を聞いたシグナムが呟いた。

「正直、俺でも銀時の相手は骨が折れる。それに銀時以外にも助っ人はいたはずだ」

「うむ。凄まじい怪力を誇る赤い服の少女と、目にも止まらぬ剣の使い手だ」

ザフィーラが桂に答えた。

「うむ。確かに彼らは強い。だが彼らには俺と同じ決定的な”欠点”がある」

「欠点？」

桂の言葉にシヤマルは首を傾げた。

桂はその欠点を口にした。

「空を飛べない事だ。俺も銀時達も魔導師ではないからな」

「あっ！」

桂の言葉に、シグナム達は同時に声を上げた。

桂の言うとおり、魔導師でない銀時達は空を飛ぶことはできない。

いかに剣の腕が凄くても、空に逃げられては攻撃のしようがない。

「地上や屋上に降りずに、空中にいれば銀時達との戦闘は避けられる。その場合は、管理局とやらの魔導師と戦う事になるかな」

「なら問題ないじゃん！魔導師相手なら負けはねえ！」

ヴィータが強気な声で言った。

シグナム達もヴィータの言葉に頷いている。

「うむ。では皆あまり無理はせぬように」

「ああ」

こうして話合いは終わり、桂も闇の書を巡る戦いに参戦する事となった。

足りない

ドクン

力が足りない

ドクン

もう少し魔力が必要だ

ドクン

守護騎士達よ…せいぜい頑張って蒐集を続けるがいい

ドクン

我が復活するために

ドクン

闇の書の中に眠る『悪』。

ずっと待ち続ける。復活の時を……。

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『Zさん』からの質問です。『銀さんはランクでいえばどのくらいですか？』」

銀八

「先生はランクとかよくわかりませんが、シグナムに勝ったので、シグナムよりは強いです」

フェイト

「ペンネーム『アスカ』さんからの質問。『銀魂の人気投票で8位だった地味な新八はA・S編で活躍できるのでしょうか？教えて下さい』」

銀八

「新八は変わらず8位だったなあ。新八は活躍するんですかねえ。先生にもわかりません」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんはビキニとハイレグどっちが好きですか？ちなみにフェイトとシグナム、どっちの水着姿が見たいですか？』」

銀八

「銀さんはビキニが好きです。原作で『いいな〜ビキニがいいな〜』と言っていましたから。水着姿はシグナムのが見たいと思います。先生も作者もシグナムのビキニ姿見たいです。でもフェイトが大人になっただら迷うかもな」

フェイト

「…………私だって負けないもん」

銀八

「え？」

フェイト

「何でもありません。ペンネーム『ナナシ』さんからの質問。『人妻好きの桂が出てきたということは、桃子さんやリンディさん、プレシアさんを口説いたりするのでしょうか？』」

銀八

「ツラの行動は俺にも予測できねーからな。人妻とわかれば口説くんじゃね？いやホント先生にもわかりません。というわけで、全員廊下に立ってなさい」

第三十四訓：引っ越しといえば引っ越しそば（前書き）

銀時達は空を飛べないけど、どうするんですか？という質問がよくありますが、その質問にはお答えできません。なんかネタバレになっちゃうそうです。

では、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十四訓。始まります。

第三十四訓：引越しといえば引越しそば

今回の『闇の書事件』も、リンディ率いるアースラメンバーが捜査を担当する事に決定した。もちろん銀時達も一緒である。

なのはも起きて、フェイトと銀時達は、リンディ達と共に地球に赴いていた。アースラの整備が完了していないので、司令部をなのはの近所に移す事になった。

「うわ〜！ 凄い近所だ」

「本当？」

「うん。ほら、あそこが私の家」

なのはとフェイトは、ベランダから仲良く街を見ている。

部屋の中では、銀時達が汗を流しながら荷物を運んでいた。

「な…何故私達が引越しの手伝いをしなければ…いけないのですか？」

「管理局のやつら…俺達を便利屋か何かと勘違いしてやがんだ。あゝ腹が立つ！」

荷物を運んで、汗を流しながら東城が不満を言い、銀時が文句を言う。

「貴方達の馬鹿力を有効に活用してるんですよ」

クロノが笑みを浮かべながら言った。

「おい東城。後でコイツにヤキ入れようぜ。ついでに定春も連れてこい」

「なっ！？ ちょっと待て銀時！ 定春だけはやめてくれ！！」

定春の名を聞いて、クロノは顔を青くした。

「みんなお疲れ様。一休みして頂戴」

プレシアが銀時達に言った。

「うース」

汗を拭きながら銀時達はリビングに向かった。

リビングにいるエイミィは、アルフとユーノを見つけた。

「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

「新形態子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと……」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。

「わ〜アルフちっちゃい！どうしたの？」

「あら、本当！」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶり〜！」

フェイトとプレシアは子犬フォームのアルフに驚き、なのはは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

「可愛いだろ」

「うん！」

アルフがフェイトの頬を舐める。

ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。

「！」

その時、アルフは銀時の視線に気付いた。

銀時はニヤリと笑った。アルフは嫌な予感がした。

「アルフ！お前、今言ったなアア！！新形態『子犬』フォームだ！つまり、お前は自分が『犬』である事を認めたワケだアア！！」

ビシッとアルフを指差しながら銀時が叫んだ。

「あっ……いや……そうゆうんじゃない……！」

「もう遅い！お前のさっきのセリフは、このカセットテープに録音してある！」

銀時は片手に持つてるカセットテープを見せた。

「何でそんなの持つてるのさ！？」

「そこはツツコむな！」

銀時とアルフがギャーギャー言い争う。

久しぶりに銀時とアルフの騒がしい会話を聞いて、フェイトは笑った。周りにいるなのはや新八達も笑った。

「なのは、フェイト。友達だよ」

「はい！」

クロノの言葉に、フェイトとなのは嬉しそうな笑顔になった。

「こんにちは！」

「きたよ〜！」

玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「はじめまして……って言うのもちよつと変かな？」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

二人を見ながら、フェイトは嬉しそうに笑った。

「うん！」

「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。

そこへ、新八と神楽もやってきた。

「久しぶり。アリサちゃん、すずかちゃん」

「二人とも元気だったアルか？」

「新八さん！神楽ちゃん！」

「久しぶりー！」

新八達にも再会して、アリサとすずかは喜んだ。

*

銀時達は、リンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、喫茶翠屋へきていた。

「ユーノ君も久しぶりだね」

「キューキュー」

「こつちの犬も可愛い〜！」

「アンツ」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。ちなみに銀時というと。

「おお〜！こつちのも、うまそうだな！」

「それは今回作った新作なんですよ。よかつたらお一つ食べてみませんか？」

「え？マジで!？」

翠屋のケーキに目を奪われながら、土郎と仲良く話をしていた。

「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしく願いします」

「こちらこそお願いします」

リンディと桃子が挨拶をしてる。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が入ってきた。フェイトは両手で小包を抱えていた。

「リンディていと……リンディさん」

「はい。なあに？」

「……あの……コレ……」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

「制服？」

銀時が片眉を上げた。

「転校手続き取つといたから。週明けからなのはさんのクラスメイトね」

笑顔でリンディが言った。

「あら素敵」

「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な？なのは」

「うん！」

「良かったわねフェイトちゃん」

優しく微笑みながら、桃子が言った。

「あの……えと……はい、ありがとうございます」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

「よかつたなフェイト。友達百人できるかな？」

と言いながら銀時はケーキを食べた。

するとリンデイが銀時を呼んだ。

「銀さん」

「ん？」

呼ばれた銀時は、フォークの動きを止めた。

「実は銀さんにも……」

リンデイは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「え？何？何か嫌な予感がするんですけど……」

瞬きしながら銀時が言った。

*

そしてフェイトが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。

聖祥大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

「し、失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトが教室の中に入ってきた。

なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

「あの……フェイト・テストロッサと言います。よろしく願いします」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。

クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

「それともう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日から私に代わって、しばらくの間臨時の先生が皆さんの担任をやります」

先生がクラスの皆に言った。

その言葉に生徒達は再びざわついた。

（臨時の先生って……まさか！）

フェイトはハツとなって、教室の扉を見た。

なのはもフェイトと同じ事を考えたのか、教室の扉に視線を向けた。
「それでは入ってきてください」

「うゝス」

扉の向こうから気だるげな声が返ってきた。

ガラリと扉が開けられ、一人の男が入ってきた。

ズレた眼鏡に、白衣とネクタイをだらしなく身につけた銀髪の天然パーマの男。

「どーも。今日から皆さんと一緒におふざけ…じゃねーや。授業をする事になりました、坂田銀八です」

この場に新八がいたら『今おふざけって言いそうになつたる！』というツツコミが入りそうな自己紹介をして登場したのは、坂田銀時だった。

銀時：いや、銀八先生を見た生徒達は静まり、フェイトとなのははズッコけた。

銀時がなのは達の担任となつて学校に来たのは、デバイスを持っていない二人の護衛のためである。

*

マンション。

「あの、クロノ君。そもそも闇の書って一体何なの？」

マンションに残ってる新八達は、クロノに闇の書について尋ねた。

「闇の書は魔力蓄積型のロストロギア。魔導師の魔力の根源であるリンカーコアを食って、全666ページを埋めるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミーが補足をした。

「では、闇の書の破壊は不可能なのか？」

九兵衛が尋ねた。

「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食って永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書」
クロノが険しい表情で説明した。
「という事は：我々に出来るのは闇の書の完成前の捕獲：ということとですか？」
涼やかな顔で東城が言った。
「そういう事になりますね」

*

昼休み。

フェイト達は、お弁当を持って屋上へ向かっていた。屋上の扉の前に着いて、フェイト達は足を止めた。扉の前に『立入禁止』と書かれた看板のような物が立てられていたのだ。

「おかしいわね。昨日まではこんな物なかったのに」
「さすがに困った顔をする。」

「こんなの無視しちゃえばいいのよ」
そう言つてアリサは、看板をどけてしまう。
フェイトが不安な顔になる。

「え？でも…いいの？」

「いいの、いいの」

アリサがドアノブを掴もうとした時、

「波アアア！」

扉の外から声が聞こえた。男の声である。

四人は顔を見合わせた。

「波アアアア！」

また声が聞こえた。

アリサはドアノブを掴んで回すと、ゆっくりと扉を開けた。
そして四人は見た。声の主を。

「かーめー ーめー波アアアア！！！」

銀時が両手を構えながら、某メガヒット漫画に出てくる必殺技の練習をしていた。

フェイト達は、冷ややかな目で銀時を見つめた。

「なんか違うんだよね。もうちょいアレだな」

ブツブツ言いながら、銀時はまた構えた。

「かゝめゝゝめゝ…」

構えながら、何気なく屋上の入口を見た。

「！！！」

そこには、冷ややかな目で銀時を見るフェイト達がいた。

*

夕方。

帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。

屋上の件は、その後銀時は凄く落ち込んで、しばらく立ち直らなかつた。

(銀八先生…大丈夫かな?)

銀時を心配しながら、すずかは本を探した。すると、隣にいる人にぶつかった。

「あつ！すみません！」

「いや、こつちこそ悪かったな」

二人は謝りながら相手の顔を見た。

「銀八先生!？」

「えっ?すずか!？」

顔を見て二人ともビックリした。

「銀八先生…どうしてこんな所に?」

すずかが驚いた顔で銀時に尋ねた。

「いや、暇つぶしに来てみたんだが…ちょっと失敗したな。字ばっ

かで頭がクラクラするぜ」

頭を掻きながら銀時が言った。

と、銀時は急に申し訳なさそうな顔になった。

「あのよお…屋上の件はすまなかった…『立入禁止』ってやれば誰も来ないと思って…つい屋上で…」

「あ、いえ！私達は大丈夫ですから、銀八先生も元気出して下さい！」

慌ててすずかは銀時を励ました。

「サンキューな…」

すずかの励ましで、銀時は少し元気になった。

その時、車椅子の音が聞こえた。すずかは音のする方を見た。

車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてるシグナムがいた。

「はやてちゃん！」

すずかが、はやてを呼んだ。

「あつ、すずかちゃん！」

はやてもすずかに気付いた。

シグナムもすずかの方に顔を向けた。

「なっ!？」

すずかの隣にいる銀時を見て、シグナムは思わず声を上げた。

「あ」

銀時もシグナムを見た。

「すずかちゃん。そちらの方は？」

「私のクラスの臨時担任の坂田銀八先生です」

すずかが、はやてに教えた。

(た…担任教師!?この男が!?)

シグナムは内心驚愕した。

「シグナム。坂田先生の事知ってるん？」

「あ…え、ええ…まあ…」

はやての問いに、シグナムは曖昧な返事をする。

「銀八先生。私の友達の八神はやてちゃんです」

すずかが銀時に、はやてを紹介した。

「どうも。八神はやてです」

ペコリと頭を下げながら、はやてが挨拶した。

「あ〜どうもこちらこそ。すずかのクラスの臨時担任の坂田銀八です」

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『ミュラ』さんからの質問です。『屁怒紹、いや屁怒

紹さんが出てくる予定はありますか？出すならいつぐらいですか？
八神家での強さランキングと、はやてがエリザベスについてどう思
っているか教えてください』」

銀八

「申し訳ありませんが屁怒紹さん、いや屁怒紹様が出る予定は今の
ところありません」

フエイト

「銀八先生。凄い汗だけど…大丈夫？」

銀八

「だ…大丈夫だ。強さランキングは…ツラかシグナムが一位…いや
シグナムが一位か？んで二位がツラで三位がヴィータかな。はやて
はエリザベスの事を『おもろい不思議生物』だと思ってます」

フエイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀さん達は空をとぶんですか
(シグナムたちと戦うときに)』」

銀八

「申し訳ありませんが、その質問には答えられません。ネタバレ的
な感じになっちゃうんで」

フエイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『闇の書対策にズルズルボールを使うのでしょうか?』」

銀八

「いやいや、そんなギャグアイテム使っちゃダメだろ。ズルズルも又メ又メも又ル又ルも使わないから」

フエイト

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『ツラってA・S編において管理局とかに正体を隠そうと』『キャプテン・カッター』に扮してそーな気がするんですけど、そこら辺はいかがでしょうか?…まあ、そんな事やったら銀さんとか新ぱつつあんのドロップキックが飛んできそうですけど…(汗)』」

銀八

「作者としたことが、『キャプテン・カッター』をすっかり忘れてました。どうもありがとうございます。作者に代わってお礼を言います。というわけで作者。今回はお前が廊下に立ってなさい」

フエイト

「ペンネーム『烈火竜』さんからの二つ目の質問。『銀さんはアルフとザフィーラを見て、発情期ネタをするでしょうか?』『発情期?』」

銀八

「うん。必ずしも発情期ネタをやるとは限りません。つい、わかりません。はい、質問してくれた読者の皆さん。廊下に立ってなさい」

第三十五訓：なりきるなら心と見た目両方でなりきれ（前書き）

今回は『教えて、銀八先生』は休みです。

では、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十五訓。 始まります

第三十五訓：なりきるなら心と見た目両方でありきれ

図書館の近くにある公園。

そこではやてとすすすが楽しそうに話をしている。はやて達から少し離れたベンチに、銀時とシグナムが座っていた。

「シグナム。お前子守のバイトでもやってんの？」

「……………」

銀時の問いに、シグナムは黙り込む。

夕焼けの空を見上げながら、銀時は考えた。

「ひよつとして…闇の書と何か関係あるとか？」

「……………」

銀時の言葉に、シグナムは動揺してしまい体が小さく震えてしまった。

「あれ？もしかして当たり？あの、はやてって子が闇の書の主なの？」

闇の書の事は、リンディヤクロノからある程度の事は聞いていた。

シグナムは焦った。

感づかれた。だが何としても、主はやての事は管理局にバレる訳にはいかない。しかし、この場で戦闘をするワケにはいかないし、戦った所で銀時には勝てない。どうする？

焦りながらシグナムは必死に考えた。そして、はやての事を管理局には黙っていてもええないか、と頼んでみる事にした。

シグナムは銀時に顔を向けた。

「銀時…主はやての事は、管理局には黙っていてくれないか？」
意を決してシグナムは、銀時に頼んだ。

「敵であるお前に、こんな事を頼むのはおかしいかもしれないが…頼む！」

シグナムは銀時に頭を下げた。

銀時とは戦っても勝てない。こうやって頼むしか、主はやてを護る

方法はない。断られても、なんとか銀時を説得してみせる。

シグナムがそう考えた時、

「止せよ、シグナム。俺なんかに頭下げんなよ」

銀時が言った。

「銀時……」

言われたシグナムは、ゆつくりと顔を上げた。

銀時は、上がったシグナムの顔を見ながら言った。

「安心しな。はやての事は、管理局の連中には言わねーよ」

「ほ……本当ですか!？」

「ああ」

シグナムの言葉に、銀時は頷いた。

「そうか。すまないな銀時。助かる」

「なアに、気にすんな」

そう言つて銀時は、すずかと楽しそうに会話をしているはやてを見た。

シグナムは銀時の言葉に、ホッと一安心した。一度剣を交えて、銀時が信用できる人物である事はわかっていた。なら銀時の言葉は信用できる。出会ったのが銀時で本当に良かった。もし管理局の者と出会っていたら、主はやての事はバれて、最悪全員捕まっていた。

「ところでシグナム。何で闇の書を完成させようとしてんだ？」

銀時が理由を尋ねた。

「主はやては闇の書の呪いを受けている。その呪いから解放させるために、我らは蒐集を行い、闇の書を完成させようとしているのです」

シグナムが理由を話した。

理由を聞いた銀時は、はやての足を見た。はやては足が不自由のようだが、アレが闇の書の呪いなのだろう。

「闇の書を完成させれば、はやての足は治るのか？」

「はい。少なくとも麻痺の進行は止まります」

「そうか……」

シグナムの言葉を聞いた銀時は、浮かない顔をした。

実際に闇の書を見たワケではないが、何か胸騒ぎのようなものがある。理由はわからないが、闇の書は完成させてはいけない気がする。だが、これは確証のない単なる自分の勘。それに闇の書を完成させる以外に、はやてを助ける方法がないのなら、シグナムに余計な事を言うべきではない。

「銀八先生！」

銀時が考え込んでいると、すずかが銀時を呼んだ。すずかとはやては、銀時とシグナムの前まで来た。

「そろそろ時間なので、私は帰ります」

「おう。気をつけて帰れよ」

「はい。さようなら。はやてちゃんもまたね」

「うん。たまねすずかちゃん」

銀時達に挨拶をした後、すずかは帰っていった。

「では主はやて。我らもそろそろ」

シグナムが、はやてに言った。

「そやな。あつ、今度は銀八先生ともお話したいです」

「ああ。また今度な。はやても早く足よくなれよ」

「おおきに」

銀時の言葉に、はやては笑顔で応えた。

「では」

シグナムがベンチから立ち上がった。

「シグナム」

「何ですか？」

銀時が呼び止め、シグナムは銀時を見た。

「あんま無茶すんなよ」

「！」

銀時の言葉に、シグナムは少し頬を赤くした。

「ああ。ありがとう」

少し嬉しくなり、シグナムは微笑みながら銀時に礼を言った。車椅子を引いて、はやてと共に公園を出た。

一人になった銀時は、周りに誰もいない事を確認した。確認した後、近くに転がってる石を拾った。

そして後ろの林に振り返り、

「それでテメーは何やってんだアアア!!」

叫びながら石を投げた。

「ぐあつ!」

投げた石は誰かに当たり、男の悲鳴が聞こえた。

銀時は、悲鳴が聞こえた方へ向かった。そこには一人の男が倒れていた。

「こんな所で何やってんだ?ツラ」

男に向かって銀時が言った。

男は桂小太郎だった。

「ツラじゃない松だ:いや桂だ」

頭を押さえながら桂が立ち上がった。

「ふふ。やるではないか銀時。完全に松になりきった俺を見破るとは」

「見破るも何も、テメー木の隣に突っ立ってただけだろーが。バカだろ。お前やつぱバカだろ」

「バカじゃない桂だ」

桂と銀時が睨み合う。

「で?こんな所で何やってんだ?」

「うむ。八神殿の事が気になってな。様子を見ていたのだ」

「はやての?」

桂の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「実は今、俺とエリザベスは八神殿に世話になっていてな。シグナム達から事情を聞いて協力しているのだ」

「はやての家に?たくつ、はやても厄介な奴を拾ったな」

頭を掻きながら銀時が言った。

「ちようどいい。銀時、実はお前に話したい事がある」

急に桂がシリアスな顔になって言った。

思わず銀時も真剣な表情になる。

「実は何者かが八神殿を監視している」

「監視？」

桂の言葉に銀時は少し驚いた。

「機械か魔法か…方法はわからんが、視線のようなものを感じた」

「シグナム達は気付いてるのか？」

「いや、気付いてるのは俺とエリザベスだけだ。俺達は常に真選組の追跡を警戒し、周囲の視線に気を配っていた。だから俺とエリザベスは監視の視線に気付けた」

はやて達を監視。

それを聞いて銀時は考えた。

「狙いは闇の書か？」

「恐らくな。だがシグナム殿達の話では、闇の書は主以外には使えんらしい」

主以外には使えない。なら監視している奴の目的は何だ？

「監視している者は、八神殿と闇の書の存在を知っている人物。シグナム殿達が八神殿を監視する理由はない。今日、八神殿の事を知ったお前も犯人ではない。となると残るは…」

桂は腕を組んで、一旦言葉を止めた。

銀時が口を開いた。

「…管理局か」

「ああ。それ以外に闇の書の存在を知る者はいない。銀時。八神殿達を監視している人物に、何か心当たりはないか？」

神妙な顔で桂が尋ねた。

銀時は考えた。管理局の中で怪しい人物。銀時の中に、一人の人物が思い浮かんだ。

「一人、胡散臭そうな奴がいるが…まだ確証がねえ」

「そうか。それと八神殿は亡くなった両親の親戚から生活費の援助を受けている。もしかしたら、その者が関係しているやもしれん」
話はそこで終わった。

「では俺は戻る。銀時、お前も気をつけるよ」
桂は振り返って歩き出した。

「ああ。じゃあな、ツラ」

銀時も振り返って歩き出した。

銀時の言葉を聞いて、桂は足を止めた。

「ツラじゃない、桂だ」

*

マンション。

銀時は部屋に入った。

「おい。銀さんが帰ったぞー」

言いながら銀時はリビングに入った。

「あつ、お帰り銀時」

フェイトが笑顔で言った。手には待機モードのバルディッシュがあった。隣にいる、なのはの手にもレイジングハートがあった。

「おつ、バルディッシュとレイジングハート直ったのか？」

「うん」

フェイトは嬉しそうに頷いた。

「それに、部品交換の時に新しい機能が付いたみたいですよ」

新八が言った。

「マジでか？そうだ新八。ついでにお前も新しい機能とか付いたら？」

「いや、何で僕が？」

新八は顔をしかめた。

「脱地味だ」

「余計なお世話だ！」

新八がツッコんだ。

「そついや第二章に入ってから新八のツッコミが少なくなったな。

この際そのメガネに新機能を付けて脱地味……」

「普通のメガネでいいわ！地味を馬鹿にするな！！」

メガネに手を掛けながら新八が怒鳴った。

「それとツツコミが少ないと言っな！僕だって気にしてんだから！！」

「とうとう新八からツツコミがなくなったアルカ」

神楽が、うんうんと頷く。

「いやツツコミなくならないから！ツツコミ続けるから！」

神楽にツツコミ新八。

その時、室内に緊急警報が鳴り響いた。

「至近距離で緊急事態発生！」

エイミイが皆に叫んだ。

「例の守護騎士達か？」

片手に刀を持って九兵衛がやってきた。その後ろには東城もいる。

「ええ」

エイミイが九兵衛に頷いた。

「なのは」

「うん」

フェイトとなのはは頷いた。

「エイミイさん。私達、現場に行きます！」

なのはがエイミイに言った。

「俺達も行くぜ」

銀時達も武器を持って、準備万端である。

「わかった。皆お願いね」

銀時達は、現場に向かう事になった。

第三十六訓：紙や結界は破ってもいいが約束は破るな（前書き）

銀八「ちよこつと！」

生徒全員「銀八先生！！！」

銀八「えー、読者の皆さん。沢山質問を書いてくれるのは嬉しいのですが、質問ばかりでなく、感想も書いてやってください。それじゃあ、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十六訓。始まります」

第三十六訓：紙や結界は破ってもいいが約束は破るな

街の上空にヴィータとザフィーラ、それに二人を取り囲む十人の管理局の魔導師がいた。更に結界も張つてある。

「管理局か」

「でもチャラいよ、コイツら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを構える。

すると魔導師達は、一斉にヴィータ達から離れた。

「え？」

魔導師達の行動に、ヴィータは訝しげる。

「上だ！」

上を見てザフィーラが叫んだ。ヴィータも上を見た。

上空に無数の青い魔力の刃があつた。無数の刃の中心に、クロノがいた。

「ステインガールブレイド！エクスキュージョンシフト！！」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

「ちっ！」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。障壁に無数の刃の雨がぶつかり、青色の爆発が起きた。

「…少しは通つたか？」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見えてきた。

ザフィーラの左腕に、数本の刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワじゃない！！」

ザフィーラは、腕に力を入れて刃を破壊した。

「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。

クロノも杖を構える。

その時、エイミーから通信が入った。

「クロノ君、現場に助っ人を転送したよ」

「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。屋上を見ると、フェイトとなのは、銀時達がいた。

「あいつら！」

「銀時と仲間達もいるな」

ヴィータとザフィーラも、銀時達の姿を確認した。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「セーッとアップ！！」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

「レイジングハート・エクセリオン！！」

「バルディッシュ・アサルト！！」

二人は自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。

二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

「あいつらのデバイス…！アレってまさか！？」

二人のデバイスを見て、ヴィータは驚いた。

二人のデバイスに新たに付けられたのは、カートリッジシステムだった。

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」「どうして闇の書を完成させようとしてるの？」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねた。

「あのさあ、ベルカの諺にこういのがあんだよ」
腕を組みながら、ヴィータが言った。

隣にいるザフィーラが、ヴィータを見た。

「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。
銀時達も、わからないと言う風に首を傾げた。

「話し合いをしようつてのに、武器を持ってやって来る奴がいるか馬鹿って意味だよ。バカ！」

「なっ！？い、いきなり有無を言わず襲い掛かって来た子がそれを言うっ？」

ヴィータの言葉に、なのはが反論した。

隣にいる新八達も、うんうんと頷く。

「それにソレは諺ではなく、小話のオチだ」

ザフィーラがヴィータにツッコんだ。

「うっせー！いいんだよ細かい事は！」

ツッコまれてザフィーラに怒鳴る。

「ブハハハ！仲間にツッコまれてやんの！ダッセー！！」

ヴィータを指差しながら、銀時と神楽は笑った。

「いや、あんたらも僕にツッコまれてるでしょ。ってか今もツッコんだし」

と、新八が二人にツッコんだ。

「うっせーよ！天然パーマバカ！」

「何だと！？オメーに天然パーマの苦しみがわかるかア！！」

ヴィータと銀時が怒鳴り合う。

その時、上空で爆発音が響いた。

ピンク色の雷が、銀時達がいる隣のビルに落ちた。屋上にシグナムの姿が見えた。

「シグナム！」

フェイトが声を上げた。

(アイツ派手な登場するなあ)

銀時は呑気にそんな事を思ってた。

「ユーノ君、クロノ君。手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言った。

なのはの言った言葉が気に入らなかったのか、ヴィータはなのはを睨みつけた。

「銀時」

「ん？」

「私も…彼女と一対一で…！」

シグナムを見つめながら、フェイトが言った。

「ああ。余計な手は出さねえ。行ってこい」

「うん！」

銀時に言われて、フェイトは頷いた。

「それじゃ、あたしは野郎の相手をするよ」

そう言いながら、アルフはザフィーラを睨んだ。

「え？何？発情期？」

「違う！！」

アルフは銀時の顔面を思いつき殴った。

銀時のせいで緊迫感が削がれたが、シグナム達となのは達がそれぞれ
の武器を構える。

そして、戦闘が始まった。

*

「でええええい！！！」

ヴィータがグラーフアイゼンで、なのはに攻撃する。

なのはは障壁を張って防御する。障壁は以前より硬く、グラーフア
イゼンの攻撃を防いだ。

なのははアクセルシューターを使って、ヴィータを追い詰める。

フェイトとシグナムも激しい空中戦をしていた。バルディッシュと
レヴァンティンが火花を散らせてぶつかり合う。

フェイトが、複数の金色の魔力の槍『プラズマランサー』を放つ。
それをシグナムは、レヴァンティンの炎で掻き消す。

空中でアルフとザフィーラは、互いに拳をぶつけ合って戦っていた。
（状況はあまりよくないな。桂に言われた通り空中で戦う事によって、銀時達との戦闘は避けられた。だが魔導師達のデバイスが強化されていて、シグナム達も苦戦している）
ザフィーラは表情を険しくした。

*

銀時達は屋上で、フェイト達の戦いを見守っていた。

「いけー！なのは、フェイト！そこアルー！！」

神楽が大声で、なのは達を応援してる。

「魔導師の戦いは始めて見るな」

九兵衛も興味深そうに、戦いを見ている。

「うむ。魔導師の少女達もなかなかやるではないか」

桂が言った。

「そうですね…って桂さん！？」

桂の言葉に応えた後、新八は驚いた。

「何当たり前のように話に参加してるんですか！？」

新八は桂に向かって叫んだ。

「桂じゃない。俺はキャプテン・カッター…」

「その衣裳どこで用意しやがったアアア！！」

桂の言葉の途中で、銀時が桂にドロップキックをした。

今の桂の恰好は、左目にエリザベスの絵が入った眼帯をして、海賊のような服装をしている。

「ツラ！お前今までどこに行ってたアルカ？」

「ちよつと、いろいろあつてな」

ドロップキックを受けた桂は立ち上がった。

「おいツラ。エリザベスはどうした？」

エリザベスがいない事に気付いた銀時は、桂に尋ねた。

「エリザベスは万が一の時のために、八神殿の護衛をしている」
「八神？誰ですか、その人？」
新八が首を傾げた。

「皆にも教えておこう。ただし管理局の者には言わないでくれ」
そう言つて桂は、新八達に銀時に話した事と同じ事を話した。

*

結界の外。

シヤマルは屋上から様子を見ている。

(私力じゃこの結界は破れない…)

シヤマルは闇の書を使って、結界を破るか迷っていた。

今日は、はやてちゃんとの大事な約束がある。ソレを護るためにも、一刻も早く結界を破つて離脱しなければいけない。

その時、背後に気配を感じた。

「搜索しているロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

シヤマルの背後で、杖を突き付けて言ったのはクロノだった。

その時、乱入者が現れた。

突然現れた仮面を付けた男が、クロノを蹴り飛ばした。クロノは隣のビルの屋上まで飛ばされた。

「な…仲間!？」

クロノは仮面の男を睨みつけた。

「あ…貴方は？」

シヤマルが仮面の男に尋ねた。

「使え」

「え？」

「闇の書を使って結界を破壊しろ」

「でもアレは…!」

シヤマルは闇の書を使う事を戸惑った。

「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かるう」

少し戸惑ったが、仮面の男の言葉でシャマルは、闇の書を使う事にした。

(みんな、闇の書で結界を破壊するわ！うまくかわして撤退を！)
シャマルが念話でシグナム達に伝えた。

「桂！シャマルが闇の書で結界を破壊する！結界を破壊したら撤退するぞ！」

シグナムが桂に向かって叫んだ。

「何！？闇の書を使って！？」

そんな事したら、闇の書の頁が減ってしまう。桂は銀時達を見た後、シグナムに向き直った。

「シグナム殿！結界は我らが破壊する！だからシャマル殿に闇の書を使わないように伝えてくれ！」

「えっ！？」

「はっ！？」

桂の言葉に、シグナムと銀時は驚いた。

「我らとは…私達も入っているのか！？」

東城が桂に尋ねた。

「頼んだぞシグナム殿！」

東城を無視して、桂はシグナムに叫んだ。

(シャマル！闇の書はまだ使うな！)

(えっ！？)

急いでシグナムは、シャマルに連絡して、闇の書の使用を止めた。

「おいッラ。何勝手な事言ってるんだ」

「そうですね桂さん！」

銀時と新八が桂に言った。

「頼む銀時！今日は八神殿と大事な約束があるのだ！」

「約束？」

桂の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「今日は八神殿の家に友達の日村殿が遊びに来るのだ。その時に皆で夕食を食べると約束したのだ！」

桂に言われて銀時は思い出した。

夕方公園で、はやてとすずかが楽しそうに話していたのを。多分あの時に、はやての家に遊びに行く約束をしたのだろう。

「頼む皆！武士の情けだ！」

桂が頭を下げて、銀時達に頼んだ。

銀時はため息をついた。

「誰がお前の頼みなんか聞くかよ」

言いながら銀時は、腰から木刀を抜きながら、近くの結界の壁に近寄った。

「今から結界破るのはテメーに頼まれたからじゃねエ。シグナム達に、はやてとの約束を破らせねえためだ」

銀時は目の前の結界を睨んだ。

「銀さん！本気ですか！？」

驚いた新八が叫んだ。

「ああ。オメーら準備しろ」

「合点アル！」

神楽は傘を構えた。

「合点しちゃうの！？」

新八がツツコんだ。

「全く。君はまた無茶な事を言うな」

そう言いながら九兵衛も刀を抜いた。

「私も手伝いますぞ、若」

東城も刀を抜く。

「すまん銀時、みんな」

桂は片手に丸い爆弾を持った。

「行くぞテメーらアア！」

「おおっ！！」

銀時の声に、桂、神楽、九兵衛、東城が応えた。

「マジでやるんですか!?!」

新八は一人戸惑ってる。

まずは九兵衛と東城が、結界に向かって走り出した。

「はあああああ!?!」

結界に向かって、二人とも剣を振り下ろした。

結界に亀裂が入った。

続いて神楽が走り出した。

「ほあちゃあああああ!?!」

亀裂に向かって傘を振った。亀裂が入った部分に傘を叩きつけ、亀

裂が更に周りに広がる。

次に銀時が走る。

「うおおおおお!?!」

結界の亀裂に突きを放った。結界に木刀が突き刺さり、ガシャンと音を立てて結界が割れた。結界に大きな穴が出来た。

最後は桂。

「シヤマル殿によって魔力が込められた、この爆弾の威力!しかもと見るがいい!」

桂は結界に出来た穴に向かって爆弾を投げた。

爆弾は大爆発を起こし、結界を粉々に砕いた。

ヴィータ達は、結界が破壊された事を確認した。

「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は?」

「なのは。高町なのは」互いに名を名乗った。

「高町なぬ……な……えーい、呼びにくい!」

「逆切れ!?!」

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな!ぜってーだ!」
そう言い残して、ヴィータは離脱した。

「あ……えつと……ヴィータちゃん!」

「悪いが我も離脱する。勝負はお預けだ」

「あっ！」
ザフィーラも離脱した。
「もう！銀時！何で結界を破ったんだい！？」
アルフは結界を破った銀時に怒った。

「すまん、テスタロッサ。この勝負預ける」
「シグナム！」
シグナムもフェイトから離れた。
だがすぐに離脱をせずに、銀時に近寄った。

「銀時！」
「ん？」
シグナムに呼ばれ、銀時は振り返った。

「あ……その……お前達のお陰で、闇の書のを減らさずに済んだ……
だから……その……」

シグナムは頬を赤くした。
「ありがとう」

少し照れながら、シグナムは銀時に礼を言った。
「へえ。照れてるところも可愛いじゃねーか」
悪戯っぽい笑みを浮かべて銀時が言った。

「なっ！？わ…私をからかっているのか！？」
顔を赤くしながら、シグナムが反論した。

「別にからかかってねーよ。それより早く主の所に行ってやれよ」
「う…うむ。ではな銀時」
そう言つて、シグナムも離脱した。

「では俺も行くとするか」
桂が去るうとした時、
「待て！」

数人の管理局の魔導師が、桂を取り囲んだ。
「逃がさんぞ！おとなしく投降しろ！」

杖を向けながら、魔導師が言った。

「ふふ。これで俺を困んだつもりか？」

桂は懐に手を入れた。

魔導師達は警戒した。桂の懐から出てきたのは『んまい棒』だった。

「んまい棒、混捕駄呪コンボクタイジユ！！」

んまい棒を地面に投げ、辺りが煙に包まれた。煙の中で魔導師達は混乱してる。その隙に桂は逃げた。

「ゾラを捕まえるには、詰めが甘すぎるぜ」

後ろで見てる銀時が呟いた。

「銀さん」

「あ？」

新八に呼ばれて、銀時は振り返った。

「なんか：シグナムさんと仲良い感じでしたよね？」

目を細めながら新八が言った。

「付き合ってるアルカ？銀ちゃんとシグナム付き合ってるアルカ！？」

神楽が大声で言った。

「バカ。そんなんじゃないよ」

メンドくさそうに銀時は頭を掻いた。

「少なくともシグナムという女性の方は怪しかったですな。あれは

ホの字ですぞ」

東城が言った。

「誰が誰にホの字なの？」

バルディッシュを構えたフェイトがやってきた。

ちなみにバルディッシュは鎌の形態になってる。

「ちょ待てよ、フェイト。お前勘違いしてるって」

後ずさりながら、銀時が言う。

「問答無用！！」

「あああああ！！」

銀時は悲鳴を上げながら、バルディッシュを振り回すフェイトから

逃げた。

*

八神家。

銀時達のお陰で、シグナム達は夕飯に間に合った。はやてやすずかと一緒に鍋を食べていた。

「桂さん。遅いなあ」

「心配いりません、主ははやて。桂ならもうすぐ戻ってきます」

桂の事を心配してるはやてに、シグナムが安心させるように言った。

「ただいま」

と、桂が帰ってきた。

「桂さん！おかえり！」

はやてが笑顔で言った。

「遅くなつてすまない。そちらが月村殿か？」

「はい。初めまして。月村やすずかです」

やすずかは桂に挨拶した。

「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

「いちいち好物を言うんじゃないやねエエエ！！」

ヴィータが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。

「あかんよヴィータ！」

「ヴィータちゃん！」

『暴力はよくない！』

はやてとシャマル、エリザベスが止めに入った。

やすずかはオロオロして、ザフィーラは獣姿で様子を見守ってる。

シグナムは、はやて達の賑やかな光景を見て微笑んだ。

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さんからの質問。『教えて！銀八先生』のコーナーなんですけど、アシスタントは今後フェイト以外に追加したりする予定はないのでしょうか？もし追加があるならば、私としてははやてかすずかちゃんがいいなあ…』と思っってますけど…（苦笑）」。確かにそろそろ、私以外のアシスタントを出した方がいいんじゃないかな？」

銀八

「そうだな。誰にするかなあ。じゃあ希望通りにすずかにするか？俺は別に構わねーよ」

フェイト

「私も、すずかならいいよ」

銀八

「はい、すずかに決定」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『ポテトチップスサバイバル対決。神楽、お妙、九ちゃん対シグナム、ヴィータ、シャマル！』なんてやる機会があるのでしょうか？」

銀八

「はい、お答えしましょう。今のところ、やる予定はありません」

フェイト

「ペンネーム『FORUTE』さん。『第一部が終わって銀さんたちはなのはのDVDを見てましたが年中金欠の銀さんたちがDVDをみるための環境はあったのですか？』」

銀八

「はい。ズバリお答えしましょう。瞬間移動装置の実験の報酬で、金の代わりに源外にDVDデッキを作ってもらって、万事屋に持って帰りました。そのDVDデッキを使って『リリカルなのは』を観ました」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』からの質問。『34訓で銀さんが『かゝめ
くゝ波〜!』みたいな感じでやっていましたよね?じゃあst
rikers編のスバルも『シャイ ング・ファイ ガアアア!』
みたいな感じでやりそうな気がするんですがどうなんですか?』」

銀八

「やりません。多分。というか『Mさん』、かゝめくゝ波〜!じ
やなくて、かゝめくゝめく波〜!だから。間違えないように!」

フェイト

「次もペンネーム『Mさん』。『土方さんの中にいる人格トツシー
がなのはやフェイトのバリアジャケットを見た瞬間に写真を撮って
も良いか訪ねたらなのは達は、どんな反応をするでしょうか?』」

銀八

「そうだなあ。恥ずかしがりながらも、なんやかんやで写真を撮ら
せてあげると思います。頼み事とか断れないと思うんだよなあ。ど
うだフェイト?」

フェイト

「えっと……多分……そうかな……」

銀八

「当たっちゃったよ。それじゃあ、質問してくれた読者の皆さん。
廊下に立ってなさい」

第三十七訓：最近の携帯電話って通話機能がオマケみたいだよ（前書き）

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「えー、メッセージに質問がありました。『質問なのですがプレシアは銀時をどう思ってますか？確か一章のラストあたりで銀時との中をからかわれた時満更じゃない反応でしたね。ヤツパリ好きなんですか？これは親子での血で血を洗う争奪戦を期待出来そうですか？それとも親子井が期待出来そうですか？』。プレシアは銀さんの事を、完全に好きにはなっていません。ちょっと気になってるくらいです。まあでも銀さんを好きになる可能性はあります。争奪戦か親子井か？それとも何も起きないのか？先生にもわかりません！それじゃ『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十七訓。始まります」

第三十七訓：最近の携帯電話って通話機能がオマケみたいだよ

戦闘が終わった後、銀時達はリンディに呼ばれ、リビングに集まっていた。

「まったく。どうして結界を破ったんですか？」

リンディがため息をつきながら、銀時達に尋ねた。

「すみません。敵が張った結界だと思って、間違えて壊しちゃいました」

「すみませんと謝る銀時だが、反省してる様子は全く伺えない。

「貴方の無茶苦茶な行動は、今に始まった事じゃないですけど…周りの貴方達は彼を止める事が出来たはずだ！どうして一緒に結界を破壊したんですか！？」

今度はクロノが尋ねた。

「すまない」

九兵衛が頭を下げて謝った。

「若の責任ではありません！責任なら、この東城歩が取りましよう！」

東城は白い着物姿で、刀を持って座り込んだ。

「切腹する気ですか！？いやいやいや！やり過ぎですよ東城さん！」

新八達が、切腹しようとする東城を止める。

「東城！」

「な…なにもそこまでしなくても…！」

九兵衛とクロノが手を伸ばした。

その時、クロノの手が九兵衛の手に触れた。その瞬間、

「うがあああああ！！！」

九兵衛は思いつきりクロノを投げ飛ばした。

「ぐわっ！！！」

クロノは壁に叩きつけられた。

「クロノ！」

リンディがクロノに駆け寄る。

「ああ、言い忘れてました。若は女性は平気ですが、男に触れられると投げ飛ばしちゃうんですよ」

切腹をやめた東城が説明した。

「最初に言え!!!」

怒鳴りながらクロノが起き上がった。

「でも、男が苦手な男なんて珍しいねえ」

九兵衛を見ながら、エイミイが言った。

「何言ってるの？九兵衛は『女』だぞ」

銀時が言った。

「え？」

銀時の言葉に、『リリカルなのは』組は固まった。

「九ちゃんね、ちよつと事情があつて、今まで男の子として生きてきたのよ」

お妙がフェイト達に教えた。

「えええええっ!!!??」

フェイト達は驚いた。

どれぐらい驚いたかと言うと、今までテストで0点ばかり取ってた小学生が突然、100点を取った時くらい驚いた。とにかくすごい驚いた。

まさに衝撃の事実である。

「今まで全然気付かなかつた…!!」

クロノも驚愕の表情をしている。

「まあ九兵衛が女だつて知ってるのは極僅かな人間だけだからな」

「僕も土方さんに教えてもらつて、初めて知りましたし」

銀時と新八が言った。

こうしてフェイト達は、九兵衛が女性であるという事実を知った。

*

八神家。

深夜のリビングで、シグナム達が集まって話し合いをしていた。話の内容はシャマルを助けた仮面の男についてだ。

「ふむ。当面の敵にはならんだろうが、その仮面の男。信用できないな」

話を聞いた桂は表情を険しくした。

「ああ。闇の書の完成を望んでいるみたいだが…」

シグナムも複雑な表情をする。
「素顔も晒せん者など信用できん。これは俺の勘だが、おそらく仮面の男は最後の最後で俺達の敵になるだろう。用心するに越した事はない」

桂の言葉にシグナム達は頷いた。

恐らく仮面の男が、八神殿を監視している者だろう。桂はそう思った。

「家の周りには厳重なセキュリティを張ってあるし、エリザベスさんも護衛してますから、はやてちゃんに危害が及ぶ事はないと思います」

エリザベスを見ながらシャマルが言った。

エリザベスは、

『心配無用！任せとけ！』

と書かれたボードを掲げた。

「うむ。だが用心のために俺も八神殿の側にしよう。やはり転送魔法や空を飛べない俺は、足手まといになりそうだからな」

と、桂が申し出た。

「そんな事はない。桂がいなければ、我らは闇の書の力を使い、頁を減らしていた」

「そうですね。桂さんには感謝しています」

ザフィーラとシャマルが、桂に感謝の言葉を言った。

「…結果破つてくれて…ありがと…」

ヴィータも少し恥ずかしがりながら、桂に礼を言った。

「…なに。半分は銀時達に感謝してくれ」

微笑みながら桂は言った。

ふと桂がヴィータを見ると、ヴィータは浮かない顔をしていた。

「ねえ、闇の書を完成させてさあ、はやてが本当のマスターになつてさあ……それで、はやては幸せになれるんだよね？」

珍しくヴィータが弱々しい声で尋ねた。

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私達は、それを誰より知ってるはずでしょ？」

シャルルがヴィータの疑問に答えた。

「そうなんだけどさ。私はなんか…なんか大事な事を忘れてる気がするんだ」

よくわからないが、ヴィータは何か不安を抱いているようだ。

「ふむ。シャルル殿。少し闇の書を見せてはくれないか？」

「はい」

桂に言われて、シャルルは闇の書を渡した。

桂は手に取って闇の書を見た。頁が増えてる以外に、特に変わった所はない。

(やはり見ただけでは、何もわからぬか。しかしヴィータ殿は何を不安に思っているのか…)

そう思いながら、桂がシャルルに闇の書を返そうとした時、

ドクン

それは聞こえた。

「えっ!？」

突然聞こえた音に、桂は驚いた。

「ん?どうした桂？」

シグナムが尋ねた。

「どうやらシグナム達には、今の音は聞こえていなかったらしい。

(何だ今の音は！？何か…心臓の鼓動音のような音が…)

桂は闇の書を耳に当てた。

「桂さん？」

シヤマルが声をかけると、

「すまんが、皆静かにしてくれ」

桂が静かにするように言った。

言われた通りシグナム達は黙った。それからしばらくして、桂は耳から闇の書を離した。

(…気のせい…か?)

桂は腑に落ちない顔をした。

「シグナム殿。闇の書が完成に近づくと、何か心臓の鼓動音のようなものが聞こえたりするのかわ？」

「心臓の鼓動音？いや、そんなものは聞こえたりしないが」

桂の問いに、シグナムは首を傾げながら答えた。

「そうか。変な質問をした。闇の書を返そう」

桂はシヤマルに闇の書を返した。

(あの音がもし俺の気のせいでなければ…闇の書には、シグナム殿達も知らない『何か』があるのかわ?)

桂も不安を抱きながら、険しい表情をした。

*

翌日。

聖祥小学校。なのはのクラス。

銀時の、それはそれは適当な授業が終わって帰りの時間。教室に、フェイト、なのは、すずか、アリサがいた。

フェイトの手には、様々な種類の携帯電話が載ってる本があった。
「な…なんだか、いっぱいあるね」

「まあ最近はどれも同じような性能だし、見た目で選んでいいんじゃない?」

とアリサが言った。

「でも、メール性能がいいヤツがいいよね」

「カメラが綺麗だと、いろいろ楽しいんだよ」

なのはとすずかも、それぞれの意見を言った。

「ん〜」

フェイトは真剣な表情で、どれにするか迷ってる。

そこへ、

「何やってんだオメーら?」

銀時がやってきた。

「あつ、銀八先生!」

「フェイトちゃん携帯電話をどれにするか、みんなで相談してたんです」

「携帯電話?」

なのは達の言葉に、銀時は片眉を上げた。

「やっぱり色とデザインが大事でしょう」

「操作性も大事だよ」

アリサとなのはが意見を言い合う。

「たくつ、ガキのくせに携帯電話なんて持ちやがって」

と銀時が言った。

「銀と…銀八先生は携帯電話、持ってないの?」

フェイトが尋ねた。

「電話なら家にあるので充分だろ」

「でも携帯電話なら音楽とか聞けるし」

「携帯電話でテレビも見れるしね」

銀時の言葉の後に、なのは達が携帯電話の話で盛り上がる。

銀時は、なのは達の話の内容にイラついた。

「オイ、お前ら」

「え?」

銀時の不機嫌そうな声を聞いて、なのは達は銀時を見た。

「最近の携帯電話は、やれメール機能やら音楽機能やらテレビ機能やらカメラ機能やら付いてるけどよお」

銀時は、ドカツと机に座る。

「よく考えてみる。俺達は携帯電話で何をしたいんだ？テレビが見たいのか？音楽が聞きたいのか？画像が見たいのか？いや違う。俺達は、電話で話したいんだよオオオオオ！！」

銀時の叫びが教室に響いた。

*

時空管理局本局。

コーノとクロノ、エイミィは通路を歩いていた。

「じゃあ僕は闇の書について調査すればいいんだね」

「ああ、これから会う二人は、その辺に顔がきくから
そして三人は部屋の中に入った。

部屋には猫の耳と尻尾を持った、二人の女性がいた。

「リーゼ。久しぶりだ。クロノだ」

クロノが挨拶した直後、

「わああ！クロすけ、お久しぶりぶり〜！」

いきなりロツテが、クロノの顔を胸の方に抱き寄せた。

「ロツテ！離せコラ！」

「何だとコラ！久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ〜」

クロノが抵抗するが、ロツテから逃げられない。

「アリア！これを何とかしてくれ！！」

アリアに手を伸ばして、クロノは助けを求めた。
だが、

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、
満更でもなさそうだし」

と、あっさり見捨てられた。

「そんな訳ないだ…」

「ニヤァー!!」

クロノが言いかけた所で、ロツテがクロノを押し倒して何かいろいろやっている。

ユーノは呆然とその様子を見つめて、エイミイはアリアと会話をしながら見ている。

クロノは思った。何でこんなのが僕の師匠なんだ？誰か助けってくれ。この際誰でもいい。母さん、フェイト、なのは、銀時イイイイ!!
クロノは心の中で助けを求めて叫んだ。

やっと騒ぎが落ち着き、クロノは二人に事情を説明した。

「ああ、なるほど闇の書の捜索ね」

「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」
話を聞いた二人は、協力を承諾した。

「よろしく頼む」

クロノは協力してくれる事に礼を言った。

するとユーノが、隣に座ってるエイミイに小声で話し掛けた。

「エイミイさん。この人達って？」

「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様たち。魔法教育担当のリーゼ・アリアと近接戦闘教育担当のリーゼ・ロツテ。グレアム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫よ」

エイミイが二人を紹介した。ロツテが笑いながらユーノに手を振ると、ユーノは苦笑いしながら手を振り返した。

「実は、彼の事で頼みがあるんだ」

「食っていいの!？」

クロノが言った瞬間、ロツテはユーノを見た。フェレットに変身できるユーノから、鼠の匂いでも嗅ぎつけたのか。ユーノは怯えている。

「ああ。作業が終わったら好きにしてくれ」

「なっ！？おい！ちよつと待て！！」

クロノの言葉に、ユーノは慌てて立ち上がる。

その姿にみんな笑ってしまった。

「それで頼みって？」

アリアがクロノに尋ねた。

「彼の無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

世界の全ての書籍やデータが納められてる超巨大データベース『無限書庫』。

そこでユーノ達は、闇の書の情報を集める事にしたのだ。

*

帰りにプレシアと一緒に、フェイトの携帯電話を購入して、途中で食材の買物をしてマンションに戻った。

「たっだいま〜！」

しばらくしてエイミーが帰ってきた。

「艦長、本局に出掛けちゃった？」

「うん。アースラの武装追加が済んだから試験航行だっ」

エイミーの問いに、フェイトが答えた。

「武装って言うと、アルカンシエルか。ふう。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

ため息をつきながらエイミーが言った。

「クロノ君もいないですし。戻るまではエイミーさんが指揮代行だそうですね」

と、なのはが言った。

「え？エイミーが指揮代行？大丈夫なの？」

「責任ジューダイ！」

銀時とアルフが、からかうように言った。

「コラ、銀時、アルフ。そんな事言わないの」
プレシアが二人を注意した。

「ふつ、まあそれも物騒といえば物騒かな。まっ、とはいえ早々非常事態なんて起こるわけが…」

エイミイの言葉が言い終わらない内に、警報が鳴り響いた。

ハイ、非常事態発生！

新八が口を開いた。

「エイミイさん。非常事態、起きました…」

「…マジで…？」

呆然となつてエイミイが呟いた。

とりあえず銀時達は、司令室に向かった。モニターを見ると、シグナムとザフィーラが映っていた。

「文化レベル0。人間は住んでない砂漠の世界だね。結界を張れる局員の集合まで最速で四十五分。む、まずいなあ」

困った顔をするエイミイ。

フェイトとアルフはジッと画面を見つめ、顔を合わせると頷いた。

「エイミイ。私が行く」

「あたしもだ」

二人は出勤を申し出た。

「うん、お願い。」

エイミイは了承した。

「念のために、銀さんも一緒に行ってくれる？」

「俺も？しょうがねーな」

暑そうだな、とブツブツ文句を言いながら銀時は了承した。

「なのはちゃんや他のみんなはボックス。ここで待機してて」

「はい」

「わかりました」

なのはと新八達は、エイミイの指示に従った。

プレシアがフェイト達に声をかけた。

「フェイト、アルフ。気をつけてね」

「うん。行ってきます」

「おう！」

プレシアに返事をして、二人は司令室を出た。

「銀時」

「ん？」

プレシアに呼び止められ、銀時は足を止めた。

「お願いね」

「おお」

手を振ってプレシアに返事をしながら、銀時も司令室を出た。

くおまけく

生徒全員

「教えて、銀八先生！！」

フェイト

「今回から、すずかがアシスタントに加わります」

すずか

「アシスタントの月村すずかです。よろしく願いします。それでは早速一つ目の質問。ペンネーム『MN』さん。『ひとつ、質問なんですがこの作品の銀魂の時間軸みたいなものは吉原炎上篇の終わった後みたいなのですか当たっていますか？回答よろしく願います。』」

銀八

「はい。ズバリお答えしましょう。『MN』さんの言う通り、時間軸は吉原炎上篇が終わった後です」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『フェイトの恋のサポートは誰がしてくれるのですか？。シグナムの恋のサポートは誰がしてくれるのですか？』」

すずか

「えっ？フェイトちゃん好きな人がいるの？」

フェイト

「う……うん」

銀八

「恋のサポートか。二人とも誰にも話してないので、今のところサポートはありません。ってかこれからも無いかな。アルフは、フェイトが銀時を好きって知ってますが、サポートはしないとはいま

す。多分」

フエイト

「それじゃあ、すずかも加わった『教えて、銀八先生』をこれからもよろしくね」

銀八

「そんじゃあ、質問してくれた読者は、廊下に立ってなさい」

第三十八訓：騎士だって恋してる（前書き）

『Strikersは十年経った状態ですが、銀魂の世界はどうな
んですか？』という質問もよく来るのですが、ネタバレになっ
てしまっているのでお答えできません。

それでは『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十八訓。始まり
ます！

第三十八訓：騎士だって恋してる

砂漠の世界で、シグナムは巨大な蛇のような生物と戦っていた。

「少々厄介な相手だな」

強さなら銀時の方が上だが、この巨大蛇は砂の中から攻撃してきて厄介だ。

シグナムがカートリッジをロードしようとした時、背後に巨大蛇の尻尾が出現した。

「はっ！」

シグナムは、巨大蛇の尻尾から現れた触手に捕まってしまう。

「く…しまった」

巨大蛇がシグナムを睨む。

巨大蛇の触手がシグナムを締め付ける。

「ぐう…うわぁ！」

締め付けられ、シグナムが悲鳴を上げる。

巨大蛇が、先端の尖った尻尾をシグナムに突き刺そうとする。

その時、数本の金色の魔力刃が巨大蛇に突き刺さり、シグナムを縛る触手も切った。

シグナムは上を見た。

そこには、金色の魔法陣を展開してるフェイトがいた。

「ブレイク！」

フェイトの言葉と共に、魔力刃が爆発して巨大蛇を倒した。

*

ザフィーラは、爆発音がした方を見つめた。

「ご主人様が心配かい？」

ザフィーラは声がした方を見た。

そこにいたのはアルフだった。

「お前か」
ザフィーラとアルフが睨み合う。
「シグナムは我らの将だが、主ではない」
睨み合ったまま、ザフィーラとアルフは構える。

*

フェイトにやられた巨大蛇は、砂の中に逃げていった。
フェイトとシグナムが空中で対峙する。
その時、
「フェイトちゃん！助けてどうするの！捕まえるんだよ！」
エイミイが通信で怒った。
「あつ、ごめんなさい。つい…」
フェイトはエイミイに謝った。
「礼は言わんぞ、テストロツサ」
「お邪魔でしたか？」
「蒐集対象を潰されてしまった」
言いながらシグナムは、カートリッジをロードする。
「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」
「そうか…悪人だったな、私は」

*

司令室では、ヴィータの姿を確認した。
「本命はこっち。なのはちゃん！」
「はい！」

エイミイの言葉に、なのはは頷いた。

*

フェイトとシグナムは地上に降りて対峙した。

「預けた決着は、出来れば今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私も、そのつもりで来ました」

互いに武器を構える。

「ただ…戦う前に一つ聞いていいですか？」

「ん？」

シグナムは、かすかに首を傾げた。

「シグナムは…：銀時が好きなんですか？」

「なっ…！？」

フェイトのあまりに予想外の質問に、シグナムは動揺して顔を赤くした。

これから戦うという時に、フェイトからそんな質問をされるとは思わなかった。

「答えてください」

シグナムを真っ直ぐに見つめながら、フェイトが言った。

シグナムは、どう答えるべきか迷った。しばらく考えた後、構えを解いて左手を胸に当てた。

「これが好きというものが、わからんが…：銀時の事を考えると…胸が苦しくなる…」

胸に手を当てたまま、シグナムが答えた。

「それは貴女が、銀時を好きという事です」

フェイトが言った。

「…そうか…：これが『好き』というものなのか…」

シグナムはゆっくりと目を閉じた。

この胸の高鳴り。熱くなる体。抑えられない気持ち。

シグナムは目を開いた。

「私は銀時が好きだ」

シグナムは、自分の気持ちをハッキリと口にした。

「私も銀時が好きです」

フェイトもシグナムに、銀時に対する想いを言った。

シグナムは、再びレヴァンティンを構える。

「戦う理由と、負けられない理由が増えたな」

「はい」

フェイトもバルディッシュを構える。

「はあああああー!!」

互いに譲れない想いを胸に、シグナムとフェイトは同時に駆け出した。

*

その頃、銀時は、

「あああああー!!」

叫びながら走っていた。

叫びながら、後ろから迫り来る巨大蛇から全速力で逃げていた。

「おかしい!絶対おかしいイイイイ!!何で俺だけこんな目に遭ったんだ!?何でフェイト達とはぐれてんだ!?!」

銀時は涙目になる。

暑さで汗だくになり、息も荒く、体もバテバテだった。巨大蛇が雄叫びを上げながら迫る。

「フェイトオオオ!アルフウウ!シグナムウウウ!ヘルプミーイイイイイ!!」

砂漠に銀時の叫び声が響渡った。

*

なのははヴィータと対峙していた。

何とかヴィータの話の間こうとするが、ヴィータは話す気はないらしい。ヴィータは赤い魔力球を出した。グラーファイゼンで赤い魔力球を砕き、赤い閃光を放つ。閃光で目くらましをして、ヴィータ

はなのはから離れた。転送魔法で離脱するためだ。だが、ここで予想外の事態が起きた。遠くにいるなのはが、レイジングハートをヴィータに向けて魔力を溜めているのだ。

「まさか…！撃ってくるのか!？」

ヴィータは、なのはの射程距離を見誤ったようだ。なのはのレイジングハートから、桜色の閃光が放たれた。閃光は真っ直ぐにヴィータに迫る。閃光が当たり、爆発した。煙が晴れていく。

煙の中から、障壁を張った仮面の男が姿を現した。

「あ…あんだ…」

仮面の男の後ろにいるヴィータは戸惑っている。なのはも驚いている。

仮面の男は、ヴィータに少し顔を向けた。

「行け。闇の書を完成させるのだ」

*

フェイトとシグナムの激闘は続いていた。

フェイトはスピードを活かした攻撃を繰り返し、シグナムは剣と鞘を巧みに操って攻撃を防ぎ、反撃する。

両者は、一旦距離を離して動きを止めた。二人とも息が乱れている。

（流石に速いな……目で追えない攻撃が出てきた）

（今はスピードで翻弄してるけど、長くは続かない）
両者は、次の一撃で勝負を決めようとする。

「強いな、テストロッサ。それにバルディッシュも」

「シグナムとレヴァンティンも」

二人は、互いの強さを認め合う。

シグナムはレヴァンティンと鞘を構える。

（闇の書も、銀時への想いも譲れない！）

フェイトもバルディツシユを構える。

(この人に勝ちたい。だから全力を尽くす！)

二人が動き出そうとした瞬間、ヤツが……仮面の男が現れた。仮面の男は、背後からフェイトのリンカーコアを取り出した。

「え……？」

フェイトは呆然となつて、自らの体を貫いてる腕を見た。

「貴様……！」

シグナムが仮面の男に向かって叫ぶ。

だが仮面の男はそんな事、気にも止めない。

「さあ、奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。

シグナムは、仮面の男を睨んだ。

確かに、主はやてのためにもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れる事は望んでいない。

「どうした？早く奪え」

仮面の男が、シグナムにリンカーコアを奪うよう促した時、

「オイ」

仮面の男の背後から声が聞こえた。

直後、大きな打撃音と共に仮面の男が吹き飛んだ。

「がはっ……！」

仮面の男は、十数メートル先まで吹き飛び、砂漠の地面に倒れた。

シグナムは、仮面の男を吹き飛ばした人物を見た。

銀髪の男が右手に木刀を持ち、左腕でフェイトを抱き抱えていた。

巨大蛇から逃げ切った銀時だった。

「銀時……！」

名を呼びながら、シグナムは銀時に駆け寄った。

その時、シグナムは一瞬たじろいだ。

銀時は鋭い眼で仮面の男を睨みながら、静かな怒りを燃やしていた。

「……シグナム。フェイトを頼む」

そう言つて、銀時はシグナムにフェイトを預けた。

銀時は仮面の男に向かって歩き出した。

シグナムは銀時の背中を見つめた。

（あれほどの怒りを表した銀時は初めて見る…）

砂漠の暑さの中、シグナムは冷汗を流した。

仮面の男が、頭を押さえながら起き上がった。

（な…何だ？一体何が起こった！？一瞬意識が吹き飛んだぞ！）

仮面の男は、頭を左右に振った。

立ち上がるうとした時、膝がガクガク震えた。

（ば…馬鹿な！？今の一撃でもう足にきている…！）

動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。

その時、

「オイ。素顔も晒せねえ下衆仮面野郎」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。

仮面の男は銀時を見た。その瞬間、銀時から凄まじい怒気を感じ、

仮面の男は思わず震え上がった。

「他人の大事なモンに手エ出したらどうなるか、教えてやろうか？」

銀時の眼は、獲物を狩る獣の眼になっていた。

仮面の男は、やってはいけない事をやり、夜叉の怒りに触れてしまった。

くおまけ

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

すずか

「ペンネーム『FORTE』さんからの質問です。『プレシアはアルハザードに病気を治してもらったので普通に魔法が使えると思います。ですが戦闘に加わることはないのでですか？（まあ戦闘に出たらほぼ最強クラスだと思うので出さなくてくれたほうが嬉しいですが）。そしてプレシアの普段着はどんな感じですか？まさかあのラスボスみたいな魔導師かつこが普段着ってことはないですよ？第一部で銀さんがジャンプを見つけたらなかったのは偶然置いてないだけなのはこの世界にジャンプがないというわけではありませんよね？新撰組メンバーはまたなのはこの世界に生きたいと思っただけですか？」。ふう〜。よ…読み終わった〜」

フェイト

「すずか、お疲れ様」

すずか

「うん」

銀八

「んじゃ質問の答えいくか。プレシアが戦闘に参加する予定は今のところありません。が、もしかしたら参加する時があるかもしれない。プレシアの普段着は、リンディが着てる普段着と似たような服を着てます。なのはの世界にジャンプはありません。銀さんにとつては辛いです。真選組は話の都合上、今回は登場しません。またなのはの世界に行きたいなあとは思ってます。後、『FORTE』さん。誤字の指摘をします。『新撰組』ではなく『真選組』です。『生きたい』ではなく『行きたい』です。注意するように」

422

フエイト

「ペンネーム『Mさん』からの質問。『A・S編でグレアムが闇の書を封印する為にはやて諸共封印する場面が原作にありましたけど、銀さんや桂、シグナム達がブチ切れてグレアムに殴りそうな気がします。どうなんですか?』」

銀八

「銀さん達がブチ切れたら、グレアムのオッサンは死んじゃうでしょうね。どう動くかは、今後の展開次第です」

「すずか

「ペンネーム『Mさん』からの二つ目の質問です。『銀魂の原作で竜宮編がありますよね？』玉手箱G』って言うアイテムがスバルみたいな戦闘機人には、効かないと思うのですが。どうなんですか？』

「

銀八

「何故に『玉手箱G』が出てくるんだ？まあいいや。申し訳ありませんが、その質問にはお答えできません。実は作者のヤローは、まだStrikers編を知らないのです…。ホントすいません」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんはなのはの世界のアダルトDVDを買うでしょうか？』。アダルトDVDって何？」

銀八

「子供は知らなくていいんだよ。ってか何故こんな質問をするのか知りたいわ。まあ時間と金があれば買うんじゃないかね？」

すずか

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『定春って体毛白いのに結構腹黒い性格ではないですか。もし犬語の翻訳機みたいな使って『なのはとかフェイトとかクロノについてどう思う？』って聞いたたら、定春はどう答えてくれるでしょうか？』。定春君、大きくて可愛かったな」

銀八

「アシスタントにすずかを推薦した『ゲロ口軍曹』さんか。そんなに知りたきゃ本人に聞くか。犬語翻訳機『わんじゃこりゃああ』」

定春

「わんっ！」

翻訳機『ぶつちやけクロノって威張ってばかりで、あんまり役に立ってねーよな。フェイトはまあ、いいんじゃない？頑張ってると思うよ。なのははこの小説では、あんまり活躍してないよね？新八より影薄いんじゃない？』

なのは

「定春君……少し、頭冷やそうか……」

すずか

「なのはちゃん……!？」

銀八

「白い悪魔が登場したので、今回の『教えて、銀八先生』はこれにて終了!ばいばい!」

フエイト

「質問してくれた読者の皆さんは、廊下になつてなせう」

第三十九訓：真実は意外と近くにある（前書き）

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第三十九訓。 始まります！

第三十九訓：真実は意外と近くにある

最悪だ。

仮面の男は思った。よりもよつて、この男と対峙するなんて。しかもフェイト・テストロツサに手を出した事で、男の怒りを買ってしまった。

管理局で噂になっている、『ジュエルシード事件』で魔法を使わず、木刀一本で活躍した男。

『銀髪の侍』坂田銀時。

銀時は鋭い眼で仮面の男を射抜き、仮面の男も銀時を見つめる。

(……だが所詮は魔法も使えない、ただの人間。今の不意打ちも油断さえしなきゃ……)

と仮面の男が思った直後、銀時が動いた。

砂を蹴って走りだし、一気に仮面の男との距離を詰める。

「速……!!」

仮面の男が驚く間もなく、銀時は木刀を横薙ぎに振る。

仮面の男は障壁を張る。

だが障壁は、木刀の一撃で粉々に砕け散った。

「ば……馬鹿な！？障壁を一撃で砕いた!!」

仮面で顔は見えないが、明らかに動揺している。

動揺しながらも、仮面の男は後ろに下がって、銀時から離れようとする。だが銀時は仮面の男を逃がさない。素早く動いて、仮面の男との開いた距離を詰める。

「うおおおお!!」

雄叫びを上げながら、再び木刀を振るう。

今度は一撃ではなく、連撃を繰り出す。仮面の男は障壁と両腕で辛うじて防御する。

(な……なんてスピードとパワーだ!!本当に人間か!?!しかも剣筋が読めない!なんて無茶苦茶な攻撃だ!!)

まさに防戦一方。

仮面の男は銀時の猛攻を受けて、反撃する事が出来ない。

銀時は、容赦のない猛攻を続ける。

「この仮面野郎！テメーの目的は何だアア!？」

銀時は、木刀を上段から思いつき振り下ろす。

障壁と両腕の防御を破って、仮面の男の頭に木刀が当たった。

「ぐあ……!!！」

仮面の男は、なんとか意識を繋ぎ止める。

ここで倒れたら計画が水の泡だ。逃げなくては。この男には、どうやっても勝てない。強すぎる。今はとにかく逃げるんだ。

仮面の男は銀時から離れて、拳を振り上げた。

「はあっ!!！」

砂漠の地面に拳を振り下ろし、砂を巻き上げた。

「くっ!!！」

思わず銀時は目を閉じた。

砂埃がおさまり、目を開けると仮面の男の姿はなくなっていた。転送魔法か何かで逃げたらしい。

一度舌打ちした後、仕方なく銀時は木刀を腰に差した。

そしてシグナムとフェイトの方を向いた。

「フェイト!!！」

銀時はシグナム達に駆け寄った。

「心配ない。気を失っているだけだ」

シグナムが銀時に言った。

「そうか……」

フェイトが無事で、銀時はとりあえず安心した。

銀時は、シグナムからフェイトを受け取る。

「あの仮面野郎は何者だ?」

銀時が尋ねた。

「我らにもわからない。理由はわからないが、奴も闇の書の完成を望んでいる」

「どういう事だ？闇の書は主以外は使えねえはずだろ？」

「ああ。だから何故奴が闇の書の完成を望んでいるのか、わからないんだ」

複雑な表情でシグナムが答えた。

「はやては大丈夫なのか？」

「主はやてには、桂とエリザベス、それにシャマルが護衛している。万が一にも主はやてに危害はないはずだ」

「そうか。まあ、ツラがいりゃあ大丈夫だろ」

桂はアホな時があるが、強いという事は知ってる。

それにエリザベスも、なんやかんやで結構強かったりする。中身オツサンなのに。

「……………」

シグナムは、ジツと銀時を見つめた。

私は銀時の事が好きだ。テストロツサのお陰で、ようやく自分の気持ちがあハッキリとわかった。

シグナムは拳を強く握った。

だが、その想いは伝えられない。私と銀時は敵同士。その関係が余計に胸を苦しめる。こんな形で出会わなければ、自分の想いを銀時に伝えられたかもしれない。

そう思いながら、シグナムは一瞬辛い表情をした。

「では銀時。私はもう戻る。いつまでも此処にいたら管理局の連中がくるからな」

シグナムは、いつもの表情に戻って銀時に言った。

「ああ」

銀時は短く返事をした。

銀時の返事を聞いた後、シグナムは去っていった。砂漠には銀時とフェイトだけが残った。

「そっぴゃ……………」

残された銀時は呟いた。

「俺らどうやって帰るの？」

フェイトを抱き抱えながら、銀時は呆然と砂漠に立ち尽くした。しばらくしてアルフがやってきて、帰ることができた。後でエイミイに、シグナムを逃がした事で怒られたが、銀時はそれを可憐にスルーした。

*

時空管理局本局。

フェイトは医務室で寝ている。特に外傷はなく、リンカーコアも無事で、しばらくすれば目を覚ますそうだ。ベッドで寝ているフェイトの隣に、プレシアが付き添っている。

*

会議室。

銀時やリンディ、クロノ、なのは達が集まっている。その中には、グレアム提督の使い魔のロッテもいた。

「銀さん達が出動してしばらくして、管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで指揮や連絡が取れなくて…ごめんね。私の責任だ」

エイミイが皆に謝った。

「んなことないよ。エイミイがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だって残せた」

ロッテがエイミイを励ましながら、仮面の男の映像を出した。

「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて…ユニットの組み替えはしてるけど…もっと強力なブロックを考えなきゃ」

リンデイの疑問にエイミイも意見を言った。

「それだけ凄い技術者がいるって事ですか？」
なのはが尋ねた。

二人の話の内容は、なのはには複雑だったが、大変な事だということ事はわかった。

一方、銀時はイラついていた。

これだけの人数がいて何故誰も『内部犯行』を思いつかないのか。フェイトが被害に遭った事で、銀時は少し熱くなっていた。多分仮面の男は、桂が言っていたはやてを監視してる奴か、その仲間。管理局内部に仮面の男、もしくはその仲間がいるかもしれないから、余計な事は言わないつもりだったが、我慢できなかった。

「あのよオ」

銀時が頬杖をつきながら口を開いた。

皆の視線が銀時に集まる。

「内部犯行だつて誰も思いつかないの？」

イラついた声で銀時が言った。

「内部犯行だつて!？」

クロノが驚きの声を上げた。

他の皆も驚いている。

「管理局内部の人間なら、システムのクラッキングも楽にできんじやねーの？」

「そんな…管理局の人間が……」

銀時の意見に、リンデイは驚きを隠せなかった。

他の皆も信じられないと言った顔をしている。どうやら本当に誰も、内部犯行を考えていなかったようだ。その事に銀時は少し呆れた。

「…だけど…どうして管理局の人間が、捜査の邪魔をして闇の書の完成の手助けを？」

リンデイが銀時に尋ねた。

「さあな。そこまではわからねエ」

ため息をつきながら、銀時は答えた。

「そうですね……アレックス。アースラの航行に問題はないわね？」
「ありません」

「うん。では予定よりも少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します」

アレックスに確認してリンデイが言った。

「各位は所定の位置に」

「はい！」

リンデイの言葉に、銀時以外の全員が応える。

「クロノ」

「ん？」

銀時に呼ばれ、クロノは顔を向けた。

「アイツ、誰？」

ロツテを指差しながら、銀時が尋ねた。

「リーゼ・ロツテ。僕の師匠で、グレアム提督の双子の使い魔だ」

クロノが答えた。

グレアム提督と言う言葉に、銀時はピクリと反応した。

グレアムの使い魔？双子？

銀時は考えた。

（そういえば仮面野郎は、なのはの所に現れて瞬間移動したようにフェイト達の所に現れた。最速で転移しても二十分かかるものを、仮面野郎はわずか九分で移動したとエイミイが言ってたな……）

銀時は考え続けた。

闇の書。仮面の男。グレアム提督。双子の使い魔。

（待てよ！もしかしたら……！）

銀時の中で、仮面の男の謎が解けた。

（なるほどな。わかったぜ、仮面野郎の正体と目的……その黒幕がな……）

*

翌朝。

八神家。

シグナム達は、朝早くにリビングに集まっていた。

「また仮面の男が現れたのか？」

話を聞いた桂が聞いた。

「ああ」

シグナムは頷いた。

「助けてもらったって事で…いいのかしら…？」

戸惑いながらシャマルが言った。

「…だが、私は仮面の男のやり方は気に入らない」

シグナムが嫌悪感を露にして言った。

その時、はやての部屋からガシャンと何かが倒れる音がした。シグ

ナム達は、すぐにはやての部屋に駆け付けた。

部屋の中ではやては、苦しそうに胸を押さえながら倒れていた。

「はやて!!」

ヴィータがはやての名を叫ぶ。

「シグナム殿！救急車を呼んでくれ！」

「ああ！」

桂に言われ、シグナムは電話で救急車を呼ぶ。

タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

*

病院。

「もう大丈夫みたいね。良かったわ」

はやての治療を担当している、石田先生は安心した。

はやては病室のベッドにいて、今は落ち着いた様子をしている。病

室には桂とシグナム達もいる。ちなみにザフィーラとエリザベスは

目立ち過ぎるので、家で留守番をしている。

「はい。ありがとうございます」

はやてが石田先生にお礼を言う。

「うむ。安心したぞ八神殿」

桂達が石田先生の言葉に安堵する。

「せやから、ちよい目眩がして胸と手がツツただけって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」

と、はやてが言った。

「いや、あの様子を見たら誰でも焦るだろう」

「はい。何かあってからでは遅いですから」

桂とシグナムが言った。

闇の書の侵食が進んでいる。どうやらあまり時間は無いようだ。

「まあ来てもらったついでに、ちよつと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしていつてね」

「はい」

石田先生の言葉に、はやては返事をした。

「さて、シグナムさん、シャマルさん。ちよつと……」

石田先生が二人を呼んだ。

恐らく入院の話とかだろう。三人は病室を出た。

石田先生との話で、はやては入院することになった。

*

銀時、クロノ、エイミィ、ロツテは司令室にいた。

これからユーノが、闇の書について報告をするのだ。

「まず、『闇の書』っていうのは本来の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅する魔導書」

ユーノが報告をする。

銀時達は、黙ってモニターを見つめながら報告を聞いている。

「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプロ

グラムを改変したからだと思う」

「ロストログアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする人が今も昔もいるってことね」

アリアが呆れた口調で言った。

「転生と無限再生はその改変が原因か」

クロノが呟いた。

「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

クロノが尋ねる。

「それは今調べてる……ただ……」

「ただ？どうした？」

ユーノの様子に、クロノは首を傾げた。

「闇の書を調べてる内に、気になる文を見つけたんだ」

「気になる文？何だよ？」

今度が銀時が尋ねた。

「一冊の本に書いてあったんだ。『闇の書は、魔導師の技術の研究のために作られた物ではない』って」

「なっ！？さっき言ってた事と違うじゃないか！」

ユーノの言葉に、クロノは思わず声を大きくする。

「うん。だから僕もおかしいなって思ったんだ。気になって少し調べてみたんだけど、他には何も記されてなかった」

「何かの間違いじゃないのかな？」

エイミイが言った。

「もしそれが本当だとしたら……闇の書って一体何なんだ？」

とクロノが言った。

銀時は表情を陰しくした。

(…どうやら、俺達が思ってる以上に厄介な事になりそうだな……)

*

司令室を出た銀時は、フェイトが眠ってる病室に向かった。中に入ると、フェイトは目を覚ましていた。病室にはプレシアとアルフもいる。

「銀時」

「よオ。もう大丈夫そうだな」

「うん。心配かけてごめんね」

微笑みながらフェイトが言った。

「銀時。フェイトを護ってくれてありがとう」

プレシアが銀時に礼を言った。

「なアに。礼なんていらねーよ」

「素直じゃないな」

アルフがからかうように言った。

くおまけ

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『セルク』さんからの質問。』ところで銀八先生は学校で何を教えてるんですか？やっぱり保険体育なんですか？フェイト達の年齢ではまだ早いと思いますよ』。私達には、まだ早いってどうして？」

銀八

「子供は知らなくていいんだよ。はい、お答えしましょう。国語を教えるフリをして、教科書の内側に『ジャンプ』を忍ばせて、適当に授業をしています。ちなみにジャンプは源外のじーさんから送ってもらっています」

すずか

「ペンネーム『Mさん』。』質問です。38訓の『教えて！銀八先生！』で定春の質問をして終わった時になのはと定春が喧嘩みたいな感じになっていましたけど、どっちが最強最悪なんですか？』。あの時の、なのはちゃん恐かったなあ…」

銀八

「ズバリお答えしましょう。なのはも強いけど、定春も狛神の姿になっただけ強いからな。でも恐さではなのはかな。なので、最強は狛

神姿の定春。最悪は白い悪魔なのは。こんなとこだな」

フェイト

「ペンネーム『名無し3等兵』さん。『質問なんですが、エリザベスははやての護衛をしているみたいですが、どのくらい強さでしょうか？個人的には新八の372K以上だとおもいますが』」

銀八

「そりゃあエリザベスは強いですよ。持ってるボードで天人をバツタバツタと倒しちゃうし。新八より強いんじゃないかね？ちなみに新八は362Kだから。勝手に数値上げないように」

すずか

「ペンネーム『烈火竜』さん。『銀八先生に質問です。学校での銀八先生の評価はどんなものですか？』。銀八先生…あんまりちゃんと授業やってませんよね…」

フェイト

「あんまりって言うか…ほとんどやってないかも……」

銀八

「まあ評価も適当って事で。はい次の質問」

フェイト

「この質問に対する答も適当だ!」

すずか

「えっと…ペンネーム『アスカ』さん。『質問です。Strike S編ではすずかちゃんの出番ないと思いますが、質問コーナーでは引き続きいるのでしょうか?教えて下さい』。銀八先生!教えて下さい!」

銀八

「引き続きいますよ。別に本編で出番がないからって、質問コーナーから消えるわけじゃないから」

すずか

「よかった」

フェイト

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『第二章で銀さんがフェイトのピンチを救って再びなのは世界に登場した際『通りすがりの侍だ』とか何とかシグナムさんに言ったじゃないですか。あれってもしかして、今放送してる『通りすがりの仮ライダーだ』な人の台詞を自分風にアレンジしていつてみたのでしょうか?』」

銀八

「いや、作者は特に意識して書いたワケじゃねーぞ。ってか今の仮ライダーって、そういう台詞言うの?作者、仮ライダー観てな

いからなあ。仮 ライダーク ガなら観てみたいけど…コレも
う古いな」

フェイト

「最後の質問。ペンネーム『ダークキバ』さんから。『銀さんって
けっこうモテテルけど銀さんうれしいですか』」

銀八

「その前に、銀さんはフェイト以外の女性が自分に好意を抱いてる
事を知りません。気付いてません。だから嬉しいとかは、まだわか
りません。今回はこんなところか。皆、質問サンキューな。それじ
ゃあ皆仲良く、廊下に立ってなさい」

第四十訓：みんな小さい頃はサンタを信じていた（前書き）

うおおおお！質問が多すぎて答えれん！！こんなに質問が来るなんて、マジビックリです。予想外です。なので、銀八先生の答えが遅れても怒らないでくださいね。

！
それでは『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十訓。 始まります

第四十訓：みんな小さい頃はサンタを信じていた

フエイトとなのはは、学校に向かっていた。

フエイトは体に異常はなく、すっかり元気になっていた。二人共しばらくは呼び出しがあるまでは、普通の生活を送るように言われている。

バスに乗り、学校に到着。

「入院？」

「はやてちゃんが？」

教室に入った二人は、すずかから、はやての入院を知った。

「うん。昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうなんだけど…検査とかいろいろあってしばらくかかるって…」
心配そうな表情で、すずかが言った。

「そつか…じゃあ放課後にお見舞いに行く？」

アリサが提案した。

「え？いいの？」

すずかがアリサに聞いた。

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいじゃない」

「うーん。それはちよつとどうかと思うけど…」

と、なのは。

「でも、いいと思うよ」

フエイトは頷いて言った。

「ありがとう！」

すずかは笑顔で、みんなにお礼を言った。

その時、教室の引き戸が開かれて、銀時が入ってきた。

「あつ、銀八先生。おはようございます」

銀時に気付いたすずか達が挨拶した。

「おお」

銀時は短く返事をした。
すると銀時は、フェイトに顔を向けた。
「フェイト。ちょっと携帯電話貸してくんない？」
「え？」

*

マンション。

部屋にはプレシアが一人でいた。

リンディ達はアースラの方にいるので、部屋にはプレシアしかいないのだ。

プレシアが本を読んでいると、テーブルに置いてある携帯電話が鳴った。フェイトの携帯電話と同じ型のやつだ。携帯電話を手に取りつてボタンを押す。

「もしもし？」

「おお、プレシア。俺だ。銀時だ」

「銀時！？」

プレシアは驚いた。

フェイトの携帯電話からかかってきたのに、何故銀時が出てくるのか？

「それフェイトの携帯電話じゃ……」

「そうだよ。フェイトから借りてんだよ」

「貴方ねえ……自分の携帯電話を買ったらどうなの？」

少し呆れながらプレシアは言った。

「金がねーんだよ」

銀時が即答した。

金がない。

それを言われたら、プレシアはもう何も言い返せなかった。

「それで？用件は何？」

「仮面野郎の正体と目的がわかった」

銀時が言った。

それを聞いた瞬間、プレシアの顔が険しくなった。眉を寄せて鋭い目つきになる。

仮面の男。自分の娘に手を出した謎の男。プレシアの中で怒りが込み上げてきた。

「それで、仮面の男の正体は誰なの？」

「グレアムってオッサンの双子の使い魔だ」

「グレアム提督の！？」

プレシアは驚いた。

まさか管理局の人間だとは思わなかった。プレシアはすぐに冷静になって考えた。姿は恐らく変身魔法で変えているのだろう。

「という事は…黒幕はグレアム提督？」

「ああ」

「でも、どうしてグレアム提督が？」

プレシアが疑問を言った。

闇の書は主以外には使えない。グレアム提督もその事は知っているはず。

「プレシア。アンタの前に、自分では使えない強力な道具があったらどうする？」

いきなり銀時は質問をした。

プレシアは、質問の意図がわからなかったが、答える事にした。

「…そうね……どこかにしまっておくか、処分するか……！！！」

そこでプレシアは、ハツとなった。

「まさか……！」

「ああ。グレアムの狙いは、闇の書の破壊。もしくは封印だ」

銀時がグレアムの目的を口にした。

今まで銀時達は、大きな勘違いをしていたのだ。

仮面の男の目的は、完成した闇の書を何らかの方法で横取りする事だと思っていた。

だが、実際はその逆。目的は闇の書の封印だった。

「…リンディから聞いた事があるわ。グラム提督は十一年前、闇の書の封印に失敗して、クロノの父親クライドを失ったと……」
十一年前の悲劇。

あれからグラム提督は責任を感じ続けているらしい。

「動機はそれだな。闇の書への復讐」

「でも…それなら何故闇の書の完成を？それに闇の書の封印は不可能のはずよ？」

「多分、その封印方法は、闇の書が完成した後じゃなきゃできねーんだろ。どんな方法かはわからねーがな」

流石の銀時も、封印方法まではわからなかった。

「そう…」

プレシアは短く答えた。

「それにしても、一体どうやって気付いたの？」

「前の戦闘で仮面の男は、なのはのいた世界からわずか九分後にフイト達がいた世界に現れた。どんなに急いでも二十分はかかるとエイミイが言ってた。そこで双子の使い魔の事を知って思ったんだ。もしかしたら、仮面の男は『二人』いるんじゃないかってな」

「なるほど。姿が同じだから、先入観で仮面の男は一人だと認識してしまっただのね」

プレシアも納得した。

「伝えたい事はこれだけだ。まあ何の証拠もねえ俺の想像だけどな…」

前の会議の時にリンディ達に内部犯行を言ったが、あまり信じてもらえなかった。

だがプレシアは違った。

「そんな事ないわ。私は貴方の言う事を信じる。教えてくれてありがとう」

プレシアは、銀時の言葉を信じて礼を言った。

「そうか。おっと、もう授業が始まっちゃうぜ。それじゃあな」
「ええ」

そこで電話は切れた。
プレシアは、これからどう動くべきか考えた。

*
放課後。

すずか、アリサ、フェイト、なのは、それに銀時の五人ははやての病室に向かっていた。四人がはやての見舞いに行くと聞いた時、銀時は内心焦った。下手をしたら、シグナム達と鉢合わせしてしまう。それにはやての入院にも驚いた。そこまで闇の書の侵食が進んでいたのか。

病室に入ると、シグナム達の姿はなかった。どうやら蒐集作業をしているようだ。

その代わり、はやての隣に桂がいた。

一瞬、フェイト達にバレないか冷や冷やした。以前の戦いで桂は、キャプテン・カツラという変装はしていたが、ハッキリ言って薄っぺらい変装だ。だが、意外にもフェイトとなのは桂に気付かなかった。

「はじめまして」

と、桂に挨拶している。

マジで気付いてないのか？

銀時は、安心したような呆れたような複雑な気分になった。

*
銀時と桂は一旦病室から出た。

二人とも互いに状況や情報を話した。はやては闇の書の侵食が進み、このままの速度でいくと持って一月。もしかしたらもっと短いかもしれないらしい。銀時からの情報にも桂は驚いた。

「闇の書の封印か…それは闇の書が完成した後に行われるのか？」

「ああ。多分な」

銀時は頷いて答えた。

「という事は…次にヤツらが動くのは、闇の書が完成した時か……」
真剣な顔で桂は腕を組んだ。

「とりあえず、はやての方は任せませ。ツラ」

「ツラじゃない桂だ」

*

12月23日。

すずかはメールを打っていた。

『明日の終業式の帰りの件。みんな大丈夫ですか？』
メール送信。

『はやてにプレゼントを渡しに行くんだよね』
と、フェイト。

『でも、内緒で行って大丈夫かな？』
と、なのは。

『まっ、もし都合が悪かったら、石田先生に渡してもらえばいいし』
と、アリサ。

『それじゃ、銀八先生も誘って、また明日ね。おやすみ』
最後にすずかが送信して、メールのやり取りは終わった。

*

12月24日。

はやての病室。

シグナム、シャマル、ヴィータがお見舞いに来ていた。桂もいつも通りいる。今回もザフィーラは家で留守番だが、エリザベスは病院の近くで待機している。

「はやて…ごめんね。あんまり会いに来れなくて」

「うっん。元気やったか？」

「めっちゃめっちゃ元気！」

はやてがヴィータの頭を撫でて、ヴィータは元気に答えた。

シグナムとシャマル、桂も微笑みながら、その光景を見ていた。

その時、ドアがノックされた。

「こんにちは」

ドアの向こうから、すずかの声が聞こえた。

シグナム達は焦った。

連絡がなかったので、今日は見舞いに来ないのだと思っていた。

「あれ？すずかちゃんや。はい、どうぞ」

はやてがすずかに返事をして、中に入るように促す。

「こんにちは」

ドアが開かれて、すずか達が病室に入ってきた。

「あ、今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは、はじめまして」

と、すずかとアリサが言う。

「あっ!？」

なのはとフェイトは、シグナム達に気付いて思わず声を上げた。

「えっ!？」

フェイト達の後ろに立っている銀時も驚いた。

(おいイイイ!!何でお前らがいるんだアアア!?)

心の中で銀時は叫んだ。桂も焦っている。

シグナムとヴィータは、敵意の目でフェイト達を睨んでる。

気まずい雰囲気になる。

「あ、すみません。お邪魔でした？」

と、アリサが言った。

「い、いや…そうじゃねーよな?いきなり見舞いに来られたからビ

ックリしたんだよな?」

「あ…ああ…そうだ」

「本当に驚きました。いらっしやい」

銀時が何とか誤魔化そうとして、シグナムとシャルは銀時に話を合わせた。

「なんだ。よかった」

「驚かせてすみません」

「さすがとアリサが安心する。」

「ところで、今日はみんななどないしたん？」

「はやてがさすが達に尋ねた。」

「さすがとアリサは、笑顔で互いに顔を見合わせ、

「せーの！」

二人は同時に、コートで隠していたプレゼントを出した。

「サプライズプレゼント！」

プレゼントをはやてに差し出した。

「はやては嬉しそうな笑顔になる。」

「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「わあ、ほんまか。ありがとう」

「お礼を言いながら、はやては二人からプレゼントを受け取った。」

「みんなで選んできたんだよ。後で開けてみてね」

「アリサ達は楽しそうに話をしている。」

「ヴィータはまだなのはを睨んでいて、なのはは困った顔をしている。」

「隣にいるフェイトも同じ表情をしている。」

「ああ、みんなコートを預かるわ」

「そう言っただけでシャルは、さすが達からコートを預かる。」

「シグナム。ちょっと話があるから、廊下に出てくれない？」

「ああ」

「銀時とシグナムは病室を出てドアを閉めた。」

「銀時は一度ため息をついてから、シグナムを見た。」

「何でお前らがいるんだ？何でお前らがいるんだ？闇の書の蒐集や

つてたんじゃねーのかよ！？」

「中にいるはやて達に聞こえないように、銀時は小声でシグナムに言った。」

「主はやてに心配をかけないように、今日は見舞いにきたんだ！銀時達こそ、どうして黙って見舞いにきた！？」

「はやてを驚かせようと思って黙ってきたんだよ！そしたらお前らがいて逆に俺達が驚いたちゃったじゃねーか！逆ドツキリかコレ！？」

言い合つた後、二人は気分を落ち着かせた。

少しだけドアを開けて、中の様子を見る。

ヴィータはまだなのはを睨んでる。

「ヤベーよ、ヴィータ超睨んでるよ。なのはの事ガン見だよ。メンチ切ってるよ」

小声で銀時が呟いた。

「えと…あの…そんなに睨まないで…」

「睨んでねーです。こういう目つきなんです」

睨みながらヴィータが言った。

なのはは戸惑った。

すると、はやてがヴィータを怒った。

「なあ。この後どうすんの？俺はどうすればいいの？何とかしてくれシグナム。頼む。三百円あげるから！」

「何故、三百円？」

病室のドアの前で、銀時とシグナムはそんなやり取りをしていた。

*

「さようなら〜」

すずかとアリサが手を振りながら挨拶した。

シグナムとシャマルは病院の玄関口で、すずか達を見送った。夜になつて辺りは暗くなっていた。

この後、銀時、フェイト、なのはの三人は近くのビルの屋上で、シグナム、シャマル、ヴィータと会う予定だ。桂は一人ではやての様子を見る事となった。

歩きながら銀時は、暗い空を見上げた。

（今夜は雪が降るかもな…）

そんな事を思いながら、銀時はすすか達と別れて、フェイト達と一緒に待ち合わせのビルへ向かった。

くおまけく

フェイト&すすか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『銀銀銀』さんからの質問です。『銀さん達、銀魂メ

ンバーはこのまま空を飛ばない方針ですか？こう、源外のじーさんの発明でタケコプターの的な物…って言うのはなしですかね？』」

銀八

「銀銀銀って、どんだけ銀が好きなんだ？はい、質問にお答えしましょう。銀さん達は、このまま飛ばない方針でいく予定です。銀さん達が空飛んだら、何か違和感あるんで」

すずか

「ペンネーム『クロス』さん。『質問なんですけど、アルフって銀さんの事をどう思っているんですか？一章の方では好意を持ってる感じでしたが二章の方で全然出番が無いので分かりません』」

銀八

「アホ作者のせいでアルフの出番は少ないですが、アルフは銀さんに好意を持ってます」

フエイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『出番や存在感の少ない女性キャラのお妙、神楽、九兵衛、なのは、ヴィータ、シャマルが目立つには、やはり色気（特に胸）が必要ですか？』」

銀八

「作者の奴、キャラを出したはいいが、まとめるのが下手なんだよな。九兵衛とかの活躍とかを期待してた方、本当に申し訳ありません

ん

作者

「申し訳ありません」

銀八

「質問の答ですが、まあ色気も必要かもな。でもそれを本人達の前で言ったら殺されるから、黙っておこう」

すずか

「ペンネーム『クロス』さん。『銀さん的にはアルフとシグナムのどちらが好みなんですか?』。二つ目の質問ありがとうございます」

銀八

「うーん。どっちもなかなかエロいボディしてるからなあ。でもアルフの方は、何か積極的な感じがするような気がする。銀さんは積極的な女は嫌いだから、そこを考えるとシグナムが好みかもしれませんが」

すずか

「ペンネーム『アスカ』さん。『なのはの世界でお妙さんは料理を作ったことありますか?あつたのなら、最初の被害者は誰なんですか?』」

銀八

「残念ながらまだ作ってません。でも必ず作ります。ダークマター」

フエイト

「ペンネーム『ニア・アルヴァース』さん。『早速ですが質問します。1. 銀さん達万事屋チームと九兵衛さんと東上（？）さんは現地滞在の時どこに住んでましたか。2. 銀さんが学校に勤めてたときの給料はどの位で何に使ってましたか。3. 銀さんは97管理外世界に居た時どのくらい糖分摂取しましたか。つか翠屋特製のシュークリーム何個喰いましたか。以上です』。沢山質問がきたね」

銀八

「…答えるの面倒になったから帰っていい？」

フエイト

「だ…ダメだよ銀八先生！」

すずか

「ちゃんと答えてあげてください！」

銀八

「へいへい。質問1の答。銀さん達は、フエイト達が住んでる部屋の隣に住んでいます。質問2の答。給料はそんなに高くありません。臨時なんで。そして給料はパチンコと喫茶翠屋で消えます。質問3の答。ぶっちゃけ、最初はあんまり糖分摂取してませんでした。だ

から翠屋を見つけた時は、銀さんは本当に喜びました。めっちゃシ
ユークリーム食いました」

すずか

「それでは、今回の『教えて、銀八先生』はここまで」

フェイト

「質問してくれた皆は、廊下に立ってなさい」

第四十一訓：騎士の魂は気高い（前書き）

沢山の感想・質問ありがとうございます！感想より質問の方が多い気がしますが（汗）

そんじゃ、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十一訓。始まり
ます！

第四十一訓：騎士の魂は気高い

銀時、フェイト、なのはと、シグナム、シャマルはビルの屋上にいた。

「はやてちゃんが…闇の書の主……」

シグナム達から、話を聞いたなのはが呟いた。

フェイトも困惑の表情を浮かべている。

「悲願は後わずかで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

シグナム達が敵意を放ちながら言う。

「ちよつと待て」

銀時がなのはとフェイトの前に出る。

「ツラの奴にも言ったが、闇の書は…」

と、銀時が言いかけた時、上空からヴィータがグラーフアイゼンを構えながら迫ってきた。

銀時はヴィータに気付いて上を向いた。

「はああ!!」

ヴィータがグラーフアイゼンを上から振り下ろす。

グラーフアイゼンは銀時の頭に直撃した。

「がっ……!!」

銀時は頭から血を流し、口からも血を吐いた。ガクツと床に膝をつける。

「銀時！」

「銀さん！」

フェイトとなのはが銀時に駆け寄る。

(ヤベエ……！今はマジで効いたぜ……！)

よるけながら、何とか立ち上がる。

ヴィータは下がって、シグナムの隣に立つ。シグナムも、レヴァンティンを出して右手に持つ。

「シグナム…」

頭を押さえながら、銀時はシグナムを見た。

「シヤマル。お前は離れて通信妨害に集中している」

「うん」

言われた通りに、シヤマルは後ろに下がった。

シグナムは両手でレヴァンティンを構える。

「…すまない、銀時。我らを許してくれとは言わない。だが…」

シグナムは悲痛な顔をする。

前髪に隠れている目から、一筋の涙が零れる。

「我ら守護騎士は…主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てる
と決めた」

目から涙が溢れ出る。

目の前の愛しき人に刃を向ける。

「もう…止まれんのだ…!」

涙を流しながら、シグナムは銀時に向かって叫ぶ。

銀時は、覚悟のこもったシグナムの気迫を受け止めながら、目をそ
らす事なくシグナムを見つめた。

「フェイト…なのは…下がってる…」

「銀時…!」

銀時は二人を後ろに下がらせた。

シグナムと対峙する銀時。

「はああああ!!」

シグナムが走り出す。

両手でレヴァンティンを握り、銀時に向かって突きを放つ。

一方の銀時は、木刀も持たず、避けるそぶりすら見せない。

「え…!?!」

シグナムの中で迷いが生まれた。

その迷いが突きの軌道をズラした。レヴァンティンは銀時の右肩に
刺さった。傷口から真っ赤な血が出る。

「ぐう…!」

銀時は歯を食いしばった。

シグナムは、信じられないと言った顔で銀時を見た。

周りのみんなも、銀時の行動に驚いている。

「…何故避けなかった…？お前ほどの者なら…かわせたはずだ…！」
僅かに声を震わせながら、シグナムが言った。

「…こんなもん…はやてやオメーらが味わった苦しみや痛みに比べたら…どうってことねーよ」

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「！」

シグナムの体が震えた。

わざと受けたのか？

お前の命を奪っていたかもしれないのに……。

「シグナム…ヴィータ…シャマル…あと…ザフィーラだけ…？」

銀時が、守護騎士達の名前を一人ずつ言った。

名前を言われたヴィータ達は、少し驚いた顔をした。

「もういいだろ。もう、テメーらで背負い込む必要はねーんだよ」

銀時は右手で、自分を刺してる剣を掴んだ。

「よく聞け、シグナム。俺は正義の味方でも、管理局の味方でもね

エよ」

真っ直ぐにシグナムを見つめながら、銀時は続けて言った。

「テメーらの味方だ」

その言葉にシグナムは目を見開いた。

銀時の言葉はシグナムの心の奥にまで届き、シグナムは再び涙を流した。

後ろにいるシャマルも涙目になり、ヴィータも動揺している。

「テメーらにとっちゃ、周りの奴ら全員が敵に見えるんだろーが、それでも俺はテメーらの味方だ」

嘘偽りの無い銀時の言葉。

シグナムは嬉しかった。刃を向けた自分に、そんな言葉をかけてくれるとは、思ってもいなかった。

シグナムは、銀時の右肩に刺したレヴァンティンを抜いた。

「……すまない…銀時……」

顔を俯かせ、涙を流しながら銀時に謝った。

「…謝る事はねーよ。お前らは、お前らの護りてえモン護ろうとしたいだけだ」

そう言つて銀時は微笑んだ。

シヤマルとヴィータも武器をおろした。

様子を見守っていたフェイトとなのはは、とりあえず一安心した。だが安心したのも束の間、突如青いバインドが現れ、銀時を拘束した。

「なっ!?!」

銀時は、自分を拘束したバインドを見て驚いた。

「銀時!?!」

シグナムとフェイトが叫んだ。

その時、

「よし。まずは一番厄介な奴から拘束した」

上から声が聞こえた。

シグナム達は上を見た。そこには仮面の男がいた。

「貴様！銀時を放せ!?!」

シグナムが仮面の男に立ち向かおうとするが、青いバインドに拘束されてしまう。フェイト達やヴィータ達も全員、バインドに捕まってしまった。

「よくやった」

そこへ、もう一人仮面の男が現れた。

「えっ!?!二人!?!」

仮面の男達を見て、なのはは驚きの声を上げた。

(やはり二人いやがったか…!)

銀時は仮面の男達を睨んだ。

「では、始めるとするか」

仮面の男が右手を上げた。すると闇の書が現れた。

「いつの間にも!?」

闇の書を見て、シヤマルが驚く。

「おい」

銀時が仮面の男達に声をかけた。

仮面の男達は、銀時に顔を向けた。

「闇の書はまだ完成してねーぜ。どうするつもりだ？管理局の子猫ちゃん達？」

不敵な笑みを浮かべながら銀時が言った。

「なっ!？」

銀時の言葉に、仮面の男達は動揺した。

(どうやら当たりのようだな)

銀時の疑惑は確信に変わった。

「く…構うな。ソイツが何を知っていても、今の状態では我々の邪魔はできん」

仮面の男が、闇の書を持つてる仮面の男に言った。

闇の書が開いて、紫色に光る。

「う…うああっ!」

シグナム達から、それぞれ光の玉が現れる。

「シグナム!」

銀時が叫ぶ。

「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す」

仮面の男の言葉の後に、闇の書が蒐集を始める。

「ああああ!」

シヤマルが闇の書に蒐集され、姿が消えた。

次にシグナムの蒐集が始まる。

「ああああ!」

シグナムの体が下から消えていく。

「シグナム!」

叫びながら銀時は、必死にバインドを解こうとする。

「ぎ…銀時…あ…主…はやてを…頼む…」

そう言い残してシグナムも消えた。

銀時は目を見開いて、呆然と立ち尽くした。

「シヤマル！シグナム！」

ヴィータが叫ぶ。

「何なんだ？何なんだよテメーら！？」

仮面の男達に向かってヴィータが怒鳴る。

「プログラム風情が、知る必要はない」

仮面の男は静かに言った。

その何気なく言った言葉が、あの男の怒りを買うとも知らずに。

「……………じゃねーぞ」

銀時が小さく呟いた。

「ん？」

仮面の男達が銀時を見た。

ヴィータも、なのはもフェイトも、全員の視線が銀時に集まる。

「ふざけんじゃねーぞ」

顔を伏せたまま銀時が言った。

「プログラム風情？ふざけんよ。テメーら下衆野郎どもに、シグ

ナム達の何がわかるってんだ」

明らかに銀時の雰囲気が変わった。

荒々しい怒りの感情が出ている。

次の瞬間、銀時は顔を上げて仮面の男達を鋭い眼で睨んだ。その眼

には怒気以外に、凄まじい殺気も含まれていた。

「な……！！？」

滅多に放たない、銀時の凄まじい殺気を受けて、仮面の男達は身を

震わせ冷汗を流した。

「テメーら如きが、シグナム達の気高い魂を汚すんじゃない」

血が出るくらいに拳を強く握る。腕に力を入れる。

「銀時……」

ヴィータは驚いていた。敵である自分達のために、銀時は仮面の男に怒っている。ヴィータは、その事が少し嬉しかった。

「このクズ野郎どもがアアアア！！シグナム達を返しやがれエエエエ！！！！」

怒りの形相で銀時が叫ぶ。

更に腕に力を入れて、無理矢理バインドを壊そうとする。すると、バキバキツと音を立てバインドにヒビが入った。

「な…何！？馬鹿な！腕力だけでバインドにヒビを…！！？」

仮面の男達がうるたえる。

「守護騎士達に傷を受けた体で…どこにあんな力が！？」

「こ…コイツ本物の化物だ！！！」

銀時の力に仮面の男達は恐怖した。

「うおおおお！！！」

銀時は雄叫びを上げながら、必死にバインドを壊そうとする。

「が…頑張れ銀時！もう少した！！！」

ウィータが銀時を応援した。

「銀さん！」

「銀時！！！」

なのはとフェイトも、銀時の名を叫ぶ。

だが、そこで仮面の男が動いた。銀時の腹に蹴りを入れて、屋上の外に突き飛ばした。

「え？」

フェイトは目を見開いて驚いた。

「いくらお前が化物でも、この高さから落ちたら命はない」

銀時を見下ろしながら、仮面の男が言った。

「うあああああ！！！」

銀時はバインドで縛られた状態で、二十階のビルの高さから地面に向かつて落下した。

「銀時イイイ！！！」

フェイトが涙目で銀時の名を叫んだ。

止まる事なく、銀時は落ちていく。途中、ザフィーラの姿が見えた気がした。その直後に悲鳴が聞こえた。

銀時の意識はそこで消えた。

くおまけく

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『セブン』さんからの質問。『質問です。定春は犬形態のアルフに発情しないのですか?』」

銀八

「発情しません。好みじゃないんで」

すずか

「ペンネーム『Mさん』からの質問です。『銀魂の原作で『タカテイーン』と言うキャラがいましたけどフランスパンを使い橋を斬るシーンがありました。シグナムと戦ったらどっちが強いんですか？』

ー

銀八

「タカテイーンいましたね。フランスパンであの威力ですからね。結構いい勝負になると思いますよ。てか、タカテイーンが勝っちゃうんじゃない？いや、もちろんシグナムも強いですよ」

フェイト

「ペンネーム『EX』さん。『質問です、StrikeS編でゆりかごVS春雨みたいなことするんですか？』」

銀八

「しません。はい次」

フェイト

「答え短っ！」

銀八

「いや、やらないモンはやらないから。はい次の質問」

すずか

「はい。それでは次の質問。ペンネーム『Mさん』。『質問です。アスカさんが紅夜叉さんに質問と同じになりますが、シヤマルと奇妙が共同で料理したら地上最強最悪の料理が出来ると思うのですがどうなんですか?』それともう一つ。『以前銀さんがフェイトやプレシアの為に弁護士になりましたよね?じゃあはやてやシグナム達の為に弁護士になるんですか?』」

銀八

「『Mさん』、作者の名前間違えてますよ。『紅』夜叉じゃなくて『赤』夜叉です。気をつけるように。一つ目の質問の答。そんなの思いついちゃダメだって。本当に作ったらどうすんの?マジで地上最強最悪の地獄料理だよ。二つ目の質問の答。やるかもしれません」

すずか

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『もしすずかちゃんも魔法を扱える素質があつて、自分専用のデバイスももらえたとしたら、すずかちゃん的にはどーいうバリアジャケットを着用さるたり、どういうデバイスを駆使したりされると思いますが?とりあえずどんな感じのでもいいので、ご自由にお答えくださいです。あと別にもう一つ先生に質問です。無印編…つまり第一章の後についてなんですけど、銀さん第二訓あたりで源外のじいさまのこと、『ボコボコにして瞬間移動させてやるっ!!』…とか何とか思ってたじゃないです

か。ぶつちやけあれ、帰った後で実行されたのでしょうか？（汗）
『。私のデバイスとバリアジャケットかあ…』

銀八

「相変わらず長い質問だな。まあお答えしましょう。すずかは防御や回復が主体とかの魔法を使いそうだから、先生的にはナース服的なバリアジャケットがいいな。ナース服で傷を癒す感じで。デバイスは注射機がデザインみたいな感じかな。源外のじーさんの件ですが、ジュエルシード事件で忙しかったり、フェイトの告白を受けたりで大変だったので、すっかり忘れてます」

すずか

「私の件は、ほとんど銀八先生の趣味みたいな答ですね…」

フェイト

「では次の質問。ペンネーム『ダークキバ』さん。『strike』
sでは銀さんは有名になっているのですか？』」

銀八

「有名になってますよ。てか今も管理局では噂になってますから」

フェイト

「本日最後の質問。ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生！質問です！マダオこと長谷川さん出す予定ってありますか？別に出さなくて

もどつてもいいですけどね俺は。』

長谷川

「いや酷くない？どうせだったら『ぜひ長谷川さんを出してください！』とか言ってもいいじゃん！」

銀八

「長谷川、勝手に出てくるな。マダオねえ。まあ機会があれば出します。それじゃあ質問してくれた皆さん、廊下に立ってなさい」

第四十二訓：どこの母ちゃんも怒ると怖い（前書き）

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』 第四十二訓。 始まります！

第四十二訓：どこの母ちゃんも怒ると怖い

銀時は意識を取り戻した。ゆっくりと瞼を開ける。視界がぼやけてる。背中に固く冷たい感触がする。

目の前は真っ白だった。いや、黄色い部分もある。だんだん視界がハッキリしてきた。そして、真っ白いモノの正体がわかった。

正体はエリザベスだった。

「うおおお！！」

ビククリした銀時は、慌てて起き上がった。

「エ…エリザベスか！？ビククリさせんじゃねーよコノヤロー！！」
エリザベスに向かって怒鳴る。

どうやら銀時は、エリザベスに助けられたようだ。

すると、シグナム達にやられた傷が痛み出した。それで思い出した。屋上での出来事を。仮面の男達が現れ、シグナム達が消えた事を。

「あの野郎！」

銀時が立ち上がるうとした。

その時、自分はまだバインドで縛られてる事に気付いた。

「エリザベスを付近に待機させといて正解だったな」

背後から声が聞こえた。

後ろを見ると桂がいた。

「ヅラ！何でこんな所に！？」

「ヅラじゃない桂だ。胸騒ぎがしたから、様子を見に来たんだけ」

桂が言った。

そして鞘から刀を抜いて構えた。

「バインドを斬る。動くなよ」

桂は刀を振り下ろし、銀時を拘束してるバインドを斬った。

「一体何があった？」

刀を鞘におさめながら、桂が尋ねた。

「仮面野郎どもが現れやがった」

「何！？ヤツらが動くのは、闇の書が完成してからではなかったのか！？」

驚きながら桂が尋ねた。

その時、ビルの屋上で大爆発が起こった。

二人は屋上を見上げた。

「何だ！？」

「まさか闇の書が！？」

銀時は舌打ちした。

「銀さあああん！！」

自分と呼ぶ声が聞こえた。

銀時は声がした方を見た。新八、神楽、定春、お妙、九兵衛、東城がこちらに向かって走っていた。

「お前ら！」

「銀ちゃん！無事アルカ！？」

新八達は銀時達の前に来た。

「お前らどうしてここに？」

「プレシアさんに頼んで、連れてきてもらったのよ」

銀時の問いに、お妙が答えた。

「プレシアに？」

*

銀時達がいる場所から、少し離れたビルの屋上。

そこに仮面の男達がいた。

「デュランダルの準備は？」

「出来ている」

仮面の男の手に一枚のカードのような物が出た。

その直後、紫色のバンドが仮面の男達を拘束した。

「な…何！？」

仮面の男達は拘束を振りほどこうとする。

「捕まえたわよ」

二人の前に一人の魔導師が現れた。

「お：お前は!？」

魔導師を見て、仮面の男達は驚いた。

魔導師は、長い黒髪の女性で片手に杖を持ち、黒いマントを羽織っていた。

魔導師の名は、プレシア・テストロッサ。

「さあ。素顔を晒しなさい」

プレシアが杖を仮面の男達に向け、紫色の光を放った。

「うああああ!！」

光を浴びた仮面の男達は叫んだ。

「変身魔法を解除させてもらっわ」

仮面の男達を睨みながら、プレシアは呟いた。

仮面の男達の変身魔法が解け、正体を現した。仮面が床に落ちる。

仮面の男の正体は、グラム提督の使い魔の、アリアとロッテだった。

「プレシア・テストロッサ!」

アリアとロッテは、バインドで拘束されたままプレシアを睨んだ。

「銀時の推理通りだったわね」

二人を見ながら、プレシアが言った。

「銀時!？やっぱりあの男!？気付いて……!!！」

ロッテは悔しそうに顔を歪めた。

「さて。話があるから、二人ともついてきてもらっわよ」

プレシアは、二人に冷たい視線を向けた。

*

バインドを破ったのはとフェイトは、屋上で闇の書と対峙していた。

仮面の男達が、はやてを屋上に転送し、目の前でヴィータとザフィ

ーラを闇の書に蒐集した。

それを見た、はやては雄叫びを上げ、直後に大爆発を起こした。闇の書を持ち、はやての姿が変わり、今に至る。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

二人は、はやての名を呼んだ。

「また、全てが終わってしまった。決して終わらせる事が出来ない悲しみ……」

闇の書は涙を流しながら言った。

闇の書は片手を上に掲げると、黒い球体を作り出した。

「デアボリック・エミッション」

闇の書の言葉の後に、黒い球体が大きくなっていく。

「空間攻撃！」

「闇に……染まれ……」

黒い球体はどんどん大きくなる。

なのははフェイトの前に出て、障壁を展開した。

*

地上にいる銀時達にも、黒い球体は迫っていた。

「いかん！逃げろ！！」

桂が叫んだ。

「逃げるってどこに！？」

パニックになりながら、新八が叫んだ。

九兵衛が近くのマンホールの蓋を斬った。斬った蓋を外した。

「この中に逃げ込め！」

マンホールの中を指差しながら、九兵衛が叫んだ。

「でかした九兵衛！！」

一人ずつマンホールの中に飛び込む。

が、

「俺が先だ！」

「ふざけんな！傷を負ってる俺が先だろーが！！」
マンホールの入口で、桂と銀時が喧嘩する。

「いや、こんな時にまで喧嘩すんな！！」

新八が怒鳴りながら、二人を無理矢理、中に引っ張った。
間一髪、黒い球体の攻撃を免れた。

数秒の後、黒い球体は消えた。銀時達は外に出た。外に出た銀時は、闇の書がある屋上を見上げた。

「若。とりあえず今は、ここから離れましょう」

「ああ」

東城の言葉に、九兵衛は頷いた。

「銀さん！一旦、ここから離れましょう！」

新八は銀時に向かって叫んだ。

だが銀時は、ジツと屋上を見つめてる。

「銀さん？」

新八は首を傾げた。

「お前らは先に行け。俺は闇の書に会ってくる」

「えっ！？」

「銀ちゃん！本気アルカ！？」

新八と神楽が驚いた。

周りにいる桂達も驚いている。

「悪いな。シグナムに、はやての事頼まれちゃったからよ」

新八達に振り返りながら、銀時が言った。

「そんな…無茶ですよ、銀さん！そんな体で！」

傷ついた銀時の体を見ながら新八が叫んだ。

「ツラ、コイツらの事は任せませ！」

銀時は走って、ビルの中に入った。

「銀さん！！」

新八は追い掛けようとした。

だが桂に肩を掴まれて、止められてしまう。

「桂さん!？」

「俺達には止められん。行かせてやれ」

険しい表情で桂が言った。

新八は歯を食いしばった。悔しくて拳を強く握った。

「…行こう、新八君。ここに居ては、彼も安心して戦えない」

九兵衛が言った。

九兵衛の言葉の後に、新八達は走ってビルから離れた。桂は一旦、足を止めて銀時が入っていったビルの入口を見た。

「…ツラじゃない、桂だ」

桂は再び前を向いて走り出した。

*

黒い球体から逃れたなのはとフェイトは、ビルの陰に隠れていた。

「なのは、ゴメン。ありがとう。大丈夫?」

お礼を言いながら、フェイトはなのはの事を心配した。

「うん。大丈夫」

フェイトを安心させるように返事をした。

「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな。バルディッシュ」

フェイトはバリアジャケットを変えた。レイジングハートをなのはに渡す。

「……はやてちゃん」

闇の書を見ながら、なのはが呟いた。

「なのは!」

「フェイト!」

ユーノとアルフが二人の所にやってきた。

直後、突風が起こり、街を何かがスッポリと覆った。

「前と同じ、閉じ込める結界だ」

アルフがフェイト達に言った。

「やっぱり、私達を狙ってるんだ」

「今、クロノが解決法を探してる。それにプレシアさんも」

「母さんも？」

フェイトはユーノに振り返った。

「それまで、僕達で何とかするしかない」

「うん」

フェイト達が話し合う。

その時、闇の書の様子を見ていたなのはが声を上げた。

「あ…あれ、銀さん！？」

「えっ！？」

なのはの言葉を聞いたフェイト達は、驚きながら闇の書がいる屋上を見た。

確かに闇の書の後ろ、屋上の入口に銀時が立っている。

「銀時！！よかった…無事だったんだ！」

銀時の姿を確認したフェイトは、安堵と嬉しさで涙目になる。

「それにしても…どうしてあんな所に？」

ユーノが疑問に思った。

「まさか！一人で闇の書を止めるつもりじゃ…！」

アルフが声を大きくして言った。

確かに銀時ならありうる。

「みんな、行こう！」

フェイトがなのは達に言った。

「うん！」

なのは達は頷いた。

*

時空管理局本局。

一室にプレシア、グレアム提督とアリアとロツテがいた。

「二人に指示を出していたのは、やはり貴方ね。グレアム提督」

目の前にいるグレアムを見つめながら、プレシアが言った。

「違う、プレシア!」

「私達の独断だ。父様には関係ない!」

ロツテとアリアが反論するが、

「貴女達は黙ってなさい」

大魔導師としてのプレツシャーを放ちながら、プレシアは二人を睨んだ。

睨まれた二人は、たじろいだ。

「ロツテ、アリア、いいんだよ。プレシア女史はもうあらかたの事は掴んでる」

グレアム提督が言った。

銀時から教えられたプレシアは、独自にグレアム提督について調べていたのだ。

「貴方は、闇の書の転生先を調べて見つけたのね。闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

「…両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て、心は痛んだが……運命だとも思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

はやての映像を見ながら、グレアムは語った。

プレシアは冷たい表情を保ちながら、内心怒っていた。悲しむ人は少なくなる? 数でしか人を理解出来ない最低な人間の考えだわ。

そんな事を思いながら、以前、自分がフェイトにした事を思い出した。

(…私も偉そうな事は言えないわね)

そう思いながら、プレシアはグレアムに向き直った。

「彼女の生活の援助をしていたのも貴方ね?」

「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった…」

グレアムは目を閉じて、少し顔を下げた。

「…偽善だな」

「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間にでも閉

じ込める。そんなところかしら？」

「ああ。それなら闇の書の転生機能は働かない」

プレシアの問いに、グレアムは答えた。

答えを聞いたプレシアは顎に手を当てて考えた。

すると、ロツテ達が言う。

「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わらない！」

「プレシアさん。私達を解放して。凍結がかけられるのは、暴走が始まる数分だけなんだ」

二人の言葉を聞いたプレシアは、顔を上げた。

「八神はやてが何をしたというの？ 彼女はまだ犯罪者ではないわ。

そんな行為は違法だわ」

「そのせいで、そんな決まりのせいで悲劇が繰り返されてんだ！ クライド君だって…クロノのお父さんだって…！！」

プレシアの言葉に、ロツテは身を乗り出して声を荒げた。

「貴女達がやろうとしている事は単なる復讐よ。八神はやてを、貴女達の復讐の犠牲者にはさせないわ！」

プレシアは怯まずロツテ達に言った。

ロツテは何も言い返せなかった。プレシアはグレアムに向き直る。

「それに貴方のやり方にも問題があるわ。凍結の解除はそう難しくはないはずよ。どこに隠しても、必ず力を嗅ぎつけた者が出て来て使おうとするわ」

かつて、自分がジュエルシードを求め、アルハザードを目指そうとした時のように。

話を聞いたグレアム提督は、目を閉じて考えた。

「それじゃあ。私はこれで」

プレシアは立ち上がって部屋を出ようとする。

「待ってくれ」

グレアム提督が呼び止めた。

プレシアは立ち止まって振り返った。グレアム提督は一枚のカード、

待機状態の『デュランダル』を差し出した。

「氷結の杖『デュランダル』だ。どう使うかは、貴女に任せる」
プレシアはデュランダルを受け取った。

「いいえ。コレを使うのは私じゃないわ」

プレシアの言葉の後、扉が開かれた。

クロノが部屋に入ってきた。

「クロノ！」

グレアム提督とアリア、ロツテは驚いた。

「提督。話は全部聞かせてもらいました」

クロノはグレアムに言った後に、プレシアに顔を向けた。

「頼めるかしら、クロノ？」

「はい」

クロノは、プレシアから差し出されたデュランダルを受け取った。

*

ビルの屋上。

闇の書は、街を見渡していた。

その時、後ろからカツン、カツンと足音が聞こえた。闇の書は後ろを振り返った。そこには銀髪の男が立っていた。

「オイオイ。闇の書がこんな綺麗な姉ちゃんなんて、聞いてねーぜ」

銀髪の男、銀時が頭を掻きながら言った。

「お前……は……」

銀時を見ながら、闇の書は呟いた。

「俺か？俺ア坂田銀時。侍だ」

ニヤツと笑いながら銀時は答えた。

くおまけく

フェイト&すずか
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!!」

フェイト
「ペンネーム『クロス』さんからの質問。『この作品のStrikerSはどうするんですか?』それと『銀さんってStrikerSのフェイトとシグナムだと、どちらが好みなんですか?』。銀八先生!答えてください!!」

銀八
「おい、顔が怖いぞフェイト。後、バルディッシュしまえ。StrikerSはやりませよ。フェイトとシグナムどちらが好みか……」

わかんね」

フェイト

「真面目に答えてください」

銀八

「いや、ホントにわかんねーから勘弁して。マジで迷うから。フェイトもマジで怖いから」

すずか

「ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんは双子の使い魔のようなネコ耳とアルフのような犬耳、どっちが萌えるでしょうか？ちなみに、フェイトとシグナム、どっちのネコ耳（犬耳）姿が見たいですか？』

」

銀八

「定春飼ってるから犬耳じゃね？でもあまりいい思い出がねーしな。まあどつちかと言うと犬かもな。フェイトとシグナムねえ。うーん。シグナムの犬耳？いやフェイトのネコ耳も捨て難いな。うーん………わかりません」

フェイト

「ペンネーム『やまと』さんからの質問です。『銀さんは仮面の男』双子に股間のセンサーは反応しなかったのですか？『股間のセンサー？』」

銀八

「お前は知らなくていいんだよ。センサーは反応しませんでした。変身魔法で完全に姿を変えられていたので。てか興味なし？」

すずか

「それでは次の質問です。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『この間の6月26日って、ツラこと桂さんの誕生日だったじゃないですか？あの人の事だからエリザベスと一緒に、むなしそうに『ハッピーバースデー、トウ、俺！』とか何とか言ってる感じがするんで、なんかかわいそうだからプレゼントか何かあげてもよいでしょうか？（大汗）あ、ちなみによろしければ、銀さんたちの誕生日の日とかも、何かしらプレゼントをご用意しますけど…（苦笑）。』。桂さん誕生日だったんだ。おめでとうございます」

銀八

「いや、ツラにプレゼントとか、やんなくていいから。お祝いの言葉だけで十分だから」

第四十三訓：破壊と創造は表裏一体だが破壊だけでは何も生まれない（前書き）

メッセージに質問がありました。『ヴィータやシャルマル達は銀さんの事をどう思っていますか？』

ヴィータは銀さんの事を、憎らしい天然パーマだと思ってます。シャルマルは銀さんに、魔法も使えないのに強いなあと尊敬の念を持ってたりします。ザフィーラは……銀時を見て、ただ者ではない、と思ってます。こんな感じでよろしいでしょうか？

それでは、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十三訓。始まり
ます！

第四十三訓：破壊と創造は表裏一体だが破壊だけでは何も生まれない

銀時は、屋上で闇の書と対峙していた。屋上の中心辺りに闇の書が立っている。

白く染まった長い髪、黒いバリアジャケットを身に纏い、背中には黒い翼を生やしている。

「さか…た…ぎん…とき…」

闇の書が銀時の名を呟いた。

「…貴方が銀時か」

「俺の事知ってんのか？」

銀時が尋ねた。

「はい。私は騎士達と心がリンクしてますから」

闇の書が答えた。

「…はやてとシグナム達はお前の中か？」

「はい」

銀時は顔を険しくした。

いざとなったら、闇の書を破壊するしかないと考えていたが、そういう訳にはいけなくなった。

闇の書を見つめながら、銀時は尋ねた。

「お前の目的は何だ？」

「主の願いを叶える事です」

「はやての願い？」

銀時は目を細めた。

「はい。愛する守護騎士達を奪った者達と、この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを…」

目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えた。

「世界の破壊だ？んな事はやてが望んでると思ってるのか？」

「…止まる事は出来ません。それに私が止まってしまったら、『ア』が私の中から出て、数多に存在する全ての世界を破壊する」

銀時を見つめながら闇の書が言った。

銀時は闇の書の話の中で、気になる言葉を見つけた。

「『アレ』？『アレ』って何だ？」

「貴方に教える必要はありません」

教える気はないらしい。

「銀時。どうか邪魔をしないでください。守護騎士達…特にシグナムは貴方を愛おしく思っていました。できれば貴方とは戦いたくない」

戦いたくはないが、破壊行為はするつもりらしい。

結局、戦う事になるのか。銀時はため息をついた。

正直、シグナム達から受けた傷がある、今の状態で戦うのは少しキツイ。それでも引くわけにはいかない。

「悪いな。俺にも譲れねーモンがある」

銀時は腰に差してある木刀を抜いた。

「そうですか。では…残念ですが、主の願いを叶えるため…貴方には消えてもらいます」

闇の書が、重いプレッシャーを放ちながら銀時を睨んだ。

両者は口を閉ざし、静寂が訪れた。

屋上に強い風が吹いた後、銀時と闇の書は動き出した。

*

フェイト達は、銀時と闇の書がいる屋上に向かっていった。

「あつ！もう戦いが始まってるよ！！」

屋上を指差しながらアルフが言った。

「銀時！」

フェイトが叫んだ。

「うおおおおお!!」

銀時は雄叫びを上げながら、闇の書に木刀の連撃を繰り返す。闇の書は障壁を張って連撃を防ぐ。障壁で防ぎながら、闇の書は魔力で強化させた拳を放つ。

拳に反応した銀時は、木刀で防御する。そこから闇の書が、両拳のラッシュで一気に攻める。銀時は木刀で両拳を防ぎながら、少しずつ後ろに退がっていった。

(ちっ! シグナム達にやられた傷が痛みやがる!)
痛みに耐えながら、銀時は攻撃を防ぎ続ける。

すると突然、闇の書が目の前から消えた。一瞬驚いたが、気配と殺気を感じて、頭を下げ、体勢を低くした。

直後、銀時の頭上を、背後に回った闇の書の横薙ぎの手刀が掠めた。
「ムッ!」

手刀をかわされ、闇の書が少し驚いた。

手刀をかわした銀時は、背後にいる闇の書目掛けて木刀を振るった。闇の書は後ろに跳んで、木刀をかわした。

距離を開けて二人は動きを止めた。

(速いな。それに障壁も硬え)

銀時は額の汗と血を拭きながら思った。

闇の書はジッと銀時を見つめてる。

(あの手負いで、この強さ。もし万全の状態であつたら…)
戦って初めて闇の書は、銀時の強さを知った。

(……………この男なら…銀時なら『アレ』を倒せるか……………?)

銀時を見つめながら、闇の書は考えた。

(いや…例え何者でも、『アレ』を倒す事はできない)

闇の書は、表情を険しくした。

その時、

「銀時!」

フェイトの声が聞こえた。

銀時は、空に浮いてるフェイト達を見つけた。

「銀時！大丈夫！？」

屋上に着地しながらフェイトが尋ねた。

「あんま大丈夫じゃねーな」

肩で息をしながら、銀時が答えた。

なのは達も銀時の側に立つ。

「アンタが苦戦するなんて珍しいね」

と、アルフが言った。

「そういう時もあんだよ」

銀時が答えた。

フェイト達はデバイスを構えた。

するとバルディッシュが、一般市民を見つけた、とフェイト達に告げた。

「よし。フェイト達は、銀さんと協力して闇の書を止めて、僕となのはが一般市民の保護に向かおう」

と、ユーノが言った。

みんな頷いて答えた。

「行こうなのは！」

「うん！」

ユーノとなのはは、空を飛んだ。

「銀さん！フェイトちゃん！アルフさん！すぐに戻ってきますから！」

なのはの言葉を聞いた銀時は、手を振って応えた。

なのは達は一般市民の保護に向かった。

「そんじゃ、もう一頑張りすつか」

両手で木刀を構える。

「いくよアルフ、バルディッシュ」

「うん！」

「Yes sir」

アルフとバルディッシュが、フェイトに応えた。

*

なのはとユーノは、結界内に取り残された一般市民の所へ向かっていた。

なのはとユーノは地上に降りて、辺りを見回した。すると、なのはは二人の人影を見つけた。

「あの、すみませーん！危ないですから、そこでジッとしててくださいー！」

人影に向かって叫んだ。

二人の人影は足を止めて、振り返った。

「え？」

「今の声って…」

二人は、声の主を見た。

「なのは！？」

「なのはちゃん！？」

なのはを見て、二人は驚いた。

二人を見て、なのはも驚く。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

人影は、アリサとすずかだった。

「なのはちゃん」

「ねえ、これってどうなってるの？」

アリサがなのはに聞く。

なのはは、どう説明したらいいか悩んでいる。隣にいるユーノも、困った顔をしている。

「あの…ごめん。今は説明できなんだ。すぐに安全な場所に運んでもらうから」

なのはの言葉の後、アリサとすずかの足下に魔法陣が展開された。

その直後、二人は転移された。

「二人に見られちゃった…」

なのはは少し、沈んだ顔をした。

「なのは」

ユーノが声をかけた。

「二人は、なのはの友達なんだから、きっと大丈夫だよ」
優しく話し掛けて、なのはを励ました。

「ユーノ君……うん。ありがとう」

なのはは、微笑みながらユーノにお礼を言った。

その時、

「なのはちゃん！」

なのはを呼ぶ声が聞こえた。

なのは達は声がした方を見た。新八達がこちらへ向かって走っていた。

「新八さん！神楽ちゃん！」

「みんなどうしてここに!？」

新八達を見て、なのはとユーノは驚いた。

「銀さんや、なのはちゃん達の事が心配で来たんだよ」

新八が答えた。

すると、遠くから爆発音が聞こえた。音は銀時達がいるビルから聞こえた。

「銀さんと闇の書が戦ってるんだわ」

ビルの方を見ながら、お妙が言った。

「そういえば、フェイトとアルフの姿がないが？」

周りを見ながら、九兵衛が言った。

「フェイトとアルフは、銀さんと一緒に闇の書と戦っている」

「フェイトちゃんとアルフさんも!？」

新八達は驚いた。

「皆さん。私も銀さん達を手伝いに行きます!だから皆さんは、転移したアリサちゃんとすずかちゃんをお願いします!」

なのはは宙に浮いた。

「ユーノ君!新八さん達を、アリサちゃん達の所に案内して!」

「わかった」

なのはの言葉に、ユーノは頷いた。

「なのは！無茶したらダメアルヨ！」

「高町殿！銀時達を頼む！」

「はい！」

神楽達の言葉に応え、なのはは銀時達が戦っているビルに向かって飛んでいった。

「ではユーノ君。なのはの友人の所まで案内してくれ」

「はい」

九兵衛に言われ、ユーノは案内した。

*

「うおおおおおー！！」

雄叫びを上げながら、銀時は木刀を振り下ろした。

闇の書は、障壁を張って木刀を防いだ。

「アークセイバー！！」

フェイトは、バルディッシュを横薙ぎに振って、金色の刃を闇の書目掛けて飛ばした。

闇の書は、金色の刃も障壁で防いだ。防がれた金色の刃は消えた。

闇の書は、魔力を纏った脚で銀時の腹を蹴った。銀時は腹を押さえながら後ずさった。

「はあっ！！」

アルフが闇の書の両手を、バインドで止めた。

銀時とフェイトが同時に斬りかかる。闇の書は障壁で防御する。

「碎け」

闇の書が呟いた。

直後、両手のバインドが碎けた。

「銀時！下がって！！」

闇の書から距離を取り、フェイトはバルディッシュを構える。

銀時はフェイトの後ろに下がった。

「プラズマ・スマツシャー！ファイア！！」
バルディツシュから金色の閃光が放たれる。
「盾」

闇の書は、巨大な障壁を張った。
障壁とプラズマ・スマツシャーが、火花を散らせて激しくぶつかる。
嵐のような風が吹き荒れる。

やがて金色の閃光が消えた。闇の書はかすり傷一つ無い。

「く…！」フェイトは悔しそうに顔を歪めた。

「刃を撃て…血に染めよ」

闇の書を中心に、周りに複数の赤い刃が現れた。

「穿て…ブラツディ・ダガー」

赤い刃が、銀時、フェイト、アルフに向かって放たれた。

フェイトとアルフは障壁を張って、何とか赤い刃を防ぐ。

銀時は木刀を振るって赤い刃を弾く。

だが、やはり傷ついた体では全ての赤い刃は防げず、左肩、左足に
赤い刃が刺さる。

「ぐ…！」

銀時は刺さった赤い刃を抜く。

「銀時！大丈夫！？」

「銀時！！」

フェイトとアルフが銀時に駆け寄る。

「なあに。心配いらねーよ…」

笑みを浮かべながら、フェイト達に答えた。

闇の書が手を突き出し、攻撃をしようとした時、

「デイバイン・バスター！！」

桜色の閃光が、闇の書に向かって放たれた。

闇の書は、デイバイン・バスターを障壁で防いだ。

屋上の上空に、なのはがいた。

「なのは！」

フェイトが声を上げた。

「遅くなってゴメン」

なのはは屋上に降り立った。

「闇の書さん！もうやめてくださいー！」

闇の書に向かつて、なのはが叫ぶ。

「世界を破壊して、それではやてちゃんが喜ぶと思ってるんですか！？」

「主は、自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であってほしいと願った。私は主の願いを叶える道具。だから私は、主の願いを叶える」

闇の書は、破壊をやめようとはしない。

「闇の書さん！」

なのはが叫ぶ。

すると、銀時が前に出た。

「銀さん…」

「確かに…大切なモンを失った時はそう思うさ。だがな…どんなに辛くて悲しい事でも、その事を忘れようとしちゃいねーんだよ」

銀時も譲夷戦争で多くの大切な仲間を失った。

いつそ忘れてしまった方が楽になれる。だが銀時は忘れない。

失ってしまった大切なモノを、忘れるような事だけは絶対にしない。

前に出て、闇の書と一対一で対峙する。

「闇の書。テメーは俺が止める」

銀時は、出来るだけ呼吸を整える。目の前にいる闇の書を、鋭い眼で睨む。

その眼を見て、闇の書は寒気を感じた。

（寒気…？私が？）

闇の書は表情を険しくした。

眼だけでなく、明らかに銀時の雰囲気が変わっている。そう、アレは獲物を…魂を狩る獣の姿だ。

銀時は、右手に木刀を持ちながら走り出した。

（速い！！！？）

闇の書は、驚いた。

銀時の体は、戦いで傷ついているにも関わらず、その動きは先ほどよりも速くなっていた。

銀時は素早く木刀を横薙ぎに振った。

闇の書は障壁を張って防御する。

すると目の前の銀時が突然、視界から消えた。

「えっ!?!」

闇の書だけでなく、フェイト達も驚いた。

次の瞬間、闇の書の背中に衝撃が走った。

「あぐう!!」

背中を攻撃された闇の書は、振り向いて後ろを見た。

そこには、銀時がいた。

(馬鹿な!?!いつの間に背後に!?!)

闇の書は驚愕した。後ろに下がって、銀時から離れた。

次の攻撃が来るかと思われたが、銀時は床に膝をついた。息が荒くなり、傷口から血が出る。

「銀時!」

「銀さん!」

フェイトとなのが叫んだ。

「…どうやら限界のようですね」

闇の書は、右手を前に掲げた。

「苦しいでしょう?今、楽にしてあげます」

哀れむような目で銀時を見つめる。

「咎人達に…滅びの光を」

闇の書の右手の前に、桜色の魔力が集束されていく。

「あれって…まさか…!?!」

フェイトは驚愕の表情を浮かべる。

「スターライト・ブレイカー!?!」

なのも信じられないと言った顔をする。

「なのはは一度、闇の書に蒐集されてる。その時に魔法をコピーし

「たんだ！」

「ってマズイよ！いくら銀時でも、あんな状態でくらったら……！」

「アルフが焦る。」

銀時は殆ど動けない状態だ。

「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどどん溜まっていく。

「銀時！！」

フェイト達が銀時を助けようと動く。

だが突如、床から触手が出現し、フェイト達の体に縛り付いて動きを止める。

「く…この…！！」

フェイト達は必死に、触手を振りほどこうとする。

「貫け…閃光」

だが、闇の書は魔力の集束を終えてしまう。

「スターライト・ブレイカー」

闇の書は、銀時に向かって巨大な桜色の閃光を放った。

閃光の光に、フェイト達は思わず目を閉じた。銀時は成す術もなく、桜色の閃光に飲み込まれた。

やがて閃光がおさまり、フェイト達は目を開けた。辺りに煙が立ち込めてる。

闇の書はジッと煙を見つめてる。

「銀時…！」

煙のせいで銀時の姿が確認できない。

煙が晴れてきた。

「なっ…！！？」

闇の書は、目を見開いて驚愕した。

目の前に、銀時が立っているのだ。

「銀時！！」

「銀さん！！」

「銀時!!」

三人が銀時の名を叫んだ。フェイトは今にも泣きそうな顔をしている。

「アレをまとめてに受けて…生きて…立っている…!?!」

闇の書は額から汗を流した。

銀時は、頭や体中血だらけになり、服もボロボロだった。それでも右手にある木刀は、放さないように固く握っていた。

「何故…?どうして…?そんなにボロボロなのに…!」

闇の書は、ボロボロの銀時を見つめる。

「何故…貴方は倒れない…!」

闇の書の目から涙が流れた。

「……闇の書……」

銀時が口を開いた。

闇の書は、ビクツと体を震わせた。

銀時は、顔を上げて闇の書を見る。

「なんで…泣いてんだよ…!?!」

涙を流す闇の書を見ながら言った。

「こ…この涙は…主の涙だ…」

動揺しながら、闇の書は答えた。

銀時は、左足を引きずりながら歩き出した。ゆっくりと、ゆっくりと闇の書に近づいて行く。

闇の書は動かなかった。

いや、動けなかった。何故だかわからないが、体が言う事を聞かなかった。

銀時は闇の書に近寄り、顔に手を伸ばした。

闇の書の目から流れる涙を、手で拭いた。

「たくつ…泣くくらいなら…最初から…こんな事すんじゃねーよ

…」

笑みを浮かべながら銀時が言った。

「銀…時…」

「ああ…俺が倒れない理由か……？」

思い出したように言った。

「俺は…俺の武士道、貫いて……俺の護りてエモンを護る……」

涙目の闇の書を見つめながら、銀時は語る。

「だから……お前が、どんなにスゲー魔法を撃つても……俺は倒れねエ……」

銀時の体がフラつく。

「だからよオ……お前が…本当にはやてを…大事に想ってんなら……」

意識が薄れていく。

視界がぼやける。

「…はやての事……諦めんじゃ…ねエ……」

そこで銀時の意識は途絶えた。

倒れそうになる銀時を、闇の書が抱いた。

「銀時……もし、万全の状態であつたら……私に勝っていたかもしれないな……」

ギュツと強く銀時の体を抱く。

闇の書は再び涙を流す。

「銀時……ダメなんだ…私は…止まれないんだ……」

今流れている涙は、はやてのものか。それとも闇の書のものか。それは誰にもわからなかった。

「…貴方は強い……よく、ここまで戦った……」

闇の書は、足下に黒い魔法陣を展開した。

「銀時！！」

「闇の書！アンタ、銀時に何する気だい！？」

フェイトとアルフが叫んだ。

「闇の書さん！！」

なのはも叫ぶ。

「強き魂を持った侍よ。もう休むがいい」

魔法陣の光が強くなる。

「銀時。私の中で」

銀時の体が薄れていく。

「眠れ」

銀時の姿は消えた。

「銀時イイイイ!!」

フェイトは叫んだ。

アルフとなのはも呆然となる。

「銀時よ。私の中で…安らかな…永遠の眠りを」

くおまけく

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さんからの質問です。『銀さん（白夜叉モード）と全戦闘機人が戦ったらだれが勝つんですかそれと神楽が夜兎の血にめざめたらどちらがかつんですか』」

銀八

「神楽が夜兎の血に目覚めたら、本当にヤバイです。あの鳳仙に匹敵する程の力ですからね。銀さんも白夜叉に目覚めたら強いです。みんなボッコボコです」

すずか

「それでは次の質問。ペンネーム『昴』さん。『プレシア、フェイト、アルフは銀時に好意をもっているように見えますが、争奪戦的な事をやる予定はありますか?』。銀さんモテモテですね。」

銀八

「争奪戦やっちゃう? シグナムも混ぜて。もしかしたら、やるかもしません」

すずか

「ペンネーム『Mさん』。『Strikers編で真選組を出すんですか? 近藤さんなんか新人フォワード達の良き理解者になると思

います。(特にティアナなんか影響されるのかなあ?) どのなんですか?』

銀八

「まだstrickers編の内容は具体的には決まっています」

フエイト

「次の質問。ペンネーム『ダンゴ24兄弟』さん。『原作でアルカシエルを使う時リンディがキーを回しますが、そこに何故か松平のとつあんが現れて』こういう事はオジサンに任せなさああああい松つちゃん砲2号発射!』とか言ってるキーを奪い回す感じがしますが、私の考え過ぎでしょうか?でも何か出てきそうで恐ろしいです。後ストライカーズに海坊主は出ないのででしょうか?そこら辺教えて下さい』

銀八

「松平のとつあんは出ません。考え過ぎです。でも出て来たらそんな感じでしょうね。星海坊主も出る予定はありません。『海坊主』じゃなくて『星海坊主』だから。間違えないように」

フエイト

「ペンネーム『銀銀銀』さん。『リリカル勢は銀魂ワールドに来れないんですか?あと土方はいつ切腹するんですか?』」

土方

「おい、切腹ってどういう事だコラ。斬るぞテメー」

銀八

「勝手に出てくんな土方。来れない事はないですよ。A・S編が終わったら銀魂ワールドに行かせようと考えています」

すずか

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『今回のお話（第四十一訓）の銀八先生のコーナーにて、すずかちゃんのバリアジャケットとデバイスについての質問をさせていただいたじゃないですか。それで、今度はすずかちゃんご本人に同じ質問をお願いしたいのですけど、ぶつちやけよろしいでしょうか？いやその、こういうのってやっぱりご本人にも聞いたほうがよいかと思ひまして…（苦笑）』。なのはちゃんが着てるバリアジャケットみたいなデザインがいいかな？お揃いで。デバイスの方は腕輪型がいいかな」

銀八

「あと『ゲロ口軍曹』さんから二人にメッセージ的なものがあるぞ。『あと、フェイトちゃんとすずかちゃん。いつも銀八先生のアシスタント、ご苦労様です。（ぺこり）個人的にリリなのシリーズではお二人の大ファンですので、色々大変だとは思いますが、これからは本編やこのコーナーで精一杯頑張ってください。私も陰ながら応援しておりますので。』」

すずか

「わあ嬉しい 『ゲロ口軍曹』さん、ありがとうございます！本編

では、あまり出番はないけどこのコーナーで頑張るので、これから
も応援よろしくね。」

フェイト

「ファンですって言われると…少し照れるけど、私も嬉しいよ。あ
りがとうございます。」

銀八

「まさか二人に応援メッセージが来るとはな。『ゲロ口軍曹』さん
もやるねえ。そんじゃ今回は二人に応援メッセージを書いた『ゲロ
口軍曹』さん、廊下に立ってなさい。」

第四十四訓：思い出は逃げるための場所じゃない（前書き）

生徒全員「教えて、銀八先生！」

銀八「ペンネーム『ダークキバ』さんからの質問。『銀さんは機動六課ではスターズ小隊ライトニング小隊どちらにつくんですか自分のにはライトニング小隊だともうのですが』。今の所、銀さんがどこに配属されるかは決まっています。てかどっちにもつかないかも。それでは、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十四訓。始まります！」

第四十四訓：思い出は逃げるための場所じゃない

目の前は真つ暗だった。

銀時は重い瞼を開けた。

目の前に沢山の子供達がいて、木の机の前で正座して座っていた。手には教科書らしき物がある。

（寺子屋か…？）

そう思いながら銀時は、視線を前に向けた。

そこには、子供達に勉強を教えている先生がいた。

その先生を見て、銀時は驚愕した。

「…松陽…先生……」
信じられなかった。

子供達の前に立っているのは、死んだはずの恩師・吉田松陽先生だった。

「ん？どうしました銀時？」

松陽先生が起きた銀時に気付いて、声をかけた。

「どーせまた寝てたんだろ」

頬杖をついた男の子が言った。

銀時は男の子を見た。短い黒髪の男の子。

小さい頃の高杉晋助だ。

「高杉！？」

少年姿の高杉を見て、銀時は驚いた。

「あ？何デケー声出してんだよ。うるせーな」
耳を押さえながら、高杉が言った。

「銀時、静かにしろ。今は休憩時間じゃないぞ」
長い黒髪を後ろに束ねた男の子が言った。

小さい頃の高杉小太郎だ。

「ツラ！？」

「ツラじゃない桂だ！そのあだ名はやめろ！！」

桂が怒鳴った。

すると、松陽先生が、手をパンツパンツと叩いた。みんなが松陽先生に注目する。

「はいはい。喧嘩は終わりですよ」

松陽先生の言葉で、みんな教本を手にした。

桂は真面目に教本を見て、高杉は頬杖をつきながらジツと松陽先生を見ている。

銀時は周りを見回した。全員顔に見覚えがある。

一緒に松陽先生の元で学んだ仲間たちだ。

これは、松陽先生に拾われ、先生の学舎で学んでいた時代……

つまり、これは過去。

(どうなってんだ？俺はタイムスリップでもしたのか!?)

銀時は少しパニックになった。

ふと銀時は思った。そういえば松陽先生も他のみんなも、大人の姿の俺を見ても全然驚いてない。何の反応もない。何故だ？

そう思った銀時は、自分の体を見た。手も足も、体全体が小さい。

桂達と同じ子供の姿になっていた。

(ま……マジでか!?!……あれ……?……ってことは……)

銀時は恐る恐る、自分のアソコを覗いた。

見た途端、銀時は青ざめた。銀時のアソコは毛が一本も生えていなかった。

「俺の手 コがアアアア!」

シヨックを受けた銀時は、ありつたけの声で叫んだ。

「うるっせーよ銀時!」

高杉がキレた。

*

高杉と喧嘩して松陽先生に止められ、そのまま授業は終わった。

授業が終わった後、銀時は学舎を出て、少し離れた所に一人で座っ

た。

一体どうなっているのだろう。自分は確か、闇の書と戦って、途中で意識を失い……気付いたら此処にいた。

ということは、これは闇の書の仕業か？此処は闇の書が創った世界。

「どうしました銀時」

松陽先生がやってきた。

「松陽先生……」

顔を上げて松陽先生を見上げた。

見間違えるはずがない、自分の恩師。

「今日の銀時は、少し様子がおかしいですねえ。居眠りはいつも通りですが」

微笑みながら松陽先生が言う。

小さい頃、何度も見た松陽先生の笑顔。松陽先生の顔を見て、銀時は懐かしく思った。

松陽先生だけではない。高杉も桂も他のみんなも昔のまんまだ。高杉と喧嘩したり、その様子を坂本辰馬が笑って見守り、桂が止めに入るが、最終的に三人の喧嘩になる。騒がしかったあの頃のままだ。

「何かあったのですか？」

松陽先生が尋ねた。

銀時はどう答えるか、しばし考えた。

「松陽先生……」

意を決して言う。

「此処は……この世界は夢か何かですか？」

松陽先生に尋ねた。

「はい。そうです」

表情を崩さず、微笑みながら松陽先生は答えた。

「此処は、闇の書が銀時の記憶を基に創った世界です」
少し強い風が吹いた。

学舎の外では、子供達が遊んでいる。桂と高杉が何やら睨み合っている。

「銀時。この世界にいれば、私や仲間達とずっと一緒にいられますよ」

松陽先生が言った。

失ってしまった大切な恩師、大事な仲間達。この世界にいれば、讓夷戦争もなく、松陽先生や仲間達とずっと一緒にいられる。

一瞬心が迷った。

だが、銀時は首を横に振った。

「悪い…松陽先生…」

前を真つ直ぐ見つめながら、銀時は松陽先生に謝った。

「俺…向こうに大事なモンが出来ちまった」

そう、俺には今、掛け替えのない大切なモノがある。

過去の思い出しがみついて、その大切なモノを捨てる訳にはいかない。自分の武士道を捨てる訳にはいかない。

そして、この世界は夢。夢での幸せは本当の幸せではない。

「だから俺は、向こうに戻らなきゃいけない」

ハッキリと自分の意志を、松陽先生に伝えた。

「そうですか」

松陽先生は微笑みを崩さない。

すると答を聞いた松陽先生は、銀時の頭に手を乗せた。

「よく、その言葉を言いました」

「え？」

銀時は松陽先生を見た。

松陽先生は、満足そうな笑みを浮かべていた。

「自分の幸せのために、大切なモノを捨てるように教えた覚えは、ありませんからね」

そうやって、松陽先生は銀時の頭から手を離した。

「もし、この世界にいたいなんて答えたら、私は貴方を斬っていました」

「ええっ!!!？」

銀時は思わず体が震えた。

「ふふ。冗談ですよ」

笑いながら松陽先生は言った。

冗談に聞こえねーよ、と銀時は小声で呟いた。

すると、銀時達の前に光が現れた。驚いた顔で銀時は光を見つめた。

「この光の中に入れば、この世界から出られます」

光を見ながら、松陽先生が言った。

銀時は立ち上がって、光に近づいた。

「銀時」

松陽先生が銀時を呼び止めた。

銀時は足を止めて振り返った。

「貴方が本当に戦うべき敵は闇の書ではなく、闇の書の中にある」

真の闇』です」

「闇の書の中の『真の闇』？」

銀時は考えた。

桂が闇の書から聞いた、心臓の鼓動音。そしてユーノが見つけた『闇の書は魔導師の技術の研究のための物ではない』という言葉。

それと関係があるのか？

「『真の闇』の力は闇の書を上回ります。それでも貴方は行くのですか？」

銀時の覚悟を確かめるように、松陽先生は尋ねた。

銀時は松陽先生から目をそらさず、真っ直ぐに見つめた。

「相手が誰だろうと、俺は俺の大事なモンを護る」

松陽先生は、黙って銀時の答を聞く。

「それが俺の武士道だ」

眼に強い決意と信念を宿しながら、銀時は答を言った。

「良い眼ですね」

松陽先生は、再び満足そうな笑みを浮かべた。

「行きなさい銀時。貴方が信じる道を」

「はい」

松陽先生に応え、銀時は前を向いて歩き出した。

後ろを振り返らず、前に進む。

松陽先生……またアンタに会えて……嬉しかったぜ

心の中で恩師に別れを告げ、銀時は決意を胸に光の中へと入っていった。

*

光から出た銀時は、真つ暗闇にいた。

すると闇の書が姿を現した。

「銀時」

闇の書は、少し驚いた顔をしている。

「よオ。また会ったな」

「銀時……何故……夢の世界から抜け出した？あそこにいれば、何も失わず、穏やかで安らかな夢を見れたのに……」

闇の書は、わからないと言った顔をする。

「簡単な事だ。夢や思い出は、逃げ込む場所じゃねーからだ。まっ、俺は元から逃げるつもりはねーけどな」

思い出は大事にすべきモノだが、決して逃げ込むための場所じゃない。

闇の書はどうするか考えている。

「闇の書。はやてを助ける方法は、本当にねーのか？」

銀時が尋ねた。

闇の書はどう答えるか迷っている。

「もしはやてを助ける方法があるなら、はやてを助けやがれ」

「……だが……私がこの行為をやめてしまったら……」

闇の書は口ごもった。

主の事は助けたい。死なせたくない。

だが、主を助けたら『アレ』が外に出てしまうかもしれない。『ア

レ』が外に出たら、全ての世界が破壊されてしまう。そうになったら主も死んでしまう。

それなら、苦しんで死ぬよりも、安らかな永遠の眠りにつかせた方が……。

「闇の書」

銀時が呼んだ。

「お前の中に何がいるのかは知らねエ。けど、もしソイツが外に出たら、俺がソイツを止めてやる」

「だが……」

闇の書は戸惑った。

「ソイツのせいでお前はやてが苦しむなら……涙を流すなら、俺がソイツをブツた斬ってやる」

銀時が力強く言った。

「銀時……」

「女に涙は似合わねーからな。笑ったお前の顔も見てみてーし」
「……！！！」

銀時の言葉に、闇の書は頬を赤くした。

笑った私の顔が見たい？そんな事を言われるとは……人からそんな事を言われたのは初めてだ。

闇の書は、何とか気持ちを切り替えて銀時を見た。

この男なら、銀時なら何とかしてくれるかもしれない。

闇の書は決意した。

「……わかった。これから主の所へゆく」

「ああ。頼むぜ」

二人は、はやての所へ向かった。

*

はやても真っ暗闇の中にいた。

「ん……」

はやては重い瞼を開けた。周りは暗く、目の前には闇の書と銀時がいた。

「銀八先生!？」

車椅子に乗ってるはやては、銀時を見て身を乗り出した。

「銀八先生?」

銀時を見ながら、闇の書が呟いた。

「ああ、それは本名じゃねーんだ。本名は銀時。坂田銀時だ。なんなら銀ちゃんって呼んでもいいぜ?」

はやてに本名を教えた。

「それじゃあ銀ちゃんって呼ぶわ」

すると、はやては周りを見渡した。

「銀ちゃん、ここはどこなんや?それにその子は?」

「私は闇の書です。そして、ここは私の中です」

闇の書がはやてに答えた。

「えっ?あなたが闇の書!？」

はやては驚いた。

それから闇の書は、はやてに今までの事を全て話した。はやては真剣に闇の書の話聞いた。

話を聞き終えたはやては頷いた。

「わかった。ほんなら名前をあげる。闇の書なんて名前は、貴女には似合わへん。私は管理者や。私にはそれが出来る」

「主…」

はやて達の足下に白い魔法陣が展開される。

*

新八達は、アリサとすがと一緒に戦いの様子を見ていた。なのは達は、海上で闇の書と戦っている。

「見てる事しか出来ないなんて…」

新八は悔しくて、歯を食いしばって拳を強く握った。

*

なのは、フェイト、アルフ、は空中で闇の書と対峙していた。何発か魔法攻撃を撃つたが、闇の書には通用しない。すると、突然闇の書の動きが鈍くなった。

その時、

（外の方！管理局の方！）

なのは達は念話を受けた。

（そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

「はやてちゃん!？」

「はやて!？」

念話を受けた二人は驚いた。

（えっ!？なのはちゃんとフェイトちゃん!？）

はやても驚いている。

（うん！なのはだよ）

（いろいろあって、闇の書と戦ってるの）

二人ははやてに返事をした。

はやての声を聞いて、二人は少し安心した。

（ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん。何とかその子止めてあげてくれる?）

「え?」

（魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が走っていると管理者権限が使えるん。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えるば、銀ちゃんも外に出せる）

はやてがなのは達に説明した。

「わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね」

「やろう、フェイトちゃん!」

「うん!」

二人は、闇の書に向けてデバイスを構えた。
デバイスの先に魔力を溜める。

*

闇の書の中。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」
はやては両手を闇の書の顔に添える。

「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」
闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

「スターライト・ブレイカー!!!」

「プラズマ・スマッシュャー!!!」

桜色の閃光と金色の閃光が同時に放たれた。
二つの閃光は闇の書を飲み込んだ。

「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります」

「うん」

「ですが、防御プログラムは止まりません」

「まあ何とかしよ」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

「行こか。リインフォース」

はやてはリインフォースを抱いた。

「はい。我が主」

はやては光に包まれた。

*

外にいるなのは達に、エイミーからの通信が入る。

「みんな気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！」
海に黒い球体が現れた。闇の書の防御プログラムだ。
すると、なのは達のすぐ近くに白い光が現れた。

「おいで…私の騎士達…」

白い光を囲むように、守護騎士達が現れた。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

シグナム。

「主在る限り、我等の魂尽きる事無し」

シヤマル。

「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る」

ザフィーラ。

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ヴィータ。

はやてによって、守護騎士達が復活した。

「シグナム！」

「ヴィータちゃん！」

シグナム達を見て、フェイトとなのはは名前を呼んだ。

光の中には、はやてとリインフォースがいた。

「リインフォース。私の杖と甲冑を」

「はい」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。

直後、光は消えて、中からははやてが姿を現した。

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セーッと
アップ！」

髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケット
を身に纏い、背中には翼のようなものが出た。

*

「あつ！あれシグナムさん達だ！」

様子を見守っていた新八が叫んだ。

「じゃあ、あの真ん中にいるのが、はやてアルカ？」

「うむ。間違いない、八神殿だ！どうやら救出できたみたいだ！」

神楽の言葉に、桂が答えた。

「よかつたわ」

お妙はホッと一安心した。

「それじゃあ、僕もなのは達の所に行きます」

「うん。気をつけてねユーノ君！」

ユーノはなのは達の所へ向かった。

「あの…ちよつといいか？」

九兵衛が手を挙げながら言った。

みんなの注目が九兵衛に集まる。

「銀時の姿がないが…」

「…あれ……？」

さつきまで喜びで上がっていたテンションが一気に下がった。

そういえば、銀時の姿が見当たらない。

なのはちゃん達から念話を受けたユーノ君の話では、銀さんは闇の

書に吸収されてしまったらしい。

「まさか…銀さん……なのはちゃん達の攻撃で、闇の書と一緒に吹

っ飛ばされちゃったのかしら…」

心配そうな顔で、お妙が言った。

新八達はイヤな汗を流した。

「あの…皆さん？」

すずかが恐る恐る声をかけた。

が、誰も反応しなかった。

銀時は何処へ？

くおまけく

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』からの質問。『質問です。ナンバーズがもしも真選組にJS事件の後に施設から出て真選組に引き取られたら、ナンバーズ（ウーノ、クアットロ、トーレ、ドゥーエ、セツテ以外）の良い所を見つけて彼女達も近藤さんを尊敬する気があると思います。（お妙のストーリーカー以外）どうなんですか?』」

銀八

「近藤だったら全員の良い所を見つけると思うぞ。全員が近藤を尊敬するかは、わからねーけどな」

「銀八
すずか」

「それでは次の質問。ペンネーム『烈火竜』さん。『一、シャマルの回復魔法は服部全蔵の痔を治せるでしょうか？二、銀さんとヴィータ、どっちの逆ギレが怖いですか？三、近藤さんがゴリラと結婚しかかったと言う話をなのは達は信じるでしょうか？』」

銀八

「質問一の答。シャマルの魔法でも全蔵の痔は治せません。痔がない全蔵なんて全蔵じゃありませんから。質問二の答。ん〜銀さんじやね？逆ギレしたら何するかわかんねーからな。いやヴィータもハンマー振り回しそうで怖そうだな。どっちも怖えよ。質問三の答。最初は信じないけど、思い浮かべてみて『あ…アリかもしれない』と言うかもしれません」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『ニケ・アルヴァース』さん。『1. 銀さんやプレシアはフェイトの露出狂予備軍のようなバリアジャケットを見てどう思いましたか？2. Strikers編での銀さんはユニゾン状態、リイン若しくはアギト、のシグナムとライオットフォームのフェイトさんどちらが好みですか？』」

銀八

「銀さんは、『今時の魔導師は露出が激しいな。もっと自分を大切

にしたら？』とってます。プレシアもジュエルシード事件の時に、ラスボスみたいな恰好してたからな。『我が娘ながら凄いわね。出来ればもう少し露出は抑えてほしいわね』と思ってます。二つ目の質問ですが、先生も作者もまだユニゾン状態とかわからないので、お答えできません。申し訳ありません」

フェイト

「ペンネーム『銀銀銀』さん。『この銀さんはいつになったら必殺技『ももパーン』をやるんですか？やるならぜひグラム爺さんにやってほしいです』。ももパーンって何？」

銀八

「洞爺湖の仙人から教えられた必殺技だ。いや、別に教えられてねーな。はい質問の答。ももパーンねえ。いつかやってくれるといいですね。はい次」

すずか

「ペンネーム『クロス』さん。『銀さんは以前シグナムの胸を揉みましたよね？感触はどうでした？』。え…ええ！？銀さん…胸を揉んだんですか！？」

銀八

「ああ、揉んでましたね銀さん。隣からフェイトが殺気を放っているの、さつさと終わらせようと思えます。銀さんからの感想のメッセージ。『大きくて、なかなか張りがあって柔らかい感触でした。デカいだけじゃない良い胸だった』と、銀さんの感想でした」

フェイト

「……………ペンネーム『プレイヤー』さん。『プレシアさんに質問です。ツラみたくない天然だけど誠実な人に言い寄られたらどうしますか？あとまだ遅くないと笑もうちから再婚してもいいと思いますよ。美人だし。フェイトの為に。では。』。母さん、再婚するの？」

プレシア

「再婚なんて、あまり考えてなかったわね。まあ桂さんは悪い人ではないみたいだけど…再婚とまではいかないわね」

銀八

「誰か気になる男とかいねーの？」

プレシア

「まあ……………いると言えばいるけど…」

銀八

「じゃあソイツと再婚しちゃえば？」

プレシア

「そんな……………！私と銀と……………！！」

フェイト

「母さん。今何て？」

銀八

「はい。今回の銀八先生はここまで。またお会いしましょう。ばいばい」

すずか

「質問してくれた読者の皆さんは、廊下に立ってて下さい」

第四十四訓：思い出は逃げるための場所じゃない（後書き）

次回、リインフォースが言う『アレ』が姿を現す!？

第四十五訓：そして真の闇が解き放たれる（前書き）

生徒全員「教えて、銀八先生！」

銀八「ペンネーム『ダークキバ』さんからの質問。『シグナムはフ
イトが銀時にキスをしたことを知るんですか後シグナムは銀さん
とキスしたいと思ってますか』。さあねえ。知るかもしれないし、
知らないで終わるかもしれません。銀時とキスしたいかどうかです
が、当然キスしたいと思ってます。それじゃあ、『銀魂×魔法少女
リリカルなのは』第四十五訓。始まります！」

第四十五訓：そして真の闇が解き放たれる

「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。

はやては優しく微笑んだ。

「すみません」

「はやてちゃん……あの……ごめんなさい」

シグナムとシヤマルが、はやてに謝った。

はやては首を横に振った。

「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そ

やけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

「おかえり。みんな」

「う……うあああああ！！」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

「はやて！はやて！はやてええええ！！」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。

はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。

そこへ、なのはとフェイトがやってきた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。ウチの子達がいろいろ迷惑掛けてもうて」

「ううん」

「平気」

なのはとフェイトは笑顔で答えた。

「主、申し訳ありません」

「ん？」

いきなりリインフォースが、はやてに謝った。

「銀時を少し離れた所に出してしまいました」

「あつ！そついえば銀ちゃんがあらん！！」

慌ててはやては辺りを見回した。

「どこに出したんですか？」

なのはがリインフォースに尋ねた。

「上です」

「上？」

言われて全員が、顔を上に向けた。

すると上から銀時が落ちてきて、

「んがっ！！」

シグナムにぶつかつた。

左手で顔を押さえながら、右手で銀時を抱えた。シグナムの腕の中に、体中傷ついていた銀時がいた。

「銀時！？」

傷ついていた銀時の姿を見て、シグナムは驚いた。

「どうして、こんな傷だらけに……！？」

「主を救うために、私と戦つて傷ついたのです」

リインフォースがシグナムに教えた。

シグナムは思い出した。自分が消える間際に、銀時に言つた言葉を。

主はやてを頼む

銀時は私の頼みを護るために、主はやてを護るために、こんなに傷つくまで戦つたのか。

私達から受けた傷も、浅くはなかつたはず。

シグナムは銀時を強く抱いた。

「……ありがとう、銀時……」

涙を流しながら、銀時に礼を言つた。

「……銀時」

ヴィータは銀時を見つめた。

シグナムとの約束を護るために、こんなにボロボロになるまで戦つ

たのかよ。

シヤマルとザフィーラも銀時を見つめた。

「シヤマル。銀時の治療を頼む」

「はい」

シヤマルは頷いて答えた。

「クラールヴィント、本領発揮よ。静かなる風よ。癒しの恵を運んで」

シヤマルの足下に、緑色の魔法陣が展開された。

緑色の花びらが風に舞う。銀時、それにフェイトとなのはの傷を癒した。

「『湖の騎士』シヤマルと『風のリング』クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「凄いです！」

「ありがとうございます、シヤマルさん！」

二人は傷が癒えて回復した。

銀時も傷は癒えたが、まだ目を覚まさない。

「銀さんの傷も癒したけど、目を覚ますにはもう少し時間がかかるわ」

「うむ。充分だ」

シグナムは頷いた。

そこへクロノがやってきた。

「すまないが。水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」

クロノは視線を黒い球体に向けた。

「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。

「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。

シャマルが手を挙げた。

「えーと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん」

シャマルとシグナムが渋い顔で言った。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータがアルカンシエルに反対する。

「そ…そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる？」

ユーノが説明した。

「あの、私もそれ反対！」

「同じく！絶対反対！！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。

確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」

「はい、みんな！あと十五分しかないよ」

エイミイが通信で伝えた。

「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

「ああ！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れたアルフがそんな事を言った。

「ア…アルフ。そんな単純な話じゃ…」

ユーノが言った。

フェイトは考えた。

シグナムも考えた。

こんな時、銀時なら何て言うだろう。

そう思いながら、シグナムは背中に背負った銀時を見た。フェイトも、シグナムの背中であいつが眠ってる銀時を見た。

銀時なら、きっと誰も思いつかないような事を考える。

要は此処じゃなければ撃てんじゃね？

という言葉が二人の頭に思い浮かんだ。

その瞬間、

「あっ！！」

二人は思いついた。

「クロノ。アルカンシェルってどこでも撃てるの？」

フェイトが尋ねた。

「どこでもって…例えば？」

「今、アースラがいる場所。宇宙空間だ」

空を見上げながら、シグナムが答えた。

話を聞いていたエイミーは、得意げな笑みを浮かべた。

「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

右手の親指を立てる。

「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

「オイ！ちよっと待て君ら！ま…まさか……！！」

二人の意見にクロノは驚いた。
フェイトとシグナムは、笑みを浮かべて頷いた。

*

「あの…海にある黒いのは何だろ？」

「さすがが不安げに言った。」

「一体何なの？まさかこんなのが…このままずっと続いたりしないよね？」

「アリサも不安になる。」

「大丈夫だよ」

新八が二人に言った。

「新八さん？」

二人は新八を見た。

「銀さんやなのはちゃん達が、きっと何とかしてくれる」
「そう。あの人達ならきっと何とかしてくれる。」

「今まで、どんなピンチだって切り抜けてきたんだ。だから。」

「信じよう。銀さん達を信じて待とう」

笑顔で新八が言った。

「新八のくせに、たまにはいい事言うアルナ」

「だから”たまには”は余計だよ」

新八が神楽に言った。

「普段はふざけている男だが、銀時はやる時はやる男だ」
九兵衛が言った。

銀時の強さを知っているからこそ、彼女も銀時を信じている。

「私も信じます。なのはちゃんとフェイトちゃんも強い子だしね」
「言った後、お妙はさすがとアリサに顔を向けた。」

「二人は、なのはちゃん達のお友達なんでしょ？なら、なのはちゃん達を信じましょう」

微笑みながら二人に言った。

みんなの言葉を聞いて、すずかとアリサは不思議と不安はなくなり、表情が明るくなった。

「はい。なのはちゃん達を信じます!」

「私も! 私達は友達だもん!」

*

「なんとも、まあ…。まるで発想が銀さんね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと十分!」

エイミイはキーボードを操作しながら言った。

「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。

「僕かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。」

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言った。

「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」と、フェイト。

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送!」空を見上げながら、なのはが言った。

「あとはアルカンシエルで蒸発」

リンディが言った。

グレラムは、現地の様子をモニターで見ている。

「アルカンシエル、チャージ開始!」

「はい!」

リンディの指示に局員が応える。

アルカンシエルの発射準備をする。

海上では、なのは達が防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスを構える。銀時は、狼形態に変身したアルフの背中に乗せられている。

防衛プログラムの周辺に、数本の禍々しい黒い柱が立つ。防衛プログラムが暴走を開始する。

「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の『闇』」

はやてが呟いた。

黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。

カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生えていて、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機械の怪物だった。頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

「チエーン・バインド!!」

「ストラグル・バインド!!」

アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえる。

「鋼のくびき!!」

ザフィーラから白い魔力の線が出る。

白い線は複数の尻尾を斬った。

「レイジングハート！エクセリオンモード!!」

レイジングハートの形が変形する。

ヴィータがグラーフアイゼンを構えて近寄る。

「ちゃんと合わせるよ！高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーフアイゼン!!」
撃鉄を起こし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。

「轟天爆砕!!」

叫びながら、巨大ハンマーを振り上げる。

「ギガント・シュラアアアク!!!!」

巨大ハンマーを、防衛プログラム目掛けて振り下ろす。

防衛プログラムはバリアを張って、巨大ハンマーとぶつかる。衝撃で波が荒れる。バリアは、ヴィータの巨大ハンマーによって碎かれた。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！」

足下に桜色の魔法陣を展開する。

カートリッジロードをする。レイジングハートから桜色の翼が出る。防衛プログラムに向けて構える。

「エクセリオンバスター！！」

先端に桜色の魔力が溜まる。

「ブレイク・シュート！！！」

桜色の閃光を放ち、防衛プログラムのバリアに直撃した。

桜色の閃光はバリアを破った。

次はシグナムとフェイトの番だ。

「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン！
レヴァンティンを上に掲げる。

「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

鞘とレヴァンティンを合わせる。

撃鉄を起こして、レヴァンティンと鞘は合わさって『弓』になった。魔力で矢を作り、防衛プログラムに向けて構える。

「翔けよ、隼！！！」

矢は紫色に輝き、防衛プログラムに向かって放たれた。

バリアに当たった矢は爆発し、バリアを砕いた。

「バルディッシュ！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュの形が変形する。

金色の刃が出て、剣の形になる。

「フェイト・テストアロッサ、バルディッシュザンバー！行きます！！」

足下に金色の魔法陣が展開される。

バルディッシュを上に掲げ、撃鉄を起こす。

「撃ち抜け、雷神！！！」

バルディッシュを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びる。

伸びた金色の魔力刃は、バリアを破って防衛プログラムを斬った。

防衛プログラムからミミズのようなモノが現れ、光線を放とうと魔力を溜める。

「『盾の守護獣』ザフィーラ！攻撃など撃たせん！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開する。

白い魔力の柱が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！！」

はやては白い魔法陣を展開する。

防衛プログラムの上空に、七ツの白い光を出す。

「石化の槍、ミストルティン！！！」

白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムを石化させる。

すると、石化した防衛プログラム内から、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に出てきた。

「うわ〜！なんか凄い事になってるよ！」

アルフは若干引いた。

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない！」

「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ！」

クロノが氷結の杖・デュランダルを構えて、エイミィに応えた。

「悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノがデュランダルを振った。

直後、海が凍っていく。

「凍てつけ！！！」

そのまま防衛プログラムまで凍らせた。

それでも、まだ防衛プログラムは止まらない。

「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

「うん！」

なのはの言葉に、二人は頷いた。

最後は、三人による一斉攻撃だ。

なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。

「全力全開！スターライト」

レイジングハートを振り上げる。

「雷光一閃！プラズマザンバー」

足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。

空から紫色の雷が落ちて、金色の魔力刃に当たる。

はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

「ごめんな…おやすみな…」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

「響け終焉の笛、ラグナロク」

三つの白い魔力の弾を作り出す。

「ブレイカー！！！！！！」

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。

閃光は直撃し、大爆発を起こした。

ドクン

防衛プログラムの中で鼓動が強くなった。

そして鼓動は防衛プログラムから消えた。

「捕まえた！」

シヤマルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

ユーノとアルフが転送準備をする。

「転送！！！！」

シヤマル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

「アルカンシエル、バレル展開！」

キーボードを操作しながらエイミーが言った。

リンデイの前に発射装置が現れた。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「了解！」

局員が応える。

そしてアースラの前に、防衛プログラムのコアが転送された。

リンデイは発射装置にキーを差し込む。

「アルカンシエル発射！」

キーを回す。

アースラからアルカンシエルが発射された。

光の中に飲み込まれ、コアは完全に消滅した。

退避したアースラは、コアの消滅を確認した。

「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミーが通信でみんなに知らせた。

みんな安心し、喜びで笑顔になる。

なのはとフェイトとはやては、ハイタッチした。

フェイトはアルフの背中中、眠っている銀時を見た。

これで全てが終わった。

銀時も起きれば、はやて達も混ざって、また騒がしくて楽しい毎日が始まる。

そう思った時、

「え？嘘……？何これ！？」

突然、エイミーが驚きの声を上げた。

「どうしたんだエイミー？」

不審に思ったクロノが尋ねた。

「みんな気をつけて！海にある防衛プログラムの残骸から、物凄い魔力反応が……！！」

「何だつて!？」

通信を聞いたクロノは、防衛プログラムの残骸を睨んだ。

コアはアルカンシエルで、完全に消滅したはず。なら一体何が？

全員の視線が残骸に集まる。

「……………できれば防衛プログラムのコアと共に、アルカンシエルで消滅してほしかったのですが…やはり弱まったコアから出ていましたか……………」

リインフォースが言った。

「リインフォース？」

首を傾げながら、はやてはリインフォースを見た。

その時、海の中から何かが出てきた。

「………」

みんなは黙ってソレを見た。

ソイツは海から上がると、防衛プログラムの残骸の上に立った。

その瞬間、空気が重くなった。吐き気が襲った。

人型で二メートルを超える大きさのソレは、ゆっくりと空を見上げた。

そして大きく息を吸い込み、

「ゴオオオオオオオ!!!」

歓喜の咆哮を上げた。

『外』に出れた歓喜の咆哮。

地を揺るがすような、禍々しき歓喜の咆哮。

ソレはついに、『外』に解き放たれてしまった。

くおまけく

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀さん達は strikers 編では民間協力者として機動六課にくるんですか』」

銀八

「えー、第三章、strikers 編に関してはあまりお答えできません。ネタバレになっちゃうんで」

「すずか

「それでは次の質問。ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんの金太郎姿（裸エプロン）を見て、フェイトとシグナムはどんな反応をするでしょうか？』。銀さんが裸エプロン！？」

銀八

「二人とも顔真っ赤になるんじゃないかね？フェイトなんか顔をキョロキョロさせて、落ち着かない気分になると思うぞ」

「すずか

「そ…それでは次の質問。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『もしはやてたちが銀さんの宇治銀時井とかを目撃したら、それぞれどういう心境になるでしょうか？ぶっちゃけ、はやてとかは『食に対する冒涇や！？』とか何とか銀さんに怒鳴りそうな気がします。』」

銀八

「言いそうだな、はやて。はやてって結構、料理上手なんだろ？そりゃあ怒るだろうな。銀時の事が好きなシグナムでも引くだろうな。もちろん他の騎士達も」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『銀銀銀』さん。『以前stss編でヴィヴィオの銀さんの呼び名談義ありましたけど、新八や神楽、他のメンバーの呼び名はどうする予定ですか？特に新八は『メガネ君』って呼ばれそうだととても危険な感じがします！あと沖田がフォワードや

ナンバーズを調教しようとするものを危惧しているのは考えすぎですか?』」

銀八

「呼び名は考えてません。まー、新八は『メガネ』で決まりだろ。他に何もねーんだし。あつ、あとツツコミか。沖田は出るかは、わかりません」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さんから二つ目の質問。『なのは達は近藤さんのハンドルネーム『フルーツチンポ侍』をどう思うでしょうか? また、この物語に使われるでしょうか?』フルーツチン……!!」

銀八

「あーあ。フェイトの顔が真っ赤になっちゃった。ダメよ『烈火竜』さん。そんな質問しちゃ。質問、読むのはフェイト達なんだから。まあハンドルネームを知ったらフェイトみたいに顔真っ赤にするんじゃないね?」

すずか

「ペンネーム『ニケ・アルヴァース』さんからの質問。『質問します。1. ヅラはいつプレシアや桃子さんをナンパしますか? 2. 高町家の戦闘民族と万事屋や新撰組がバトつたらどちらが勝つと思いますか?』」

銀八

「誤字があるぞ〜。『新撰組』じゃなくて『真選組』だから。『二ケ・アルヴァース』さん、『真選組』って百回書きなさい。質問1の答。ナンパするかはわからんが、声をかけるのは少なくとも闇の書事件が終わってからだな。質問2の答。高町家の人間がどんぐらの強さなのかわからないので、お答えできません」

銀八

「実はまた『ゲロ口軍曹』さんから、すずかに質問がある。『この間の質問の続きのようなものですけど、もしあなたが魔法を使えるとしたら、どういう魔法とかを使ってみたいと思いますか？私的には銀さんの意見みたいに回復系統の魔法とか、あと水とか氷とかの攻撃魔法を使われてそうかな〜』と書いてますけど…（苦笑）」。ほんと『ゲロ口軍曹』さんはすずか好きだな」

すずか

「『ゲロ口軍曹』さん、質問ありがとう。うん。私も使えるなら回復とかの魔法がいいな。水と風で傷を癒したりする魔法。攻撃とか人を傷つける魔法は、あんまり使いたくないから。こんな答でいいかな？」

銀八

「いいと思うよ。あつ、あと質問がたまにかぶったりする時があるから、気をつけるように」

銀八&フェイト&すずか

「それじゃあ質問してくれた読者の皆さん、廊下になっとなさい」

第四十六訓：バカは最強（前書き）

ついに解き放たれた真の敵！

起きろ銀時！全てが壊される前に！！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十六訓。 始まります！

第四十六訓：バカは最強

防衛プログラムの残骸の上に立っているソイツは、咆哮を上げた後、ジツと海の向こうを見つめた。

アースラでも、モニターでソイツの姿は確認している。

「な…何なのアレは…！？」

リンディは冷汗を流した。

手も震えている。

モニター越しからでも、ソイツの禍々しい感じが伝わってくる。

「わ…わかりません…突然、海に現れて…」

エイミイも声が震えている。

時空管理局本局の一室。

モニターで様子を見ているグレアム達も驚愕していた。

「と…父様…アレは一体！？」

アリアが震える声で、グレアムに尋ねた。

隣にいるロツテも、恐怖で震えている。

「わ…私にもわからない…！何だあの化物は！？」

グレアム自身も闇の書事件に関わり、その後も闇の書についてそれなりに調べてきた。

だが、あんな化物の存在は知らない。

別室で、プレシアもモニターで現地の様子を見ていた。

モニター越しからでも化物の禍々しさは伝わってきた。こんな危険な存在には、今まで出会った事がない。

恐らくその脅威は、闇の書の防衛プログラム以上。

プレシアは、急いで杖を持って部屋から出た。

*

フェイト達は上空から、化物を見ていた。向こうはまだコッチに気付いてない。

化物が出てきてから、明らかに空気が変わった。

化物の大きさは二メートル以上。二つの、血のような真っ赤な目。額からは一本の角のような物が生えている。そして体は黒く、鋼のような強靱な肉体をしていた。

フェイト達は青ざめて、大量の冷汗を流した。呼吸が荒くなる。

本能が”逃げる”と告げている。

アレに近づいたらダメだ。

アレと戦ったらダメだ。

殺される

全員がそう直感した。

*

「な…何だアレ…？」

化物を見て新八が呟いた。

新八も今まで、いろんな生物や敵と出会ってきた。

宇宙海賊、ターミナルに寄生した巨大えいりあん、持ち主を支配する刀。

だが今、新八が見ている化物は、それらを凌駕した存在に見えた。

「アレも闇の書の一部なのか？」

九兵衛も化物から、ただならぬ脅威を感じて冷汗を流している。

後ろでは、お妙が震えるすずかとアリサを安心させるように抱いて

いる。

「俺にもわからん……」

桂も険しい表情で化物を睨んでる。

(もしかや…俺が闇の書から聞いた、心臓の鼓動音の正体か!?)

*

化物は街とは反対方向の、海の向こうをジッと見つめていた。すると、化物は口を開いた。鋭い牙が見えた。

「……久しぶりの…外だ……」

海を見つめながら、化物は喋った。

やっと外の世界に出れた。

何故、自分は今まで外に出れなかった？

人間どもに……あのクソ魔導書の中に封印されたからだ。

化物の中で、ふつつつと怒りと憎しみが込み上げてきた。

拳を強く握って、鋭い歯を食いしばる。

アースラにいるエイミイは、化物の魔力の上昇を確認した。

「みんな気をつけて！化物の魔力がどんどん上がってる！何かする

気だよ！！」

「えっ!?!」

エイミイから連絡を受けたフェイト達は、化物を見た。

「クソ人間如きが、我を封印しやがってエエエエ!!」

怒鳴りながら、化物は口を大きく開き、

「ゴオオオオオオオオ!!!」

開いた口から、巨大な黒い魔砲を放った。

黒い魔砲は、真っ直ぐに数十キロ先まで飛び、次の瞬間、海の上で

黒い大爆発を起こした。

その爆発の規模はおよそ十キロ。

「……………!!!」

化物の魔砲の威力を見て、フェイト達は言葉を失った。

魔砲を撃った後、化物は空を見上げた。

「…アア……最高の気分だぜ……」

化物は後ろを振り返った。

「ん？」

そして、街の存在に気付いた。

「なんだ。人間どもの街があるじゃねーか」

街を見つけた化物は、ニヤリと笑った。

*

「な…何なんですかアイツ?!? ビーム出しましたよ!! ビームで海を吹っ飛ばしましたよ!! あんなの食らったら、街が跡形も無く吹っ飛びますよ!!」

化物を指差しながら、新八が叫んだ。

松っちゃん砲や蝮Z、なのはちゃん達の魔砲攻撃など、いろいろ見てきたが、それらとは比べ物にならないくらいのデタラメな威力だった。

「…い…一体ヤツは何なんだ…!?!?」

なんとかシグナムが口を開いた。

「『ゾーマ』」

リインフォースが呟いた。

「え？」

シグナムはリインフォースを見た。

他のみんなも、リインフォースに注目する。

「魔導生物兵器『ゾーマ』。古代の魔導師達が生み出した『生物型ロストロギア』です」

「生物型ロストロギアだって!?!?」

クロノは驚いた。

今まで様々な事件に関わり、沢山のロストロギアを見てきたクロノでも、生物型ロストロギアなんて見た事も聞いた事もない。

「その昔、狂気の魔導師達が、その技術を駆使して造り出した、最強最悪の魔導生物兵器。しかし、そのあまりに強大な力のせいでコントロールが効かず、何人何十人も魔導師達の力によって、やつとゾーマを私の中に封印したのです」

「リインフォースの中に封印!？」

リインフォースの話に、はやては驚いた。

「はい。私が作られた目的は、ゾーマの封印です。そのために、多くの魔導師達の魔法や魔力を蒐集して、その力でゾーマを封印していたのです」

リインフォースから語られた意外な真実に、なのは達は驚いた。

まさか、リインフォースが封印の魔導書だったとは……。

一方でユーノは納得していた。自分が見つけた文の意味は、こういう事だったのか。

「だが、ゾーマは私の魔力を奪って外に出ようとしていました。そこである魔導師が、私のプログラムを改変し、魔導師の魔力を蒐集して私の魔力を高め、その力で一定期間ゾーマの活動を停止させる事にしたのです。そして活動停止させた後は、ゾーマに余計な魔力を奪われないよう、破壊活動をして魔力を消費する。転生と再生機能は、私が破壊されてゾーマが外に出ないようにするためです」

リインフォースが説明を終えた。

リインフォースの真実。魔導生物兵器・ゾーマ。

夜天の魔導書は、呪われた魔導書なんかではなく、ゾーマという強大な『悪』を封じていた封印の魔導書だった。

なのは達は複雑な気持ちになった。

だが、今は気持ちを切り替えて、ゾーマを何とかしなければ。

フェイト達がそう思った時、

「うるさくて、眠れねーなア」

気だるげな声が聞こえた。

全員の視線が、アルフの背中に集まる。

銀時が起きて、頭をぼりぼりと掻いていた。

「銀時！！」

フェイトとシグナムは、弾んだ声を出した。

「よオ。おはよう」

こんな時でも、呑気に挨拶をする銀時。

すると銀時は、海上にいるゾーマを見つけた。

「リイン。アレがお前の中にいたヤツか？」

「はい」

リインフォースは答えた。

銀時は険しい表情で、ゾーマを見つめた。

アレが松陽先生が言っていた『真の闇』。本当に倒すべき敵。

「誰か足場とか作れねーか？俺飛べねーからさ」

と、銀時がみんなに尋ねた。

フェイト達は驚いた。

まさかアレと一人で戦うつもりなのか？

「一人で戦うつもりか！？いくら貴方でも無理だ！ヤツは海も吹っ

飛ばす魔砲を使うんだぞ！！」

クロノが銀時を止める。

すると、リインフォースが言った。

「あの魔砲は、膨大な魔力を使うので、次に撃てるようになるには、

もう少し時間がかかります」

今、魔砲を撃ったゾーマは、しばらくは魔砲を撃てないらしい。

それでも、ゾーマが脅威である事に変わりはない。

するとフェイトが口を開いた。

「……クロノ。デュランダルで海を凍らせれば、足場が作れるよね

？」

「フェイト！？」

フェイトの発言にクロノだけでなく、全員が驚いた。

「フェイト…！どうして銀時を止めないんだい！？」

「…ごめんね、アルフ。でもアルフもわかってるでしょ？私達が何を言っても、銀時は止まらない」

「う…それは……」

アルフは言い返せなかった。

止めても無駄だという事は、アルフにもわかってた。

「フェイト…本気で言ってるのか？」

クロノが確認するように尋ねた。

「うん。お願いクロノ」

フェイトも本当は、銀時を止めたかった。一緒に戦いたい。

でも銀時は、きつと止まらない。防衛プログラム破壊の時に、魔力を消費した私達じゃ足手まといになるだけ。

なら、せめて銀時のためにしてやれる事は、やっておきたい。

*

ゾーマは、街をどう攻めるか考えていた。

「魔砲はさつき撃つちまったからな……部下どもに壊させるか」
するとゾーマは、両拳を強く握った。

「ゴオオオオオオ！！！」

叫びながら、体に力を入れた。

するとゾーマの背中から、無数の黒い玉が出てきた。黒い玉は宙に浮き、人型になっていき、背中に翼の生えた怪物になった。

その数は百を超える。

「な…！？アイツ、自分の体から化物を生み出しやがった！！」

ヴィータが叫んだ。

「アレで街を襲う気だ！」

怪物達を見ながら、ユーノが言った。

「ほら。時間がねーぞ」

銀時が言った。

もう時間も、選択の余地もない。

「…わかった」

クロノは頷いた。

「そんじゃ行くか」

銀時が、アルフに移動を頼もうとした時、

「待て、銀時」

シグナムが呼び止めた。

「ん？」

銀時は振り向いて、シグナムを見た。

するとシグナムは、レヴァンティンを銀時に差し出した。

「木刀だけでは、アレの相手は辛いだろう。使え」

「いいのか？お前の相棒だろ？」

「構わん。お前になら任せられる」

レヴァンティンを差し出したまま、シグナムは答えた。

銀時は少し考えた後、レヴァンティンを受け取った。

「そんじゃ、お前の騎士の誇りってヤツを、少し借りるぜ」

「ああ。勝って必ず返しに帰ってこい」

シグナムは、銀時の勝利と無事を祈った。

「銀時」

今度はリインフォースが呼んだ。

白髪の女性・リインフォースが銀時の前に現れた。

「本当にすまない。貴方をこんな危険な目に遭わせて…」

「なアに、気にすんな。厄介事はいつもの事だ」

申し訳なさそうに言うリインフォースに、銀時は笑って答えた。

「銀さん」

なのはが呼んだ。

「銀さんの手助けが、出来ないのは悔しいけど…私達は私達の出来る事をします！！」

強い決意が宿った目で、なのはが言った。

「それと…全部終わったら…また私達の先生をやってください」

「ああ」

短く答えて、銀時は頷いた。

「銀時！」

ヴィータが銀時を呼んだ。

少し涙目になっている。

「絶対に……絶対に勝って、帰ってこいよー！」

「ヴィータちゃん……」

銀時の帰りを願ってるヴィータを見て、シャマルは微笑んだ。

どうやらヴィータは、銀時の事が気に入ったようだ。

「お前が俺の心配するなんて珍しいな。今夜はハンマーでも降るか？」

と、銀時は空を見上げた。

「私もヴィータやシグナム達と一緒にや。銀ちゃんの事信じてるからヴィータの肩に手を乗せながら、はやてが言った。

「へいへい」

手を振って銀時は応えた。

「銀時」

最後にフェイトが、銀時を呼んだ。

涙目で、銀時に抱き付いた。

「絶対に……帰ってきてね……約束だよ……？」

涙を流しながら、フェイトは言った。

銀時はフェイトを抱きながら、頭を撫でた。

「ああ。侍は果たせねー約束はしねーからな」

生きて帰ってくる事をフェイトと、みんなと約束する。

フェイトは、ゆっくりと銀時から離れた。

「街の方は頼んだぜ」

「うん」

涙を拭いて、フェイトは力強く頷いた。

「それじゃ頼むわ。アルフ、クロノ」

銀時に頼まれ、二人は頷いた。

銀時を乗せたアルフと、デュランダルを持ったクロノは下に向かった。

「テストロツサ」

シグナムが声をかけた。

「我らは、我らの出来る事をやるぞ」

「はい」

バルディツシュを構え、フェイトは頷いて応えた。

*

クロノはデュランダルで、海を凍らせた。

氷結はどんどん広がっていく。

「これで足場は出来た」

「ああ。サンキュー」

クロノに礼を言っ、銀時はアルフの背中から降りて、氷の上に立った。

「…フェイトもなのはも、みんな貴方の帰りを待っている。負けたら承知しないぞ」

「わーってるよ」

銀時は軽く応えた。

「行こうアルフ」

クロノはなのは達の所に戻っていった。

だが人型になったアルフは、戻ろうとしなかった。

「ん？どしたアルフ？」

銀時が尋ねた。

「あ…あのさ、銀時……」

アルフは顔を赤くして、手をモジモジさせている。

銀時は首を傾げた。

「…フェイトにも黙ってたんだけどさ……あたし……」

アルフは、意を決して言う事にした。

「あたし、銀時が好きなんだ！」

「えっ!？」

いきなりアルフから告白され、銀時は驚いた。

「だ…だから…！絶対帰ってきてよ!!！」

顔を赤くしながら、アルフはなのは達の所に戻っていった。

残された銀時は、呆然となってアルフが去った後を見つめた。

まさか、このタイミングでアルフから告白されるとは思わなかった。

(何考えてんだ、あの狼?)

銀時はため息をついた。

主とその使い魔、両方から好かれるとは思わなかった。これはゾーマとの戦いより、戦い終わった後の方が大変かもな。そんな事を思いながら、銀時は氷の上を歩き始めた。

*

ゾーマは自分が生み出した怪物達で、街を襲わせようとしていた。

「お前達！久しぶりの外だ！思う存分暴れるがいい!!！」

「ギャゴオオオオ!!！」

怪物達がゾーマの言葉に応えて、雄叫びを上げた。

「よし、ゆけエエエ!!！」

街を指差しながら、ゾーマは命令した。

怪物達は街目掛けて、一直線に飛んでいった。

「我はここで、見物でもしているか」

ゾーマが腕を組んだ時、

「ん?」

海が凍った。

ゾーマは首を傾げた。

「これは…魔法か?」

氷の上に降り立ちながら、ゾーマは呟いた。

どうやら、この世界には魔導師がいるようだ。

なら直接この手で、その魔導師を殺す。魔導師は我が直接殺さなければ、気が済まない。

その時、カツンカツンと足音のようなものが聞こえた。

ゾーマは、足音がする方を見た。誰かがこちらに歩いてくる人間だ。

銀髪の男で、左手には剣を持っていて、腰にも木刀が差してある。

「何だお前は？」

ゾーマは尋ねた。

すると銀髪の男は足を止めた。

「宇宙一バカな侍だ、コノヤロー！」

銀髪の男・銀時は、ニタアと憎たらしい笑みを浮かべ、手をヒラヒラ動かしながら答えた。

大切なモノを護るため、『白夜叉』再び戦場へ。

くおまけく

フエイト&すずか
「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

フエイト

「ペンネーム『クロス』さんから二つ質もあります。『もしも銀さんがプレシアさんやシグナムに告白されたら銀さんは一体どうしますか?シグナム達が宇治銀時井を見たらどうという反応をするんでしょうか?』」

銀八

「銀さんは告白とかされた経験がありませんからね。フエイトに告白された時も、どうしたらいいかわからずにいましたし。同じような反応するんじゃないやね?二つ目の質問。何か似たような質問が前にあったな。かぶらないように注意するように。宇治銀時井を見たら引くと思います」

すずか

「それでは次の質問。ペンネーム『タークキバ』さん。『銀八先生に質問チンカスあつまちがえた土方の犬のクソスペシャルをシグナムたちが見たらどんな反応するでしょうかやはり気持ち悪そうな目でみるのでしょうか』」

銀八

「そりゃそうだろ。あんなのを平気で旨そうに食うのは、土方だけだからな」

土方

「っーか犬のクソスペシャルって何だ？謝れコノヤロー！」

銀八

「だから、お前勝手に出てくんなくて」

すずか

「ペンネーム『Mさん』。『質問です。真選組の沖田さんと守護騎士ヴィータが原作の沖田さんと土方さんが拉致られた時と同じ様だったらヴィータは、どのような反応するんですか？（魔法も使えない、デバイス無い状況だったら）』」

銀八

「とにかく最初は拉致った犯人に向かって怒鳴りまくりますね。んで沖田犠牲にして自分だけ助かるうとして……最終的に土方と同じオチになるでしょう」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『食卓の騎士』さん。『銀八先生に質問です。なのはたちが銀魂ワールドにいった時にセイバーがいてフェイ

トヤシグナムと銀さん争奪戦とかありませんか?」

銀八

「いや、あの…まずこの小説は『銀魂/Fate』と話繋がってないから。セイバーとか出ないから。その辺、混ぜないように」

フェイト

「ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生質問です!!リリカルの世界にジャンプはマジでないんですか?そうなると死活問題ですよ。大丈夫ですか?』」

銀八

「リリカルの世界にジャンプはないので、銀さんにとっては本当に辛いです。だから源外のじーさんにジャンプを買ってもらって、装置で送ってもらってます」

すずか

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『もしこの作品において第一章とか第二章とかにイメーজOPをつけるとしたら、どーいう曲をチョイスされるでしょうか?私としては第一章は『Pray』(アニメ銀魂の第一OP)、『第二章は『銀色の空』(アニメ銀魂の第三OP)』』といったところでしょうか? (汗)』」

銀八

「そうだなあ。第一章は『ゲロ口軍曹』さんと同意見だな。ただ、

第二章は先生的には、『曇天』がいいな」

フエイト

「実は『ゲロ口軍曹』さんからもう一つ質問があります。『ぶつちやけこの』『魔法少女と銀髪の侍』シリーズ(？)って、『同人』の小説とか漫画にしてみたら結構いい感じじゃね？』…と思うのですが、さすがにそういうのは無理でしょうか？(大汗)いやそのやっぱカッコいいシーンとか感動的なシーンとかがって、直に絵として表現されたのを見てみたいなあ…なんて思ってしまったりしちゃいまして…(大汗)。あ、小説だと挿し絵的な感じで…(汗)…いやほんと、こーいう変な発言しちゃうたりして、すみませんす…(汗)』」

銀八

「変な発言っていうか、『ゲロ口軍曹』さん汗かきすぎ。んでもって質問と言うより要望じゃね？ただ作者は絵下手だからな。え？友達や周りの人に頼めばいい？いや、作者の周りに絵が上手い奴とかいないから。そんじゃ、今回の銀八先生はここまで」

フエイト&すずか

「それでは質問してくれた読者の皆さん、廊下に立ってて下さい」

第四十七訓：泣き顔より笑顔（前書き）

……ど……読者の皆さん……質問してくれるのは大変嬉しいのですが……
……数が多すぎるので……も……もう少し……お手柔らかに……お願い……し
ま……す……（ガクッ）

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十七訓。始まります！

第四十七訓：泣き顔より笑顔

ゾーマに生み出された怪物達は、街へ向かって飛んでいた。

「ギャゴオオオオ！！」

叫び声を上げながら、街へ迫る。

その時、

「サンダー・レイジー！！」

声と共に怪物達に雷が落ちた。

何体かの怪物に雷は当たり、全身に火傷を負った。

「ギャゴオ！？」

怪物達が上を向く。

そこには、バルディッシュを構えたフェイトと、なのは達がいた。

「街には入れない」

フェイトは、怪物達を睨みつける。

怪物達も牙を向いて、フェイト達を睨む。

怪物達の体が一回り大きくなり、ゾーマと同じくらいの大きさになる。

「ギャゴオオオオ！！」

雄叫びを上げ、フェイト達に迫る。

なのははレイジングハートを構え、デイベイン・バスターを放った。怪物達は、桜色の閃光に飲み込まれた。

はやても杖を怪物達に向け、石化の槍を放つ。槍に貫かれた怪物達は、次々と石化した。

はやての隣にはリインフォースがいて、障壁を張ったりと、はやてをサポートしている。

ザフィーラとアルフは獣形態になり、体当たりや鋭い爪で怪物達を切る。

ウィータはグラーフアイゼンを振り回し、怪物達を吹き飛ばす。

シグナムは鞘を使って怪物達と戦っている。急所に向かって鞘を振

り抜き、怪物達を倒していく。

フェイトもプラズマ・スマッシュャーを撃つ。金色の閃光に飲み込まれ、怪物達は消滅した。

それでも、怪物達の数はまだまだ沢山いる。

フェイトの息が切れていく。

すると、数体の怪物達が後ろからフェイトに迫る。

「フェイト危ない!!」

怪物達に気付いたアルフが叫んだ。

「はっ！」

フェイトは後ろを振り返った。

怪物達がフェイトに迫る。

「テストロツサ!!」

シグナムも気付いて、フェイトの所へ向かおうとする。

が、間に合わない。

怪物が鋭い爪を振り下ろす。今から障壁を張っても間に合わない。

爪がフェイトに当たる直前、

「フェイトから離れなさい!!」

紫色の雷が怪物達に落ちた。

怪物達は悲鳴を上げた。やがて雷が消え、黒焦げになった怪物達は動かなくなり、力尽きて海に落ちていった。

フェイト達は上を見た。

そこには、杖を持ったプレシアがいた。

「母さん!!」

「プレシア!!」

フェイトとアルフは、驚きの声を上げた。

フェイトは自然と笑顔になった。

プレシアはフェイトに近寄った。

「フェイト。怪我はない？」

「うん。ありがとう、母さん」

フェイトは頷いた。

「プレシアさん！」

なのは達もプレシアに気付いた。

「私も加勢するわ。みんな頑張って！」

「はい！！！」

プレシアの登場で、なのは達の士気が上がった。

怪物達がプレシアを囲む。

「大魔導師の肩書きは、伊達じゃないのよ」

怪物達を一瞥しながら、プレシアは言った。

プレシアが杖を振ると、再び紫色の雷が怪物達に直撃した。

「行くわよ、フェイト！」

「うん！」

金色と紫の雷が空に光った。

*

プレシアも加わって、怪物達の進攻を止めようとするが、数が多すぎて全ては止められなかった。

約半数近くの怪物達が、街に向かう。

そして怪物が街に入った瞬間、

「ほあちゃあああ！！！」

建物の屋上にいる赤いチャイナ娘・神楽が、怪物達を回転蹴りで吹き飛ばした。

「ここいらは海鳴市の女王・神楽のモノアル！」

傘を怪物達に向け、神楽が言い放った。

「ギャゴオオオオ！！！」

怪物達は雄叫びを上げる。

「勝手に入ってくるなアルウウウ！！！」

怪物達に向け、神楽は傘からマシンガンのように弾を発射した。

弾は怪物達に当たり、怯んだ隙に神楽は怪物達との距離を詰めた。傘を振り回し、怪物達を薙払った。

下にいるお妙、わずか、アリサの所にも怪物達は迫っていた。

怪物達は口を開いて、鋭い牙を見せた。ダラダラと涎を垂らす。

「ギャゴオオオオ！！」

叫びながら、怪物達はお妙達に襲い掛かる。

その時、お妙達と怪物達の間にも九兵衛が現れた。

神速の速さで刀を横薙ぎに振るい、怪物達を真っ二つに切り裂いた。

上半身がズレて、ドチャツと音を立てて地面に落ちた。下半身の斬

り口から紫色の血が、噴水のように噴き出た。

「お妙ちゃん達には、指一本触れさせん」

九兵衛は鋭い目で、後ろにいる怪物達を睨んだ。

「ギャゴオオオオ！！」

怪物達が九兵衛に迫る。

口から黒い魔砲を放つ。九兵衛はソレをかわして、一気に怪物達の所まで駆ける。

怪物達は、拳を九兵衛に向けて振り下ろした。

九兵衛は、静かな川の流れのような動きで拳をかわし、すかさず神速の剣を振るう。

怪物達は血を噴き出して倒れた。

怪物達は、背後から九兵衛を襲おうとする。

その時、

「危ない、若アアアア！！」

東城が叫びながら、刀を振るって怪物達を斬った。

「若を護るのが、この東城歩の務め！何人たりとも若には触れさせん！！」

怪物達に向け、東城は凄まじい気迫を放った。

屋上。

桂、エリザベス、新八は怪物達に囲まれていた。

怪物達はニヤリと口元を歪めた。

「ふん。俺を捕まえるには甘いな」

桂は懐に手を忍ばせた。

そして『んまい棒』を取り出した。

「んまい棒、鎖羅魅サロミ!!!」

んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。

突然煙に包まれ、怪物達は混乱する。すると丸い玉のような物が怪物達の前に投げられた。

玉に表示されている数字がゼロになった瞬間、玉は大爆発を起こし、怪物達は粉々に吹き飛んだ。

爆発で煙も消え、生き残った怪物達は桂を見つけた。

「ギャゴオオオ!!!」

二匹の怪物が桂に襲い掛かろうとした時、

「僕をツツコミだけのダメガネだと思うなアアア!!!」

『うおりゃあああ!!!』

背後から新八とエリザベスが、それぞれの武器、木刀とボードを振り下ろして怪物の頭に攻撃した。

怪物達は痛みで頭を押さえ、その隙に桂が刀で怪物達を斬った。

「新八ー、ツラ、エリーー！無事アルカ？」

隣のビルの屋上にいる神楽が呼びかけた。

「大丈夫だよ、神楽ちゃん！」

新八が返事をした。

すると神楽を背後から襲おうと、怪物達が後ろから迫っていた。

「危ないリーダー!!!」

桂が危険を知らせた。

その時、

「わんつ!!!」

定春が怪物達に体当たりをした。

「定春！」

神楽は定春に抱き付いた。

「よかった」

「うむ」

新八達はホッと一安心した。

『まだ気は抜けないですよ』

と、書かれたボードをエリザベスが掲げた。

「そうだったな」

桂達は気を引き締め直して、まだ残っている怪物達を見つめた。

*

空や街で、フェイト達や新八達が怪物達と戦っている最中。

銀時とゾーマは、氷上で睨み合っていた。

「侍だと？」

ゾーマは銀時の魔力を探った。

銀時からは、魔力を全く感じない。つまり魔導師ではない。

手に持っている剣は、デバイスのようだが、ただの人間のようだ。

「…一体何をしにきた？まさか我を倒しにきたのか？」

馬鹿にしたような笑みを浮かべて、ゾーマが言った。

銀時は不敵な笑みを浮かべた。

「ああ」

「ムッ」

銀時の返事に、ゾーマは顔をしかめた。

「…ふんっ。正義の味方気取りか？我を倒して、世界を護ろうと？」

力の差もわからずに挑もうとは、人間とは馬鹿な生き物だ！」

鼻で笑って銀時を馬鹿にした。

一方、銀時はゾーマの言葉を聞いて、ため息をついた。

「勘違いすんなよ」

「何？」

「俺は別に正義の味方でもねーし、世界を護ろうとも思ってたねエ」
メンドくさそうに頭を掻きながら、銀時が言った。

ゾーマは、銀時の言葉に首を傾げた。それ以外に戦う理由が見つからない。

「なら…何のために戦う？」

ゾーマが戦う理由を聞いた。

「一つは、俺の大事なモンを護るため。そしてもう一つは……」
そこで銀時は一旦言葉を止め、空を見上げた。

視線の先にはリインフォースがいた。

そしてゾーマに向き直る。

「アイツの笑顔が見てエのさ」

親指でリインフォースを指差しながら、銀時が言った。

「……………はア？」

思わずゾーマは間抜けな声を出した。

世界のためではなく、女のため？

女ために我と戦い、倒そうと言うのか？

銀時は、腰に差してある木刀に手をつけた。

「女に涙は似合わねエ」

ゆっくりと木刀を抜く。

「テメーという荷を降ろさせて、アイツの笑顔を取り戻す」

両手に剣を持って、銀時が言った。

本気だ。

ゾーマは思った。

この男は、本気でそんな理由で我を倒そうとしている。
思わずゾーマは笑いで顔を歪めた。

「クハハッハッハッハッハッ！」

ゾーマは顔を上に向け、大きな高笑いをした。

「たかが女一人のために我に挑むか？人間は馬鹿な生き物だと思っ
ていたが、お前のような大馬鹿は初めてだ！！ハハッハッハッハッ！」

！」

腹を押さえながら、ゾーマは笑い続ける。

銀時は何も言い返さず、ただジツとゾーマを睨んでる。

笑い終えたゾーマは、呼吸を整え、

「ナメるなよ」

ゾーマの雰囲気が一変する。

重く禍々しいプレッシャーと、突き刺すような鋭い殺気を放った。

「……いいだろう。お前には、我のウォーミングアップの相手になってもらおう」

全身に魔力を漲らせる。

黒く禍々しい魔力が、ゾーマの体を包んでいく。

魔力を感じない銀時にも、その禍々しさが伝わってきた。

「俺をウォーミングアップの相手に選んだ事を、後悔させてやるぜ」

右手に洞爺湖、左手にレヴァンティンを構える。

「もうアイツに、涙は流させねエ」

自分と戦っている時に流した、リインフォースの涙を思い出す。

もうアイツにあんな顔はさせねエ。

コイツをブツた斬って、全てを終わらせる。

剣を構え、地を蹴ってゾーマに向かって、銀時は駆け出した。

銀時対ゾーマ。

人類の……世界の存亡を賭けた決戦が幕を開けた。

くおまけく

フェイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『新しく銀魂のEDでウォーアイニーとゆう曲がでしたがそれをリリなのと混ぜると配置はどうなるのですかぜひ教えてください』」

銀八

「『ダークキバ』さんの好きに配置すればいいんじゃない？」

すずか

「それでは次の質問。ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生質問です！アルカンシエルとネオアームストロングサイクロンジェットアー

ムストロング砲（銀玉の）どっちが強いですか？」。なんだか凄い名前の武器ですね」

銀八

「銀玉ってゲームのアレか？そりゃあネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だろ。完成度高けーぞアレ」

すずか

「ペンネーム『ニケ・アルヴァース』さん。『1.プレシアさんはStrikers編に出ますか。あと戦闘とかしますか？2.闇の書編が終わったらまた宴会しますか？その時新八はカラオケしてなのはにケシズミにされますか？3.Strikers編で銀さん達は年取ってますか？』」

銀八

「プレシアはStrikers編にも出る予定です。宴会をやるかは未定です。Strikers編で銀さん達は年を取るかどうかは秘密です」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『宇治銀時井についての八神家の反応については大体分かりましたが、それではある意味アレより凶暴ともいえるお妙の姐御の『かわいそうな卵（またの名をダークマター）』については、八神家の皆はそれぞれどんな意見を出したりするでしょうか？とりあえずはやては『こんな卵焼きちやう！もう見るのもむなくしくなりそうな黒こげの塊やんか！

「？」とか何とか文句言いそうかな〜と。…まあ、その直後にお妙の姐御にその塊を口にぶち込まれそうですけど…。」。ダークマター
って何？」

銀八

「お妙の作った殺人料理だ。ってかお妙の前でダークマターの文句を言える人間は存在しませ。それとも『ゲロ口軍曹』さん、貴方はお妙の目の前でダークマターに対して文句を言えますか？」

フエイト

「ペンネーム『ゲロ口軍曹』さんからも一つ。『総悟つてStS編においてスバルとかティアナとかを目に付けてそんな気がするのですが、そこら辺いかがでしょうか？とりあえず個人的に総悟はティアナたちに出会って早々『ほお〜う、さすがは精鋭部隊。いいメス豚候補どもが揃ってるじゃねーか、はやて部隊長お〜、とりあえずその青いのとオレンジの、俺がちよいと鍛えて（調教して）やってもいいですかい？』…って事平気でいいそんな気が…（大汗）」

『

銀八

「そんな事考えるなんて、『ゲロ口軍曹』さん。実はアンタSだろ？」

フエイト

「『ゲロ口軍曹』さんって…結構凄い事考えるよね」

銀八

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『土方のゲロクソウンコスペシヤルはまたでるのですかできるだけ見たくないですなんか読むだけで胸焼けしてきますてゆうかぶつちゃけ土方いらなくねもうこの小説から土方消してください後シグナムに質問シグナムは銀さんと結婚したいんですかシグナム答えてください』。『ダークキバ』さん。キャラの悪口などは、ほどほどにお願いします。あんまり言い過ぎないように。そんじゃシグナム。質問に答えてやれ」

シグナム

「け……結婚か……？ま……まあ出来るならしたいが……私は人間ではないし……年も取らないし……」

銀八

「まあ結婚できるなら、したいみたいだな」

フエイト

「ペンネーム『Mさん』。『質問です。沖田さんってヴィータの事を『ゲボ子』って呼ばれそうなんですけど、そうしたら長谷川さんと一緒に変なニツクネームになりそうですね？どうなんですか？』
『ゲボ子』ってどういう意味なんだろ？」

銀八

「いや、俺にもわかんねーよ。『ゲロをボロボロ吐く子供』略して『ゲボ子』か？いや、ヴィータはゲロ吐かないからな。あっ！『ゲ

「トボールしてそうな子』略して』ゲボ子』か？」

フェイト

「後の方がしっくりくるね」

すずか

「今回も沢山質問が来たね」

銀八

「……………俺そろそろ休んでいい？」

第四十七訓：泣き顔より笑顔（後書き）

読者の皆さん、気付いたでしょうか？

実は、神楽が傘のマシガン（？）を撃ったのは、今回の話が初めてなんです！

第一章でも撃ってません。多分。

第四十八訓：戦場に出るなら覚悟を持って（前書き）

『侍』銀時 対 『魔導生物兵器』ゾーマ

いよいよ最終決戦開始！！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十八訓。 始まります！

第四十八訓：戦場に出るなら覚悟を持って

ゾーマに向かって銀時は駆け出した。

距離を詰め、ゾーマの頭目掛けて木刀を振り下ろす。ゾーマは右に動いて、木刀をかわした。

すかさず銀時は、左手のレヴァンティンを横薙ぎに振るう。ゾーマは右腕を上げて、甲高い音を立ててレヴァンティンを受け止めた。

銀時の視界からゾーマが消える。気配を察して上を向くと、開いた口に魔力を溜めているゾーマがいた。

「ゴオオオオオ！」

銀時に向け、黒い閃光を放った。

銀時は、前に跳んで閃光をかわした。閃光は氷上に当たり爆発した。威力は最初に撃った魔砲ほどではないが、それでも大きな爆発だった。

ゾーマから離れた銀時は、体勢を立て直した。

着地したゾーマは、銀時に向けて右手を上げた。右手に桜色の魔力が溜まる。

ソレを見て銀時は、顔を引きつらせた。

「おいおい…マジかよ…？」

桜色の魔力が集束され、

「デイバイン・バスター！」

右手から桜色の閃光が放たれた。

走って銀時は、閃光を避けた。

「ハッハッハッ！我は闇の書から、僅かだが魔力を奪った。その中には闇の書が蒐集した魔力も含まれているのだ！」

つまりゾーマも、リインフォースと同じように蒐集した魔力から、魔法をコピーしたのだ。

恐らくスターライト・ブレイカーも使えるだろう。

距離を離したらダメだ。

銀時はゾーマに向かって走り出した。

「ゴオオオオオ!!!」

ゾーマは魔力を溜め、思いつきり拳を突き出した。拳から魔力の塊が発射された。

銀時は横に動いて、紙一重で避けた。

「いい反応だ!」

今度は両拳をラッシュさせ、魔力弾を連発した。

銀時は紙一重でかわしながら、ゾーマとの距離を縮める。

ゾーマは、銀時の動きを見て内心少し驚いていた。封印される前、多くの魔導師達を葬ってきたが、銀時のように純粋な身体能力だけで、ここまでの動きをした人間はいなかった。

(軟弱な魔導師よりは楽しめそうだ)

ゾーマはニヤリと不敵な笑みをした。

銀時がゾーマの前にたどり着いた。レヴァンティンを横薙ぎに振る。それをゾーマは右拳をぶつけて弾く。

「ゴオオオオオ!!!」

ゾーマは雄叫びを上げながら、無防備の腹に左拳を叩き込んだ。

「ぐふっ!!!」

銀時は吐血をした。

痛みに耐えながら、危険を察した銀時は後ろに下がった。前にゾーマの拳が振り下ろされ、氷上を砕いた。

「ゴオオオオオ!!!」

メチャクチャに拳を振り回し、銀時を追い詰める。

剣で拳を防ぎながら、反撃のチャンスを待つ。ゾーマが右拳を大きく振り上げた。

銀時は一気に懐に入り、木刀を振るって腹に叩きつける。

「無駄だ!その程度では、我が纏っている魔力の鎧は突き破れんぞオオオ!!!」

右拳を銀時目掛け振り下ろす。

後方へ跳んで拳を避ける。

ゾーマは体に魔力を溜め、

「バアッ!!」

体から大量の魔力を放出する。

放たれた魔力は、衝撃波のように銀時を襲った。銀時は腕を交差させて防御する。

「ゴオオオオオ!!」

雄叫びを上げ、ゾーマが襲い掛かる。

「うおおおお!!」

銀時も気迫を放ち、木刀とレヴァンティンを振るう。

剣と拳が激しくぶつかり合い、火花を散らす。拳を弾き、銀時はゾーマの右側に移動した。右脇腹目掛け、レヴァンティンの突きを放つ。

だが突きはゾーマに届かず、上からの手刀で突きの軌道を変えられ防がれてしまう。すかさずゾーマは口から黒い閃光を放つ。体勢を低くして、黒い閃光をかわす。

一旦、ゾーマから離れる。だがゾーマはすぐに銀時に追いつき、拳を放つ。

銀時は舌打ちしながら拳をかわした。

デカイ図体のくせに動きが素早い。

「いいぞ!人間にしてはいい動きだ!もっと我を楽しませろ!!」

ゾーマは右手に魔力を集中させ、黒い大剣を作り出す。

力任せに大剣を振り下ろす。銀時は木刀とレヴァンティンを頭上に構え、大剣を受け止める。ゾーマの力に押され、足が氷にめり込む。

「ほらほらどうした?もう終わりか?我を倒すんじゃないのか?」

そう言いながらゾーマは、更に腕に力を入れる。

「くっ…!!」

銀時は歯を食いしばった。

ここで潰れる訳にはいかない。こんな所でくたばってたまるか。

「うおおおお!!」

雄叫びを上げ、銀時は足を上げた。

そのまま、大剣となったゾーマの腕を蹴り上げた。再びゾーマの懐に入り、木刀とレヴァンティンを振るう。一撃ではなく、連撃を繰り返す。

（一撃でダメなら…何発でも食らわせてやる！）

ゾーマの自慢の鎧を砕くまで、何度でも何度でも。

「馬鹿め！我の魔力の鎧は砕けんぞ！！」

ゾーマは反撃するでもなく、余裕の表情で銀時を見ている。

それでも銀時は、剣を振り続ける。

どんなに硬え鎧でも、打ち続ければダメージは蓄積されるはずだ。

（鎧砕いたら、その間抜け面に叩き込んでやるぜ！）

剣撃の勢いは弱るところか、激しさを増していった。

その勢いに、ゾーマは顔を険しくした。

その時、パキンツと小さな音がした。

ゾーマは自分の体を見た。銀時が打ち続けている場所に、小さなヒビが出来ていた。

ゾーマは目を見開いた。

（馬鹿な！？我の鎧に傷を？）

初めてゾーマは動揺した。

幾多の魔導師が傷を付けられなかった我の鎧に、この男は傷を付けた。

だがゾーマが本当に驚くのは、この後だった。

「うおおおおお！！！」

銀時は、木刀とレヴァンティンを同時に振り下ろした。

二つの刃はゾーマの体に当たり、ガラスが砕けるような音と共に、魔力の鎧が砕けた。

「な…何イイイ！！？」

鎧を砕かれたゾーマは驚愕した。

傷を付けるどころか、この男、鎧を砕きやがった。

ゾーマの表情が歪む。たかが人間如きに、我の鎧が……。

銀時を見た。

ゾーマを見上げながら、銀時はニヤリと嫌な笑みを浮かべている。怒りでゾーマの顔は、どんどん歪んでいく。

「このクソ人間がアアアア！！調子に乗ってんじゃねエエエエエ！！」

ゾーマの体が、禍々しい黒い魔力に包まれる。

銀時は間合いを取って、剣を構える。

次の瞬間、ゾーマから黒い魔力が放たれた。放たれた黒い魔力は、ゾーマや銀時の周辺を包み、黒いドームになって闇の空間が出来上がった。

「何だこいつア……………！！」

銀時が闇の空間を見渡した。

その瞬間、急に体が鉛みたいになり、氷上に膝をついた。

（か…体が…重てえ……………！！）

なんとか立ち上がるうとするが、氷上から膝を離す事が出来ない。立つ事が出来ない。

「無駄だ」

ゾーマが近づいてくる。

顔を上げてゾーマを見る。

「ここは私の魔力で作出した空間。我以外の者は、私の魔力に押し潰される」

銀時の前で立ち止まる。

ゾーマは銀時に、大剣となった右腕を振り下ろす。立ち上がれない銀時は、なんとか横に動いて大剣を避けた。

直後、銀時の顔にゾーマの蹴りが入った。蹴られた銀時は、吹き飛んで氷上に倒れた。

「ぐ……………！！」

口から血を垂らしながら、体を起こす。

必死に立ち上がるうとする銀時の姿を見て、ゾーマは舌打ちした。

「……………本当にデタラメな人間だ。常人…いや、魔導師でもとっくに

魔力に押し潰されて死んでるんだがな……」

ゾーマは呆れた顔をする。

初めて見た瞬間から、ただ者ではないと思っていたが、まさかここまでとは。

我の鎧は砕く。この闇の空間内で、押し潰されずに生きている。

本当に人間かと疑いたくなる。

「だが…それもここまでだ」

ゆっくりと銀時に近づく。

全身に力を入れ、立ち上がろうとする銀時。だが『上から降り懸かる力』に圧され、立つ事ができない。

「さつきチラツと見えたが…我の部下と戦ってる人間どもがいた。

お前の仲間か？」

銀時がピクリと反応する。

「ヤツらは我の力を見たはずだ。それでもヤツらは戦っている」

ゾーマは途中で足を止めた。

「お前がいるからか？」

ギロリと、銀時を睨む。

銀時もゾーマを睨み返す。

「お前という”光”があるからか？おとなしく我という”闇”に飲まれればいいものを」

忌々しげに言う。

「まあいい。お前という”光”をここで消して、ヤツらの希望を絶つてやる」

邪悪な笑みを浮かべる。

「お前は良かったな。今ここで死ぬ事で、仲間達が殺される所を見なくて済むんだからな」

牙を見せて笑う。

「我に盾突いた事を後悔させてやる。まずは楽に殺さず痛ぶり、目の前でソイツの大事なモノを壊す。それからソイツ自身も殺し、全てを破壊する。目の前で大事なモノを壊された時の、ヤツらの顔を

見るのが楽しみだ！ハーハツハツハツハツ！！」

楽しむようにゾーマは語り、高笑いをした。

銀時は剣を強く握った。

楽しんでやがる。

コイツは殺しを、破壊を楽しんでやがる。

外で戦っているフェイト達の姿が思い浮かぶ。

負ける訳にはいかない。こんな野郎に、俺の大事なモンを壊されてたまるか。

何よりコイツは、殺しを楽しむために戦場で戦ってやがる。

気に入らねエ。

氷上に剣を突き刺す。

コイツにだけは…死んでも負けねエ。

ゾーマが銀時の前に立つ。

「終わりだ」

大剣を振り上げる。

そして、大剣を振り下ろそうとした時、

「うおおおおお！！！！」

雄叫びを上げ、ゾーマの目の前で銀時が立ち上がった。

「なっ…！？」

ゾーマは驚愕し、振り下ろそうとした腕を止めた。

その隙を見逃さず、銀時は木刀とレヴァンティンを振るった。魔力

の鎧はなくなっているの、剣撃はゾーマの体に直接当たる。木刀の打撃を当て、レヴァンティンで体を切る。

『上から降り懸かる力』に圧され、体が悲鳴を上げる。ソレに耐えながら銀時は、剣を振るい続ける。

「ゴオオオオオオ！！！！」

嵐のような剣撃が、容赦なくゾーマを襲う。

ゾーマは両腕で防御する。

銀時は渾身の力を込め、木刀を振るった。木刀による剣撃は、ゾーマを空間の外に吹き飛ばした。

ゾーマは氷上に着地した。

「な…なんて人間だ！ 我の空間内で立ち上がったただけでなく、反撃までしてきやがった！！」

予想外の事態に、ゾーマは驚愕を隠せなかった。

ゾーマが外に出た事で、空間を維持する者がいなくなり、空間は消滅した。

銀時が姿を現した。肩で息をして、鋭い目でゾーマを射抜く。

（落ち着け。よく見る。奴はもう虫の息だ。今の攻撃も、燃え尽きる前の炎に過ぎん！）

ゾーマは大剣を構える。

氷上を蹴って駆け出した。

銀時も、両手の剣を構えて駆け出した。

銀時の剣とゾーマの大剣が、激しくぶつかり合い火花を散らす。

（左手に魔力を溜めて、貴様の体を貫く！ いや、いつそバラバラにしてくれるわ！！）

大剣を振るいながら、ゾーマは左手に魔力を溜めた。

銀時は、ゾーマが魔力を溜めている事に気付かない。

（まさか人間相手に、ここまでてこずるとは思わなかったぞ！）

怒りで顔を歪める。

そして大剣に意識が向いてる隙に、左拳を振り上げ、

（くたばれっ！！）

銀時の腹目掛け、魔力を纏った左拳を叩き込む。

叩き込まれた瞬間、銀時の動きが止まった。

ゾーマはニヤリと笑みを浮かべた。

勝利を確信した直後、

「……ククク」

笑い声が聞こえた。

「悪いなデカブツ」

笑みを浮かべながら、銀時が言った。

ゾーマは、自分が殴った所をよく見た。ゾーマが放った拳は、木刀

とレヴァンティンによって防がれていた。

「こんなもんじゃ……」

銀時は顔を上げてゾーマを見た。

「こんなもんじゃ、俺達の魂は砕けねーよ」

不敵な笑みを浮かべて言った。

ゾーマは目を見開いて驚愕した。この人間は、何度我を驚かせれば気が済むんだ。

銀時は一步前に踏み込み、

「てえああああ!!!」

木刀とレヴァンティンを振り下ろす。

木刀はゾーマの頭に直撃し、レヴァンティンは体を斬った。

「がっ……!!」

ゾーマは紫色の血を吐いた。

頭と斬られた所を押さえながら後ずさった。距離を離して、銀時を睨んだ。

「テメーの拳なんざ効かねーよ」

銀時もゾーマを睨む。

「俺を倒したきゃ、夜王並の腕つぶしでかかってきやがれ！」

「ぐぬ……!!!」

ゾーマは拳を強く握った。

（我の拳が効かないだと？ふざけるなよクソ人間如きが!!!）
ギリギリと歯を食いしばる。

「それとゾーマ」

銀時が口を開いた。

「俺はテメーのように、殺しを楽しむために戦場に出てる奴は気に入らねエ」

銀時は思い出す。

かつて仲間と共に戦った譲夷戦争を。

「戦いに対する”覚悟”もねエ奴が、戦場に立って命を弄ぶんじゃねエ」

フエイト達も新八達も、自分の大切なモノを護るために”覚悟”して戦ってるんだ。

だが目の前のコイツには、ソレが無い。

銀時の秀囲気が変わる。鋭い眼でゾーマを射抜く。

「来いよ。戦いの恐さを教えてやる」

その眼は、『白夜叉』の眼をしていた。

くおまけく

フエイト&すずか

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『一、銀さんはユーノみたいにフェレットに変身できたら、覗きをしますか？二、クロノ君のアソコは右回りですか左回りですか？三、ヴォルケンリッターで下ネタに敏感なのは誰ですか？』」

銀八

「一、銀さんはフェレット姿に変身しないで覗きをします。二、そんな俺が知るかアアアア！三、シャマルじゃね？なんとなく」

すずか

「それでは次の質問。ペンネーム『昴』さん。『質問ですが、新八はモテる事はあるんでしょうか？後、これからも銀さんを想う人は出てきますか？具体的でなく、出るか出ないかを教えていただければ嬉しいです』」

銀八

「新八はモテません。モテる新八なんて新八じゃありません。新八は地味で眼鏡でツツコミ。これが新八です。銀さんを想う人は、これからも出る予定です」

すずか

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『ぶっちゃけ今いる万事屋とり

りなのメンバーがガチバトルしたら誰が勝ちますかね教えてください
い』」

銀八

「万事屋です。でも新八はやられます」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『おしるこ』さん。『銀八先生に質問です。リリカルキャラが銀魂の世界に行くことはないんでしょうか。行くとしたらいつぐらいになったら行くのでしょうか。また、銀魂の世界のストーリーに介入しないんでしょうか』」

銀八

「リリカルキャラは、ゾーマとの戦いが終わったら銀魂の世界に行く予定です。ストーリーに介入するかは、わかりません」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』。『沖田さんがstrickers偏に出たらティアナの良い兄貴分になりそうです。(2回前以前の質問と関わります)ティアナがシグナムに殴られそうになったらティアナを庇って殴られて『俺が何時なめたって言うスか？俺がなめているのは、土方さんと管理局だけだ！』とか、ティアナがナンバーズ三人と戦っている最中に沖田さんが乱入して『…！誰に手を出してやがる！』なんてティアナに加勢したりすると思つのですがどうなんですか？』」

銀八

「これって、リクエストにも見える気がするんだけど、気のせいかな？まあこんな設定も嫌いではないです」

すずか

「ペンネーム『Mさん』から、もう一つ質問です。『真戦組』にある意味綺麗好きクマナクセイゾウさんと言う人物がいるんですけど出すんですか？出すとしたらナンバーズと絡ませて小説を見てみたいですね。ナンバーズにタマ菌の話題を出してやがて山崎さんがチンク達ナンバーズの一人に『あ！チンクちゃん。ちようどトウモロケシが焼けたばかりだから一緒にみんな食べない？』ガシツ！モクモク！『ぎゃあ~~~~~！』『』『』その後、赤夜叉さんの想像な任せます。*説明長くてすみません。どうなんですか？』」

銀八

「『真戦組』じゃなくて『真選組』だから。やっぱりこれリクエストでしょ？絶対リクエストだよな？」

フエイト

「ペンネーム『10円』さん。『質問です。1・刀剣類+木刀の銀さんってもしかしてこの中で最強？2・リリカルキャラが夜兔の夜王鳳仙と戦ったら勝てますか？』」

銀八

「1・一応、銀さんが最強です。2・勝つのは無理だと思います。」

鳳仙はあの星海坊主と激戦を繰り広げ、銀時でも一人では勝てなかった実力者だからな」

フェイト

「ペンネーム『GIPPO』さんからの質問です。『洞爺湖には醤油がでる機能がついていますが、今後使うことはあるんですか？』。え？銀時の木刀って醤油が出るの！？」

銀八

「柄の部分を押すと、先っちょから醤油が出るんだ。いや、使わないだろ。うん。使わない」

すずか

「最後の質問です。ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生質問です！神楽の傘って質量兵器に分類されると思うんですけど大丈夫なんですか？ってこのSS始まって一発も撃ってないか…気づいてないだけ？』」

銀八

「まあ大丈夫じゃね？うん。大丈夫。第四十七訓で、神楽はやっと弾を撃ちました」

フェイト

「銀八先生。今回もお疲れ様でした」

銀八

「ホント疲れたわ。マジで次回は休もうかな？」

第四十八訓：戦場に出るなら覚悟を持って（後書き）

ついに『白夜叉』覚醒!?

銀時の実力を知ったゾーマも、死に物狂いの反撃に出る！

第四十九訓：デカけりゃいいってもんじゃない（前書き）

銀時に変化が！？

ついに魂を狩る夜叉が目覚める！！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第四十九訓。始まります！

第四十九訓：デカけりやいってもんじやない

戦いの恐さを教えてやるだと？

ゾーマは歯を食いしばり、拳を強く握った。恐れることなく、ゾーマに鋭い眼光をぶつける銀時を睨む。

弱い人間如きが……魔法も使えねえクソ人間如きが……。

「生意気言つてんじゃねえぞオオオオ！！！」

ゾーマの背中から、八匹の黒い蛇が現れた。

八匹の黒い蛇は、一斉に銀時へと襲い掛かる。

銀時は、正面から襲い掛かる蛇の頭を、レヴァンティンを振り下ろして両断した。

左右から蛇が襲い掛かる。銀時は上に跳んでかわし、蛇は互いに頭をぶつけた。怯んでいる二匹の蛇の頭に、銀時はそれぞれ木刀とレヴァンティンを突き刺した。

三匹の蛇が、同時に襲い掛かる。

銀時は蛇に向かって駆け出し、三匹の間にある小さな隙間を抜けた。レヴァンティンを振り、三匹の蛇の首を斬り落とす。残り二匹。

一匹の蛇が、口に魔力を溜める。銀時に向けて黒い閃光を放った。

閃光は爆発し、辺りに煙が立ち込める。煙の中から銀時が出て、蛇の目の前まで跳んだ。レヴァンティンを振り下ろし、頭を両断した。直後、背後から蛇が大きく口を開けて襲い掛かった。空中では移動ができず、銀時はバクツと蛇に食べられてしまった。

ゾーマはニヤリと笑った。七匹もやられるとは予想外だったが、仕留める事が出来た。

ゾーマがそんな事を思っていると、突然蛇が苦しみ出した。

そして背中から血が噴き出て、銀時が出てきた。

「何イイ!？」

ゾーマは目を見開いて驚いた。

木刀で蛇の背中を突き破って、外に出てきたのだ。そのまま銀時は

氷上に着地し、蛇は動かなくなった。
あっという間に八匹の蛇は全滅した。

ゾーマは唾然となる。

銀時がゾーマを睨む。

「ペットじゃなくて、テメー自身が来やがれ」

「……………!!」

銀時の言葉に、ゾーマは顔を歪めた。

何だその言い方は？

まるで我が、貴様を恐れているみたいではないか。

ゾーマは右手を銀時に向け、桜色の魔力を集束した。

「ゴオオオオオ!!!」

桜色の閃光『スターライト・ブレイカー』が放たれた。

銀時は桜色の閃光を見つめ、右手にレヴァンティンを持ち替えて、居合いに似た構えをした。桜色の閃光が当たる直前、銀時はレヴァンティンを振り抜いた。

桜色の閃光は、レヴァンティンによって切り裂かれた。二つに割れた桜色の閃光は、銀時の後ろで爆発した。

「なっ……………!!?」

ゾーマは、口を大きく開けて驚愕した。

左手にレヴァンティンを持ち直し、右手に木刀を持った銀時は、ゾ

ーマを睨んだ。

「猿真似だけだな。テメーは」

「ぐっ……………!!」

銀時の言葉に、ゾーマは激怒した。

「そんなに死にたきや今すぐぶっ殺してやるウ!!!!」

禍々しい魔力を放ちながら、ゾーマは銀時に向かって駆け出した。

*

「はあっ!!」

シグナムが鞘を振り下ろし、怪物の頭に当てた。

「プラズマ・スマツシャー!!!」

怯んだ怪物に、フェイトの金色の閃光が放たれた。

怪物は消滅した。

シグナムは額の汗を拭いた。

「大分減ったな」

「はい」

二人は周りを見回した。

怪物の数は、ずいぶん減り、もう二十匹ぐらいしかいない。

「もう一頑張りですね」

「ああ」

二人とも気を引き締め直す。

ふとシグナムは、リインフォースに顔を向けた。

リインフォースは、銀時の戦いを見ている。だが様子が少しおかしい。

「どうした、リインフォース？」

シグナムとフェイトが近寄った。

「…銀時の雰囲気が変わった」

「え？」

リインフォースの言葉を聞いた後、二人も氷上を見た。

銀時がゾーマと戦っている。そこでシグナムも気付いた。

「私と戦った時よりも、動きがよくなっている」

「えっ!？」

シグナムの言葉にフェイトは驚いた。

「アレ」は…あの時と同じ……」

リインフォースは、銀時と戦った時の事を思い出す。

最後に見せた銀時の動き。魂を狩るあの眼。獲物に恐怖を与える威圧感。

この戦いで、銀時の強さがわかる。

「ゴオオオオオ!!!」

ゾーマは雄叫びを上げながら、銀時に向かって大剣を振るう。左手も大剣に変わり、二本の巨大な刃が銀時に襲い掛かる。

だが大剣は銀時に当たらない。掠りこそすれど、致命傷にはならない。

(な…何だコイツ!?)

ゾーマは焦った。

攻めているのは自分の方だが、逆に追い詰められている気分だった。銀時は巧みに両手の剣を操り、大剣を捌き、防ぎ、かわす。

「ゴオオオオオ!!!」

自分の攻撃が当たらないイラつきから、ゾーマは雄叫びを上げる。

両肩から、それぞれ大剣の腕が生え、銀時に襲い掛かる。

合計で四本の大剣の嵐を、銀時は二本の剣で捌く。

上空で戦いの様子を見守っている、フェイト、シグナム、リインフオースは驚愕を隠せなかった。

「凄い…!」

フェイトは今まで、何度か銀時の戦いを見てきた。

だが今の銀時の強さは、今までのモノとは別物だった。

「あんな銀時…初めて見る」

銀時の戦いを見て驚いたのは、一体何度目だろう。

するとシグナムが、ぽつりと呟いた。

「白夜叉…」

「え？」

フェイトはシグナムに顔を向けた。

「知らないのか、テストロツサ? 銀時はかつて譲夷戦争という戦いで戦い、数多の敵を倒し、敵味方から恐れられた武神なのだ」

シグナムから聞かされ、初めてフェイトは銀時の過去を知った。

「その時に呼ばれた名が『白夜叉』だ」

シグナムは、ジッと銀時の動きを見つめた。
自分達とは全く違う強さ。

「あれは、極限の命のやりとりの中で
剣撃の嵐の中、銀時は剣を振るう。」

「身体の奥底に眠る、戦いの記憶が甦ったのだ」

ゾーマは、四本の大剣を振るう。

だが、目の前から銀時の姿が消えた。

銀時の姿を見失ったゾーマは、慌てて辺りを見回す。

そして、背後にある気配に気付いた。

ゾーマの背後にいる銀時は、まさに夜叉のような恐怖を与える眼で
ゾーマを睨みながら、剣を構えていた。

次の瞬間、剣は振り抜かれ、ゾーマの肩から生えている二本の腕を
斬り落とした。

フェイトとリインフォース、シグナムは目を見開いて驚愕した。も
う銀時の動きから、目を離せない。

「あれが、白夜叉……!!」

*

ゾーマは背後にいる銀時に振り返った。

鋭い眼でゾーマを射抜いている。

私の技が、動きが完全に読まれている。完全に押されている。

ゾーマは、銀時の眼を見た。

その瞬間、体が震え上がった。

(こ……殺される……!!)

銀時の殺気を受け、ゾーマは後ずさった。

あの眼は本気だ。本気で我を殺そうとしている。

(我が……クソ人間如きに恐怖を感じている？ふざけるな!!)

震える手に力を入れ、拳を握る。

我は最強だ。

我より強いヤツなど存在しねえ。

我以外はゴミだ。クソ弱え人間なんかクズだ。

「我が最強だアアアアア!!!」

ゾーマが空に向かって叫んだ。

直後、ゾーマに異変が起こった。

眼が光り、体の筋肉が盛り上がり、禍々しい黒い魔力が体から溢れ出る。

魔力に当てられ、氷上にヒビが入る。

「な…何だ!？」

怪物達を倒し終えたクロノ達が、振り返ってゾーマを見た。

ゾーマの体が一回り大きくなる。両手の大剣が砕け、元の拳に戻る。

口から涎が垂れる。

「ゴ…オ…!!!」

大きく口を開く。

「ゴオオオオオオオオ!!!」

空に向かって禍々しい咆哮を上げる。

咆哮だけで銀時に衝撃が伝わった。衝撃と共に、今まで以上に禍々

しい危険な感じが伝わってきた。

「な…何だこのデタラメで禍々しい魔力は!？」

青ざめた表情でユーノが言った。

「ゾーマは、体に負担が掛からないように、普段は魔力を抑えています。そして今、その抑えていた魔力を解放したのです」

リインフォースが言った。

*

禍々しい殺気や魔力を放ちながら、ゾーマは銀時を睨んでいる。

ゆっくりとゾーマの口が開く。

「…こ…ろ…す…」

禍々しい殺気が強くなる。

「デケー大砲も……」

声が聞こえた。

ゾーマの動きがピタリと止まる。

「当たらなきゃ意味がねーよな」

下から声が聞こえる。

ゾーマはゆつくりと、下を向いた。

そこには服をボロボロにし、左肩から血を流し、剣を構えている銀時の姿があった。

ギリギリで魔砲を避けて、ゾーマの所まで走ってきたのだ。

ゾーマは自分の目を疑った。動揺しながら、銀時目掛けて右拳を振り下ろす。

銀時はレヴァンティンを振り抜いた。

次の瞬間、ゾーマの右腕は宙を舞い、ドサツと音を立てて氷上に落ちた。

「ゴギヤアアアアアア！！！」

ゾーマは右腕を押さえながら、悲鳴を上げた。

「うおおおおおお！！！」

銀時は、ゾーマの顔目掛けて木刀を振る。

顔に木刀が当たり、重い打撃音が響いた。また木刀を振るう。嵐のような木刀の連撃が、ゾーマを襲う。

反撃する暇を与えるな！息さえさせるな！

木刀を振るい続ける。

ゾーマは剣撃を受け続ける。殴られる度に意識が失いそうになる。

攻撃の手を休めるな！動きを止めるな！

力の限り、体が動く限り木刀を振るい続ける。

もうこれ以上戦う体力は残ってねエ！これで終わりにするんだ！

ゾーマは残った左腕で、なんとか防御しようとする。

だが片腕だけでは、銀時の木刀による剣撃の嵐は防ぎ切れない。

剣撃の嵐は、ゾーマの左腕を弾いた。

そして銀時は勝負に出た。

木刀を水平に構え、

「おおおおおおお！！！！」

叫び声を上げながら、ゾーマの腹に木刀の突きを放った。

「ゴハアッ！！」

突きを受けたゾーマは、口から紫色の血を吐いた。

遂に決着の時がきた。

第四十九訓：デカけりゃいいってもんじゃない（後書き）

次回、ついに死闘決着！

闇を貫け！！

第五十訓：見たかった笑顔はそこにある（前書き）

死闘、ついにクライマックス！

全てに決着を着ける！！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十訓。 始まります！

第五十訓：見たかった笑顔はそこにある

街の方でも、怪物達は全滅した。

「みんな大丈夫ですか？」

肩で息をしながら、新八が皆に聞いた。

「ああ。大丈夫だ」

『全然平気だぜ！』

桂とエリザベスが答えた。

隣のビルの屋上では、神楽が定春に抱き付いている。

屋上の端に移動して、下にいる九兵衛達の様子を見た。

九兵衛と東城もほとんど無傷だった。お妙とアリサとすすかの三人も無事だった。

みんなが無事で、新八は安心した。空の方を見ると、フェイト達も怪物達を倒し終えたみたいだ。

残るはゾーマ。

（銀さん）

新八は海に出来ている氷の陸を見つめた。

大丈夫。きつと銀さんなら勝ってくれる。

新八はそう信じた。

*

銀時の放った木刀の突きが、ゾーマの腹に突き刺さる。

「ゴオオオオオオオオオオ！！！！」

顔を空に向けながら、ゾーマは叫んだ。

すると右腕の斬り口から、大量の血が噴き出た。

直後、新たな腕が生えて再生した。

ゾーマの再生能力に、銀時は驚いた。

ゾーマは再生した右腕を振り下ろし、右手の手刀で木刀を折った。

折れた木片が、氷上に飛び散った。

「終わりだクソ人間！この至近距離で、そのボロボロの体で攻撃を食らえば、お前は死ぬ！！」

ゾーマは大きく口を開けた。開いた口に魔力を溜める。

威力は魔砲の半分だが、貴様を消すには充分な威力だ！
笑みを浮かべるゾーマ。

その時、

「剣ならあるぜ……」

銀時が不敵な笑みを浮かべて、ゾーマを見上げた。

「とっておきなのが、もう一本！」

左手を上げる。

ゾーマは銀時の左手を見た。

左手には、水平に構えられたレヴァンティンが握られていた。

己の体を突き刺す木刀にばかり気を取られ、レヴァンティンの存在を忘れていた。

「貫けエエエエエエ！！！」

ゾーマの腹目掛け、刃を上に向けたレヴァンティンの突きを放つ。

先ほど木刀で突いた場所と同じ所を突いた。レヴァンティンはゾーマの体を貫いた。

「ゴツ………バア……！」

口から大量の紫色の血を吐く。

血は、銀時の白い着物を紫色に染めた。

「こいつで……」

両手でレヴァンティンを握る。

「シメーだアアアアア！！！！！」

頭に向けて斬り上げようと、腕に力を入れる。

「ガッ、ゴツ、オッ、オッ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

剣がゾーマの体を斬りながら、頭に向かって上がっていく。

次の瞬間、斬り上げられてゾーマの体は、胴から頭にかけて真っ二

つに裂かれた。割れた体の断面から、大量の紫色の血が噴水のように噴き出た。

「ガボ……ゴボゴボ……」

ゾーマは、出血をしながら口を動かす。

そのままゾーマは氷上に倒れた。やがて噴水のような出血もおさまった。

銀時は肩で息をしながら、倒れたゾーマを見つめた。ゾーマの体はピクリとも動かない。

気を抜いたら、ドツと疲労感が襲い、力が抜けた。

力無くその場に倒れ、銀時は意識を失った。

*

銀時は意識を取り戻した。

ゆっくりと瞼を開けて、目を覚ました。目に入ったのは白い天井だった。

まだ少し意識がぼやけてる。頭を触ると、包帯が巻かれてある。

銀時は上半身を起こした。すると小さな寝息が聞こえてきた。

寝息のする方を見ると、フェイトとヴィータ、アルフがベッドの隣で寝ていた。その後ろには、椅子に座って寝ている新八と神楽もいた。

銀時は壁の方を見た。

そこには、壁に寄り掛かって、腕を組んだまま寝ているシグナムとリインフォースがいた。

ゾーマとの激戦の後、倒れた銀時はアースラの医務室に運ばれた。

フェイト達は、銀時が起きるまで付き添うと言い出したのだ。

銀時はぼりぼりと頭を掻いた。

たくつ、テメーらも疲れてるくせに。

それでも、悪い気はしなかった。

「オーイ。起きろテメーら」

少し大きめの声を出した。

フェイト達は、眠い目を擦りながら体を起こした。重い瞼を開けて、起きている銀時を見た。

「銀時！！」

フェイトが声を上げた。

その声で、他の皆の眠気が吹っ飛んだ。

「銀時！起きたのか！？」

「銀時！良かったあ！目が覚めたんだね！」

ヴィータとアルフが、銀時に飛び付いた。

「が……！！バツカお前ら！俺、怪我人だぞ！イダダダッ！！」

二人に抱き付かれ、傷が痛んで銀時は顔を歪めた。

「アルフさん！ダメですよ！また銀さん意識失っちゃいますよ！！」

「ヴィータ止せ！」

新八とシグナムが、アルフとヴィータを銀時から引き離れた。

すると、医務室の扉が開かれ、なのははやてが入ってきた。

「銀さん！もう目が覚めたんですか！」

「元気そうで、良かったわ」

なのはははやてが銀時に近寄る。ちなみに、はやては車椅子に乗っている。

「よオ。お前らも元気そうだな」

「はい！」

二人は笑顔で、元気よく応えた。

ふと銀時は、車椅子に乗ってるはやての足を見た。

「はやて。足は大丈夫なのか？」

「うん。侵食はなくなったから、リハビリをすれば歩けるようになるって」

「そうか」

銀時は安心した。

「銀時。体の方は大丈夫なのか？」

シグナムが聞いてきた。

「ああ。まあちつと痛むが、大したことねーよ」
「そうか」

シグナムは安心して微笑んだ。
「そういや、あの後どうなったんだ？」

銀時が尋ねた。

その後、ゾーマの死体はアースラに回収された。本局に着いたら焼却処分される事が決まった。
はやてやリインフォース、シグナム達は、管理局の保護観察を受ける事になった。

リインフォースの中にあつた防衛プログラムは、元々ゾーマを封印するために作られた物なので、ゾーマがいなくなった今、防衛プログラムを作る意味はなくなり、二度とあのような事は起こらないぞうだ。

「まつ、いいやな」

と、銀時はまとめた。

「そんじゃ行くかな」

銀時がベッドから起き上がった。

「え？行くつてどこに？」

新八が尋ねた。

「決まってるんだろ。管理局の連中から報酬ガツポリもらっただよ」

「金とんのかよ!!!」

邪悪な笑みを浮かべる銀時に、新八はツッコんだ。

*

クロノはリンディに報告を済ませ、部屋を出た。

廊下にはシヤマルがいた。

「あの〜…本当にいいんですか？私達を逮捕しなくて？」

シヤマルが尋ねた。

「ああ。幸い死者は出ていないし、君達も悪意があつてやっていた

訳じゃないからね」

歩きながらクロノが答えた。

ふとクロノの表情が暗くなった。

「それに…正直また彼と討論したくないし……」

「え？」

シヤマルは首を傾げた。

クロノは、プレシアを弁護した銀時の姿を思い出していた。

彼の無茶苦茶な弁護は、誰にも崩す事は出来ない。彼の憎たらしい顔が思い浮かぶ。

クロノはため息をついた。

*

銀時は医務室のベッドで横になっている。

『管理局からガツポリ報酬いただくぞ作戦』をやるうとしたのだが、

「銀ちゃん。この世界のお金、私達の世界でも使えるアルか？」

という神楽の言葉で、銀時は報酬ゲットを断念した。

この世界と銀時達の世界のお金は違うから、報酬を受け取っても意味がない。

せっかく大金が手に入ると思ってたのに、と落ち込む銀時。

すると医務室の扉が開かれ、リインフォースが入ってきた。

「銀時」

「ん？」

銀時は体を起こして、リインフォースに顔を向けた。

「その…今回は、貴方には世話になりました」

少し恥ずかしがりながら、リインフォースが言った。

「ありがとう」

微笑みながら、銀時に礼を言った。

その微笑みを見て、銀時も笑い返した。

報酬は手に入らなかったが、見たかったモノは見れた。

「いい顔するじゃねーか」

「!!!」

銀時の言葉にリインフォースは顔を赤くした。少し照れながら笑った。

やっぱ女は笑顔が一番だな。

リインフォースの笑顔を見ながら、銀時がそんな事を思っていると、

「銀時」

フェイトとシグナムが入ってきた。手には、ゾーマに折られた木刀がある。

「あ。俺の木刀」

「木刀…壊れちゃったけど……どうする？」

フェイトが尋ねた。

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

「しょうがねーな。また通販で買うか」

「え？」

銀時の言葉を聞いて、三人は同時に声を出した。

「奮発して新しいの買うとするか」

と銀時。

「ねえ銀時」

フェイトが口を開いた。

「この木刀、仙人に貰ったって言ってたよね？私に嘘ついたの？」

「私とレヴァンティンは、通販で買った木刀に敗れたのか？」

フェイトとシグナムは、それぞれのデバイスを構えた。

フェイトは怒った顔で、シグナムは鋭い目で銀時を睨んでいる。

リインフォースは後ろに下がって、両手を合わせて合掌している。

銀時は、デバイスを構えてる二人を見て、冷汗を流しながら後ずさった。

「ちよ待てよ。俺、怪我人よ？暴力反対」

「問答無用!!!」

二人は銀時に向かって、デバイスを振り下ろした。

「あああああ!!!」

医務室に、銀時の悲鳴が響いた。

「平和だね」

「平和ね」

廊下を歩きながら、九兵衛とお妙が呟いた。

ちなみに、エリザベスと桂は部屋で囲碁対決をしていた。定春は局員達の頭を、次から次へと噛みまくっていた。

くおまけく

銀八

「復活!」

フェイト&すずか

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『Mさん』。『質問です。ヴィータって私が思うんで

すが90パーセント以上がデバイスで残りがゲボ子じゃないんですか？銀さんとか思っていたりして？（新八や長谷川さんみたいに）どうなんですか？』」

銀八

「ダメだよ、ヴィータを新八や長谷川と一緒にしたら。ヴィータの本体はヴィータ本人です」

すずか

「ペンネーム『Mさん』から二つ目の質問です。『真戦組の近藤さんと管理局のレジアスが言い争ったらこんな感じになると思うのですが』ひん！馬鹿共がワシ等に従っていれば良いんだ！」（レジアス）「俺達は、馬鹿は、馬鹿でも！武士道って言う鋼の魂持った馬鹿だあ！」（近藤さん）「みたいな感じになりそうです。どうなんですか？』」

銀八

「『真戦組』じゃなくて『真選組』です。多分そうなるんじゃない？ってかそうなってほしいの？リクエスト？」

すずか

「ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生質問です！先生の後ろになんか半透明のフェイトのそっくりさんがいるんですが…なんかこうスタンドっぽい奴が…』」

銀八

「は？何言ってるの『銀銀銀』さん？そんなお前……ないない！そんなの無い！認めん！許さん！絶対許さんぞ！！」

フェイト

「次の質問。ペンネーム『ゲロ口軍曹』さん。『銀八先生、質問です、もうすぐ第二章も終わりっぽいですけど、とりあえず事件解決後もしばらくは臨時教師としての『坂田銀八先生』を続けるのでしようか？一応なのはとの約束でもありますし……。』」

銀八

「やりますよ。銀八先生」

すずか

「ペンネーム『クロス』さん。『StrikerS編にアルフは出ますか？』」

銀八

「できれば出したいと考えています」

フェイト

「そういえば、『ゲロ口軍曹』さんからこんなコメントもあつたよ。『あと、銀八先生、すずかちゃん、フェイト。これまで時折変てこな質問とかしたりして、マジすいませんでした……。』（汗）これからもうちょい考えて質問させていただきますので、どうか嫌いにな

らないでくださいです…orz」

すずか

「そんな…！嫌いになったりしないので、安心してください！」

フェイト

「そつだよ。どんな質問でも来たら嬉しいよ。本当にいつもありがとう」

銀八

「俺は嫌いだけどね」

フェイト&すずか

「銀八先生！！」

銀八

「嘘、嘘。冗談だよ。『ゲロロ軍曹』さん。嫌ってないから安心してください。そんじゃ今回はここまで。ばいばい」

第五十一訓：結局アームストロング砲が何なのか誰にもわからない（前書き）

新八「そういえば、グレアムさんはどうなったんですか？」

銀時「グレアムじいさんは辞職して、山へ芝刈りに」

神楽「二匹の猫は川へ洗濯に」

新八「……要するに管理局を辞職したんですね」

銀時「あと読者の皆にお知らせがある。質問の数が多いので、作者が沢山の質問の中から選んで『教えて、銀八先生』に載せる事になります。あつ、一応後書きも読んでよ。んじゃ、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十一訓。始まるぜ！」

第五十一訓：結局アームストロング砲が何なのか誰にもわからない

八神家。

家にははやて、シグナム達とリインフォースがいる。

「まだ雪が降つとるな」

はやては、窓から外を眺める。

雪は、昨日の夜から降り続いていて、もう随分積もっている。

「そういえば今日、銀時達が来るんだよな？」

ヴィータが言った。

「ああ。授業が終わったたら、高町達を連れてくると言っていた」

シグナムが答えた。

銀時は、なのは達のクラスの臨時担任を続けている。授業の内容は、相変わらず適当だが。

「そろそろ来る頃じゃないかしら」

時計を見ながらシャマルが言った。

「ほな、外に出て待つてようか」

はやてが車椅子を動かす。

リインフォースが、はやての首にマフラーを巻いた。

玄関の扉を開ける。

門の外に出た。

すると、門の側に銀時達がいいた。

フェイトとなのはが雪で玉を作っていた。雪だるまを作る感じに、コロコロ転がしながら大きな玉を作っている。

新八は険しい表情で、様子を見ている。

玉を作り終えた二人は、銀時の指示で玉を指定の場所に置いた。

「これでいいんですか？」

なのはが尋ねた。

「ああ。後は真ん中に棒を立てれば完成だな」

真ん中に間を空けて、左右に雪の玉が置いてある。

「完成させるなアアアア!!」

シグナムとシャマルが、左右の玉を蹴って壊した。

「おいおい、お前ら何すんだよ。フェイト達はその玉を作るのに、
どんだけ苦労したと思ってるんだ?」

言いながら銀時は、玉を作り直す。

「何、なのはちゃん達に卑猥な物を作らせてるんですか!?!」

「貴様それでも侍か!?!」

シャマルとシグナムが、銀時に怒鳴った。

その時、

「銀さん。棒ができました」

「お待たせ」

すずかとアリサがやってきた。

二人の後ろには、棒を担いでる神楽がいた。

「きゃああああ!! 神楽ちゃん何持つてるんですか!?!」

シャマルが顔を赤くしながら、神楽に叫んだ。

はやととヴィータ、リインフォースは呆然となって様子を見ている。
ザフィーラはため息をついた。

玉を作り直し終えた銀時が口を開いた。

「お前らよオ。何を勘違いしてんの? これアレだよ? ネオアームス
トロンクサイクロンジェットアームストロング砲だよ」

「アームストロング二回言ったぞ! こんな卑猥な大砲があるわけな
いだろ!」

シグナムが反論した。

銀時は、やれやれと首を横に振った。

「たくつ。お前らエロい大人は、棒と玉があればスグそっちに話も
つてくんだよな」

「マジキモイアル。しばらく私に話し掛けないで」

銀時と神楽は、作り直した玉の間に棒を立てた。

シグナムは顔をしかめた。

「いや…明らかにおかしいだろ。だったらソレがどいう武器か言

「つてみる」

シグナムが説明を求めた。

「江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させちまった戌威族の決戦兵器だ」

「はあ！？こんなふざけた兵器に、お前の国はやられたのか！？」

シグナムは、信じられないと言った顔をした。

「変わった大砲やな」

はやてが珍しそうに、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を見つめた。

「はやてちゃん！あんまり見ちゃダメです！」

シヤマルがはやての前に立った。

「新八。何とかならないのか？」

シグナムが小声で尋ねた。

「この人達を止めるなんて無理です」

諦めた口調で新八が答えた。

「ん？みんな八神殿の家に来ていたのか」

桂がエリザベスを連れてやってきた。

「桂」

シグナム達が桂に気がついた。

すると桂は、銀時達が雪で作った物に気付いた。

「むっ。これはネオアームストロングサイクロンジェットアームス

トロング砲ではないか。完成度高けーなオイ」

「お前も知ってるのか？」

目を細めて、シグナムが尋ねた。

「別名『走る雷』。バルカン戦役における惨劇『火の七日間』を引き起こした地獄の兵器だ」

「さつきと話が違っぞ」

ザフィーラがツッコんだ。

「あら。皆もはやてさんの家に遊びにきたの？」
リンディがやってきた。

「おお、リンディ殿」

「桂さんもいたんですか」

「うむ。そうだリンディ殿。この近くに旨いそば屋があるのだが、今度一緒にどうだろうか？」

「ええ。いいですよ」

桂とリンディは、なんかいい感じに会話をする。

シグナム達は目を細めて、ジツと二人の様子を見ている。

銀時の話によれば、桂は人妻好きらしい。

するとリンディも、銀時達を作った卑猥な作品に気付いた。

「あら。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃない。完成度高けーなオイ」

「えええええ!!?!？」

リンディの口から意外な言葉が出て、新八やシグナム達は驚いた。

「ちよっ…何でリンディさんが、この卑猥な大砲の名前知ってるんですか!？」

動揺しながら新八は尋ねた。

「大魔導師クラガ・ラーンとスルバ・ジエツクの魔法決戦において、スルバ・ジエツク側を勝利に導いた奇跡の兵器よ」

真面目な顔で、リンディは新八達に説明した。

「何なんだよ!？何なんだよアームストロング砲って!？」

新八は頭を抱えながら叫んだ。

アームストロング砲の謎は深まっていった。

様子を見ていたフェイト達は苦笑いをした。

はやては銀時達の騒ぎを見て、腹を抱えて笑っている。自然と周りにはいるヴィータ達も笑った。

シグナムも笑いながら思った。

こんなに大声で笑ったのは何時ぶりだろう？

いや、もしかしたら初めてかもしれない。

その後、みんなで雪合戦をやった。

銀時が、雪の中に石を入れて投げるといふ反則行為をした。もちろ

ん、投げた先にいた人物は桂である。

ヴィータは、アームストロング砲の玉を投げた。

銀時はアームストロング砲の棒で打ち返した。

やったなコノヤロー！おい、アークセイバー投げるな！デイバイン・バスター！

これ雪合戦ですか？的な雪合戦をやっている途中で、お妙と九兵衛、東城がやってきた。

そして遂にこの時がやってきた。

「雪合戦で疲れたでしょ。疲れたときには甘い物が一番よ」
持っていた箱の蓋を開けた。

箱の中身を見て、全員の顔色が青くなった。

銀魂読者ならお分かりでしょう。箱の中に入っていた物。
それは。

「卵焼きよ」

ダイクマター
暗黒物質。

お妙の殺人料理である。

お妙はニコニコ笑いながら箱を差し出した。

シグナム達は戸惑った。

シヤマルも料理は下手だが、この料理は次元が違う。

はやてはこの真っ黒い物体が『卵焼き』なんて信じられなかった。

一言文句でも言いたかったが、言えなかった。なんか…文句も言わせない、物凄い威圧感があったから……。ついでに食べないと、許してくれなさそうな感じもした。

諦めたはやては、卵焼き…いや『かわいそうな卵』に手を伸ばした。

その時、銀時と新八、シグナムとヴィータが、はやてよりも速く手を伸ばし、かわいそうな卵を掴み、口に入れた。

はやては驚愕した。

まさか、私を護るために！？

銀時達の口から、ガリガリと卵焼きからは聞こえないはずの噛み音を立てながら、かわいそうな卵を食べ、飲み込んだ。

直後、顔面蒼白になり、意識を失って四人は倒れた。

*

銀時と新八、シグナムとヴィータは、なんとか一命を取り留めた。四人は、回復魔法で助けてくれたシャマルに、深々と頭を下げ感謝した。

その後軽い雑談をし、空が暗くなってきたので、銀時達は帰ることにした。

明後日、銀時達は元の世界に帰る予定だ。

はやて達は、見送りの約束をした。

銀時達が帰ろうとした時、

「銀時」

シグナムが呼び止めた。

銀時は足を止めて、シグナムに振り返った。

「少し……いいか？」

頬を少し赤くしながら、シグナムが言った。

*

シグナムと銀時は、近くの公園に来ていた。

公園には、二人以外誰もいない。

「んで？何の用だ？」

銀時が尋ねた。

「あの……その……」

シグナムは顔を赤くし、銀時から目をそらしながら呟く。

今日、私は銀時に告白すると決めた。だが、なかなか銀時に自分の想いを伝える事ができない。告白というものが、こんなに難しい事だったとは……告白を少し悔っていた。

いつの間にか、雪は止んでいた。時間だけが過ぎていく。

「…用がないなら帰るぞ？」

焦れた銀時が言った。

「ま…待て、銀時！」

慌ててシグナムは、銀時を呼び止めた。

「わ…私は……！」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、シグナムは今度こそ告白する決意をした。

「銀時が好きだ！」

銀時を真っ直ぐに見つめ、ついにシグナムは告白した。

銀時は目を大きく見開き、口も大きく開けて驚いた。

場が沈黙した。

冷たい風が二人の頬に触れた。

「……………マジでか？」

沈黙を破って、銀時が尋ねた。

「私は本気だ」

銀時を見つめながら、シグナムは答えた。

告白した事で吹っ切れたのか、シグナムは歩き出し、銀時に抱き付

いた。

シグナムの豊満で柔らかい胸が、銀時に当たる。

こういう状況に慣れていない銀時は、どうしたらいいかわからず、

首を左右に振りながら動揺する。

シグナムは両手を銀時の顔に添えた。

そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を銀時の唇に重ねた。

シグナムにキスされ、銀時の体は固まった。

フェイトの時とは違って、長い時間キスをした。

シグナムは、銀時から唇を離れた。

「フフ。私のファーストキスだ」

シグナムは、嬉しそうな笑みを浮かべた。

一方銀時は、キスをされて呆然としている。フェイトとは、また違った感触のキスだった。

「テストロツサには負けん。銀時。必ずお前を、私の男にしてみせるからな」

じゃあな、と言ってシグナムは八神家に帰っていった。

残された銀時は、呆然と立ち尽くした。

「……………何でこうなるの？」

小さく呟いた。

「フェイトに告白されるわ、アルフに告白されるわ、シグナムに告白されるわ……………俺はどうすればいいんだ？」

この時、銀時は人生で一番悩んだ。

「教えてくれエエ！レヴァンティイイイイン！！！」

空に向かって銀時は叫んだ。

*

あつという間に、別れの日がやってきた。

街の近くの丘に銀時達はいた。見送りにフェイト達やシグナム達、アースラの局員、すずかやアリサもいた。

「今回も、また貴方達には世話になった。礼を言う」

「まあお前もこれから大変だろうが、頑張れよ」

クロノと銀時が挨拶を交わした。

「銀ちゃん。他の皆も、ほんまにありがとう！」

はやてが銀時達に礼を言った。

「早く足、良くしろよ」

「うん！」

銀時の言葉に、はやては頷いた。

「今度、私達の世界に遊びにくるアルよ」と神楽が言った。

「おう！絶対に行くからな！」

ヴィータが応えた。

「なのはちゃんも元気だね」

「はい。新八さん達もお元気で！」

新八となのはも挨拶を交わした。他の皆もそれぞれ別れの挨拶をした。

すると銀時が無線機に向かって、新八達を先に帰してくれ、と言った。無線機で銀時の言葉を聞いた源外は、言われた通りにした。

フェイト達の前から、新八達がいなくなり、銀時だけが残った。

「フェイト、アルフ、シグナム」

銀時が三人の名前を呼んだ。

「悪いが。俺は誰と付き合うかは、まだ決められねエ。けどよ……」
そこで銀時は、一旦言葉を切った。

改めて三人を見て言った。

「ありがとな。お前らの気持ちは、スゲー嬉しいぜ」
笑って銀時は言った。

フェイト、アルフ、シグナムは顔が赤くなった。同時に嬉しくもなった。

「じゃあな」

そう言い残し、銀時も消えた。

フェイト達は、銀時達がいなくなった後もしばらくその場にいた。

*

フェイトとプレシア、アルフは、部屋に戻ってきた。

「フェイト、アルフ」

プレシアが声をかけた。

「何、母さん？」

「何だい？」

プレシアを見ながら尋ねた。

「貴女達……銀時が好きなの？」

先ほどの銀時の言葉が気になり、二人に聞いてみた。

二人は少し頬を赤くした。

「うん。好きだよ」

「あたしも」

頷きながら答えた。

「…そう」

プレシアは短く返事をした。

何だか胸の奥がモヤモヤする。

この気持ちは一体……？

初めての感じに、プレシアは戸惑った。

*

八神家。

「シグナムは、銀ちゃんの事が好きやったんか」

「…はい」

顔を赤くして、シグナムは答えた。

「銀さんのどこを好きになったの？」

シヤマルが尋ねた。

「そ…それは……」

シグナムは戸惑った。

家に帰ってきてから、ずっとこんな感じだ。

ザフィーラは、ヴィータの方を見た。

何やら少し機嫌が悪そうな感じがする。

「どうした、ヴィータ？」

ザフィーラが尋ねた。

「なんでもねーよ！」

ヴィータはそっぽを向いた。

ラインフォースは、ソファーに座ってソワソワしている。

シグナムに先を越されたか。

ラインフォースは、少し悔しそうな顔をした。

「それじゃ昼ご飯にしようか」

「はい」

はやてが調理の支度をする。シグナム達も手伝いを始める。すると、

「なあシグナム！」

ヴィータがシグナムを呼んだ。

「何だ？」

シグナムは振り返って、ヴィータを見た。

ヴィータは、少し迷ってから言った。

「銀時のどこが好きなんだ？」

「その話はもういいだろう！！！」

間髪入れず、シグナムが怒鳴った。顔は真っ赤になっている。はやて達は、二人の様子を見て笑った。

今日も八神家は平和である。

第二章 闇の書・ゾーマ死闘篇 完

第五十一訓：結局アームストロング砲が何なのか誰にもわからない（後書き）

どうも。第二章如何でしたか？

まだStrikersを見終わっていない、第三章の話の設定なども決まっていないので、しばらくは日常的な話を書きます。更新も今までよりも遅くなると思います。

こんな感じになりますが、これからもよろしくお願いします！

〜日常篇〜 第五十二訓：家賃はちゃんと払いましょ(前書き)

第三章のオリジナルの敵キャラや、オリジナル設定が大体決まりました。

後書きには『銀八先生』もあります。

それでは、『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十二訓。始まります！

〈日常篇〉第五十二訓：家賃はちゃんと払いましょ

江戸の空は、雲一つない青空。あつ、微妙に雲がありました。すいません。

銀時達が『リリカルなのは』の世界から戻ってきて一週間。今日も江戸は平和である。

そんな平和な江戸の街に、平賀源外の工場があった。工場内から強い光が発せられた。やがて光は収まり、工場内にある装置から四人の人物が出てきた。

「着いたのかな…？」

フェイト・テストロツサ。

「意外とあつという間だったね」

アルフ。

「ここが銀時達の世界か」

シグナム。

「源外ってジーさんの工場だろ？」

ヴィータ。

源外の装置で、四人は銀時達の世界にやってきた。

「おー、よく来たな」

四人の前に源外がやってきた。

「は、はじめまして…でいいんでしょうか？」

フェイトが戸惑いながら言った。

「まあ実際に会うのは初めてだが、無線で何度か話してるからいいだろう」

と源外。

「私とヴィータは、はじめましてだな。私は『剣の騎士』シグナムだ」

「『鉄槌の騎士』ヴィータ」

二人は源外に自己紹介した。

「俺は平賀源外だ。まあよろしくな」

軽く自己紹介した。

それからフェイト達は、源外から銀時の家までの道のりを聞いて工場を出た。

「しかし、別品ばかりだな」

フェイト達の後ろ姿を見ながら、源外は呟いた。

外に出た四人は驚いた。

建物の形が違う。それに街を歩く人達の中に、アルフのように頭に獣の耳を生やしている者がいる。

他にも顔が魚のような者や、体の色が赤い者など異形の人達が歩いてる。

「アレが銀時達が言っていた『天人』か…」

四人は興味深そうに天人達を見た。

「この世界なら、アルフも耳と尻尾を隠す必要はないね」

「うん」

フェイトの言葉に、アルフは頷いた。

「それにしてもヘンテコな奴らだな」

天人達を見つめながら、ヴィータが言った。

「さて、そろそろ行くぞ」

シグナムが歩き出した。

フェイト達も後に続いて歩き出す。源外に教えてもらった道のりを歩いて、しばらくすると『万事屋銀ちゃん』の前に到着した。

「ここが銀時の家か…」

四人は少しドキドキした。

階段を上って、二階にある万事屋に向かう。

階段を上り終えた時、

「いい加減にしるよ天然パーマ!!!」

誰かの怒鳴り声が聞こえた。

四人は玄関前を見た。タバコを持った、五十代くらいの女性が、玄関の中を覗んでる。

玄関の中にいるのは、もちろん銀時。

「家賃家賃うるせーんだよクソババア！ねエもんは払えねーって言うてんだろ！！」

「ナメてんじゃねーぞコラア！五ヶ月分の家賃だぞ！さっさと耳を揃えて払わんかいクソツたりヤアアア！！」

どうやら家賃の事でモメているようだ。

四人は目を細めて、呆れた顔で様子を見つめた。ゾーマを倒して世界を救った男が、家賃も払えないとは。しかも五ヶ月……。

あの女性は、大家さんだろう。よくそこまで家賃滞納を許していたな。まあ今日で我慢の限界のようだが。

四人はそれぞれ、そんな事を思った。

この後、銀時は女性に体を持ち上げられ、地面に向かって投げられた。

*

「よオ。よくきたな」

ポロボロになった銀時が言った。

フェイト達は苦笑した。今みんなは一階にある『スナックお登勢』にいる。

カウンターには先ほど銀時と争っていた、『スナックお登勢』のオーナーで『万事屋銀ちゃん』の大家さんのお登勢がいる。

「アンタに、こんな可愛い知り合いがいたとは驚きだね」

タバコの煙を吐きながらお登勢が言った。

「はじめまして。フェイト・テストロツサです」

「アルフです」

「シグナムです」

「ヴィータだ」

四人はお登勢に自己紹介した。

「私はこのスナックのオーナーで、このダメ男の事務所の大家のお

登勢だ。まあゆっくりしていきな」

「はい。ありがとうございます」

フェイト達は礼を言った。

銀時との喧嘩の様子を見て、怖い人だと思っていたが、そうでもないみたいだ。

アルフは、さつきから敵意の視線を受けていた。恐る恐る後ろを振り返った。

そこには、頭に猫耳があるのに顔が濃くて全く萌えられない女性がいた。スナックお登勢の従業員、キャサリンである。

「ソコノ才前、頭二獣ノ耳ナンカ付ケテ、私トキャラガカブルンダヨー！」

アルフを指差しながら、キャサリンが怒鳴った。

「いや、かぶんねーよ」

銀時が言った。

「アルフとお前とじゃ、可愛さが天と地ほどの差があるだろ」

「差別ハヨクナイト思イマス」

「差別じゃねエ。分別だ」

「ゴミカ？私ハゴミカ？」

キャサリンは銀時を睨んだ。

「正解！」

「正解ジャーネーヨ！」

キャサリンが怒鳴った。

銀時とキャサリンが騒いでいる中、フェイトはもう一人の従業員と目が合った。

緑色の髪でなかなかの美人。機械家政婦の『たま』である。

「はじめまして。たまと言います」

たまが自己紹介をした。

「あつ、はじめまして。フェイト・テストロツサです」

慌ててフェイトも自己紹介した。

たまの事は、銀時から少し聞いている。

ある天才機械技師が、死んだ娘を生き返らせようと、人格データをたまさんに移した。

私とたまさんは似ている。私も死んだアリシアの代わりとして、母さんに造られたから。

「どうかしましたか？」

たまがフェイトに声をかけた。

「あ、いえ。何でもありません。大丈夫です」

「そうですか」

フェイトの返事を聞いて、たまは安心したように笑った。

そう、もう大丈夫。

たまさんには、お登勢さん達や銀時がいる。私の母さんも、私を『フェイト』として、『娘』として見てくれてる。

ふとフェイトは、ある事を思いついた。

「あの、たまさん」

「何でしょうか？」

「私と…友達になってくれませんか？」

少し照れた感じにフェイトが言った。

「友達…」

たまは小さく呟いた。

それから嬉しそうに笑い、

「はい。よろしくお願ひします」

フェイトの友達となった。

フェイトも嬉しそうに笑い、たまと握手をした。

銀時やシグナム達は、微笑みながらその光景を見守った。

*

銀時達は『スナックお登勢』を出た。

これからフェイト達に、江戸の街を案内させるのだ。ちなみに、たまもいる。お登勢に”今日は休んでいいよ”と言われ、フェイト達

の案内に付き合っている。

「そういえば、新八と神楽は？」

歩きながらアルフが尋ねた。

「今日は仕事は休みだ。神楽は定春と散歩だ」

「ふん」

それから少し歩いて行くと、

「あつ、お花屋さんだ」

フェイトが花屋を見つけた。

銀時は顔を青くし、冷汗を流した。そんな銀時の異変に気付かず、

フェイト達は花屋に寄って、外に並べられている花を見た。

「へえ〜。綺麗だなあ」

「それに、どれも見た事もない種類だ」

花を見ながらヴィータとシグナムが言った。

すると、

「いらつしやいませ」

店の中から声が聞こえた。

フェイト達は顔を上げて、声の主を見た。見た瞬間、全員顔を引き

つらせ、大量の冷汗を流した。

店の中から出てきたのは、身長二メートルくらいの巨体で、顔は鬼

のような形相をしている。ライオンのような黒いたてがみが後頭部

から首の周りを覆い、側頭部から角が一對生えている。

「はじめまして。僕、花屋をやっています、屁怒紹ヘドロです」

赤い眼を光らせ、最凶ボイスで自己紹介した。

鬼の形相で睨まれ……いや、屁怒紹さん本人は睨んでるつもりはな

いのだが、四人は屁怒紹に恐怖した。

え…？何ですかこの人？この人も天人？ゾーマみたいな魔導生物兵

器じゃないのか？っていうかゾーマより怖いんですけど！ゾーマよ

りも強そうなんですけど！何でこんな化物が花屋？シユールだわー！

四人は心の中で、それぞれそんな事を思ったが、決して口には出さ

ない。

口に出した瞬間、殺されるかもしれないから。

フェイトは目を大きく見開き、冷汗を流し、尻餅を着いている。シグナムはレヴァンティンを出すのが、恐怖のあまり鞘から剣を抜けなかった。

アルフとヴィータは目に涙を浮かべ、それぞれフェイトとシグナムに抱き付いてガタガタ震えている。

後ろにいる銀時も顔を引きつらせている。たまは特に怖がっている様子はない。

屁怒紹は視線をフェイト達から外し、

「おや。坂田さんとたまさんじゃないですか」

二人に気付いた。

「ど…どうも……」

「こんにちは、屁怒紹様」

銀時は震える声で挨拶し、たまは普通に挨拶した。

「このお嬢さん達は、坂田さんのご友人ですか？」

フェイト達を見ながら、屁怒紹が尋ねた。

見られた瞬間、フェイト達はビクツと体を大きく震わせた。

「あ…ああ…そつだ…いや、そつです」

銀時は、体中から嫌な汗を流しながら答えた。

「そつですか。ではお近づきの印に、コレをどうぞ」

屁怒紹は小さな花が植えられている植木鉢を、一つずつフェイト達に渡した。

震える手で、フェイト達は受け取った。

「坂田さんのご近所ですから、これからもよろしくお願いします」赤い目でフェイト達を見つめる。

誤解がないように言っておくと、屁怒紹さんは悪い人ではありません。見た目メチャクチャ怖いですが、中身は清廉せいれんで生き物を愛する優しい人物です。ちなみに傭兵三大部族の一つ『茶吉尼族』の天人で、メチャクチャ強いです。

「は…はい。ありがとうございます」

四人は声を揃えてお礼を言った。
フェイト達が、屁怒紹さんの優しさに気付く日は来るのか？

くおまけく

銀八

「教えて」

フェイト&すずか

「銀八先生!!!」

フェイト

「ペンネーム『おしるこ』さん。『銀八先生に質問です。この先、strikers編のあとにfate x 銀魂みたいにオリジナルストーリーっぽい作らないんですか』」

銀八

「微妙だな…。作者はオリジナルストーリーで、大失敗してしまつた過去があるからな。オリジナルストーリーっぽいのは、やるかわかりません」

すずか

「ペンネーム『テストメント』さん。『初代リイン。生き残った訳なんですが……。リイン2は生まれるのでしょうか？いや、ぶつちやけ初代リインが生き残ったらリイン2はやて達、生み出さないのでは無いかと(汗)ちょっと、いや、かな〜り心配になってしまいました(汗)』」

銀八

「この質問は、ほかの読者からもよく聞かれます。まあ……………俺にもわかりません」

すずか

「ペンネーム『アイスピック』さん。『銀魂の世界の技術と(天人にもたらされたものがほとんどですが)管理局の技術はどちらが上ですか？少し気になったので』」

銀八

「管理局は、アルカンシエルなんて物騒な物がありますからね。江戸にも源外とか天才がいますが、全体的には管理局の技術の方が上だと思います」

〜日常篇〜 第五十二訓：家賃はちゃんと払いましょう（後書き）

生徒全員「3年Z組の銀八先生!!」

銀八「今日は身体検査をする。まずはシグナム。制服を脱げ」

シグナム「先生。セクハラです」

キヤサリン「ソナニ見タキヤ、私ノヲ見セテヤルヨ」

銀八「シグナム。お前の剣でこの化け猫退治してくれ」

シグナム「レヴァンティン!!」

キヤサリン「ニャアアアアア!!」

新八「先生。お腹痛いので帰ります」

第五十三訓：祭りは大勢で行くべし（前書き）

銀時「新八」

新八「何ですか銀さん？」

銀時「Strikersを観たけどよオ……………アレって魔法じゃなくね？科学じゃね？超科学。タイトル『機動少女リリカルなのはStrikers』に変えたほうがよくね？」

新八「ちよっ！銀さん！そういう事言わないでください！！」

銀時「へいへい。そんなじゃ、重大発表がある『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十三訓。始まるぜ！」

第五十三訓：祭りは大勢で行くべし

屁怒紹さん…いや、屁怒紹様との対面を済ませたフェイト達は、江戸の街を歩いていて。

手には、屁怒紹さんから貰った植木鉢がある。

「こ…恐かった……」

フェイト達は、屁怒紹さんとの初対面でかなり疲れている。

無理もない。あの最強顔面に睨まれたら、生きた心地がしない。

「まあ、よく頑張ったよ」

銀時はフェイトの肩を叩きながら言った。

「ところでさア銀時」

ヴィータが口を開いた。

「この世界、暑くねーか？」

汗を拭きながら、ヴィータは言った。

ヴィータ達の世界は、まだ冬だ。だけどこの世界の暑さは、まるで夏みたいだ。

「当たり前だろ。夏なんだから」

さらつと銀時は言った。

「夏!？」

ヴィータ達は驚いた。

「お前らの世界と、この世界は季節がズレてんだよ」

「そうなのか。道理で暑いはずだ」

シグナムは、手をパタパタ振って涼もうとしている。

シグナム達は長袖を着ているので、尚更暑い。

「そういえば、今日は夏祭りの日ですね」

たまが思い出したように言った。

「お祭りがあるのか？」

ヴィータは目をキラキラ輝かせた。

「そっぴや今日だったな」

顎に手を当てて銀時が言った。

「じゃあさ、みんなで行こうよ！なのは達も後から来るんでしょ？」

「うん。アリサとすずかも来るって」

「それじゃあ、一旦戻ってアレに着替えようぜ！」

「浴衣か。着るのは初めてだな」

祭りと聞いて盛り上がるフェイト達。

すると、前から歩いてくる集団の一人とシグナムの肩がぶつかった。

「ああ、すまない」

「いえ、こちらこそ……」

眼鏡をかけた青年は、言葉を止めた。

眼鏡に手をかけて、ジツとシグナムを見た。青年の友達と思われる

周りの人達も、シグナム達を見つめてる。

シグナム達は戸惑いながら後ずさった。

それから青年は驚愕の表情を浮かべ、

「シグナムだアアアア！」

大声で叫んだ。

シグナム達は、驚いて体を震わせた。

「間違いない！『魔法少女リリカルなのは』のシグナムだ！」

「フェイトやアルフ！ヴィータもいるぞ！」

「スゲー完成度高けーコスプレ！本物みたいだ！」

青年達はテンションを上げて騒いだ。

どうやら青年達はオタクのようだ。

いや、本物だからね。

銀時はため息をつきながら思った。

そこでフェイト達は、自分達がアニメのキャラクターである事を思い出した。

「写真撮らせてください！！」

青年達がカメラを構える。

「あの……その……」

フェイトは困った顔をする。

「うぜーな！全員ぶっ飛ばしてやるうか！！」

「止せヴィータ！この世界で魔法は使うな！」

グラーフアイゼンを使おうとするヴィータをシグナムが止める。

どう対処すればいいか迷っていると、たまがフェイト達の前に立って、青年の腕を掴み、

「いってらっしゃいませ！」

ブンツと思いつき投げ飛ばし、青年は遠くへ飛ばされた。

青年達は、口を大きく開けて驚愕した。

「私の友達が嫌がっています。おひきとりください」

青年達を見つめながら、たまが言った。

「ごめんなさ〜い！！」

ビビった青年達は、走って逃げていった。

フェイト達は、青年達を見つめながらポカンとしてる。

たまがフェイト達に振り返る。

「大丈夫ですか皆さん？」

たまが尋ねた。

「あ、うん。ありがとう！」

アルフが礼を言う。

「助かったよ！お前結構やるじゃねーか！」

「うむ。礼を言う。ありがとう」

ヴィータとシグナムも礼を言った。

たまはフェイトに顔を向けた。

「大丈夫ですか、フェイトさん？」

「うん。ありがとう、たま」

笑顔で、たまに礼を言った。

たまも嬉しそうに笑い返した。

銀時は微笑みながら、その光景を見つめた。

*

夕方。江戸の夏祭りが始まる時間。

スナックお登勢の前に、銀時、新八、神楽、たまがいた。ここがフ
ェイト達との待ち合わせ場所になっているのだ。

しばらく待っている、フェイト達がやってきた。その中には、な
のは、はやて、アリサ、すずかもいる。

みんな浴衣を着ている。

「お待たせ」

「ぞろぞろと大勢で来たな」

「お祭りは、大勢で行った方が楽しいですよ」

なのはが笑顔で言った。

隣にいる、はやてやアリサ達が頷いた。

銀時はため息をついた。

こんなに大勢で祭りに行ったら、ただでさえ少ない金が消えちまう
ぜ。

「心配いりません、銀時様」

たまが懐から財布を取り出した。

「私のお金を皆さんで分ければ、問題ありません」

銀時の悩みを見透かしたように言った。

たまは機械だから、基本燃料以外の物は必要ない。だからお登勢か
ら貰ってる給料も、ほとんど使っていないのだ。

たまの言葉を聞いて、銀時は安心した。

「ありがとうございます、たまさん」

新八が礼を言った。

「それじゃ、祭りに行くアル！」

「おお！」

神楽とヴィータが、テンション上げて歩き出した。

銀時達も後に続いて歩き出す。

*

かぶき町夏祭り。

カップルやら友達連れやら家族連れやら、沢山の人で賑わっていた。
「やったアル！」

神楽は、射的をやっている。

全弾お菓子の箱に当たって、箱を倒して神楽は上機嫌だ。

「凄い神楽ちゃん！」

「流石、神楽！」

すずかとアリサが拍手をした。

一方、神楽の隣では、

「当たれ！」

ヴィータがお菓子の箱に狙いを定め、弾を発射した。

だが弾は、お菓子の箱を掠めただけだった。

「ああ〜！悔しい！！！」

頭を抱えながら、ヴィータは悔しそうに叫んだ。

「ヴィー…ヴィータちゃん！最後はおしかったよ！」

なのはが励ます。

*

フェイトは金魚すくいをやっている。

「あ」

紙が破けて金魚が逃げてしまった。

「あ〜、また逃げられちゃった！」

後ろで見ていたアルフが、残念そうに言った。
すると、

「私にお任せください」

たまがフェイトの隣にやってきた。

「たま」

フェイトはたまに顔を向けた。

たまはお金を払い、『ポイ』という金魚をすくう道具とお椀をもら

う。

水の中を泳ぐ金魚を見つめる。狙いを定め、ポイを持つ手を動かす。見事に金魚をすくい、お椀の中に入れた。

「凄い！！」

フェイトとアルフは驚いた。

屋台の主人もビックリしてる。

「たま、金魚すくい上手だね」

「私の中には、金魚すくいの達人のデータが入っています」

「何でそんなデータが入ってるんだい？」

アルフがツツコんだ。

構わずたまは金魚をすくい続ける。

あっという間にお椀の中は金魚で一杯になった。

フェイトは、たまに礼を言い、お椀の中の金魚を三匹貰った。

*

「綿菓子ください」

銀時は綿菓子を買った。

「銀ちゃんは、ホンマに甘い物が好きやな」

松葉杖を使って、はやてがやってきた。隣にはシグナムと新八がいる。

「しかし、糖尿病寸前なのだろ？大丈夫なのか？」

「いや、もう開き直って、太く短く生きるみたいですよ」

苦笑いしながら、新八はシグナムに答えた。

「銀ちゃん。甘い物ばかり食べたらアカンよ」

はやてが注意した。

「お前は俺の母ちゃんか？」

綿菓子を食べながら、銀時が言った。

「そついや、足の方はどうなんだ？」

「うん。リハビリも順調やから、もう少して松葉杖を使わなくても

歩けるようになるんよ」

嬉しそうにはやては言った。

「そうか」

銀時は笑って応えた。

すると、もう一つ綿菓子を買った。

「ほらよ」

買った綿菓子をはやてに差し出した。

「ありがとう！」

はやては喜んで綿菓子を受け取った。

おいしそうに綿菓子を食べる二人。新八とシグナムは微笑みながら、二人の様子を見ていた。

*

神楽達はフェイト達と合流していた。

「少しお腹空いちゃったね」

「何か食べよっか」

なのはとアリサが言った。

「あつ！焼きそば屋があるぞ！」

ヴィータが焼きそば屋を指差した。

みんなで焼きそば屋へ向かった。

屋台の前に着くと、

「おじちゃん！焼きそばくださいアル！」

神楽が屋台のおじさんに声をかけた。

鉄板の上では、ジュージューと音を立てて焼きそばが作られている。

「はいよ！」

声をかけられ、おじさんは顔を上げた。

「あつ、マダオアル」

おじさんを指差しながら、神楽は言った。

「げっ！激辛毒舌娘！」

黒いサングラスをかけ、顎髭を生やしたおじさんは、神楽を見た途端顔を歪めた。

おじさんの名は、長谷川泰三。元入国管理局の局長である。

「神楽。『マダオ』って何？」

フェイトが首を傾げながら尋ねた。

「まるでダメなオツサン。略して『マダオ』アル」

「ま…まるでダメなオツサン？」

アリサは長谷川を見つめた。

確かに何かこう…ダメそうな雰囲気がある。アリサは若干引いた。

「いや、教えなくていいだろ！ほらっ！金髪の女の子引いちゃつてるよ！！」

「意味は他にも”マジでダサイオツサン”とか”まだまだ墮落していくオツサン”とか”まるでダメな夫”とかいろいろあるアル」

神楽が言った。

それを聞いたなのは達は、哀れみと同情の視線を長谷川に向けた。さつきまで引いていたアリサもだ。

「ちよっ…やめろ！ホントやめて！そんな目で俺を見ないで！なんで初登場でこんな扱いなんだよ！！」

ちくしょオオオオ、と長谷川は涙目で叫んだ。

しかもこの後、神楽達に焼きそばをタダ食いされてしまった。

*

全員が合流して、祭りを回った。

リング飴を食べたり、輪投げをしたり、かき氷を食べたりとたくさん屋台を回った。

楽しい時間は、あっという間に過ぎ、そろそろ別れの時間となった。

「ありがとうな銀ちゃん。こんな大勢で楽しんだのは初めてや」
はやては嬉しそうに笑った。

源外の工場内に集まって、別れの挨拶をする。

「ホント。楽しかったね」

なのも笑顔で言った。

「僕達も楽しかったよ」

「また遊びに来るアルよ」

新八と神楽が言った。

「ではな銀時」

「また来るね」

シグナムとフェイトが言った。

「ああ。またな」

銀時が別れの挨拶をした。

その直後に、フェイト達は装置で元の世界に帰った。

「さーて、俺らも帰るか」

「そうですね」

三人は工場を出ようとした。

「銀時様」

たまが銀時を呼び止めた。

銀時は足を止めて、たまに振り返った。

「またフェイトさん達が来たら、誘ってくれますか？」

たまの言葉を聞いて、銀時達は少し驚いた。

同時に嬉しくもなった。たまには『友達』と言える者が少ないから、

今回のフェイト達との出会いは良い事だ。

「ああ。またみんなで騒ごうぜ」

笑みを浮かべながら、銀時が言った。隣にいる新八と神楽も微笑ん

でる。

三人は歩きだし、たまは三人の後ろ姿を見つめながら微笑んだ。

くおまけく

銀八

「教えて」

フェイト&すずか

「銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀さんの宇治銀時をフェイトは気に入りましたがフォワード陣とナンバーズで好きになる人はいますか』」

銀八

「いたとしても一人か二人だろうな。つーかナンバーズって何食って生活してんの？」

すずか

「ペンネーム『虚空』さん。『銀さんは、潰されて逝きますか？それとも黒こげにされて逝きますか？それとも斬られて逝きますか？（お笑いパートで、しかも例の3人を絡ませたとしたネタを想像して）』」

銀八

「いや、俺にもわかんねーな。まあ死なねー事を祈るよ」

フェイト

「今回の質問はここまでです」

銀八

「そんじゃ前書きでも言った、重大発表をする」

すずか

「それでは、どござい」

緊急告知！

近日掲載決定！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』

最終章 開始！

『リリカル銀魂 Strikers』～白夜叉鎮魂歌～

黒き獣の呻き

蘇る脅威

かつてない悪しき存在

そして

銀八

「はい。という訳で、『魔法少女と銀髪の侍』とは別にして最終章を連載します」

フェイト

「どんな話になるんだろ？」

銀八

「物凄くグダグダになる予定だから、読者のみんなは覚悟するよ
うに！」

すずか

「銀八先生！読者を不安にさせるような事は、言わないでください
！」

銀八

「あつ、日常篇は今後も続くから、よろしく。それじゃあ今回はこ
こまで。ばいばい」

第五十三訓：祭りは大勢で行くべし（後書き）

今回は、銀さん達が海に行ったり行かなかったりします。

うん。行きます。

銀時「ビキニがいいな」

第五十四訓：海とえば水着美女（前書き）

銀時「暑いからって、アイスばっか食うなよ」

フェイト「銀魂×魔法少女リリカルなのは」第五十四訓。始まります」

第五十四訓：海と言えば水着美女

青い海。

白い砂浜には、カップルやら家族連やら沢山の人で賑わっていた。あれ？夏祭りの時の文章と同じじゃね？まあいいか。

当然この中には、銀時達もいた。銀時と新八は既に水着に着替えており、砂浜にシートを敷いて、着替えにいったフェイト達を待っている。

ちなみに今日、この世界に来ているのは、フェイト、アルフ、シグナム、ヴィータ、なのは、すずか、アリサ、それにリハビリで足が良くなったはやてとリインフォースである。

うん。夏祭りの時とあまり変わってないな。

「大丈夫なの？こんな大人数で来て？作者のヤツちゃんと全員上手く出せるの？」

作者の心配をしながら、銀時はフェイト達を待った。数分後。

「お待たせ」

フェイト達が戻ってきた。

フェイトは黒、なのははピンク色、すずかは青、アリサは黄色、はやては白とそれぞれ違う色の水着を着ている。

「どうかな、銀時？」

フェイトが、恥ずかしがりながら尋ねた。

「いいんじゃない？似合ってるよ」
と銀時は答えた。

フェイトは嬉しそうに笑った。

「おい、私はどうアルか？」

同じく水着を着てる神楽が言った。

陽の光が苦手なので、ちゃんと傘をさしている。

「なのはちゃん達もよく似合ってるよ」

神楽をスルーして、新八はなのは達に言った。

「オイ！無視してんじゃねーヨ！！」

神楽が怒鳴った。

だが銀時と新八は、それすらも無視。

神楽は新八に殴りかかった。謝りながら神楽にポコポコにされる新八。

フェイト達は、苦笑しながら、その光景を見つめた。

その時、

「待たせたな」

シグナム達も戻ってきた。

シグナムは白、リインフォースは黒、アルフはオレンジ色と、それぞれ色違いのビキニを着ている。ヴィータは赤色の水着を着ている。

「おおっ！」

ビキニ好きの銀時は、思わず声を上げた。

「ど…どうだ銀時？」

フェイトと同じく顔を赤くし、恥ずかしがりながらシグナムが聞いた。

「似合ってるよ。マジで見惚れちまったよ」

「そ…そうか」

照れながらシグナムは、嬉しそうに笑った。すると、

「銀時。私はどうだ？」

「あたしは？」

リインフォースとアルフも聞いてきた。

「お前らもよく似合ってるよ」

銀時の言葉を聞いて、二人も嬉しそうに笑った。

「いや〜。やっぱりボンツキュッポーンな体にビキニは最高だな」

三人を見つめながら、銀時が言った。

こうして見ると、単なるエロオヤジである。

フェイトは、自分の胸とシグナムの胸を交互に見た。

やっぱり銀時は、大きい胸が好きなのかな。

少し嫉妬のこもった視線をシグナムに向けた。

「銀時」

ヴィータが銀時を呼んだ。

「私はどうだ？」

「ああ、いいんじゃない。可愛い」

適当に銀時は答えた。

直後、ヴィータはハンマーで銀時の頭を叩いた。

*

みんな海に入って自由に遊んでいた。

なのは、すずか、アリサ、神楽、ヴィータの五人は浅い場所で水をかけ合って遊んでいる。

新八はリンフォースと一緒に、はやての泳ぎの練習に付き合っている。

はやては、今まで足が不自由だったせいで、一回も泳いだ事がない。リンフォースと新八が優しく教えて、はやては楽しく嬉しそうに練習している。

ちなみに新八とはやては、リンフォースが泳げる事に少し驚いた。

「ねえ」。銀時も泳ごうよオ」

一方アルフは、浮輪に乗って海の上でひなたぼっこしている銀時に声をかけていた。

「お前ら好きに泳いでろよ。俺こっから見てるから」と、銀時は泳ぐ気なし。

浮輪の上から、アルフ達のビキニ姿を眺めてるつもりだ。うん。ホントただのエロオヤジだな。

「一緒に泳ごうよ！」

アルフが浮輪を揺らす。
「バツカ、お前！揺らすんじゃねエエエ！！」
銀時が怒鳴った。かなり動揺している。
銀時の慌てようを見て、フェイトとシグナムは不審に思った。
もしかして、銀時は……………。

*

みんなシートの上に座って、昼食を食べている。
昼食は、桃子とプレシアが作った弁当だ。

「おいしい！」
食べた新八が感想を言った。

「なのはちゃんとフェイトちゃんのお母さんは、料理が上手だもんね」

「さすがが言った。」

「うん！」

なのはとフェイトは、嬉しそうに頷いた。

プレシアのヤツ、こんなに料理上手かったのか。

そんな事を思いながら、銀時は弁当のオカズを食べた。

「から揚げもーらい！」

ヴィータが最後の一個のから揚げを箸で取った。

「あつ！それ私が狙ってたアルよ！！」

「私も！」

神楽とアリサがヴィータに叫んだ。

ヴィータは構わず、から揚げを口の中に運んだ。

二人は恨めしそうにヴィータを睨んでる。

「こーゆーのは早い者勝ちなんだよ」

ヴィータは勝ち誇った笑みを浮かべた。

神楽は悔しそうな表情をする。

食卓は戦場だつて銀ちゃんから言われていたのに！油断したアル！

「ほんなら、私はこのサンドイッチを」
はやてはサンドイッチを掴んだ。

「ああゝ!!!」

またアリサと神楽は叫んだ。

また油断したアアアア!!!

神楽は頭を抱えた。

どうやらサンドイッチも狙っていたらしい。

「うるせーな。静かに食わせるよ」

おにぎりを食べながら、銀時が言った。

隣では、アルフがドッグフードをバクバク食べている。

「だからお前は、人の姿でドッグフード食うんじゃねエ!!!」

「銀ちゃんもうるさいアル!!!」

アルフに怒鳴る銀時に、神楽が怒鳴る。

「あーもう!二人とも落ち着いて!」

新八が止めに入る。

食事中も賑やかなメンバーである。

「銀時。一つ聞きたい事がある」

シグナムが声をかけた。

「何だ?」

銀時はお茶を飲み始めた。

シグナムは尋ねた。

「銀時は泳げないのか?」

直後、銀時は口からお茶を噴いた。噴いたお茶は新八にかかった。

「ちよっ…何するんですか銀さん!!!」

タオルで顔を拭きながら、銀時に怒鳴る。

だが銀時は新八を無視する。

「な…何だよ急に!?!」

動揺しながらシグナムに聞き返した。

「いや、海にいる間、ずっと浮輪から降りなかったから、ちよっと
気になってな」

「銀さんって、カナヅチなんですか？」

驚いた顔ですずかも尋ねた。

「大の大人がカナヅチって…それってヤバくない？」
とアリサ。

その顔は、ちよつと呆れていた。

「は？何言ってるの？普通に泳げるに決まってるじゃん」
と銀時。

「え〜？ホントに〜？」

ヴィータとアルフが、ニヤリと憎たらしい笑みをした。

「だったら浮輪無しで泳いでよ。銀時イ〜」

二人はからかうように言った。

完全に二人は楽しんでた。普段は銀時がからかってくるので、こんなチャンスは滅多にない。

二人に迫られた銀時は、

「上等だよ！泳いでやるよコラ！」
と言ってしまった。

負けず嫌いな性格は、ときに自分を追い詰めてしまう。

新八は呆れながら、ため息をついた。

素直に泳げないって言えばいいのに。まあそれを言えないのが銀さんなんだが。

*

銀時は浅い海辺に立っている。

もう後には引き返せない。

大丈夫。自分を信じなさい。かつては白夜叉って呼ばれてたんだ。
心の中で自分に言い聞かせた。

銀時の後ろでは、フェイト達が見守っている。

計画通り！

周りのみんなにバレないように、シグナムは小さく笑みを浮かべた。あの慌てぶりから、銀時はカナツチだ。

私がそこを突けば、アルフやヴィータが面白がって銀時をからかう。負けず嫌いな銀時が、このような行動に出る事もわかっていた。

後は、銀時が溺れたところを私が助ける！完璧だ！

シグナムは邪悪な笑みを浮かべながら、銀時を見つめた。

さあ、溺れる銀時！

そして銀時は、深いところへ向かって進み出した。

「天よオオオ！我に力をオオオオ！！」

叫びながら、銀時は海の中に入った。

みんな心配そうな顔をしている。

すると銀時が海から顔を出し、

「あばばば！足がつか！ガボツ！た！たす……！」

バシャバシャと暴れながら、銀時は助けを求めた。

完全に溺れている。

「銀時！！」

慌ててみんなが助けに向かう。

だが、みんなよりも先に動いていた者がいた。

シグナムである。

銀時が溺れる事を予測していたシグナムは、既に海に入って泳いでいた。

「銀時！」

銀時のもとへ向かって泳ぐ。

「シ……シグナ……ム……！」

銀時はシグナムに手を伸ばす。

シグナムも手を伸ばす。

チエックメイトだ！

銀時の手に届きそうになった時、いきなり銀時の体が海から上がった。

驚いたシグナムは、動きを止めた。
他のみんなも驚いている。

「お…お前は……！」

銀時は下を見た。

銀時は黒い岩のような塊の上に乗っていた。

だがソレは岩ではなかった。見た目はゴツゴツとした岩のようだが、ソレは巨大な魚のえいりあんだった。

「ああ！あの時の！」

新八が声を上げた。

銀時を助けた魚のえいりあんは、以前銀時達がえいりあん退治に海にやってきた時に出会ったえいりあんである。

「サンキュー。またお前に助けられちまったな」

銀時はえいりあんに礼を言った。

えいりあんは嬉しそうに鳴いた。

フェイト達は、とりあえず安心した。

だがシグナムは計画が潰れて、残念そうな顔をした。
もう少しだったのだが……。

シグナムはため息をついた。

*

夕方になり、そろそろ帰る事になった。

結局、銀時がカナヅチである事はみんなにバレてしまった。

銀時は少し、いやかなり落ち込んだ。

「元気出してくださいよ、銀さん」

「…泳げるお前に、俺の気持ちがあわかってたまるか……」

銀時は子供のようにいじけた。

その後、落ち込みいじけた銀時をみんなで励ましながら帰った。

*

海の家『ビーチの侍』。

「あれ？俺の出番は？」

グラサンをかけ、アロハシャツを着たオヤジが言った。
鉄板の上では、モツサリした焼きそばが焼かれていた。

くおまけ

銀八

「教えて」

フェイト&すずか

「銀八先生！！」

フェイト

「ペンネーム『銀銀銀』さん。『先生質問です！！現段階でトツシ
ーは成仏したんですか？』って言うか今原作の銀魂のどこら辺ですか
ね？ここのSS？。』」

銀八

「まだトツシーは成仏してません。銀魂の世界は、『吉原炎上篇』が終わった後です」

すずか

「ペンネーム『花極四季』さん。『なのはの世界のキャラと屁怒紹さんではやはり屁怒紹さんの方が圧倒的に強いんでしょうか？例えなのは組全員でかかっても敵しいでしょうか』」

銀八

「屁怒紹さんは、まずその顔面で相手に恐怖を与えます。んでもって自身も怪力を誇ってますから、バツタバツタと倒します」

フェイト

「ペンネーム『ダークキバ』さん。『銀八先生に質問銀さんはこの小説が終わるころにリリカルなのはのキャラと結婚するのですか』」

銀八

「結婚は未定です」

すずか

「次の質問。ペンネーム『ST』さん。『質問ですが、バカ皇子とハタ皇子は出てくるんでしょうか？』」

銀八

「作者の気分次第です」

フェイト

「ハタ皇子って誰？」

銀八

「珍しい動物好きのバカ皇子だ」

すずか

「それじゃあ、今回はここまで。ばいばい」

第五十五訓：他人の家の留守番は引き受けるな（前書き）

久しぶりに更新しました。

沢山の感想・評価ありがとうございます！返事が書けず、すみません！

ちゃんと銀さんらしく書けるように頑張ります！もちろん『リリカルなのは』のキャラも。

ただ今回の話は、銀さんあまり出ません（汗）

フェイト『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十五訓。始まります」

第五十五訓：他人の家の留守番は引き受けるな

夏。

外ではセミが、ミンミンミンミン鳴いている。街中には、日傘をさしている人や、ハンカチで汗を拭きながら歩いている人でいっぱいである。

そんな暑い江戸のかぶき町に、万事屋銀ちゃんがあった。

部屋の中には、今日もだらしなく椅子に座って、アイスを食べながらジャンプを読んでいる銀時の姿が………なかった。

扇風機の前を独占し、一人涼む神楽の姿は………なかった。

冷蔵庫を開けて、冷気で涼む定春の姿は………なかった。

うちわで涼む、地味な眼鏡、新八の姿も………なかった。

部屋には万事屋トリオと定春の姿はなかった。

では部屋には誰もいないのか？と言うと、そうではない。

「暑い……」

呟きながら、うちわをあおいで何とか涼もうとしてる女性がいた。

「この世界の暑さは、異常だ……」

汗をダラダラ流してる、ピンク色のポニーテールの女性、シグナムが言った。

「えっと……地球温暖化って言うのが、進んでるみたいですよ……」

とシグナムに言ったのは、ソファアに座ってる、長い金髪のツインテールの少女、フェイト。

「アイス〜アイス〜」

床を這いずりながら、冷蔵庫を目指してる赤髪の少女はヴィータ。

「ヴィータちゃん……アイスばかり食べちゃダメだよ……」

暑さのせいで力無く注意したのは、栗色の髪の少女、なのは。

四人は蒸し暑い部屋の中で、暑さと戦っていた。

何故、銀時達がない万事屋に四人がいるのかって？

では説明しましょう。

またまた遊びにきたフェイト達は、当然万事屋にやってきました。だが万事屋に依頼があつて、銀時達は仕事に出掛ける事になり、「んじゃ留守番、頼むわ」

と銀時に頼まれ、フェイト達は万事屋で留守番する事になったのだ。それから約一時間後。

フェイト達は、むっっちゃ暑い部屋の中で苦しんでいる。

「…大体…何故この部屋にはエアコンがないのだ……？」
シグナムが疑問を言った。

一応扇風機を回してるが、その程度ではこの暑さは凌げない。

「単純に、お金がないからだと思います」

苦笑しながら、フェイトが答えた。

「なあ〜もう帰ろうぜ〜」

アイスを口にくわえて、ヴィータが戻ってきた。

「ダメだよ、ヴィータちゃん。銀さんから留守番、頼まれてるんだから」

「そつだよ。銀時達だって、この暑さの中働いてるんだから……」
なのはとフェイトが言った。

チリンチリン、とジャスタウェイ型の風鈴が鳴った。

*

その頃、万事屋一行は。

「かんぱ〜い！」

エアコンがガンガン効いている、ファミレスに来ていた。三人とも一気に飲物を飲み干す。

「くう〜、仕事の後の一杯はうまいねエ」

「まさか、こんなに早く仕事が終わるとは思いませんでしたね」

「お金もいっぱい貰えたし、お腹いっぱい食べるアル！」

神楽はナイフとフォークを持つ。

万事屋トリオは、涼しい環境で飯を食べ始めた。

ちなみに定春は、スナックお登勢に預けられている。エアコンあるから。

*

万事屋一行が涼しい環境で、おいしくご飯を食べてるとも知らずに、フェイト達は暑い万事屋の部屋にいた。すると、ピンポンとインターホンが鳴った。

「…はい」

シグナムはダルい体を動かして、玄関に向かった。

戸を開けた。

そこには、一人の若い女性がいた。

「あの、万事屋銀ちゃんですよ？依頼にきたんですけど」

「え？依頼…ですか？」

シグナムは戸惑った。

銀時達が不在の時に依頼が来るとは、この暑さのせいで考えてなかった。

断るべきか迷ったが、せつかくこの暑さの中、来たのだから話ぐらいは聞いてあげようと考えた。

「どうぞ中へ。少し暑いですが」

「お邪魔します」

二人は万事屋の中に入った。

*

フェイト達は、街中を歩いていた。太陽の陽射しが暑い。

「暑い」

暑さでヴィータはフラフラだ。

「頑張つてヴィータちゃん」

なのはが励ます。

結局四人は、先ほどやってきた女性の依頼を受けた。依頼の内容は、迷子になった子猫を探してほしいというものだった。

猫探しなら、自分達でも出来るだろうと考え、引き受けたのだ。

フェイトの手には、黒い子猫が写ってる写真がある。

「早く見つけて、あの人を安心させてあげよう」

「うん。子猫も、きっと寂しがってると思うし」

「よし。二手に分かれて探そう」

シグナムの提案で、フェイトとシグナム、なのはとヴィータと二手に分かれて探すことになった。

しかし、街中で一匹の猫を探し出すのはなかなか困難な事だった。

猫は沢山いるし、似たような猫もいる。

子猫探しを甘く見ていた四人は、苦戦を強いられていた。

しかも、この暑さ。体力もどんどん消耗していく。喉も渇く。飲物を買いたくても、この世界のお金がないので自販機で購入する事も不可能。

「な…なかなか…見つからないな…」

「…そ…そうですね…」

フェイトとシグナムは、汗だくでフラフラの状態だった。

下手をしたら、脱水症状で倒れてしまう。と言うか、シグナム達”騎士”に脱水症状であるのだろうか？

二人は、人気のない廃工場の前までやってきた。

その時、ニャ〜という鳴き声が聞こえた。

二人は周りを見回した。

「シグナム！」

フェイトが廃工場の入口を指差した。

入口を見ると、黒い子猫がいた。

二人は写真の子猫と見比べた。入口にいる黒い子猫には、写真の黒い子猫と同じ、黄色い鈴の付いてる青い首輪をしている。

「間違いない。あの子猫だ」

ようやく目標を発見した。

すると、子猫は廃工場の中に入ってしまった。

「あつ、待って！」

二人は子猫を追って、廃工場の中に入って行った。

廃工場の中には、使われなくなった機材や木材などが置かれてあった。

二人は、薄暗い廃工場内で子猫を探す。あちこち探すが、なかなか見つからない。

「むう。こっちの方だと思ったんだが……」

シグナムが首を傾げる。

「向こうを探してみましようか」

「そうだな」

二人は別の方向へ行こうとした。

その時、声が聞こえた。子猫の鳴き声ではない。

人の声だ。

声を聞いた二人は、自然と足音を立てないように、声が聞こえる方へ近づいて行った。

広い部屋から声が聞こえる。二人はそつと部屋の中を覗き込んだ。

部屋の中には、妙な恰好をした男達がいた。

何やら黒い全身タイツを着た、シ ッカーの戦闘員みたいな男達がいる。

フウー、フウー！

と、何やら声を上げている。

「我々、悪の組織は、必ず世界征服をするぞオオオオオ！」

戦闘員達の前に立っている、リーダーと思われる男が大声を上げた。

男は左目に黒い眼帯をつけ、何かリーダーっぽい恰好をしている。

何故か右手が銃に改造してある。

フェイトとシグナムは、目を細めて悪の組織を見つめた。

え？何これ？何この人達？

よくわからないが、危ない人達だという事はわかる。

あんまり関わりたくない感じなので、二人は振り返って立ち去ろう

とした。

その時だった。
にゃ〜。

子猫の鳴き声。しかも足元から聞こえる。

二人はそつと足元を見た。探している黒い子猫がいた。
次に二人は、後ろを振り返った。

悪の組織がこちらを見ている。

「貴様らアアア！そこで何をしている！？」

悪の組織のリーダーが叫んだ。

「いえ…その……」

「困めエエエエー！！」

「フウー！フウー！」

二人がモタモタしている間に、悪の組織のリーダーの命令で、戦闘員が動いた。

あっという間に、二人は戦闘員に囲まれてしまった。

フェイトは、子猫を抱いて悪の組織のリーダーを見る。

「フンツ。よく我々の居場所がわかったな。褒めてやろう、地球防衛軍よ」

悪の組織のリーダーが、右手の銃を構えて不敵な笑みを浮かべた。

フェイトとシグナムは、互いに顔を見合わせた。

え？地球防衛軍？管理局みたいなものですか？

シグナムは、悪の組織のリーダーに顔を向けた。

「いや…え？我等は、ただ子猫を探していただけで…」

「とぼけるな！貴様ら地球防衛軍の者だろう！！」
悪の組織のリーダーが怒鳴る。

シグナムは顔をしかめた。額に青筋も立っている。

「まさか、あの女と銀髪の男以外にも生き残りがいた事には驚いたが、ここまでだ」

戦闘員が少しずつ距離を縮めてくる。

「かかれエエエエー！！」

悪の組織のリーダーの合図と同時に、戦闘員が襲い掛かってきた。

二人は待機状態のデバイスを取り出し、

「バルディッツシュ！」

「レヴァンティン！」

デバイスを起動させて、襲い掛かる戦闘員を吹き飛ばした。

「な…何イイイ!?」

悪の組織のリーダーは、目を剥いて驚く。

周りの戦闘員も動揺している。

シグナムは、レヴァンティンを悪の組織に向けた。

「悪いな。今日の私は暑さでイライラしているんだ」

「私も……ちよつとイライラしてます」

フェイトも、バルディッツシュを鎌の形態に変えた。

「何で子猫探しで、こんな目に遭わなきゃいけないんだアアアア

!!!」

二人は怒りながら、戦闘員に向かって突っ込んだ。

デバイスを無茶苦茶に振り回し、戦闘員が次々と宙を舞っていく。

悪の組織のリーダーは、その光景を呆然となって眺めている。

「ば…馬鹿な！何だあの化け物どもは！？まるで銀髪の男みたいではないか！」

悪の組織のリーダーの言うように、強かった。

暑さでイライラしていた上に子猫はなかなか見つからず、更に子猫が見つかったと思ったら、悪の組織に襲われて、二人のイライラは最高潮に達していた。怒りの形相で暴れ回る二人は、メツチャ強かった。

四十人は超える人数の戦闘員を、二人は一分も経過しない内にぶちのめした。もちろん、全員ちゃんと生きてます。

戦闘員をぶちのめした二人は、悪の組織のリーダーを睨みつけた。身の危険を感じた悪の組織のリーダーは、慌てて懐からリモコンらしき物を取り出した。

「そ…それ以上動くな！動けばこの自爆装置のスイッチを押すぞ！」

悪の組織のリーダーは、冷汗やら脂汗やらをダラダラと流す。

「あつ！」

フェイトが、悪の組織のリーダーの後ろを指差した。

「え？」

悪の組織のリーダーは、後ろを振り向いた。

直後、

「とう！」

シグナムのドロップキックが、悪の組織のリーダーの後頭部に決まった。

「がはあ！」

ドロップキックを受けた悪の組織のリーダーは、地面に倒れて気絶した。

スイッチも地面に落ちた。

二人はデバイスを待機状態に戻した。

「ふう」

「子猫を探して悪党退治とは……」

二人とも額の汗を拭いた。

まあ何はともあれ、悪の組織は倒したし、子猫も無事見つけたし、めでたしめでたしである。

と思ったら。

「ん？スタロツサ。子猫はどうした？」

「え？あれ？いない！？」

さっきまで抱いていたはずの子猫が、いなくなっていた。

さっきの乱闘で、フェイトの腕から逃げてしまったようだ。

「はあ……またフリダシに戻ったな」

シグナムが溜め息をついた。

「す……すみません」

フェイトは謝った。

その時。

にや〜。

子猫の鳴き声。しかも近い。

二人は声がした方を見た。倒れてる悪の組織のリーダーの傍に、子猫がいた。

「いたぞ、テストロツサ！」

「よかった！ てつきり遠くへ逃げちゃったのかと思った」

シグナムとフェイトはホツとした。

これでやっと帰れる。

二人がそう思った時だった。

子猫が、傍に落ちていた自爆装置のスイッチをポチッと押ししてしまった。

二人は呆然となって、子猫を見つめた。

「……え〜？」

二人が呟いた直後、廃工場は爆発した。

*

銀時達は万事屋に戻ってきた。

玄関を開けて中に入った。

「よオ〜。留守番ご苦労さん」

「アイス買ってきたよ」

「あっついアル〜」

「
部屋の中に入って、銀時達は声をかけた。
すると、

「お…おかえりなさい」

なのはが、ぎこちない感じで挨拶した。

「ん？」

銀時は片眉を上げた。

「銀さん」

「アレ」

新八と神楽に言われ、銀時はソファーを見た。

髪が爆発ヘアで、全身真っ黒な姿の二人の女が座っていた。服装から見ると、フェイトとシグナムだろう。

「え？何かあったの？」

目をしばたたかせながら、銀時が尋ねた。

フェイトとシグナムは、真っ黒い顔を銀時達に向けた。

「ドーナツ作りに失敗しました」

二人は声を揃えて答えた。

デスクの椅子に座ってるヴィータは、溜め息をついた。

ジャスタウェイ型の風鈴が、チリンチリンと涼しげな音を鳴らした。

第五十六訓：お酒は二十歳になってから（前書き）

赤夜叉「オッス！オラ、赤夜叉！『白夜叉鎮魂歌』が終わっても、『魔法少女と銀髪の侍』はまだ終わりません。いつまで続くかな？それでは『銀魂×魔法少女リリカルなのは』第五十六訓。始まります！久しぶり！」

第五十六訓：お酒は二十歳になってから

月曜日、坂田銀時はいつも通りコンビニに行つて、ジャンプを買ってきた。

スナックお登勢の近くにスクーターを停めて、階段を上つて二階にある万事屋へ向かう。ここまでは、何の問題もない。だが、この後から銀時にとって大変な一日が始まる。

玄関の戸を開けて、何気なく視線を下げると、銀時は片眉を上げた。神楽は定春と散歩に出掛け、新八はお通のコンサートに行っている。だから万事屋には誰もいないハズなのに、玄関には靴が置いてあった。

靴は、子供が履くぐらいの小さなサイズだった。一瞬訝しんだ銀時だが、すぐに誰の靴なのかわかった。

アイツ、また来てんのか。
戸を閉めて、靴を脱いで家にあがる。

裸足で歩いて居間に入ると、ソファーに銀時が予想した人物が座っていた。

「やつぱり、お前か」
と、銀時は呟いた。

ソファーに座っているのは、長い金髪をツインテールにしている美少女、フェイト。

「お前も暇だねエ」
デスクまで歩いていき、椅子に座って、買ってきたジャンプを開いて読み始める。

すると、フェイトがソファーから立ち上がり、フラついた足取りで銀時の前にやってきた。

銀時は顔を上げて、フェイトを見る。そこで銀時は、首を傾げた。フェイトの様子が、いつもと違う。顔がうつすら赤く、ボーツとしている。体もフラついていて、今にも倒れそうな感じだ。

「大丈夫か？」

とりあえず銀時は、声をかけてみた。

しかし、返事はない。代わりにボーツとした目で、銀時を見つめている。

風邪でもひいたのか？

銀時が、そう思った時だった。

「銀時〜！」

いきなりフェイトが、満面の笑みで抱き付いてきたのだ。

「おわっ!？」

突然の行動に銀時は対応できず、椅子から倒れてしまった。

「銀時〜！」

フェイトは、銀時に抱き付いたまま離れない。

「オイ！ちよっ……離れる、フェイト！」

「ヤだ〜！離れない〜！」

フェイトは首を横にブンブン振って、銀時から離れようとしなない。

「お前、なんか様子おかしいぞ？風邪か？風邪ひいたのか？」

「風邪なんか、ひいてないよ。フェイトは元気だよ〜！」

無邪気な笑顔で答えるフェイト。

銀時は顔をしかめた。明らかに、いつものフェイトではない。そう

思った時、銀時はフェイトのもう一つの異変に気付いた。

「臭っ！フェイト、お前臭いぞ!？」

銀時は鼻を摘んで叫んだ。

「酷いよ、銀時〜。私臭くないよ〜。ちゃんと毎日、母さんとお風

呂に入ってるよ〜」

フェイトは、うるうるとした涙目で、銀時を見つめる。

絶対、いつものフェイトじゃない。銀時はそう確信した。同時に、フェイトの匂いに覚えがある事に気付く。

そして銀時は気付いた。匂いの正体に

「フェイト……お前、酒飲んだか？」

そう、酒臭いのだ。

酒臭いという事は、フェイトは今酔っ払っているのだ。

「お酒じゃないです。たまさんに、ジューズを貰いました。」
えへへ、とまた無邪気に笑って、フェイトは答えた。

銀時は頭を抱えた。

たまの奴……酒とジューズを間違えやがったな。

どうしたものか、と銀時が悩んでいると、フェイトは銀時から手を離した。

考えを中断してフェイトを見ると、銀時の上に跨がったまま、フェイトは服を脱ごうとしていた。

「いや、待てエエエエエ！」

慌てて銀時は、フェイトの手を掴んだ。

フェイトは、とろんとした顔で首を傾げた。

「どうしたの、銀時？」

「どうしたの？じゃねーよ！オメー何やってんだ！？」

「服を脱ごうとしてるんだよ？銀時に、私の裸をプレゼント」

「脱ぐなアアア！そりゃ一部のマニアは喜ぶかもしれんが、俺は違うから！そういう趣味はねーから！！」

フェイトの下で、慌てふためく銀時。

するとフェイトは、口元に手を当てて涙目になる。

「銀時……銀時は、私の事が嫌いな……？」

「いや……別に嫌いじゃねーけどよ……」

思わず銀時は、フェイトから目をそらす。

マズイ。銀魂にはないタイプだ。こんな瞳をうるつるとさせる女は、銀魂にはいないからな。どう対処したらいいのか、全然わからねエ。

「銀時……」

悩んでいる銀時に、再びフェイトが声をかける。

「私の事……嫌い……？」

頬がうつすら赤く潤んだ瞳で、首を小さく傾げる可愛い仕草をするフェイト。

銀時は僅かに、いやホントに僅かに動揺した。

い、いかん！このままでは、俺はロリコンという事になってしまう。負けるな、坂田銀時。かつては白夜叉と呼ばれて、ブイブイいわせてたじゃねエか！

自分を励まして、再びフェイトを説得しようとした時だった。

パタツと銀時の体に、フェイトが倒れた。

「フェイト……フェイト？」

恐る恐る銀時が声をかける。

だが返ってきたのは、小さな寝息だった。顔を見ると、目を閉じて眠っている。

銀時は、全身の力が抜けた。やれやれ、と溜め息をついた。

フェイトを抱いて立ち上がると、ソファーに寝かせた。

「ったく。人騒がせなガキだぜ」

銀時は頭をぼりぼりと掻いた。

「……むにゃ……銀時……」

*

フェイトが寝てしばらくすると、玄関の戸が開く音がした。

玄関を見ると、私服姿のシグナムが立っていた。

「お前も来たのか」

言いながら、シグナムに向かって歩き始めた。

ふと銀時は、途中で足を止めた。銀時の頭の中で、警戒信号が鳴る。思わず銀時は、顔をひきつらせた。

「いやいや……ないない……それはないわア……」

必死に自分の嫌な予感を否定する。だが、こういった嫌な予感は外れた事がない。

そして、嫌な予感は今回も的中する。

「銀時……ヒック……」

シグナムは顔を真っ赤にして、酒臭い匂いを放っている。

「お前もかアアア！！」

銀時は、頭を抱えて叫んだ。

「たまか！？お前も、たまがジュースと間違えて出した酒を飲んだのか？」

「いや……ヒック……キャサリンが……ヒック……ジュースと酒を間違えて……」

あんの年増猫耳イ！耳とつてただの団地妻にしてやるつかアアア！！
銀時が怒りを燃やしていると、シグナムがよろけながら近寄ってきた。

「銀時イ……ヒック……体が熱い……」

「お前、どれだけ酒飲んだんだ？スゲー酔ってるぞ？」

シグナムは、フェイトよりも酔っているようだ。

「銀時……」

フェイト同様、シグナムも銀時に抱き付いた。

「だアアアア！こんなトコで抱き付くな！別に此処じゃなけりゃ、抱き付いていいって訳じゃねーけど！」

言って銀時は、シグナムに抱き付かれたまま居間に向かう。その際、シグナムの大きな胸が、ギユウと銀時の体に押し付けられる。

マ……マズイ！シグナムの巨乳に、俺の股間のセンサーが反応しちまう！

必死に股間のセンサーを抑えながら、銀時は居間に辿り着いた。

ソファーにシグナムを寝かせようとすると、シグナムは銀時から離れた。

また嫌な予感がして、シグナムを見る。するとシグナムは、銀時の目の前で上着を脱いだ。黒いブラジャーを着けた、シグナムの巨乳が露にされた。

「おいイイイイ！！お前も何脱いでんだアアア！！」

「お前は巨乳が好きなのだろう？ヒック」

シグナムは潤んだ瞳で、銀時を見つめる。

銀時は顔をしかめる。

何で向こうの世界の奴らは、こんな汚れの無い瞳をしてんだよ。

「ほら。触れ」

ブラジャー姿のシグナムが迫る。

「触れる訳ねーだろ！っーかこれ全年齢対象の小説だぞ！」

「心配ない。『T O O V E R』の女性キャラも、普通に下着姿で出ていたではないか」

「何でお前が『T O O V E R』知ってるんだよ？いいから服着ろオオオオ！！」

「断る」

シグナムが迫り、銀時が後ずさる。

だが、ドンツと銀時の背中に壁がぶつかった。

「もう逃げられないぞ、銀時」

そう言うとシグナムは、スカートも脱いだ。上下黒の下着姿となった。

「ま……待て待て待て！」

その時、慌てふためく銀時の手が、シグナムの胸を掴んでしまった。

「違う違う違う！これアレだから！ワザとじゃないから！」

「フフ。そんな事言っつて、体は正直だぞ銀時」

「嫌な事言っんじゃねーよ！！」

額に青筋を立てて怒鳴る銀時。

シグナムは、そんな銀時の下半身に手を伸ばす。

「オイイイイ！！ヤバイから！これ以上は本当にヤバイからアア

ア！！」

銀時は目を閉じた。

さようなら、銀時ファンの皆さん。すみません、シグナムファンの皆さん。みんなの銀さんは、今日からシグナムの銀さんになります。

心の中でファンに謝りながら、銀時は覚悟を決めた。

だが、いつまで経ってもシグナムからの責めがこない。

不審に思った銀時は、ゆっくりと目を開けた。

すると目に入ったのは、下着姿で銀時に寄り掛かって寝ているシグ

ナムの姿だった。スー、と小さな寝息を立てて気持ちよさそうに眠っている。

銀時は力が抜けて、シグナムを抱えてその場に座り込んだ。

「はあ……」

銀時は、深い溜め息をついた。

シグナムを抱き抱えて立ち上がると、もう一つのソファアの上に寝かせた。

とりあえず間違いを起こさずに済んで、銀時はホツとした。まあ、ほとんどギリギリだったが。

「しかしコイツら……酔うと脱いじまう癖でもあるのか？」

眠っている二人を見ながら、銀時は言った。

いくらか気分も落ち着いて、冷静になっていく。

そしてハツとなる。

今この場には、銀時と眠っているフェイトとシグナムしかいない。

が、もしこんな所を、誰かに見られたら……。

考えた瞬間、銀時は額から汗を流した。

銀時は、すぐにシグナムに顔を向けた。フェイトは、あのまま寝かせておいても問題ないが、シグナムは大アリだ。何せ下着姿で寝ているのだから。新八達が来る前に、早く服を着せなければ大変な誤解を招いてしまう。

銀時は、床に落ちているシグナムの服を拾う。

そしてシグナムの前にやってきて、服を着せようとする。

とりあえず、スカートを先に履かせよう。

そう考えた銀時は、シグナムにスカートを履かせようとする。

その時だった。

「だだいまヨー」

「ただいまー」

「おじゃましまーす」

最悪のタイミングで二人が帰ってきた。

しかも声が一つ多い。ちなみに誰の声かは、すぐにわかった。

銀時は青ざめた顔で、冷汗をダラダラと流した。
俺、何か悪い事しましたか？

そう思ったのと同時に、三人と一匹が居間に入ってきた。

「銀ちゃん。なのはが遊びに……」

「やっぱり、お通ちゃんコンサートは最……」

「銀さん。遊びにきちゃい……」

居間に入った、神楽、新八、なのはの三人は言葉を失った。

三人の視線の先には、ソファアの上で下着姿で寝ているシグナムの前で、こちらを見ながらスカートを持っていく銀時がいた。もう一つのソファアには、フェイトが寝ている。

銀時は、下着姿で寝ているシグナムに、スカートを履かせようとしていたのだが、三人の目には、寝ているシグナムを襲おうとしている”ケダモノ”にしか見えなかった。

「銀ちゃん……」

「銀さん……」

神楽と新八は、軽蔑のこもった視線を銀時に向ける。

「待て待て待て！違う違う！」

銀時は、かぶりを振りながら必死に否定する。

「寝ている女を襲おうなんて、女の敵アル！害虫ネ！」

「銀さん。アンタもう、侍でも男でも人間でもありません。ただのク

ソ虫だよ」

「ウウ〜！」

神楽は怒りで拳を震わせ、新八は冷たい目で銀時を蔑み、定春も牙を剥いて敵意の目で銀時を睨みつける。

「神楽ア！新ハイ！定春ウ！違うんだア！誤解だア！俺は何にも悪い事はしてねーんだ！」

必死に誤解を解こうと叫ぶ銀時。

その時、

「銀さん……」

酷く冷めた声が聞こえた。

銀時は、ゆつくりと声の主に顔を向けた。視線の先にいるのは、レイジングハートを構えたなのは。既に桜色の魔力を収束し終えている。

「少し……頭冷やそうか……」

氷のような冷たい表情と声で、なのはは銀時に狙いを定めた。

「ちよっ……頼む！話を聞いてくれエエ！！」

涙目で叫ぶが、時既に遅し。

「スターライトブレイカー！！！！」

桜色の閃光が放たれる。

「ぎゃあああああああ！！！！」

悲鳴を上げながら、銀時は桜色の閃光に飲み込まれた。

閃光が収まると、部屋に黒焦げとなった銀時が倒れていた。

*

目が覚めたフェイトとシグナムは、酔っていた時の記憶がなくなっていた。

「あれ？私、どうしたんだろ？」

「何だか、記憶が飛んでいるような」

くおまけく

銀八

「教えて」

フェイト&すずか

「銀八先生!!」

フェイト

「ペンネーム『烈火竜』さん。『真選組の近藤さんがリリカル組の前で素っ裸になる機会がありますか?』。……………近藤さんって何?というか、この質問何?」

銀八

「白夜叉鎮魂歌では近藤の裸を披露できなかったので、この小説では出したいと思います。あれ?作文?」

フェイト

「裸なんか見せなくていいです!『烈火竜』さん。両手に水が入ったバケツを持って、一日中廊下に立っててください!」

第五十六訓：お酒は二十歳になってから（後書き）

銀時「ペンネーム『烈火竜』さん。『パフェ大好き』の銀さんに質問です。自分に好意を持ってくれているフェイト、シグナム、アルフ、リインフォースを大好きなパフェに例えるなら、どんなパフェですか？』。そうだな。フェイトはチョコレートパフェ。シグナムはイチゴパフェ。アルフはマンゴーパフェ。リインフォースはバナナパフェ。理由？大体適当だな」

第五十七訓：俺達の物語はこれからだ！！

江戸のかぶき町にある、万事屋銀ちゃん。

坂田銀時が経営している、所謂“なんでも屋”だ。従業員には、志村新八と神楽、それと巨大ペットの定春がいる。

だが今、万事屋には、三人と一匹以外にも人がいた。フェイト・テストロツサと高町なのは、シグナム。三人は、この世界とは別の世界からやってきた人達なのだ。しかも全員がもれなく魔法が使えるという、魔法少女。あつ、シグナムは魔法少女と呼ぶには、ちょっと無理あるかな。あつ、ごめん、シグナムさん。レヴァンティンはしまつてね。

んで、何で彼女達が万事屋に集まつてるのかは、これから銀時が教えてくれます。

「そんじゃ始めるか！『銀魂×リリカルなのは』、これからの展開どうする？緊急会議！」

*

デスクの椅子に座るのは、万事屋のオーナー　銀時。そしてソファーには、新八、神楽、フェイト、なのは、シグナムが座っていた。

最初に口を開いたのは、新八だった。

「いやあ、何とか『魔法少女と銀髪の侍』連載再開しましたね」

「ああ。一時はこのまま打ち切りか、とか思ったからな」

「いろんな事があつたアル」

神楽が懐かしむように言った。

「ところで、今日はどうして私達を集めたの？」

フェイトが手を挙げて聞いた。

「これからの『魔法少女と銀髪の侍』について話し合うんだよ」

いつもの気だるげな声で、銀時は答える。

「つーわけで、お前ら、なんかいい案ないか？面白けりゃ何でもい
いからよお」

椅子に踏ん反り返りながら、新八達に問い掛ける。

問い掛けられ、全員が腕を組んだり、顎に手を当てたりして考え
始める。

やがて、なのはが挙手をした。

「銀さん。話の案とは違うんですけど、ちょっとお願いがあります」
「言ってみる」

銀時に促されて、なのはが続ける。

「今まで私の出番が少なかったので、これからはもう少し出番を増
やしてほしいです」

「あー、それな」

思い出したように銀時が言う。

「そついやあ、お前、何故か出番少なかったよな。原作じゃあ、一応主人公なのに。作者も言ってたぜ。『何で俺の書く小説は、なのは出番が少ないんだろう?』ってな」
「で、私の出番をもっと増やして欲しいんです」
「まあ考えておくけどよお、もし出番が増えなかつたら、お前どうする?」
「その時は……」

銀時に問われたなのは、レイジングハートを出して構えた。
なのはの表情は笑顔だ。だが、どこか恐ろしく、寒気を感じるような笑顔である。

「スターライトブレイカーで、作者を撃ち抜きます」
「いや、それはマジでやめてくんない? 赤夜叉の奴、死んじゃうから」

引きつった顔で銀時が言った。

「他ねーか? 何でもいいぞ」

とりあえず、なのはの出番の件は終わりにして、他の案を求める。

「はい」

と、次に挙手をしたのは新八だ。

「何だツツコミ? 俺まだボケてねーぞ」
「役割じゃなくて、ちゃんと名を言え! それと別に、ツツコミのために挙手した訳じゃないですから!」

銀時にキレてから、新八はコホンツと咳払いをして続けた。

「今まで、『魔法少女リリカルなのは』の物語を使っていたから、今度は『銀魂』の物語を使うというのはどうでしょうか？」

「ほお」

と、新八の案に銀時は興味を示した。

「さすがポケ人より常識人なだけあって、まともな案を出すじゃねーか。例えば、どの話を使うんだ？」

「そうですねえ……」

うーん、と顎に手を当てて、新八は天井を仰いだ。

「スタンド温泉なんかどうですか？」

「あ？あそこか？」

新八の案を聞いて、銀時は少し嫌そうな顔をする。

「スタンド温泉とは何だ？」

シグナムが尋ねてきた。

「スタンド……まあ実際は幽霊なんですけどね。幽霊をお客として
いる温泉宿です」

「幽霊じゃない！スタンドだ！」

幽霊を全力で否定する銀時。

銀魂読者の皆さんは、知っているとは思いますが、一応説明をします。銀時は、超が付くほど幽霊が苦手なのだ。本人は『全然怖く

ない』と否定しているが、あまりに怖がっている様子がバレバレなので、幽霊が苦手だという事は、万事屋メンバー等に既にバレている。

「温泉宿だったら、海鳴温泉でいいだろーが！」

「いや、それ『銀魂』じゃなくて『リリカルなのは』の方ですから」

怖がっている銀時に呆れながら、新八は答えた。

「スタンド温泉に行つて、宴会でもやるアルか？」

「いや、宴会はやめよう。フェイトとシグナムが大変な事になつちまうから」

銀時が言った後、

「銀時、それどういう意味？」

「我等に何か問題でもあるのか？」

フェイトとシグナムが聞いた。

「……オメーらは知らなくていいんだよ」

「？」

二人は首を傾げた。

何にも覚えていない二人を見て、銀時は頭を抱えた。宴会で間違えて酒を飲み、みんなの前でフェイトとシグナムが服を脱ぎながら自分に迫る、なんて展開にはなりたくない。

「それじゃあ、どの話ならいいんですか？」

と逆に新八が銀時に尋ねた。今度は銀時が考え込む。すると、銀時ではなく神楽が拳手をした。

「たまクエはどうアルか？」

「おお、アレな」

と今度は銀時も乗り気になる。

「たまクエって？」

フェイトが尋ねる。

「たまの中に厄介なコンピュータウィルスが入って、それを俺達がたまの体内に入って退治するって話だ」

「その話なら、銀さんの苦手な幽霊も出ませんし、なのはちゃん達も活躍できる絶好な話ですね」

新八が言った後、銀時が新八を睨みつける。

「オイ、新八。誰が幽霊苦手だつて？俺は違うからね。幽霊なんか全然怖くないから。むしろ万事屋に依頼に来て欲しいくらいだから」

精一杯強がる銀時。

そんな銀時を見て、新八は溜め息をついた。負けず嫌いと言うか、何と言うか……。

「それじゃあ、次の話は、その『たまクエ』とかいうヤツなのか？」

「はい。ソレに決定みたいです」

シグナムの問いに、新八が答える。

「あっ、そういやあ今回の緊急会議で、読者にお知らせがあったの忘れてたわ」

「え？何ですか？」

と新八が尋ねる。

「実はな、この『魔法少女と銀髪の侍』……」

と一旦言葉を置いて、銀時の表情が真剣になる。

場の空気が変わった。滅多に見せない、その真剣な表情に新八は思わず息を飲んだ。他のみんなも、少し緊張した様子で銀時の言葉を待つ。

そして銀時はカメラ目線で、衝撃の一言を放った。

「今回で最終回です」

一同、銀時が言った言葉の意味が解らず、ポカンとなる。
場が妙な沈黙に包まれた。

そして一同の中でいち早く我に帰った新八が、目を剥いて叫んだ。

「ってオオオオイ！！マジなの！？最終回！？マジ今回で最終回なの！？」

「最終回イイイイ！！？」

遅れて一同も、驚愕の声を上げる。だが、神楽だけは驚かず、鼻の穴をほじくっていた。

「そつだよ。最終回だよ。いや〜結構長く続いたよなあ」

「『リリカル銀魂StrikerS』も入れると、相当な量アル」

驚く一同を差し置いて、銀時と神楽は懐かしむように会話をする。

「ちよつと待てお前らアアア！最終回なんて聞いてないぞ！」

「そっだよ、銀時！」

「『魔法少女と銀髪の侍』本当に終わっちゃうんですか!？」

「答える銀時！」

突然の最終回の知らせに、納得できない一同が叫ぶ。

「ギャーギャーやかましいんだよ。そんなに叫びたいなら、商店街の大声コンテストにでも出場してこいよ」

頬杖をついて銀時が言った。

「とにかく、ちゃんと終わる理由を教えてくださいよ！じゃないと納得できませんよ」

新八がそう叫ぶと、なのは達も頷く。

「まあ、要はアレだ。燃え尽きちまったんだよ」

「は？」

銀時の言葉に、新八だけでなくなのは達も顔を顰めた。

「『リリカル銀魂Strikers』を書き終えて、作者の制作意欲が燃え尽きちまったんだよ」

「えええっ!？」

驚く一同に構わず、銀時は続ける。

「それにな、スタンド温泉の話とか、たまクエの話とか一応は考え
てたらしいんだけどよお……。色々悩む所があったらしくてな、断
念する事になっちまったんだよ」

「話が広がり過ぎたアル。元々『銀魂』と『リリカルなのは』のク
ロスなんてのが無理あったアル」

「調子に乗って『日常篇』なんて書いたのがいけなかったんだな。
第二章で終わらせるべきだったんだよ」

腕を組んで、うんうんと頷く銀時。

「え……？じゃあ、あの……この小説これで終わり……？」

「ああ。終わりだな」

「始まりがあれば、当然終わりもあるアル」

『魔法少女と銀髪の侍』最終回。この事実を知った新八達のシヨ
ツクは大きく、全員暗い表情で黙り込んでしまった。

そんな一同を見兼ねて、銀時が言う。

「まあ、そう落ち込むなよ。終わりって事は、良く言えば新たな舞
台への始まりだ」

「そうアル！私達の物語りは、まだまだ終わらないネ！」

神楽も握り拳を固めて言った。

すると、さっきまで落ち込んでいた新八達が顔を上げる。その顔
は、暗い表情から明るい表情へと変わっていた。

勢い良く、ソファーから立ち上がる。

「そうですね！」

「私も、まだ諦めないよ！」

「全力全開で頑張るよ！」

「必ずまた、ここに戻ってくるぞ！」

新八達の表情を見て、銀時は満足げな笑みを浮かべた。

「よし、行くぞお前ら！」

「はい！」

銀時の声に応え、全員が走って玄関から外へ飛び出した。

「俺達の物語はこれからだアアアア！！！」

銀時の叫び声が、青空に響き渡った。

応援ありがとうございました！！

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～・完

第五十七訓：俺達の物語はこれからだ！！（後書き）

こんにちは、こんばんは。作者の赤夜叉です。

こんな最終回納得できない！という方もいるかもしれませんが、今回で『魔法少女と銀髪の侍』完結です。

こんな中途半端な終わりで、本当に申し訳ありません。

そして今まで応援して下さった読者の皆さん、本当にありがとうございました。ございました！沢山の感想が来た時は、本当に嬉しかったです。

本編の最後の方でも言いましたが、応援ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9475g/>

『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～

2010年10月9日17時05分発行